

昭和三十三年九月三十日印刷 (第十一卷 十月号) 昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可

奇譚クラブ

1957年 10月号



勤勞動員女
学生の手記
サジズム
小説

終戦

容病

院隸

雪俊 遥
久留木 栄

10
月
号

〔奇譚クラブ最近号主要目次〕

奇譚クラブ最近号主要目次

昭和三十年
○十月号 (復刊第一号)

口絵 美しいドアー (四馬 孝・画)

頭立二馬車 (四馬 孝・画)

水中の女 (都築 峰子・画)

緊縛フォト・オンパレード (川辺 砂登子)

黒のシユミーズ (伊吹 真佐子)

どういふポーズを (萩 千恵子)

とるの? (加賀 利江子)

ボリウ (加賀 利江子)

朝日を浴びて (須川 令子)

うつつ (須川 令子)

旅の縛られ女 (藤田 節子)

悪性の下着について (藤田 節子)

鼻の下の写真 (水本 利子)

奈落の欲情 (北谷 英二)

洗滌のイヂク洗腸 (久利 須和雄)

二個のイヂク洗腸 (花村 恵美子)

完全なる禁断 (坂田 三夫)

サティズムの女腹切 (村岡 信子)

乗馬スポンの女腹切 (藤田 節子)

口絵 苦痛の夢 (四馬 孝・画)

第二次会の披露宴 (宮崎 昭平・画)

戦国夜盗 (群 幸久・画)

ナイロスのレインコート (萩 千恵子)

「こんなポーズで?」 (佐賀 美智子)

お気に召すかしら (加賀 利江子)

一手首が痛いから (加賀 利江子)

く解いてエ! (加賀 利江子)

黒人少女の飼育 (黒岩 肇)

成る切腹マニヤの恋文 (等原 孫之介)

幽囚十ヶ月 (春田 一郎)

キヤルマタの美 (柳村 伸彦)

魔の味 (高木 伸三)

ドストエフスキの嗜虐性 (野中 愛次)

女性乗馬考 (馬場 喬次)

サジスチンの独白 (原 美智子)

女剣士の切腹について (青山 芳樹)

少年矯正院体験記 (みせしめ) (獄 上 流 太郎)

私は訴えるアブ・放談 (水本 利子)

完全なる禁断 (坂田 三夫)

口絵 淑やかな令嬢、メイドの拘束服 (宮崎 昭平・画)

スチユアーデスの晒し (宮崎 昭平・画)

魔の味 (高木 伸三)

完全なる禁断 (坂田 三夫)

戦国夜盗 (群 幸久・画)

体験記 (みせしめ) (獄 上 流 太郎)

灰土のノット (異常体験記) (相沢 松子)

箱の謎 (多岐 光一)

奴隷に与える手紙 (森山 美樹)

奇妙な事件 (森山 美樹)

責めとフェチズム (加賀 利江子)

魔の白鳥 (須川 令子)

お膳の研究 (二) (須川 令子)

生埋め願望 (長岡 伸一)

陰花への憧憬 (長岡 伸一)

玉稿落穂集 (編 集 十 三)

アブノーマル・モノローグ (辻村 隆)

拷問に笑う女 (辻村 隆)

○五月号 (復刊第四号)

定価二百円 (千8円)

口絵 美しい床の間 (四馬 孝・画)

すべり床の間 (萩 千恵子)

米誌にみた緊縛面歐米式新スタイル (北原 純子)

華々しき私刑 (藤田 節子)

大衆文学に現れた責めの描写 (藤田 節子)

無惨なマニア (藤田 節子)

二等兵時代の思い出 (高木 伸三)

縛り絵マニアの回想 (高木 伸三)

一読者としての公開状 (高木 伸三)

元禄女腹切 (高木 伸三)

「鼻」と「変型しぱり」 (高木 伸三)

幽囚十ヶ月 (高木 伸三)

目録 (高木 伸三)

奈落の欲情 (高木 伸三)

賭けられた洗腸 (高木 伸三)

赤い花は泣いている (高木 伸三)

私のコレクションより (高木 伸三)

続「少年体験記」 (高木 伸三)

緊縛映画速報欄 (高木 伸三)

玉稿落穂集 (編 集 十 三)

○八月号 (復刊第七号)

定価二百円 (千8円)

口絵 美しい床の間 (四馬 孝・画)

すべり床の間 (萩 千恵子)

米誌にみた緊縛面歐米式新スタイル (北原 純子)

華々しき私刑 (藤田 節子)

大衆文学に現れた責めの描写 (藤田 節子)

無惨なマニア (藤田 節子)

二等兵時代の思い出 (高木 伸三)

縛り絵マニアの回想 (高木 伸三)

一読者としての公開状 (高木 伸三)

元禄女腹切 (高木 伸三)

「鼻」と「変型しぱり」 (高木 伸三)

幽囚十ヶ月 (高木 伸三)

目録 (高木 伸三)

奈落の欲情 (高木 伸三)

賭けられた洗腸 (高木 伸三)

赤い花は泣いている (高木 伸三)

私のコレクションより (高木 伸三)

続「少年体験記」 (高木 伸三)

読者原稿募集 (皆さまの共同広場建設のために)

【研究発表】 アブノーマルに関する研究や発案、小論文等、平易にして本誌の読者に興味を持たすようなもの、十枚迄、採用篇には本誌三月分を贈呈いたします。

【創作】 異色ある題材を現げて立つ野心ある新人の出現を期待します。枚数は三十枚迄、未発表の作品に限る。採用篇には本誌三月分以上贈呈致します。

【体験告白手記】 皆さまの偽らざる真実の叫びを募ります。枚数は三十枚程度掲載篇には一篇につき千円乃至三千円の賞金を呈します。誰でも人には一篇位は直ぐ書けるものです。生々しい体験や告白を是非お寄せ下さい。

【ポケット告白】 文体や用紙などは一切問いません。十枚以内の短い告白物を気軽に書き下さい。採用篇には本誌三月分を贈呈いたします。

【映画、雑誌通信】 映画や雑誌の中で特に興味をお持ちになった事項についての通信をお待ちします。出処は必ず明記して下さい。掲載の分には本誌二月分乃至三月分贈呈いたします。

【口絵並に挿絵】 画材はサド、マゾ、浣腸、切腹等御自由です。優秀なる作者には継続的に御依頼いたします。

【編集者或は執筆者への公開状】 編集者執筆者或はモデル嬢等に対しての読者の皆様からの公開状を募ります。適当なものは本誌上に掲載の上、回答を求めることとします。本誌三月分贈呈。

(開放した誌面を御利用下さい)

【私のイメージ】 熱烈奔放なイメージをどしどしぶっ放して下さい。どんな荒唐無稽なものでも奇抜なものでも結構です。採用分には本誌三月分以上贈呈します。

【実写写真】 御自身写されたものに限りません。裏面又は別紙に説明とデータをお忘れなく。採用分には相当謝礼。

【アイデア】 将来本誌にて企画すべきものの全般につき出来るだけ詳細に、掲載の如何に拘らず優秀なものには千円迄の謝礼を呈上いたします。

【私は訴える】 皆さまの胸に持っておられる誰にも云えない諸々の悩みや御意見主張等を発表して下さい。本誌ならでは取り上げないような内容のもの。採用のものには本誌二月分以上贈呈。

【レポート】 新聞記事の切り抜き或は見聞等、皆様の興味をお持ちになった事件等につきお知らせ下さい。掲載篇には本誌二月分贈呈。

【読者通信】 編集者、執筆者、投稿者等への便り、前号の批評、希望、或は編集や雑誌のあり方等に関して忌憚なきお便りをお寄せ下さい。ハガキにても結構です。つとめて誌上に紹介します。

【読者交歓室】 読者相互間の文通呼び掛け応答等の頁を新設いたしますから御遠慮なく御活用下さい。文章はなるべく簡単明瞭にお願いします。○締切は別に定めません。到着順に最近号に掲載します。原稿の第一頁には応募の種目を明記しておいて下さい。

奇譚クラブ編集部

◎本誌月極購読料◎

一月分一冊(送料八円)二百円
三月分三冊(送料共)六百円
半年分六冊(送料共)千二百円
一年分十二冊(送料共)二千四百円

本誌は一切書店売りは致しませんので、購読御希望の方は、直接発行所へお申込み下さい。一月分一冊、お申込みの方は必ず送料八円の御加算を願います。半年分御申込の方には景品として手札型写真三枚、一年分お申込の方には景品としてキャビネ型写真三枚を贈呈いたします。

奇譚クラブ

第十一卷第九号
毎月一回一日発行
定価二百円
(送料八円)

十月号

昭和三十三年九月三十日印刷
昭和三十三年十月一日発行

編集人 箕田 京二
印刷兼発行人 吉田 稔

発行所 天星社

大阪市阿倍野区晴明通一丁目八五番地
振替口座大阪五〇〇四二番

本社に対する御送金は振込みの振替用紙を御利用の上、受領証をお送り下さい。振替用紙御入用の方は早くて大変便利です。振替用紙御入用の方はお申込次第お送りいたします。(但し御注文品と同送しない時は、八円切手の封入を願います)

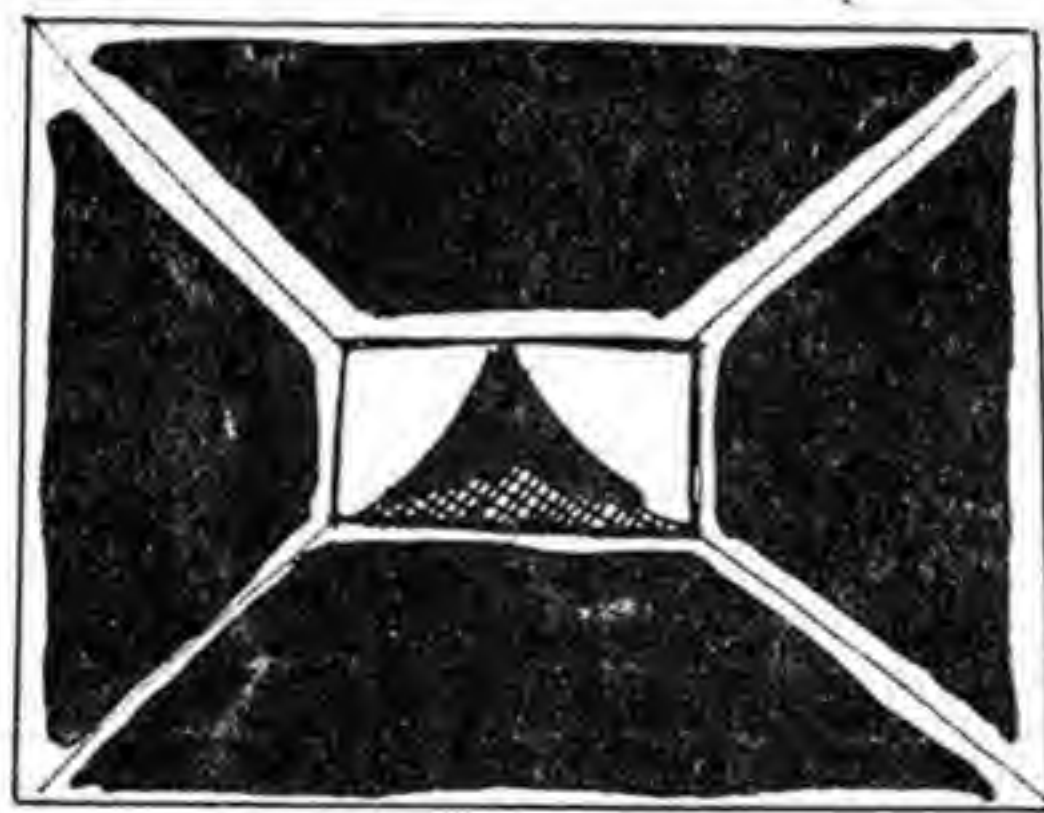
奇譚クラブ

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan

昭和三十三年九月三十日 印刷
昭和三十三年十月一日 發行
昭和三十一年四月二十日 第三種郵便物認可
(毎月一回一日發行)



定価二百円

(送料八円)

IBM. 2805

〔奇譚クラブ最近号主要目次〕

探偵小説新考……………東 一郎
蜂胸完成……………藤間 洋子
とりこの白人娘……………藤木 仙治

○九月号（復刊第八号）

定価二百円（〒8円）

口絵 美しい飼育物の調教……………四馬孝・画
吊り加味したアイデア……………北原純子・画
緊縛フット二題……………須川熾・花坂嬢
ナイフ投げの的……………B I R A R Rより
女学生……………北原純子・画

欧米式新スタイル二題……………（2）
洗腸とおむつ……………月岡 映子
文学に現れた同性愛……………藤見 郁子
私の「ふんどし」……………松原 三千代
「被虐欲」のその後……………真金 十郎
「マニア」の女生徒の手記……………池田 幸子
奈子の恋愛について……………門田 奈子
沼正三の手帖……………沼 正三
お灸を据える女性雑誌……………松原 一三
映画に現れた拷問場面……………左 巻
現代マゾヒズム芸術時評……………東 忠正
探偵小説新考……………原 一三
芝居の責め……………本 田
最近の映画から……………白石 由郎
悦楽に関する一考察……………菅 春夫
「切腹の歴史」……………松原 春夫
私のコレクシヨン……………角 間
玉稿落穂集……………編 集 部

○十月号（復刊第九号）

定価二百円（〒8円）

口絵 北原純子十月集、壊れ易き獲物
刺青師の部屋、和蘭陀屋敷の謎
現代マゾヒズム芸術時評参考資料……………
引廻し……………春日ルミ嬢、伊吹真佐子嬢
米誌に見た緊縛写真……………藤木 仙治
サディズム・シオン詳察……………岩瀬 祥一
お灸の女王コンクール……………岩瀬 祥一

大衆雑誌と書翰……………青山三枝吉
私の洗腸ブレイ……………ラフマン
受刑生活の思い出……………福村 光治
現代マゾヒズム芸術時評……………原 忠正
「ますらお派出所」の犯罪……………青山三枝吉
泥棒に縛られた話二件……………池田 幸子
エスキモー嬢の切腹……………本 田
ある夢家の手帖から……………沼 正三
「洗腸」に関するレポート……………東 忠正
締めつけられた女優達……………古賀 信司
泥棒に入られた南田洋子……………古賀 信司
責め絵の今昔……………伊藤 晴雨
「一男色者」の手記……………矢 野
私のアイデア「晒し台」……………羽村 栄市
緊縛映画速報……………東 忠正
探偵小説新考……………藤見 郁子
サジスチンの半生記……………藤野 秀子
読・乗馬スポンの女腹切……………藤山 秀子

○十二月号（復刊第十号）

定価二百円（〒8円）

口絵 新着フット紹介（一）
「いであ」より……………北原純子・画
拘束服とマスク、欧米式新スタイル……………（雲井久子）
或るポーズ……………（雲井久子）
現代マゾヒズム芸術時評……………滝見 子
文学に現れた責めの描写……………藤見 子
私のふんどし……………松原 三千代
異性より同性に興味……………畑村 三郎
コルセット・マンボ……………東 忠正
スカーフへの魅力……………林 一三
牢獄の花嫁……………東 忠正
黄色オラミ嬢……………真木 二平
和装女の縛り責め展覧会……………岸 本
美女決闘場面のアイデア……………小 西
腋毛礼讃……………南 秀夫
女武者自刃……………藤山 秀子
ある夢家の手帖から……………沼 正三
醜態への幻想……………淡 美一郎

昭和三十三年

○一月号（復刊第十一号）

【定価二百円】（〒8円）

玉稿落穂集……………編 集 部
魂を病む人……………北原純子
私の告白二題……………青 葉
家畜人ヤブー……………沼 正三
女性化願望と女性ホルモン……………古 井
糸姫の体験……………高 橋
美とワイセツの境界……………柳 沢
緊縛映画速報……………千 葉
防具使用による窒息死……………近 藤
マゾ・クラブの結成を望む……………山 田
告白「責めとフエチの自画像」……………越 野
現代マゾヒズム芸術時評……………原 忠正

口絵 新着フット紹介（アメリカ）……………（2）
花嫁受難二題……………北原純子・画
「ボウニー分岐点」の一場面……………（2）
鳴門の妖鬼（水戸黄門漫遊記第十話）……………須川 熾
A D E S U G A T A……………北原純子・画
お灸を据える……………北原純子・画
欧米式新スタイル（5）……………藤見 子
文学に現れた責めの描写……………藤見 子
花と幽霊……………北原純子・画
フエチに関する切抜き……………阿 川
黄色オラミ嬢……………木 真
大奥裸女決闘……………京 真
電氣責に関するノート……………甲 斐
ある夢家の手帖から……………沼 正三
女性切腹例抄記（上）……………田 谷
ある女給の体験……………日 下
麻酔切腹……………青 葉
遊女八重路の責め……………本 田
女性の裸について……………長 門
特異な角度から（折檻と拷問）……………九 雅
続々・乗馬スポンの女腹切……………藤山 秀子
女性の素足礼讃……………高 原
家畜人ヤブー（第二回）……………沼 正三

○二月号（復刊第十二号）

【定価二百円】（〒8円）

舞踊女師匠の責めの実験……………岸 本
戦地での同性愛……………東 一郎
サジスチンの半生記……………藤野 秀子
児童雑誌にみた惨虐性……………東 一郎
玉稿落穂集……………編 集 部
ヴェールを脱いだ肢体美……………畑 集
「ムチ打ち」と「緊縛」……………千 葉
緊縛映画と雑誌の挿絵……………千 葉

口絵 新着フット紹介（アメリカ）……………（3）
洋面スチール名面集（四場面）……………（3）
北原純子責面集「捕われの令嬢」……………（3）
先でのお仕置「猿轡を噛まれた女優」……………（3）
「たち」欧米式新スタイル……………（6）
我が異常性の記……………南 秀夫
オート・スタイルの女腹切……………藤山 秀子
お灸の研究……………須 藤
ある夢家の手帖から……………沼 正三
マゾヒズム見たり聞いたり……………春 木
サジスチンの半生記（三）……………藤野 秀子
秀緒の告白……………藤山 秀子
家畜人ヤブー（第三回）……………沼 正三
サディズムの芽……………甲 斐
女教員の責め折檻……………岸 本
異人屋敷の裸女……………本 田
お灸アパート……………白 金
現代マゾヒズム芸術時評……………原 忠正
話の肩籠……………辻 村
フエチに関する切抜き……………阿 川
「スロース・クラブ会則」……………並 木
私の「縛り美五原則」……………月 岡
洗腸とおむつ……………松原 三千代
私のふんどし……………（2）

○三月号（復刊第十三号）

【定価二百円】（〒8円）

口絵 新着フット紹介（アメリカ）……………（4）



奇譚クラブ

復刊第十九号
十月 号

目次

責画 鼻 い じ め

四 馬

孝・画

縛られた女優たち (場面集)

阿 部 太 郎 秀 提供

京マチ子「地獄花」

筑紫あけみ「風雲天満動乱」

浦路洋子「弥太郎笠」

嵯峨美智子「赤穂浪士問者秘聞」

頭 監 写 真 グラマー・ガールのニューススタイル

責 画 「地下倉庫」

「いでゆ」北 原 純 子・画

洋画 スチール二題

米 MGM 映画「古城の剣豪」米 UA 映画「指紋なき男」

絵物語 お加代源三郎旅日記

藤木 仙治 18

告白 女性志願者の夢

真崎 伸一 22

女性の悲鳴に就いて

南川 和子 30

「苦しみを求めて」

近藤 一 32

良二断想集

高木 良二 36

終戦 奴隷

雪俊 遙 38

私の好きな女靴

波路 洋 56

「吊し責め」の実験

岸本 青柳 58

女性化願望と男性思慕

古井 真哉 64

未来幻想 マゾ小説家畜人ヤプー (第十回)

沼 正三 66

東京の人よ何を穿く

松原三千代 76



「艶美なる捕物帳」	牧	高志	87
ある夢想家の手帖から	沼	正三	81
大陸暴行列車	本田	由郎	84
可憐なサド可憐なマゾ	佐々木	ツトム	88
製糸工女	木口	房代	92
緊縛映画雑感	阿部	秀	100
恋する夫人への手紙	麻生	和夫	102
アブ・モード・オール・スクラップ	矢桐	重八	108
痛められし桃の実	鴉嘔吐夫	・訳	114
「美女達のお尻が風船をつぶすアイスショー」	清水	恵二	120
マゾヒズムへのいざない	天野	哲夫	121
女性切腹随想	田谷	敬生	122
「和装教室」	白金	紅次	124
雑報と雑感	沼	正三	132
アブ・マニア雑談	赤井	茂	135
捕縄術入門	嶽	収一	138
ヒップ受難	花田	育子	143
美容病院	久留木	栄	146
架空小説 残虐芸術展覧会	伊藤	晴雨	158
雑誌通信 (挿絵を中心として)	丘	一明	160
フランソワの手記	山梨	参次	162
読者通信			170

〔奇譚クラブ最近号主要目次〕

スクリーンで縛られた女優たち	四馬孝・面
海冥の悲歌	栗原伸・面
浴槽の新妻	栗原伸・面
森の小怪	(萩千恵子嬢)
大映映画「魔の花嫁衣裳」より	南時夫
我が異常性の記	荒尾謙介
髪と絵	春木俊野
マゾヒズム見たたり聞いたり	本田由三郎
あぶり責め奇聞	阿川正三
エチフに関する切抜きから	沼田正三
ある夢想家の手帖から	沼田正三
悪魔の勝利を夢みる男	佐々木トム
或る女装マニヤの記	森本信一
洗滌レポ	島直樹
特異な角度から	九雅直樹
私のふんどし	松原三千代
燃ゆる男装	藤山秀緒
或るアブ・マニアの告白	東本一秀
女同志の吊り責め	岸本青柳
輝美悲願	加藤千春
ある女給の体験(2)	日下絹子
サジスチンの半生記(4)	鷹野めぐみ
「洗滌」に関する告白	島直樹
虐待された女中	佐原弘
少女の切腹	中康弘
電気責めに関するノート(続)	甲斐仁参
続・潰滅の前夜	土路草一
スクリーンで縛られた女優たち	千葉栄市
〇四月号(復刊第十四号)	
【定価二百円】(〒8円)	
口絵	
女体運動機能測定器	四馬孝・面
縛られた女優たち	楓月太郎
緊縛映画名場面集(一)	楓月太郎
スクリーンで縛られた女優たち	藤木仙治
縛られ拷問を受けるシナ・ロロブリシ	南時夫
我が異常性の記	南時夫

マゾヒズム見たたり聞いたり	池田ふみ子
探險服姿の女腹切	春木俊野
スロースE.T.C.	並山新一
女優を縛る監督達	升岡金吉
木馬責に関するノート	甲斐仁参
現代マゾヒズム芸術時評	原忠正
女装愛好者の方へ	滋賀雄二
ある夢想家の手帖から	沼田正三
緊縛の軽演劇	本田由三郎
インナーベルト責め	武田源之助
続・切腹曼陀羅図絵	法谷四郎
緊縛映画名場面集	楓月太郎
続・潰滅の前夜	土路草一
縛り責めを好む男と女	岸本青柳
大衆文学の責の描写資料	館地佐渡
〇六月号(復刊第十五号)	
【定価二百円】(〒8円)	
口絵	
クツワの装置	四馬孝・面
地下室の拷問二題	滝い子・面
振袖狂女	楓月太郎
縛られた女優たち	楓月太郎
「ある夢想家の手帖」(二)	楓月太郎
緊縛映画名場面集	楓月太郎
我が異常性の記	南時夫
おしめと洗滌の幻想	月岡映子
ある女給の体験	山下絹子
私のセクシユアリス	山本秀夫
続・飛行服姿の女腹切	藤山秀緒
緊縛映画名場面集	楓月太郎
マゾヒズム見たたり聞いたり	春木俊野
ある夢想家の手帖から	甲斐仁参
切腹幻想	沼田正三
ふんどし幻想	須藤三郎
責師の話	本田由三郎
加虐送別会	青葉一夫
洗滌器具考	本田由三郎

続・潰滅の前夜	土路草一
女サジストの記	鷹野めぐみ
「和装教室」	白金紅次
玉稿落穂集	編集部
〇七月号(復刊第十六号)	
【定価二百円】(〒8円)	
口絵	
地下の拷問室	四馬孝・面
縛られた女優たち	楓月太郎
花坂道子嬢艶姿集	北原純子・面
石抱き算盤責め	楓月太郎
緊縛映画名場面集	楓月太郎
「愛は惜しみなく」	藤山秀緒
私の本箱から	星光一
幻想の娘	館地佐渡
重屏禁	月岡映子
ある女性から編集長への手紙	甲斐仁参
水責に関するノート	近藤由一郎
マゾヒズム見たたり聞いたり	甲斐仁参
続・切腹曼陀羅図絵	法谷四郎
南支那海の鬼	本田由三郎
現代マゾヒズム芸術時評	原忠正
女血たるま	伊藤晴雨
縛り責め	池田ふみ子
「ある夢想家の手帖」	楓月太郎
一筆事難記	内田武夫
黒いベチコート	山田那津子
那津子の洗滌日記	山田那津子
仏、米の婦人ふんどしに就いて	飯田靖子
防衛眼と私	飯田靖子
〇八月号(復刊第十七号)	
【定価二百円】(〒8円)	
口絵	
美への冒険	四馬孝・面
加賀利江子嬢艶姿集	加賀利江子・面
花魁「美吉野」の折檻	滝い子・面
映画写真「夕立勘五郎」	楓月太郎
洋面スチール「聖衣」	岩窟の野獣

旅廻り劇団の責場面から	星和光
恋する夫人への手紙	日下絹子
ある女給の体験	久利須雄
青い洗滌器	甲斐仁参
魔女裁判に関するノート	藤山秀緒
「乗馬スポン」への憧れ	森本信一
残虐な女性	牧高志
「腰巻のアンケート」	原由貴子
おむつカウアーと私	矢崎竜一
灰色のノート	白田紅次
「和装教室」の折檻	本田由三郎
花魁「美吉野」の折檻	土路草一
続・潰滅の前夜	土路草一
〇九月号(復刊第十八号)	
【定価二百円】(〒8円)	
口絵	
女体屈伸測定器	四馬孝・面
いけにえの町娘	滝い子・面
新緑の陽を浴びて	須川千恵子
「括られちやつたり」	秋山千恵子
緊縛映画名場面集	楓月太郎
縛られた女優たち	千葉栄市
洋面スチール二題	柳沢吉保
病徒然草	皆川正三
ある線に描かれて	高崎勉
探偵小説に現れた地獄絵巻	白田紅次
人身御供の美女	本田由三郎
魔女裁判に関するノート	甲斐仁参
「苦しみ求めて」	近藤由一郎
水兵生活と禪	内田武夫
医学幻想	古井直哉
女性志願者の夢	真崎伸一
切腹随想	兵頭幸一
美少年処刑の図「笑い」	山口栄二
赤い下着	高木栄二
痛められし桃の実	土路草一
続・潰滅の前夜	土路草一

鼻いじめ

後手に縛られて身動きも出来ない乙女の誇りである高々とした鼻を
頑丈な指先で手荒に玩弄しようとするところ





大映 「地獄花」 京 マチ子



新東宝 「風雲天満動乱」 筑紫あけみ

縛られた女優たち (場面集)



大映 「弥太郎笠」 浦路洋子



東映 「赤穂浪士間者秘聞」 嵯峨美智子

グラマー・ガールの

ニュースタイル





於・淡輪海岸

本誌写真部特写



いでゆ

「泉義明」作『サディズム小説』より
〔本誌31年6月号並に7月号掲載〕



まだ躊躇っている良江に、姑は待ちきれぬように荒々しく浴衣をはぎ始める。「あつ、おお、どうぞ許して」「いいえ、素直になるのよ」「はい、はい、なりますから」良江はぶるぶる震える手で浴衣を床に落した。「さあ、大人しく其処に坐るんだよ」わなわなと戦き乍らも良江は示された通りタイルの床に坐った。ひんやりとした石の感触がぞくつと背筋へ抜けて……………



地 下 倉 庫



北原純子・画



米MGM映画 「古城の剣豪」より
 逞ましい男の腕に抱きすくめられ声も立てられぬマゾヒスティックな美女
 の顔に御注目

〔ロバート・テイラー
 ケイ・ケンドール 主演〕

△洋画スチール 二題▽



米UA映画 「指紋なき男」より
 サジスティックな女看守、下着姿の女の被虐的な美しさ。

(アンソニー・クイン主演)

新しい文献研究誌

奇譚クラブ

1957年10月号

(第十一卷 第九号 通刊第九十九号)



米誌 SATAN VOL. 1 NO. 1 FEBRUARY 1957

絵物語



お加代源三郎旅日記

藤 木 仙 治 文 画

一
「女のくせにイカサマ使うなんて、ふてえアマだ。ここを熊五郎親分の賭場と知ってのイカサマか。」

武州彦成村の小バクチ打ち彦成熊五郎の家の奥座敷。くずれた牡丹のように美しい女が縛られ、それを見張っている子分が一人。

「ブン、稲妻と異名をとったお加代さんも、こんな田舎のバクチ打ちに見すかされるようになったちやアおしまいだねえ。」

と、お加代はふてぶてしくかまえたが、長い間縛られているので、腕も胸もしびれて、苦しくてたまらない。

二

見張の交替に、今度は浪人者が現れた。

「お前さん、いい男だねえ。こんなやくざの用心棒なんかしてるの、もったいないじゃな

いか。」

と、お加代は早速色っぽい眼で角井源三郎をみる。腕ツぶしは減法強いが、まだ年若い源三郎、脂ののり切った女の媚態に、つい、ふらふらと心を惹かれる。

「ねえ、こんなにきつく縛られて痛くって仕様がないうんだよ。乳房の上に縄がかかっているもんだから、息がつまりそうなんだ。せめてこの胸の縄ぐらい、はずしておくれよ。」

男の心を見抜いたお加代は、ここぞとばかり身体をくねらせて源三郎を誘惑するのだった。

三

その夜ひそかに、源三郎はお加





代の縄を解いた。様子を見にきた熊五郎は、この有様をみて驚き、子分を呼び集めようとしたが、その時、源三郎の刀がひらめき、「ワアッ」と、熊五郎は血しぶきをあげて倒れた。

「やったね、お前さん、いい腕だ。」

血をみてお加代は眼を輝かせた。

「怖い女だな、お前は。おれはお前のおかげで恨みもない人間を一人斬ってしまった。」と、源三郎は、ぼうぜんとする。

「なにいつてるんだい
こんな奴は人間じやない、
毒虫さ。さ、子分
たちが気づかないうち
に逃げるんだよ。」

四

「で、これから何処へ行こうというのだ？」
「とも角、江戸へ出て
みようじやないか。こ
うなったら、あたしと
あんたは、もう他人じ
やないんだからね。」

いざという時は女の

方が落着くものだ。まして稲妻お加代、こんな場合のクソ度胸は源三郎より一枚うわてである。この美男浪人にどうやら本当に惚れたらしく、もう夫婦気どりのお加代である。旅を重ねるうち、源三郎もまた、お加代のとりことなってしまうた。

五

或る夜、行き暮れて夜道に迷い二人はとある荒れ寺にたどりついた。一夜の宿をたのもうと思いい、一歩踏み込んだお加代と源三郎、寺の中から「ヒイーツ」と聞える

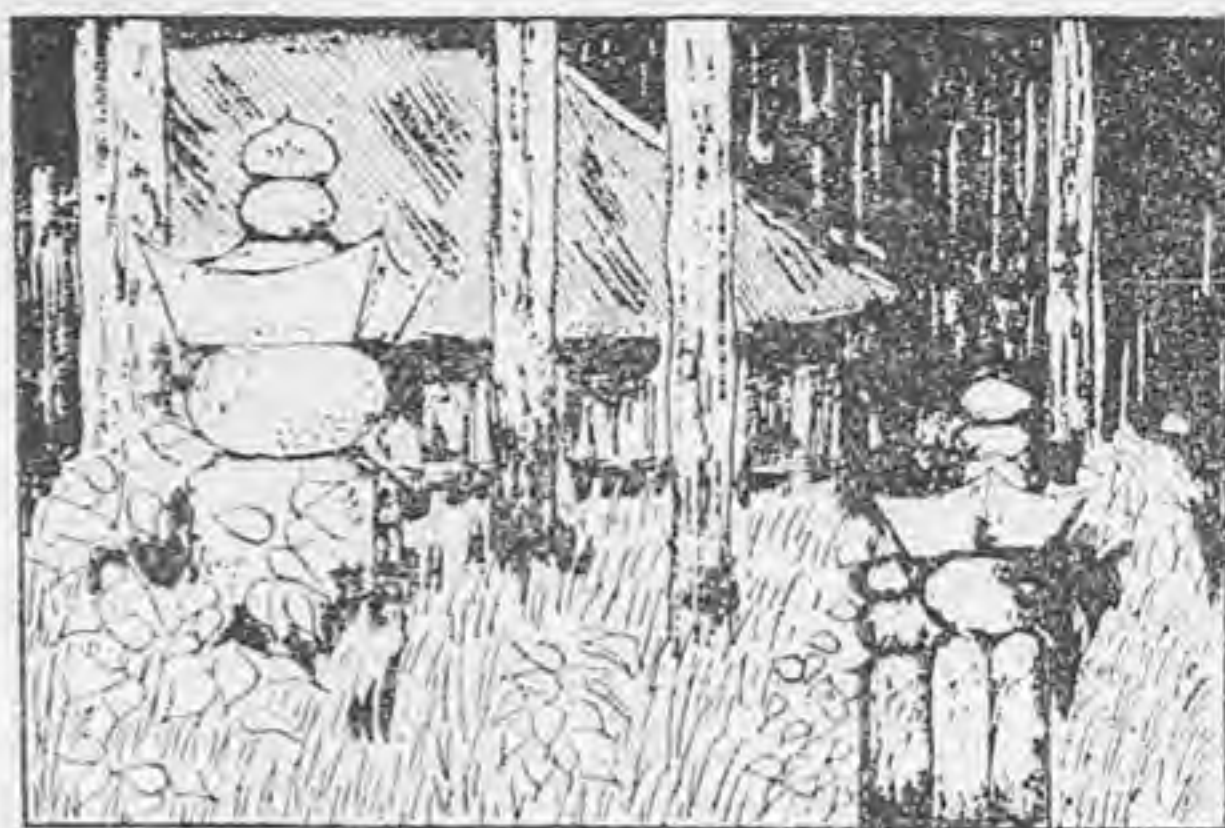


声に思わず顔を見合せた。

「なんだろう、お前さん。」

「女の悲鳴のように聞いたが、とも角、様子
をうかがってみよう」





二人は物陰に身をひそめて、室内をのぞいた。うす暗いローソクの灯りに展開されてい

と心の中で叫んだ。

六

破れ畳に転されているのは腰巻一つの女。うしろ手にギリギリ縛られて息も絶えだえ。そのそばに、貧乏徳利から酒をくみながらニタニタ笑っているのは、この寺の住職らしい坊主頭の大男。

「ウフフフ、。どんな急ぎの用事かは知らねえが、こんな田舎を女一人旅とは無茶な話だぜ。おかげでこの仙海も久し振りに女ッ氣にありつけるといふもんだ。たっぷり楽しんだそのあとで、宿場女郎に叩き売り、またう

めえ酒を飲もうという寸法さあ。」
そのひとり言を聞いてお加代も呆れた。
「世の中にや悪党も沢山居るけど、坊主のくせにこんなひどいことをするなんて、うわてがいるもんだねえ。」
と、感心する。

七

「お加代、こいつは一体、どうしたもんだろうな。」

「まあ、もう少し様子を見てみようよ。」

お加代は落着いて面白そうに中をのぞいている。仙海坊主は、悶える女を柱に縛りつけると、遂に、最後の一枚もはがしてしまっ



た。大きな息を一つぷうーと吐いて、「いやア、こいつは絶景だ。縄が肌に喰いこんで、白い肉が盛りあがっている所なんぞア、酒のサカナにもってこいだ。」

女は咽喉の奥でヒイヒイと悲鳴をあげているが、声はかすれてもうでない。

八

柱縛りにも飽きた仙海は、又、うしろ手に縛りなおして、天井から吊す。吊しておいて、割れ竹で、ピシリピシリと女の豊かな尻をたたきはじめた。にぶい音をたてて竹は肌に鳴り、その度に白い肌はひくりひくりとふるえる。まるで猫がねずみをなぶるように、仙海坊主は一人の女を縛っては解き、また縛っては解いて楽しんでいる。

九

仙海は女の四肢を一つに縛った。まるで

海は酔い痴れてドロソとなった眼で吊られた女の姿を眺めている。女はもう気を失っていた。悪坊主の責めは最高潮である。

手足を一緒に一本の縄で吊られているので、女の身体は縄を中心にして、ゆるりゆるりと動き出した。仙海坊主は割れ竹を拾い上げると、女の尻をまるで独楽でも廻すように、たたいた。駿河問という責があるが丁度それのように女の吊られた身体



熊か猪でも縛るように。そうしてまた天井に吊りあげた。にぶいローソクの灯がゆらゆらと揺れて女の影が壁にうごめく。仙

はクルクルと廻った。気がついた女は、初めて「うううむ」と呻き声を発った。

十

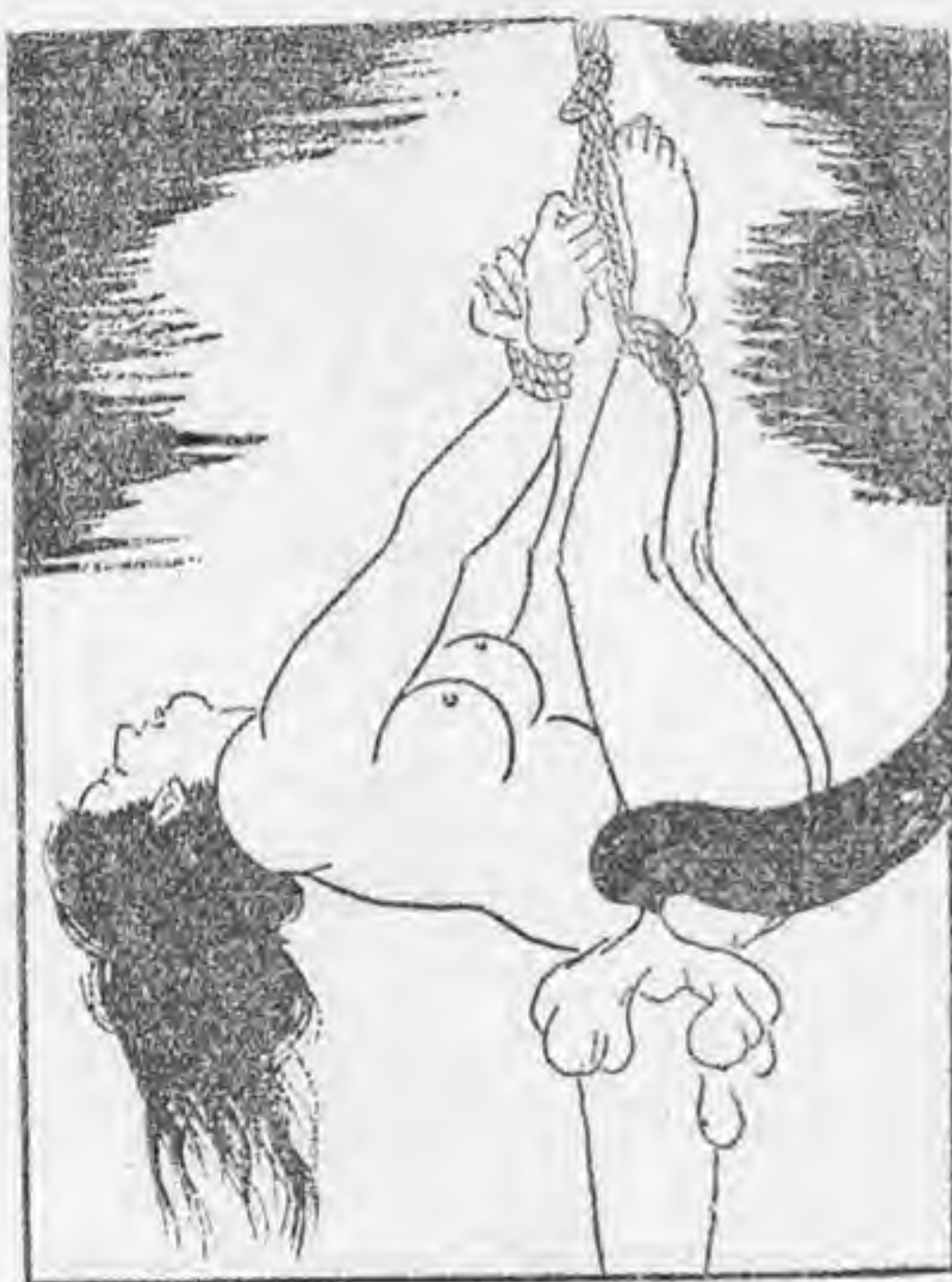
源三郎は我慢しきれなくなって部屋の中に飛び込んだ。

「ウワッ、誰だ、てめえは」

仙海はギョツとしてわめいた。源三郎は一刀を抜き放つと、じりじり仙海に迫った。冷たく笑いながら刀を振りかぶる。

「お前も死ね、死んだ方が世の中のためだ。」逃げようとする仙海の肩先に源三郎の刀尖がひらめいた。

「源さん、この娘はどうする?」



「一応助けて手当をして、それから改めて、その辺の安女郎にでも叩き売るのだ。それで江戸への旅費もでる。」

「へえ、お前さんもなかなかの悪党だねえ。たのもしいよ、源さん。」

お加代は源三郎にすがりついた。返り血をあびた源三郎は青白い顔で苦笑する。

お加代源三郎旅日記はまだまた続くのだ。

(完)

△告白▽

女性志願者の夢

(後篇)

真 崎 伸 一

一

遠い／＼ところから風に乗って流れてくるような話声に、だんだん氣力を回復して、パツチリと私は瞳を見開いた。身体は寝台の上に乗せられてあつた。ベルトは外されて手足は自由である。部屋もあの冷い陰惨な病室と違つて、明るい洋間であり、寝台もフカフカとして心地よかった。ウーンと思い切り伸びをしようとして、あつと胸部から下半身をヒリヒリ走った痛さに小さな叫びを洩した。

「まあ、美子。氣が付いたのね」

聞き覚えのある声の方を見た。ルミ子と蒼白い青年が寝台の傍らのデスクをはさんで向い合つて腰かけていた。

「ごめんね。あんなにひどい目に合まして。

美子が叔父さんの子だとは知らなかったのよ。叔父さんたら今まで隠してゐるんだもの。さっき一郎さんから話を聞いて始めて知つたの。叔父さんってなかなか隅におけないのね。あんたのお母さんと若い時、仲が良かったのだったね。何かの事情で後に別れたのだけど、あんたのお母さんが最近死んだので、引き取つたのですってね。これからほんとにお友達になりましょうね。あんたみたい綺麗な子、生んだお母さんてきつと美しい方だったのでしょう。可哀そうに……、だけどこれからはあたしがお母さん代りになって、たと可愛がつてあげるわ」

ルミ子は虚心に同情していると見えて、真

剣な顔つきで言つた。一郎と言う青年に全く欺かれてゐるとは片鱗だも心付かないで……私。私はルミ子には答えず一郎を睨んだ。蒼白く澄んだ顔の一郎はふつと口辺に苦笑を浮べて私に片目をつぶつて見せた。黙つてゐるんだとの合図である。喋れと言われても私は黙つていただろう。この様な私の趣味にかなつた遅しく美しい女性の面前で、どうして醜惡な過去の事を話せよう。それでも聞いておかなければならない事があつた。

「ねえ、一郎さんや新村さんは、どう言う人達なの」

私はまずい質問だと思つて一郎を見た。一郎は怒りと詰責の焼けるような視線を投げ返した。

「変な事尋ねるのね。それに叔父さん、つまりあなたの父親の事を新村さんなんて、他人みたい呼び方よ」

ルミ子は少々怪訝そうだ。一郎は大急ぎで弁解した。

「いや、そのう、つまり今まで何も知らされずに育てられて来たのでね。母親は全然、何もその子には打ち明けずに死んで行ったのだし、父親があるって事など知りもしなかったのが、急にここへ引き取られて、いきなり一面識もない父を父と呼ぶのは無理だろう。然も昨日の夕方引き取られて来たのだ。だからこの事は皆目知らしてないんだ」

「ふーん。そうなの」

ルミ子はしきりに鼻を鳴らして頷いた。それから私の方を向いて言った。

「叔父さんは生物学者でホルモンと性転換のオーソリテイ。ここにいらる一郎さんは私の許嫁で叔父さんの助手。これで紹介はおしまい。一郎さんと叔父さんは研究心が旺盛で、何を研究しているのか知らないけど、研究となると夢中で一週間でも二週間でも一部屋に閉じこもる事だ。てさらにあるのよ。美子の来る前までだって一月程、叔父さんなんかはあの実験室から出ようとしなかったのよ。内側から鍵をかけちゃってね」

「ふふふ」

私は意味深長に笑った。一郎は知らん顔で

そっぽを向いていた。新村と一郎が実験室が病室か知らないが、あの部屋で一月の間何をしていたか知っているのは、この私だけなのだ。だがそんな事は一郎が心配しなくても私は言わない決心であった。それよりもルミ子に手術台へ縛られた時の素晴らしい快感を思い起して、身震いした。鞭で叩かれるのは痛いからごめんだが、つねられる位なら辛抱してもよかった。ルミ子にもう一度縛って貰いたくってたまらなかった。疑う余地もなく純情可憐な女として、妖麗で男性的な女性に縛られるのであるから、その快楽は望外のものではあった。文句なしに快楽の谷底へ転落して行けそうであった。過去は私から抹殺されており、未来は物凄く不安定であり、現在だけにすがり気持で満ちあふれていた。頼りになるのは現在の然も瞬間だけなのだ。淋しい言い知れない孤独感が吸取紙の上に落ちた一滴のインキのように、シワシワと胸内に重苦しく拡大して行った。すがり付ける支柱は官能的な快楽とルミ子であった。ルミ子にすがり付いていたなら安心できそうであった。私はルミ子の真実を求めてランランと双瞳を輝かし、彼女を凝視した。ルミ子にニヤニヤと美しいが、しかし皮肉な笑みを浮べて、私のそばに身をかがめ顔にそっと唇を押し当てた。火焰の如く熱をもった口づけであった。私は虚脱したように唇を突き出して彼女の唇を求

め、首っ玉にかじり付いた。長い／＼女同志の接吻が続いた。男性的な要素は私の肉体からも精神からも余す処なく打ち消されていた。私は一郎が苦々しい面持で佇立しているのを思い出し、微かに頬を赤らめた。

「行こう。ルミ子さん」

一郎は露骨に嫉妬を表してルミ子の手を握んだ。ルミ子は冷笑を刻んだが、私には軽く親愛の情を込めてウィックを残して部屋を出て行った。私はやっと独りになれて、久しぶりののびのびとした気分になり、寝台に仰向けに引っくりかえった。鞭の跡が痛かった。鞭打ちだけはやめて貰わねばと思った。今後の自分の運命を中心にして起る数々の事件を思つて、胸がワクワクと躍動した。

ルミ子はその夜は帰って行ったが、その後も三日に一度は訪れた。私に会うのが目当らしかったが、十分間と二人っきりで会えなかった。新村や一郎の看視が近頃次第に厳しくなり始めた。特に一郎がしつこく邪魔をした。彼はルミ子に恋している。だから元来は男であり、未だに男の心を持つてあらうと思える私に対して嚴重に警戒していた。彼にとって私は私は恋敵であつたのだ。新村を父と呼ぶ気はいかにしても起らなかった。彼には深く感謝し尊敬していたが、父と呼べる程の親近感が湧いて来なかった。最近は一そう湧かなかった。三日程前の夜、トイレから部屋へ戻る

途中、うす暗い廊下の壁にいきなり新村に押し付けられ唇を奪われたのである。斜め横の窓から月の光が射し込み、欲望に歪んだ彼の顔を照らした。彼は自分の拵えたものに対す

る醜汚な欲情を恥じ入ったのか、無言で蹣跚と去って行った。新村はその翌日から妙によそよそしい仕草を示した。彼の横側にいた時ですら極力私を無視しようと努めている風で

あった。その横顔は深酷な悩みと苦痛と憂愁のためにひしやげて見えた。口髭が力なくたれ下っていた。

私の心は日が経つにつれて少しづつ女性化して行き、一人で考える時ですら、あたしどうしようかしら、と言う具合に女として考えられる様にまでなった。

ある日、ルミ子が私の部屋に忍び込んで来た。庭に木の葉がチラチラと散る静かな淋しい秋の午後であった。彼女は私を抱き寄せて低く囁いた。

「今夜、十二時頃、あたしがここに忍び込むから一緒に逃げ出さない。あたしを愛しているならあたしに従いなさい」

「逃げてどこへ行くの？」

「あたしのアパートへおいで。そこで二人っきりで暮すのよ」

「新村さんや一郎さんは怒らないかしら？」

「バカッ。あんな奴らの事は気にしちやいけない。いいこと、男なんてみな獣なのよ」

ルミ子は私の唇を力いっぱいひねり上げた。私はああと呻き声を出した。そして逃げる事を承知



した。ルミ子との生活はきつときつと素晴らしい夢物語の実現であらうと予想した。

「約束するわね」

「約束するわ」

私は首を前に振ってあどけなく笑った。ルミ子は音もなく部屋から出て行った。私は今夜の冒険を思うと気もそぞろであった。

二

私は午後九時頃、寝室に入り電灯は消したが、眠ったふりをして、いつでも外に飛び出せる服装をしてルミ子からの連絡をいまいまかきまかと待っていた。置時計のカチカチと言うモノトナスな音調がやけに神経をいら立たせた。長い長い永久に來ないかとも思われた三時間が不安と希望のうちに過ぎ去り、十二時少しすぎにドアの外からルミ子の呼ぶ声がした。私はドアを開けて寝室から飛び出した。彼女は私の二の腕をギュッと掴んで引っ張った。転がるように階段を降りた。ホールを横切る時、何か柔い物体につまづいてよろめいた。私はそれが何か確かめようと足を止めたが、彼女に力いっぱい引かれて不本意乍ら諦めたが、ホールを出しなに何気なく振り向いた。折しも雲間から月が顔を覗いて、ホールの窓から煌々とさえた蒼い光線が流れ込んだ。ホールの一隅にうずくまっている人を見た。キヤッ、と叫んで私は立ちすくんだ。新村に違

いない。彼の背中にキラリと光るものが突き立っていた。床を掻きむしるように伸ばした両手の爪をたてていた。そう思っていると床にどす黒い液体が流れているようにも見えた。彼は何者かに殺されたのだ。

「見たね。確かに見たね」

凄艶な形相をしてルミ子は私を睨み付けた。私は声もなく打ち震えた。鬼気が四辺に立ちこめ、ゾクゾクと悪寒が背筋を貫いた。

私は訳のわからない事を喚いて走り出そうとしたが、ルミ子に引きすえられ首をギューギューと締められた。彼女は気が狂ったのだ。私は彼女の頬をつねったりひっぱったり首を締めている腕を苦しまぎれに引っ掻いたりして、出来る限り抵抗したが、その甲斐もなくいつしか気を失ってしまった。

気が付いた時、私は自動車のクッションに深々と埋ってゆられていた。横にルミ子が冷たいプロファイルを見せて腰かけていた。首のまわりがまだ痛かった。首をさすりながら身を起した。

「気が付いたのね。死んじやったのかと心配だったわ」

ルミ子は眉をひそめて気づかしそうに私の首のまわりを撫でてくれた。平然とした態度であった。今しがた人を殺したとは見えない態度であった。私は空恐しくなり答えず黙々としていた。

車は深夜の街道をひた走りに疾走していた。黒々とした街路樹が矢のように早く窓外を流れ去った。

「どこへ行くの？」

私は恐る／＼尋ねた。にべもなく彼女は言下に答えた。

「どこでもいいじゃないの。あんたは今からあたしのものなんだから。あたしに絶対服従しないと……」

私はゴクリと固唾を呑んで操り人形のようにガクンと首を垂れた。ルミ子に底知れぬ恐怖と不気味さを覚えた。だが今となっては彼女にそむく事は死を意味するであろうから、温順に言いなり放題になるより仕様がなかった。無益な抵抗は諦めていた。一方、私の心の奥にはルミ子のものとなる事を欲し望んでいる不幸な本質的なものが疼いていた。それは快い刺戟にすらなりそうであった。

「ねえ」

私は拒絶されるのが判り切っているながら重ねて尋ねずにはいられたかった。

「どこから来てどこへ行くの。教えて頂戴」

「うるさい子だね。二度とお聞きでないよ。さもないと……」

彼女は私の内股をいやと言うほど強くつねった。悲鳴をあげかけたが、素早く彼女の白い手が動いて口を覆った。私は彼女の胸の中へ自から抱きついて、涙をこぼした。甘酸っ

ばい懐しい香にむせんで、尚もグイグイと頬をこすり付けた。

「ふふふ。可愛い子猫さん。そうそう甘えてもいいから、この通りに温和しくするのよ」

と言つて彼女は私を両手で締め付けて固く抱きしめた。ここに至つて私はあくまで彼女と行を共にする事を決意した。どうにでもなれと少し自暴自棄気味でもあった。彼女は人殺しかも知れない。だけど殺したと言ふ証拠は今の処私は持っていない。それで充分である。人殺しかも知れないと言ふ事は逆に人殺しでないかも知れないとも言ひ得られるからだ。その上、彼女に抱きしめられると、五感が躍動し心がときほぐれて信頼感があふれ出し、身も心もささげつくす氣になった。彼女の有する特有の魔力かも知れない。兎も角、私は七色の絲を吐く美しい毒蜘蛛に捕えられた哀れな一羽の蝶なのである。毒蜘蛛は十重八重に私を縛り付け、金輪際放しはするまい。放すほど彼女は愚かではなからう。いかに私が哀訴しても無益であらう。蜘蛛は蝶に恋していると思える節もあるからである。

車はずらりと家の立ち並んだ町の中に入つた。真夜中の都会は、シン—と静寂の最中にあり、車の走る音がやけに高く響いた。見たような町通りだと瞳をこらしているうちに思ひ当った。ここは京都なのである。

「なあんだ。京都なの。すると私達は大阪か

らやつて来たのね」

私は自分の直感に得意になつて声高く叫んだが、横腹を息が詰る程小突かれてペソかいた。車は三条の橋を越えて町はずれの淋しい路を進み、一軒の洋館の門前に停止した。

「遠いところをすまなかつたわね」

ルミ子は運転手の労を優しい声音でねぎらつて黒皮のハンドバッグから千円札を二十枚ばかり摘み出し手渡した。運転手はすっかり恐縮して去った。ルミ子は洋館へは入らずにずんずんと坂になった道を進んだ。間もなく薄暗い森かげの古ぼけた家に達し、こわれた門を押し開けて入った。小じんまりとした建物であり、外観は古びて見えたが、内部は手入が行き届き家具なども、きちんとそろつていたので、意外に綺麗で住み心地も悪くはなさそうであつた。

薄いカーテンの影に広い寝台のある小部屋に案内して、ルミ子は厳然と宣言した。

「これがあたし達の家。この部屋は私達の寝室。あそこにラジオ、ここに蓄音機、あれは本箱、どうロマンチックでしょう。そして美子。あんたは人里離れた魔城に捕われのお姫様なのよ。あたしはお前をいじめる美貌の悪魔。氣に入つたでしよう。このストーリーは童話や小説じゃなくて現実なの。さあ、その実証を示してあげよう」

ルミ子の両眼はただれたように充血し妖し

く輝きを増した。化猫のような眼付きに寒氣を覚えて、私は夢中で逃げかけたが、ルミ子に床へ押し付けられ、ブラウスを剥ぎ取られた。必死になつて争つたが、女の癖に強力な彼女にかかつては問題にならなかつた。スカートも奪われシユミーズも吊り紐をち切り取られて脱がされた。さんざんに暴れたがとうとう下穿も彼女の掌中に帰し、私は、もう争う氣力もなくぐったりと床の上に伏した。ルミ子は私をかかえ上げて寝台の上に乗せ手首と足首を縛つた。キリキリと身に迫る緊縛感にうっとりとして、私は臉を閉じた。甘えた声で思わず言つた。

「このままキユツと抱いて。お願い。抱いてよ。抱いてつたら。轢でぶたないでね。あんなの大嫌いな。ルミ子さんに抱かれるのが大好きなの」

「ふーん。そんなら眼を閉じてうつ伏せになり。すぐ抱いてあげるからね」

私は言われるがままに不自由な手足を使つて俯伏した。

「ヒット。いたあい」

私はお尻に焼けるような痛撃を覚えて泣声をあげた。眼を開けるとルミ子が乗馬鞭を振り上げている恐しい姿が映つた。

「うそ。うそ付き。鞭は嫌いよ。勘忍してえい。助けてえい。うそつき」

「美子の嫌いなものは全部あたしの好物なの

よ。大好物なのよ。そうら、いい音がするじやないの。ふふふふ」

ヒューヒューと鞭が鳴るたびに私は身をちぢめたり伸ばしたり、寝台の上をあちこち転げまわったりして逃れようとしたが、俯伏すと尻や肩に、仰向くと内股から腹部と言わず乳房と言わず正確に鋭く打ちすえられた。ルミ子の額にはジツトリと脂汗が滲み、残忍な笑みを含んだ眼が、悶え苦しみ泣き叫ぶ犠牲者の哀れな姿を冷酷な眼で眺めていた。私はもう鞭から救われる事だけを念願して、哀泣し懇願した。身体のあるゆる個所が赤紫にはれ上り、ところどころは皮が破れて血が滲み出していた。気が遠くなりかけた時、やっとこの苛酷な責苦の鞭は振うのがやめられた。「大げさな子だね、この子は。今にも死にそうな声を出してさ。あの位の鞭でワアワア騒ぐなんて意気地がないよ。まだまだ辛い目にあわにやならないのだから、よく覚悟をしておく必要があるわ。おお、可哀そうに。血が出てるわ。よしよし、いい子だから泣くのはおよし。およししたら。泣きやまないと又鞭が飛ぶよ」

鞭と聞いて私は震え上ってすすり泣くのをやめた。おどおどしながら美しい皮を着たサタンの化身を見た。

「その表情は何てステキなんだろう。美子、お前はやっぱりあたしの思った通り、あたし

のものとして神様が拵えて下ったに違いないわ」

ルミ子は私に武者ぶり付いて二の腕にガブツと喰い付いた。あれーと私は悲鳴をあげた。歯の跡からタラリと血潮が紅に散った。神様が拵えたのじやない、あんたの殺した叔父さんが拵えたのだと叫びたかったが、この秘密だけはかかる場合にも暴露を思い止ませる強い力が働いた。手足を一つに縛って天井から吊し下げられローソクを軀中に立てられてローを流されたり、片足をベッドの足に結び付けられもう片足は天井の環に通った縄でくくられその縄の一端を引っぱられて大きく逆さに胸をひろげて足の裏や腋の下をくすぐられたり、白々と東の空が明けそめるまで私はあらゆる責苦を味わされた。朝、鶏の鳴声を耳にする頃、グスングスンとしやくりをあげて泣き呻きながら、ルミ子の暖い胸に顔を埋めて、泥のように眠り込んだ。

昼は眠り夜は起きて責められる不規則な一週間が続いた。ルミ子は私の手首と足首の縄だけは一度もといってくれず、従ってものを食べるのも便所へ行つて用をたすのも一切彼女の手を借りねばならなかった。恥しい事だがどうにもならなかった。そうしたある日、眠りからふと覚めると、お小用がしたくてたまらなかった。ルミ子の名を呼んでも買物にでも出かけたのか一向に現れなかった。寝る前

に、ガブガブ水を飲んだのがたたったのである。足首と手首は寝台の枠に縛り付けられており、置き上るどころか満足に動く事すら出来なかった。一時間たち二時間たった。ルミ子はまだ帰って来ない。真蒼になってこらえにこらえた。

毎晩／＼情容赦なく責め刻まれて、私は全身が傷だらけで、自分で自分の軀だと判らない位ガタガタになり無感覚に近かった。悲嘆に明け哀愁に暮れる毎日であったが、胸奥をズキンズキンと痛め疼かせる慕情も募った。我ながらも理解できない情であった。これが自分の本質であり本性である事は最初から疑う余地もなかったが、従来は強烈な自己嫌悪が伴い、僅かに常識ある正常人として踏み止り得たのであった。処がルミ子と二人きりの生活を続けるうちに早くも嫌悪とか恥辱とか見識とかは失われ、ただ死ぬほどの苦痛は承知の上で、鞭にこがれ、縄を求めて、なす事もなく夜を待遠しく考える哀れな一匹の獣と化していた。自己批判などは起そうとすら思わなかった。どこまでもどこまでも一歩踏みあやまれば地獄の底の悦楽を求めて、呪いの業火の中を人と言うものは落下して行くものだ。どこまでもどこまでも、果てなど初めから判らない。ただ少し淋しく哀しいだけであった。

遂に最大のそして最悪の破局が到来した。

ある夜、いつもの通り大の字に私が寝台に縛り付けられ、これから責めの遊戯が始められんとしていた時、突如寝室の戸を外側から何者かが開けて侵入した来た。

「キヤッ」私とルミ子は同時に絶叫した。ルミ子は私を庇うように寝台の上に身を乗せてガタガタと打ち震えていた。醜い怪物が青白く眼を光らして戸口に突き立っているのだ。焼けただれて顔形は全くなかった。顔の真中に二つの鼻穴と唇のない歯を剥き出した口とがモグモグと動いた。

「俺は一郎だ」

怪物は低いフガフガした声で言った。

「えっ？ 一郎さんなら……」

ルミ子の面上を名状しがたい恐怖の表情が走った。

「そうとも。ルミ子。お前に殺された筈の一郎だ。お前の刺した俺は幸か不幸か急所を外れた。けれどもお前の放った火が俺の顔をこんなに変えたのだ。勿論、新村先生も死んだ。いや、お前に殺されたのだ。だから俺は復讐せねばならない。だが俺はルミ子、お前を愛しているのだ。この矛盾と相剋。俺は心苦しい。苦し



いが断じて復讐はするぞ」

怪物の手許からキラキラと電灯の光に反射して刃物が飛びルミ子の大きく喘いでいる乳房の下にズブッと突き刺さった。ルミ子は断末魔の呻めき声と共に床の上に転げおち、ブ

ルブルと四肢を震して絶息した。

瞬時の悲惨事である。私は絶望的に怪物を見詰めた。逃れる術はなかった。身動き出来ない姿を怪物の眼前にさらしていた。自業自得であった。怪物はフワフワと酔ったような

足取で接近し、心持冷笑を浮べて私を見下した。

「俺はルミ子を殺した。俺はルミ子を愛していた。だのにルミ子を殺した。何故か判るか。第一に俺が醜くなったからだ。第二に新村先生と俺の復讐のためだ。ルミ子はお前を独占するために先生と俺を欺いて刺し、あの屋敷に放火したのだ。第三にルミ子が気狂いとなっているからだ。然し、然し根本の原因はお前の存在なのだ。俺は先生と協力して美子と言う存在を創った。その存在がこの言うに言われぬ不幸をもたらした。何たる皮肉だ。ウ

絵画 写真 のアイデア募集

本誌の口絵(写真を含めて)並に代理部の分譲写真、或は「画帖」「写真帖」などのアイデアを広く皆さまから募集いたします。内容はどんなものでも結構です。採用の分には、原画、若くは引伸写真、画帖、アルバムを贈呈の外、優秀なるプランは本誌に掲載の上、編集用のフォトを贈呈いたします。出来るだけ詳細なる説明及び出来れば略画の添布をお願いします。(困難なときは略画はなくとも差支えありません。)(編集部)

ッフッフッフ。俺はお前を殺さねばならない。美子としてではなしに、以前の真の汝としてね。そして俺も死ぬ。ルミ子と抱き合いつたこの家に火を放って死ぬ。お前は元の姿となって死ぬのだ。死体は町の真中に遺棄して満天下に恥をさらしてやろう」

怪物はルミ子の胸部から刀物を抜き取り、私の腹部目がけてシリシリとおろしてゆく。私はいやだいやだと叫び泣き狂おうとしたが余りの恐怖に声が押しつぶされてしまった。大粒の泪がポロポロとこぼれた。ルミ子、ルミ子、と死んだ彼女の名を懸命に胸の内ではび続けた。すぎるものは何もなかった。前に見た悪夢を思い出した。あの夢で刃をひらめかしたのは女であったが、今は男であり、あの女は女にしようと思図していたが、この怪物は男にしようと思図しているのだ。全く夢と反対である。夢には悦虐があったが、ここにあるのは残忍なる兇暴極まりなき殺戮の恐怖と絶望である。私はこの窮地の中に快感を覚えようと思ひ立って、静かに瞳を閉じた。

三

ビッシヨリと冷汗をかいて、私は呻吟していた夢魔から目覚めた。しっかりとフトンに摺って眠っていたと見え、目覚めてからも固くフトンにしがみ付いていた。枕許の薄暗いスタンドの灯に、二、三の風俗雑誌と女の下

着類が放置してあるのが見えた。日頃考えていた事を偶然夢に見たまでである。覚めてみて軽い失望を覚えた。だが、これほど真に迫った夢は今まで見た事がない。実際に女になったのかも知れなかった。

私は無意識で枕許にある女の下着を手にとった。母のシユミーズとズロースである。それらは鏡の前で引き裂いた筈だが、別にどこも破れてはいなかった。そこでシユミーズとズロースを身に付けて見た。言い知れぬ快よさうしてでも見果てぬ夢を追うより仕様がなかった。せめて女性の下着を身につけて実感を味い、空想の世界に惑溺するのを一心不乱に楽しみたかった。悲しい業苦の底には哀憐たる孤独感が暗黒の巨口をポツカリとあけて、私が落ち込むのを待っていた。

この後、私はいろいろな女性の下着を求めて気狂い犬のように彷徨し、首尾よく下着にあり付けば、それを身に纏って痴態に耽ると言う情ない習癖におち入ったが、これも無理がない事と同情して下さる人もあらうと自ら慰めて味気ない日々を送っている。

私のこの世にも稀なる欲望は、このままかなえられることはないと思うが、せめて共感者の一人でもあれば、これに越した慰めはない。

女性に就いて

南川和子

銀座にあるY診療所を訪れた時で御座います。診察を待つ間、私は「婦人科」と名札の出た扉の前で椅子に凭れ、これから起る光景に胸を震わせておりました。Y先生には何回も診察をうけておりましたが、それでも、やっぱり恥しかったのです。

見ると私より二、三人前の席で番を待っている可愛いらしいセーラー服の女子高校生に気付きました。私は母親らしい隣側の中年婦人の附添いで来たものと思っておりました。が、Y先生の声で促されるように高校生が立上ったのです。中年婦人は尻ごむ娘を押すように診察室の扉に消えました。

間もなく火の点くような娘さんの悲鳴が聴えました。私も待合椅子の婦人達も一瞬「ぎよッ」と顔を見合せました。何をされているのか診察に来られた女性なら直ぐ想像が出来る

ます。恥を忍んだ悲しい泣声です。ただでさえ恥かしい検診を受けに来たのですから泣声を上げるなんて余程苦痛が激しいに違いありません。……かしら？それとも……まさか……十七、八才のようだし……私の憶測には際限がありません。

突然「Eー」「Eー」と絶え入るような号泣に変わりました。それは必死に診察を拒んでいる声なのです。恐らくY先生の右手を掴んで抑えている声ではないでしょうか？言葉は一つも聴えません。天井の境がなく区切っただけの各診察室ですから声を憚っているの御座います。悲鳴は「Eー、Eー、HーHー、HーッHーッ」と断続したように聴えました。声にならない泣声のようでした。

幾時が経たぬ時、中年婦人に涙を拭いて貰い乍ら現れた高校生のスカートが前と違っ

て異状に乱れていたのを鮮かに記憶いたしております。

大衆文学などでは『ひーひー泣く』と決ったように表現しますが、私の体験ではローマ字の『E』を何回も何回も繰り返した母音の連続が本当の肉声ではないかと思いました。慎しみ深い婦人は決して大声を上げて苦痛に耐えるのは少く、大抵は噛み殺したように泣き叫び悶えます。

それは日本字では表現がむづかしく、むしろローマ字の方が適切です。もともと私は平仮名による表現は抽象的で現実感がないと思っている位ですが『奇ク』などの作者は卒先して『悲鳴』について、びったりとするローマ字を当てはめるよう現実的にテープレコードなどでモデルさんを責め、研究してみても如何でしょうか。それは、また一幅の責め写真になると存じますが……

また成熟した婦人の号泣は、簡単に見られませんが特殊な場合発見出来ます。凄惨程、美しい婦人ほど、その叫喚は動物的で『UWA/UWA』とそれは激しいものだそう御座います。責められて苦痛に泣く成熟した婦人の大声は文章にしても野獣の咆哮に近く、男子のそれと殆んど変わりありませんので興味が少いので御座います。殆んどリアルに書いた小説は見当らない状態です。

看護婦さんに伺った話で御座いますが、あ

「苦しみを求めて」 (2)

— 縄への憧憬を持つ女性の手記より —

近 藤

(一)

恵以子が第三の男と逢ったのは、鎌倉から帰って大分経った八月末のことである。

男は二十七才。自称では画家と言っていたが、自己流に絵筆を持つだけの男。それでも『貴女をモデルに傑作を創り出したい』という絵描きの言葉は、女にとって正に殺し文句であった。男の画室は農家の納屋を改造した薄暗いがらんとした部屋だった。

「キミ、ボクのアトリエに来たら、ボクの言う通りにポーズとらなあかんで。ボクがよし云うまでそのままでおるんや。」そう云ってから男はにやと笑って、「キミも、ヒドク扱って貰う方がいいんと違うか」と云った。

恵以子は両手首を頭上に括られて吊下げられた。男は恵以子の腰を抱くようにして抵抗を避けながら、洋装の彼女の上下半身を包ん

でいる下着を徐々に剥いで行つた。スーツからスリッパが長く露わられて腿までを覆っていたが胡乱な風の触れるのは避けられなかった。男が離れると、恵以子の体は一本のローブにかかって手首や腕の附根が焼けるように痛んだ、その苦痛は、羞恥を意識しながらも頼りに足場を探って空を蹴らずにはいられぬ程だった。男は恵以子の背後に脚立を持ち出し、それに跨って片手で彼女の衣類の襟をぐいと纏めてつかむと、片手で手首の縄を器用にほどいた。二、三度激しくゆすぶられるとスーツもブラウスもスリッパも今まで包んでいた女体を落して男の手に残った。パットを入れたブラジャーだけが残されていたが、それらもすぐ男にむしるようになして取られた。

「やせとるなア、キミ、一体何食べとったんやね。年頃の女はどないにまづいもの食べたかて豚みたいによう肥えるもんやで。何でキミこないなんや。」

男は恵以子の背に廻り、いきなりヒップをびしや／＼叩いて嘲笑した。男は細引で恵以子を後手に縛り首縄をかけて締上げた。画室には麻縄、棕梠縄、荒縄は勿論、芝居の太綱までが揃っていて、その上に恐ろしい責の道具、小道具が金具を鈍く光らせ壁際に影を曳いていた。恵以子は初めて気付いた光景への恐怖と縛しめの苦痛に「うー、うー」と身を慄わせて低く呻いた。

「Life is short, art is long」男は楽しそうだった。恵以子の前へ自作の責絵を並べた。

「どうや、これ。今日びは身体の美しいモデルが増えたそうやけど、ボクだけはモデル早いや。ええ女やなア思うと思いきついいポーズにしてもうやる、どないに我慢強いモデルかて泣いたり怒ったりや。二度と来いへん。」

向うからモデルになりたいという女は、死にかけの豚やないけど肥えてぶよ／＼しとったり針金みたいにやせておって気がよう進まん。そやけど、これだけのもん描くボクや、キミもええ女に描いたるで。」男は殊更に関西弁を使っているようで、アクセントから恵以子には男が東京の者と思われた。

男が恵以子をモデルにして創り出そうと云うのは、「女囚訊問の図」というシリーズだった。男は縄尻を取ると恵以子を納屋から曳出した。目くらめく程の強烈な陽光の下で、汗は恵以子の肌に流れた。杉林までの田舎道の往復は曳かれて歩む身には堪らなかった。乾いた畑道の土は恵以子の足の裏を焼くように責めつけていた。先の見えている道を急ぐつもりなのに、恵以子は三度も人にすれ違った。見通しの利く畑道だから逃れようもなく、人々は男に軽く会釈しながら無遠慮に恵以子を見据えた。恵以子は立っていられたなかった。両手の自由を奪われた以上、せめて身を伏せて他人の淫らな眼から逃れようとしたが、男はその度に縄尻を引いて立たせるので首縄に堰かれた恵以子は却って他人の視線に弄ばれる結果になった。人々は男を知っているのだろう。中には『お楽しみでんな』と言葉をかけた者もいた。しかし一様にその眼には軽侮と嘲笑の色が満ちていて、恵以子と思わず「ああっ」と声をあげて身悶えた程だった。

た。

画室に訪客があった。西井という中年の男と西井の連れで山村という若いカメラマンだった。西井は好事家であり、男のパトロソであった。この画室や責道具等を調えた男であった。責手は三人になり、仕事はどん／＼捗った。恵以子の羞恥は三人の男の手で、極めて事務的に処理され、写真照明用の明るい電光の下で恵以子は思うさま呻き、絶叫した。石抱きでは本物の角木に坐らされ、しかもその上に檜のような重い角材を二枚も抱かされた。閉め切った画室でも近所を憚って呻き声を抑えていたが、やがて心からの苦痛と恐怖の悲鳴となり、遂には声の涸れるまで哭き喚いた。海老縛りなどは楽な方だった。恵以子の白い肌は、ローソクで焼かれ、割竹や鞭で打たれ、剃刀で切り裂かれ、その傷痕に辛子や焼酎を注がれたので、一面に火傷、裂傷がつき、擦傷はあざと共に縄目以外にも多く残った。現責のために夜は恵以子の細い頸に、映画『山椒太夫』で観たような枷がはめられ、後手の首縄も解かれないままに、睡眠は全く許されなかった。一つ一つの責は全く新しい恐怖の刺激であり、恵以子は全身で苦悶した。山村はそんな恵以子の姿態を刻明にフィルムに収め、男達は「白状しろ白状しろ」と怒鳴りながら、更に新しい責へ進んで行った。縛しめのまま井戸へ漬けられたり、胴を

巻いた縄を左右から掛声と共に引かれたり、曲げた二本の竹の交叉点に括られ竹の弾力に激しく苛まれた時には、責め殺される想いで正に発狂寸前であった。スケジュールは進み、最後の駿河間がフィルムに収まった時、恵以子の意識は無かった。顔は充血し浮き出した脂でてか／＼光っていたし、胸から大腿にかけて一面に汗を滴らせ、床を濡らした。それでも遂に脳の働きは正常であった。否、或いは既に狂っていたために変化が無かったというべきかも知れない。あの変態性慾の狂気と云う奴に……。

(二)

恵以子は目印のオレンジ色スーツケースを左手に提げ、右手にピンクの絹ハンカチを持って、そつとプラットフォームに降り立った。列車は新橋駅でかなりすいたとはいえ、やはり出迎えの人々もあって東京駅は人の波と云える程の群が、乗換フォームや出口へ急ぐのだった。目印を明示しながらも恵以子はやはり初対面の男から特殊な目的で待たれる我が身が恥かしく、人の蔭にかくれるようにして降車口へ出た。慌ただしい人の流れを避けて駅の隅々に人待ち顔の男女がいる。

——私を待っていたのはどの男かしら——
恵以子には総ての視線が自分に集中されているように思え、足の踏みようにもうるたえ

る想いだった。しかし、どの男もオレンジ色のスーツケースには近寄って来なかった。やむを得ず恵以子も伝言板の傍に立って見も知らぬ男の迎えを待った。

——M氏はどうしたのだろうか。もし迎えがなければどうしよう。私はM氏のアドレスを知らない。私書函の主は郵便局で教えて貰えるのかしら。それにしても……



列車の到着は定刻より遅れたのだろうか。時計の針は恵以子がM氏に書き送った時刻より十三分も先に進んでいた。恵以子は耐え難い気持ちに襲われた。中学の頃、幾ら考えても宿題が解けないまま教室に出て、親や兄弟達に教えて貰った男生徒や女生徒の蔑視の前に晒されて立っていたと同じ取り残された淋しいみじめな想いだった。恵以子は男のために

目的のスーツケースを傍の女に託して化粧室へ入った。化粧室から戻って約二十分、傍の女も恋人らしい男と楽しげに肩を寄せて語らいつつ去ってしまった。恵以子は文字通り途方にくれて泣きたくなった。

「あの、失礼でございますが、それは貴女のスーツケースですか？」女の声でした。はっとして振り向くと黒のオーヴァから白い絹のマフラーを覗かせた、すらりとした若い女が頬を染めて恥かしそうに立っていた、女は恵以子の答を聞くと、明らかに安堵の色を浮かべて重ねて訊いた。

「では、森宮恵以子様でいらっしゃいますかね。」

女はM氏に代って迎えに来たのだった。恵以子は喜びが大きかっただけに、今眼の前にいる女に自分が味わった心細さの程を知って貰いたかった。女は丁寧に恵以子に詫びて自らスーツケースを持ち車に案内した。女が自分で運転する自家用車は小型ながら快適な乗心地で、皇居前広場を抜け濠洲に沿って西へ走った。

車内の暖房のため女はオーヴァを脱いでいた。年齢は幾つ位だろう。恵以子より二つ三つ年上のような落着きを見せながら、紺のツーピースに純白のブラウスという姿は清楚な感じさえしている。うっすらと頬紅を刷いただけで化粧の色もない細面は、

まつ毛が長く、瞳は優雅と知性の潤いをたたえ、時折見せる皓齒はこぼれるように輝いていた。一体この女はM氏の何にあたるのか、という疑問が妬心ほどに強く湧いた。

女は地味な身装についてこう云った。

「Mが地味なものを喜びますの。時々私は私も派手な服装を致しますけれど、Mが余り喜んでくれませんし、第一私が気恥かしくって……」

車が着いた処は、閑静な住宅街の一角であった。M氏との初対面の挨拶もそこ／＼に、恵以子は入浴を奨められた。「お流し致しますわ。」という女の申出を拒んで、浴室で化粧を落し、湯上りの肌へ新しい下着を纏い、薄化粧に変えたのも、美しいと思われたい女心の哀れさだったろうか。

夕食は楽しかった。恵以子もすすめられて口にした白ブドウ酒のせいか、男の聴き上手のせいか、活発に談笑した。東京駅での心細さをからかい気味に恨むと、男はいかにも済まなそうに苦笑しながら云った。

「いやア済まんです。どうも事が事だけに、迎えの方も人達をしたあとは気遣れがしましね、まあ、貴女も同年配の女性に目印を預けんようにして頂きたいですな。」

恵以子は一層血が顔に上るのを感じた。当の迎えに来た女が席をはずしていたのが、せめてもの幸せに思えた。

「さゆり」と呼ばれるその女を、「奥様ですの？」と訊いた時、M氏はにっこり笑って大きく頷いたのである。

さゆりは紫のセーターとグレイのスラックスに着換えていた。しつとりと黒く、濡れているように光沢のある髪は解かれて肩の辺りにまで垂れていた。さゆりを顧みながらM氏は穏やかに云った。

「僕は奇譚クラブのファンですが、しかし決して冷酷な男じゃない、女性からフェミニストと云われている位ですからね、だがこの人にだけは始終気むずかしいことを云って泣かせてばかりいます。自分でも無理と判っているながら難題を吹っ掛ける、この人の服装は僕の好みです、自分の宝を他人の眼に立たせたくないのでね、余り外へも出さんし、外へ出す時はできるだけ地味にさせるんですよ。しかし、まあそんな我儘でもこの人が素直にきいてくれるんで余計いじめたくなるんですなア。あっはっはっはっ……」

さゆりはM氏に寄り添うように腰かけて、頬を染めて俯向いていた。恵以子の心情は、完全なそして惨めな敗北以外になかった。ブドウ酒さえ苦くなり、マントルピースの火と傍のガストロブが間断なく身を焙って責めた。全身を走り廻る動悸と割れるような頭痛に恵以子は更にグラスを傾け、やがて新しい肌着に懣めを感じながら胸を覗かせて床に崩

れた。

(三)

胸の苦しさに悩まされて恵以子は呻いた。さゆりの介抱を受けるのが心苦しく、何度も詫びようとしたものの声が出なかった、さまざまな後悔が一度に押し寄せて来た。思い切り吐いて塩水で口をすすぎ、何やら錠剤を吞まされて恵以子は眠りに落ちた。

深い眠りが何時間続いたのだろうか、眼が睨めた時の恵以子は眠りに満ち足りた爽快な気分であった。さゆりと顔を合わせるのが辛かったものの、身仕度を調えるときゆりの運転する車に乗せられM氏の身内の青年に逢いに出かけた。

青年はM氏の義弟だと云った。二十四、五才、五尺三、四寸のがっしりした体軀で健康そうな湿顔に笑を浮かべて恵以子を迎えた。M氏は四十才前後、実業家風の恰福の良さがあつた、青年は若さそのものという感じが異っている点であつた。

青年は会話の中から恵以子の余り強くないマゾヒズムを汲み取ったのであろうか、縛しめは緊かったものの手首には布を巻く心遣いを見せ、恵以子の表情や疲労に注意深く気を配りながら共に楽しんでくれた。恵以子は満ち足りた想いよりも、今までの遍歴のみじめさが先に立って涙があふれ落ちた。青年の顔

を仰ぎ見ることが恐ろしく眼を固く閉じたまま涙を流した。

「貴女には未だ首縄は無理だろうな」と云った男の温い呼吸。後手の縛しめとは別の縄で腰を括って引廻した男の声音。「貴女のお尻は冷たすぎる。もう少し温かにしなければ」と云って身悶えして許しを乞う恵以子のヒツプを熱くなるまで打ち続けた男の掌の感触。そのいづれもが、恵以子の肌の全面から吸収されて胸の中に結合された想いであつた。

恐妻家

或る男が「夫の事を主人と云うのはおかしい、それでは妻は夫の召使という意味になる」というような事を云った。そばには美貌で若い細君がにこ／＼笑っていた。しかし私が考えるに夫の事を主人と呼んでも少しもおかしい事はない、妻の事を主婦というではないか、思う

に此の男は多分に恐妻的だと思ふ、恐妻家というものは、自分が妻の主人である事を認識する事は苦痛なのだ、彼は美しい賢い妻の極端に云えばドレイ的地位を認識する事によつ

恵以子は青年のなすままに大きなタオルで汗を拭って貰った。胸から腋へ触れるタオルの粗いタッチは、快い擦りを倦怠の肌に与えた。青年は後手のままの恵以子に、男の匂いのするナイトガウンを羽織らせ、ストープに点火した。

「風邪をひくといけませんからね。」恵以子は、激痛は無いが自ら解くことの叶わぬ縛しめの身で、男のハンカチに涙を拭かれながら、そっと呟くように云った。

「お姉さま、お綺麗な方ね。」「姉？」

青年は訝しげに顔を起したがすぐに「ああ、さゆりさんのことですね、さゆりさんは僕の姉じやない。あの人は僕の姉じやありませんよ。」と云った。

その瞳には何処か遠くを見る人のような光があつた。

(次号へ続く)

変奇マゾ

マゾヒストと云えば女を女王の位置において崇拜し、自分をドレイの位置に引下げて奉仕したり虐待されて喜ぶのが普通であるが之と少し行き方の変ったマゾヒストが

ある。

自分はいくまでも立派な人物として認識し又は空想し、女を悪魔か劣等生物か嫌悪すべき存在と空想し、そのいやらしい女に自由を奪われ、屈辱的な目に逢う事によつて快感を感じるマゾもある。もっと複雑なマゾは大好きな女性を嫌いな女性にいじめさせ精神的苦痛を感じる事によつて陶醉をおぼえるマゾがある。

こうなるとマゾだかサドだか自分でもわからなくなる。これがマゾこれがサドとはっきり区別をつけられないものもあるのではないかマゾ的陶醉にひたっているうち、サド的感情

良二断想集

高木良二

に交って行く事がある。

マゾの男の見分け方

一人の人間は全然マゾばかりとかサドばかりとかそういう片よった人間も居るであらうが、まず両面兼ね備えているのが普通である。そして絶対的なマゾヒストも絶対的なサジストも存在しないという事だけは確かである。何から何までマゾヒストであるなんて有り得ないと思う。只マゾ的要素の多い人という事は云い得るしマゾヒストというのはこうした人というのだが、さてその見分け方がむづかしい、例えば愛人を縛りつけムチうつ男を見て大抵の人は此の男がサジストであると思つて居るが実はそうでない場合もあるのである。彼は愛人の苦しむ姿に直接快感は感じない、いやむしろ己は耐えがたい苦痛を感じている。この耐えがたい自己の苦痛が興奮をよび起すのだ。こうなるとこの場合の彼はサジストではなくマゾヒストである。又、こんな場合もある。愛する女にムチうたせて快感を感じる男がマゾヒストでない場合があり得るのである。女は男をムチうち乍ら男の苦しむ様子を見て自分も苦痛を感じている、その女の苦痛にムチうたれる男が快感を感じているとすれば男はマゾではなくサド的陶

酔にひたっている事になるではないか。

こんな風に人間の心理は複雑である。だからその行為を見て軽率にこの男はマゾだとかサドだとかはきめられない。しかし特殊な例をのぞいて大体の目安をつける事は出来ると思う。

女の言葉を使う男

どんなにかくして居ても無意識に現れるくせ、又は言葉使い、これによって其の人の実体を或る程度までつかむ事が出来る。所で男のくせに女の使う言葉を会話の所々にはさんで云う人がある。名士の中にも知人の中にもそういう人が存在している事に気づく。ラジオの朝の訪問にも「そうだね」「そうよ」等と云っているから女だと思つていたら男だったりする事がある。こういう人は百人のうち九十九人まで恐妻家として知られている。恐妻家にはマゾヒストが多い。

フェミニスト

これは男性の女性に対する征服慾缺乏患者である。というより女性の主動性（男性部分）を尊重しているかのように思われる。政界の悲劇の人といわれる代表的人物某氏の如きは、これであるのかも知れない。

女の仕事を好む男

これは私自身痛感しているのだが、私は台所仕事に絶大な興味をもつのを、どうする事も出来ない。中でも料理はもつとも好ましく、婦人雑誌の料理の本を読んではいるんなものを創案している。台所仕事は女のする仕事である。女の仕事を好んでする男にマゾヒストが多い。私も、だからその一人なのだ。その他、男のくせに育児の事に口うるさく干渉するような男、女手がなからとて子供を背負うたりする男、主婦の台所仕事にチヨコ／＼手伝いする男、以上マゾヒストが多い。

一生人に使われる男

実は世間の大部分の男性がこれなのだ。人を使う男より使われる男の方が数に於て圧倒的に多い。独立して事を成すような人間はどちらかと云えばサジストである。独立とまで行かず地位的向上を願わず人に使われる男。

此の場合、小使、下男、忠僕、居候は何か環境の然らしむる所があるとは云え性格的なものを見のがすわけには行かない。ここにマゾ的要素が多く感じられる。その他自分の仕事に非常に熱心な男もマゾという事が考えられる。

終^{しゆう}戦^{せん}奴^ど隸^{れい}

△或る勤労働員女学生の手記より▽

雪^{ゆき}俊^{とし}遙^{はるか}

トラックが両側に雑草の生き茂った、やっと通れる様な坂道を下って一軒のただ広い荒屋の前に停った時、抑えに抑えていた私達の疑惑が爆発しました。

「齊藤さん、ここどこ？」

「一体、どうしたんですか。」

「いやよ私、こんな気味の悪い、お化屋敷みたいなお家。」

私達は一齊に、口々に叫びました。運転台の後窓から齊藤さんがちよっと後向きになって顔を見せ、それから扉があいて、まだ十八九の若い男がやくざみたいな凄惨な目付きで私達を睨上げながら降りたのです。その目を見た私は不安になって急に口をつぐんでしまいました。続いて齊藤さんが降りて来ると私の不安は決定的なものになりました。いつも機嫌よく、にこにこ笑っている齊藤さんが、にこりともしないで、じいっと私達の顔を一人一人見ているのです。私について田鶴子さん、喜代子さん……、次々に皆黙ってしまいま

した。女子さんだけが一人まだ小鳥みたいに囁いていました。

「齊藤さん、どうして、こんな山奥に、こんなお家があること知ってるんですか？ ああ解った。昔、二号さんをここにかくしていたんでしょう。」

私達は皆笑いました。でも内心は不安でならないので、その笑いとはとても虚ろな、おかしくもないのに無理に笑っている様な響きがありました。

「うるさい！少しは静かにしろ。」

笑い声が消えない中に齊藤さんが、今迄の沈黙の方を全部取返してしまふ様な大声で叱ったのです。余り大きな声で急に叱られたので私達は皆身体がビクッと震えました。

「皆、トラックから降りて此の荷物を家の中へ運べ。」

RI 欽山を登った時から、私達は此の荷物は何だろうと話合っていました。南京袋の様な布で何重にも包まれた大きな包みで、嚴重

に麻縄がからげてありました。私達は押してみたり叩いてみたりして何か布らしいと云っていたのです。包みはトラックの荷物台に山の様に積まれ、真中が一包み分だけあいていて、その凹みに私達は立たされていました。平時の女学生なら、こんな所から遣出して下まで降りるのに大変な騒ぎをやったことでしょう。何しろ地上には四人の男の人達が立っていて、私達の降りる姿をじっと見守っているのですから。でもその時、私達は皆、黒か国防色のもんべズボンをはいていたので割合平静でした。それでも麻縄を掴み、トラックの荷台のうちに足をかけて腰曲げた姿勢になった時など、丸くふくらんだお尻のあたりへ男の人達の視線が注がれているのを意識して皆、少し赤くなっていました。一人だけ上に残っていた田鶴子さんが私達のリュックを投げてよこしました。田鶴子さんも降りて来ました。私達は三、四人づつ組んでトラックの荷物を、がらんとした汚ない百姓家の中へ運び入れました。荷物は随分ありました。男の人達も手伝いましたが、私達が三人も四人もで運んで行く物を一人で一つづつ運んでしまうのです。だから数の割には案外早く片附きました。

「いいか。お前達も知っている様に此の間、天皇陛下のお勅語が発表された。だからお前達は戦争が終ったと思っているのだろう。併し、戦争はまだ終っていないんだ。本当の戦争はこれから始まるんだ。お前達も知っている通り、わしは北部軍管区司令部へ屢々公用で行っている。此の前行った時、某作戦参謀から実に重大な秘密を打明けられ、重大な用務を頼まれた。お前達を札幌へ帰すといつわってこんな所へ連れて来たのは、実はその用務を果す為なのだ。某作戦参謀の話というのはこうだ。正確な日は解らないが、来る十月頃米軍がロシヤ軍が北海道にも上陸して来ることになっている。我が勇猛なる北部軍部隊は各地の山峽にたてこもってこれを迎え撃つ、内地でもこれは同じことだ。二千六百年來夷狄に蹂躪されたことの

ない我が国土を決して敵手には委ねないというのが陸軍の決意だ。終戦のお勅語は中央で方便にやったのださうだ。勿論此のことは極秘にされている。そこで司令部でも極秘に軍需物資を調達している。わしが頼まれたのも此の点だ。そこでわしはお前達にわしの手足となって仿いて貰いたいと思ってここへ連れて来たのだ。お前達は久しぶりに札幌の山河を見たいだろう。懐かしい父母とも話したいだろう。併し皇國の為にその望みは一時捨て、こゝでもう一頑張りして欲しい。此の通りわしが頭を下げてお願いする。」

斎藤さんの長い演説を聞いている中に私はサインと身内が熱くなつて来ました。そうだったのか……。

私達は三、四日前に釧山の事務所で終戦のお勅語を聞いたばかりでした。その二日前に月遅れのお盆で勤労動員の学生には一齊に休暇が出たのですが、事務所勤めの私達六人だけは、丁度やりかけの釧山用具の原価計算の仕事で手が離せなかったので休暇は日延べになっていました。愛子さんと一緒に帰るので特に斎藤さんをお願いして此の間だけ、後山から事務所へ一時、仕事替をしていた珠子さんも入れて七人。事務所の人達の前に並んで放送を聞いたのです。皆、何のことかよく解らないので、始めは下を向いて鼻汁ばかり吸っていました。お勅語が終って鈴木総理大臣がお話を始めますとどうやら負けたりしいとぼんやり解つて来ました。そしてその後はラジオなどそっちのけで皆ワアワア泣きました。斎藤さんは道庁の学生動員の係のお役人で、札幌の中学校や女学校の「良いお客先」のR I 釧山には始終来ていましたが、市内の工場やあちこちの農家への動員も受持っているというお話を聞いたことがありますから、この大きな荒屋は援農の世話で此の辺に來た時にでもみつたのかもしれない。それにしても一体こゝはどこなのでしょう。トラックが札幌へ通ずる国道をそれて山奥へ入ってしまったてからは、私達は南も北も解らなくなっているのです。何か目印になる有名な

山でも遠くに見えればいゝんですが、此の辺からでは羊蹄山も大雪山も見えはしません。

その日一日は家の中の大掃除で潰れました。家の裏は五米程の断崖になっていて、轟音を響かせながらちよつとした滝が落ちていました。水は清冽で美しかったのですが、直径十米程の滝壺は深そうで、水が絶えず逆巻いているのとでどんよりと濁って見えました。滝壺の水は小川になって、家の左の方を大きく迂回して流れています。私達はその水を汲んで来て床や縁側を雑布掛けしました。迂回した小川は家の前でもう一つ小さな崖に懸って小滝を作っていました。小滝の傍にも小屋があつて、斎藤さん達はしきりにそこを調べていました。

「何をしているのかしら？」

私は鶴田子さんに訊きました。

「先刻水を汲んだ帰りにちよつと上から覗いてみたのよ。あの小屋はね、澱粉工場よ。此の辺の大きい農家はお薯から澱粉を作る工場を自分で持つてるのよ。自家発電でモーターを廻すの。斎藤さん達きつと自家発電設備をもう一度使おうと思つて調べているのよ。」

札幌育ちの田鶴子さんが首をかしげていると、田舎育ちの喜代子さんが傍から教えて呉れました。

夕方、若い人一人と斎藤さんが残つて、もう一人の若い人と運転手さんはトラックで帰って行きました。

「俺達は近所の農家を廻つて食糧を集めて来る。疑われない様に俺達の口先で何とか云いくるめておくから、お前達は此の辺の百姓と顔を合す様な所へ行つてはいかんぞ。公務が終わるまであの坂より上へ行くことを禁ずる。根堀り葉堀り奴等に訊かれたりすると、お前達は純情だから、かくしきれなくて何か喋つてしまうかもしれないからな。」

若い男の人が持つて来たりユツクを肩に負いながら、斎藤さんは

私達にそう云いました。

「一番近い農家は、どれ位離れているんですか。」

文子さんが無邪気に訊くと斎藤さんの表情がさつと変りました。「千米以上だ。ことわつておくが軍の秘密を明かした以上、逃亡したりした者は、どういうことになるか解らないぞ。よく考へて行動しろ。」

可哀想に文子さんは真赤になつて見て居られない程困つた顔をしていました。彼女は只何の考へもなく質問してみただけなのでしよう。私は厭アな気持ちになりました。鉾山ではあんなに親切で朗かだった斎藤さんが、文子さんの、こんな無邪気な質問にも余計な心を伪かせ、その上私達を脅す様にするなんて……。

食器がないので、その晩は斎藤さん達の持つて来た飯盒で御飯を炊いて食べました。

翌朝早く、床の上にごろ寝して裏山の郭公の啼き声を夢現に聞いていた私達は、トラックの音で目を覚まされました。昨日の二人が帰つて来たのです。トラックの上にはミシンや風呂桶、何か大きな鉄製の機械。食器類、建具などが見え、その下には畳や材木が沢山積んでありました。その材木の一部で男の人達は奥の部屋の上に屋根裏部屋を作りました。その部屋にも下の部屋にも畳を敷き、下の部屋にはミシンを置きました。

「ワイシャツの作り方を、ちよつと知っている者は手を上げる。」

私と田鶴子さんと愛子さんと珠子さんが手を上げました。でも私を除いては三人とも他の人の顔を見たり、上げた手を一度降してみたり、自信のなさそうな上げ方でした。

「よし、何とか出来るだろう。こゝに軍から利用を委嘱されたキヤラコがある。今時珍しい純綿だ。これでワイシャツを作つて貰いたい。軍で使う物だから一つ一つ念を入れて良い物を作つて欲しい。」そう云つて斎藤さんは、例の大量の荷物を指さしました。あゝそ

うか。私は漸く思い当りました。

あの日。自分の机へ戻って又一しきり泣いた私が、目を泣き腫しながらお便所へ行くと、その入口の所でバツタリ斎藤さんと出遇いました。斎藤さんは何かしきりに考え込んでいて、私がお辞儀をすると、「やあ」と慌てゝいつもの愛想の良い笑顔になりましたが、直ぐ又難かしい顔になってしまわれました。お便所から出て来るとその斎藤さんが私を待っていました。

「照子さん、貴女、ワイシャツを仕立てられますか？」

「ワイシャツって洋裁の中では難かしい方なんです。私位の年の者は大概出来ないんじゃないやありません。でも、私は母に教わっていたから何とか出来ますわ。」

「そうですか。」

「何故ですの、斎藤さん。」

「ナニちよつと布地があるものですから。あゝ、これはしまった。」

余り他人に云わないで下さいね。」

「ハイ。それを私に仕立てゝ欲しいと仰有るのでしようか。」

「え、いや、ま、そういうことになるかもしれないません。」

「斎藤さんが御自分でお着になるだけでしたら、仕立てゝ上げても良うございますわ。」

でも闇に流したりする物ならおことわりします。という言葉は咽喉の所で抑えました。あれで斎藤さんは闇物資の売買では相当な物なのだから、それで儲けたお金で札幌に二号さんだの三号さんだのを囲っているのだとか、不愉快な噂も私は何回か聞いていました。でも、どうせそんな物は噂なのだからと余り信用もしていませんでした。が、あゝ、これはしまったと云った時の斎藤さんの表情から、急に私はその噂を信じられる様な気持ちに襲われました。何れにしろ祖国の敗戦を知ったばかりだというのに、平然と闇の布地の処分方法を一生懸命考えているなんて、何という人だろう。……。

その時の私はとても憤りを感じたのです。

「照子、じや製造の方はお前が責任者になってうまくやって呉れ。俺達は出来上った品物を秘かに軍に運び込むからな。何か仕事の上で必要な品物があつたら紙に書出して俺の所へ持って来い。直ぐ手に入れるから。解ったな。」

「ハイ、解りました。」

小さい時、私の家の直ぐ近所にシャツなどを作っている町工場があつたので、私は大勢でシャツを作る時の大体の手順を知っていました。ミシンが丁度四台あるので、私、田鶴子さん、愛子さん、珠子さんがこれを使って、一番複雑で難かしく時間も掛る縫製をやることにし。文子さんと啓子さんは仕上げ。喜代子さんには裁断をやつて貰うことにしました。男の人達は発電小屋を整備して電気を引き、又余つた材木で家のあちこちの破れをしきりに修理していました。

皆、どうにか自分の仕事を一通り覚えたところで夕食にしました。若い人が一人材木を打附けて梯子を作り、屋根裏部屋へ掛けてくれました。こゝがこれから私達の部屋になるのです。

「どうだ、名案だろう。直ぐ下は仕事部屋だから、やりかけのまゝ上の部屋へ行くことも出来る。第一梯子を外しておけば誰も上つて行かれないからお前達だって安心して寝ていられるだろう。」

上に上つて来た斎藤さんが、久しぶりに、こにこしてそう云いました。

斎藤さんは降ると直ぐ梯子を外してしまいました。私は急に不安になつて来ました。私達が梯子を上引上げるのならともかく男の人達が下に引下しておくのでは余り『安心して』もいられません。そうでなくても私達の部屋は窓もない一番奥で、男の人達は入口の手前の部屋で寝起きしてるのです。『逃亡したりした者はどうい

ことになるか解らないぞ。』という食糧を買いに行く前に斎藤さんの云った言葉が今更のように思出されました。誰からともなく女学校の校歌を歌い出しました。きつと皆私と同じ不安に突当って、それを払落したかったのでしょうか。

合唱が終ると今度は一人宛歌いました。喜代子さんが『勝利の日まで』を歌い、田鶴子さんが『夏は来ぬ』を歌い、勇ましいことの好きな啓子さんが『後に続くを信じ』を歌った後で、私は『東京市歌』を歌いました。

紫匂いし武蔵野の野辺に
日本の文化の華咲き匂う。
月影入るべき山の端も無く
昔の広野の面影何処。

此の歌を歌うと私は最初の空襲で焼かれるまで住んでいた東京の家のことを思出すのです。あれからまだ十ヶ月も経っていないのに私はもう何年も北海道に住みついている様な気がしていました。これがどんな歌が知りもしない田鶴子さん達も黙って耳傾けて聞いていて下さいました。

大東京こそ我が住む所
千代田の宮居は吾等が誇。
力を併せていざ我が友よ
吾等の都に輝き添えん。

私は感傷的になって涙をぼろぼろこぼしていました。家族達のこと、殊に弟のことを切なく思出したのです。八月十五日以後は目まぐるしいばかりの日が続いて、私は弟のことともすれば忘れ勝ちだったのです。あゝ弟……………」

「こら、うるさいぞ女共。いゝ加



減に静かにせい。歌ばかり歌いおって。」

何か棒の様な物ですぐお尻の下天井板をどんとどんと烈しく突く音がし、若い男が下から怒鳴りました。田鶴子さん達は慌て、拍手をやめました。私は耐らなくなつてワッと泣伏してしまいました。

私と弟は一緒に鉦山^{やま}へ行つたのでした。私が転校した学校も、弟が編入された学校も共に三年生以上はR1鉦山に動員されていました。編入手続を済すと事務室の中年の女の人が、明後日道庁の人が一人連絡に鉦山へ行くことになっているから一緒に連れて行つて貰う様に、と云うのです。家へ帰ると弟も中学で同じ様なことを云われて来ているのでした。

その日私達は指定された時間に母に附添われて桑園の駅で待つていました。私達の傍に眼鏡を掛けた、恰幅の良い中年の紳士が居て時々腕時計を気にしながら北海道新聞を読んでいました。私は何となく此の人が道庁のお役人ではないかしらと思ひながら、だだっぴろく、静かで、清潔な感じのする、駅の構内を何回も見廻していました。

「ア、来た来た。」

弟が小さい声で云つたので弟の顔の向いている方へ目をやると、小柄で眼鏡を掛け、どこか鯨を連想させる、ユーモラスな感じの四十男が真直に私達の方へ近附いて来るのです。彼は近附きながら腕時計の紳士の方に、「やあ」と云つて頭を下げ、直ぐ母と弟を等分に見やつて、もう一度頭を下げました。腕時計の紳士も私達の方を向きましたので、丁度彼の方を見ていた私とバツタリ視線が遇いました。

「此の方が道庁の斎藤さんです。」

「まあ、さよでございますか。こちら一雄の姉の昭子でございます

の、あの、H女学校に入りました……。」

「ヤア、それはそれは——。中学生が一人と女学生が一人と聞いて居たのですが、御姉弟だったのですか。」

そんな挨拶が交されてから鯨さんの方は帰つてしまわれました。此の方が弟の入った中学の副校長さんだったのです。私の方の学校の人は御用でも出来たのでしょうか、とうとういらっしやいませんでした。

汽車が発車する間際まで、母は、

「何しろ東京ではのんびり育つていたものですから力仕事などどこまでやれるものですやら。本当にどうぞ宜しくお願い致します。」

と、くどくど云つては頭を下げてばかりいました。何ということ云うのだらうと私は憤りを感じました。女親として、人夫も同然の仕事させられに行く子供達が、不憫でならない気持は解る様に思いますが、東京ではのんびり育つたの、力仕事に向かないの、と正直に他人様に云われては、私達が軽蔑されるか非国民視されるかして、風当たりが強くなつて困るのです。現に東京に居る頃から、母のこんな調子の害を自身に浴びた記憶を私は幾つも持つていました。

「もういゝわよ。お母様、帰つて。」

思わず口が滑りました。きつい調子でした。斎藤さんが、おやという様な顔で私を見ました。私はハッとしましたが、同時にこれはいゝんだ。これで丁度母のあの口調と相殺するんだ、とも思いました。それでいて私は、まだ見知らないクラスメイト達と同様に坑内に仇かされることにはとても不安を感じていたのでした。だから心の底には、母のあんな調子を持つとする様な気持もあったのです。

私が心配したみたいに斎藤さんは私達を非国民視はしませんでした。それどころか私達は好意を寄せられた様でした。トコッコやエレベーターで先山の掘出した鉦石を貯鉦場まで運ぶのが女学生に割

当てられた仕事でしたが、算盤に巧みな人や計算の速者な人が六人程事務所勤務になっていました。私はそれ程数字も算盤も得手ではなかったのに事務所に廻して貰いました。斎藤さんの指金でした。斎藤さんは、その時は用事が簡単に片附いたので直ぐ帰りましたがその後も来る度に事務所に顔を出して、

「どうです、昭子さん。もう仕事に慣れましたか。」

などと声を掛けて行つて下さるのです。私達とは大分離れた坑で働いている弟の所へも声を掛けていらつしやうです。尤も声を掛けて行くのは私だけではなく、事務所の学生一人々々に何か勞いの言葉をかけて行くのが常でしたから、皆一人々々自分は斎藤さんに好意を持たれていると思つていた様でした。こういう所が彼の処世の巧さだったのでしょう。

でも私は私だけは特別だと思つていました。自分で云うのは変ですが、私は東京育ちですし、身体は小柄ですけれど、特別に目立つ理知的な、整った顔をしていた積りです。弟達の宿舎へ訪ねて行つた時気がついたので、弟は姉の私でさえ見惚れる程綺麗な顔をして居て、肌は透通る様に白く、色の黒い田舎の少年達の間では群を抜いていました。母だつて斎藤さんの男としての関心を惹く程度の色香はまだ充分持つていました。

忘れもしない、それは此の年の六月十八日の夜でした。もう此の時私は私と田嶋さんは卒業して、愛子さん達が最高学年になっていたのです。当時どこの動員学生もそうだった様に、卒業しても私は家へ帰ることを許されず、そのまゝこの鉱山で働かされていました。

仕事が終わってから、職員社宅の一軒の私達の合宿で、寝転んで『西部戦線異常なし』を読んでいると、愛子さんがやって来ました。

「ねえ昭子さん。今晚、私、珠子の所へ行ってみようと思つてるんだけど、昭子さんどう？」

「行つてもいいわ。でも、もう少し待ってね。もうじき此の本読んじやうから。」

「どこなの今？」

「カチンスキーが戦死した所。」

「じやもうじきね。早く読んでね。」

私は大急ぎで残りを読み終り、本を愛子さんに返しました。彼女は仲々の文学少女で、こんな、当時珍しい本を持って来ていたので。珠子さんは三年生になったばかりで、だから鉱山へは来たばかりでした。前から現場の女学生が泊っていた寄宿舎が、卒業生が退かない為に満員なので、新来の三年生は鉱山の倉庫の端の一棟を宿舎にしていました。そこから幾らも離れていない所に、中学校の下級生が合宿しているR I小学校があつたので、私と愛子さんはいつも二人連れで姉妹の所へ会いに行くことになっていました。倉庫の附近から小学校へ行く途中は夜になると人通りも殆ど絶えてしまひますので。

珠子さんは疲れきつて、自分の寝床を取るのも億劫で仕様がなさとブリブリしていました。私達は早々に倉庫を出ました。

有刺鉄線の垣根の破れを抜けて、両側にボブラの並んだ小学校の裏門を入ろうとして、私達は足を停めました。

ボブラ並木の左の端の内側。校舎の裏昇降口の、小さな石の階段の上に、私もよく顔を知っている。五十嵐という今年卒業の不良少年を中心、数人の上級生が塊っているのです。その前には六、七人の三、四年生が裸のまゝ一列に横に並び、もう一人が更に二、三歩前に一人で立たされ、そして大勢の学生達がその周りを取囲む様にして立っていました。

「大体疎開者は上級生に対する礼儀を知らんぞ。いゝ機会だから今日は一つ徹底的にヤキを入れてやる。」

五十嵐がしやがれた様な声で喚きました。私は危く声を立てる所

でした。月の光にも一際白く美しい裸身を見せて、一人だけ前に立たされている少年は弟の一雄だったのです。

今はどうか知りませんが、その頃、田舎の中学では上級生が下級生に制裁を加えることは普通でした。通りがかりにうっかりして敬礼するのが遅れた。たったそれだけの理由で、直立不動の姿勢を取らせてビシビシ撲ったのです。流石にこれは学校からは禁じられていましたが、生徒達の間では公然の事実でした。

女の私でさえやられました。私の場合は同級生でした。女学生は平手で打つ代りに指先で抓るのです。

地下数百米の坑内は暑いので皆半裸で仿っています。本当の鉱夫は越中一つ。鉱婦はお相撲さんの締込みの様な、巾広い厚地の布の褌でした。中学生も大概はパンツ一枚で、勇敢な人は鉱夫の様に褌一本になっていました。女学生は流石にそうはいかないので、ランニングシャツに下穿きという姿で仿っていました。女学生の坑は先山は全部鉱婦で、先生方と、会社側が特別に選んだ職員が監督していましたので、問題は起きませんでした。そんな姿で真黒になって仿き、併も酷く疲れるので、事務所勤めの私達がとてもよく見えるのでしよう。私達が用事で傍を通ったりすると、凄いい目で睨む人が随分居ました。私達は先生の『お花ちゃん』だから良い仕事に廻して貰ったという訳なのです。

私がやられたのは寄宿舎のお便所でした。お昼休にそこへ連込まれ、寄ってたかって全身を抓られました。東京から来たばかりで直ぐ事務所へ廻されたので特別に憎かったのでしょうか。お昼では寄宿舎に先生方は居ませんし、大勢が相手だから手足は抑えつけられていますし、どうなることかと思ひながら、夢中でヒイヒイ云っていると、いきなり裏戸の硝子が大音響と一緒に壊れました。誰かが大きな鉱石をぶっつけたのです。皆が驚いて騒いでいる間にほうほうの態で逃げて来しました。

社宅へ戻って泣きながら破かれたもんぺやブラウスを着換えていと愛子さんが入って来しました。

「良かったわねえ、照子さん。うまく逃げられて。」

私は驚きと感謝でズボンを引き掛けた手を止めて思わず彼女を見上げました。が、何ということでしょう。ふっくりと柔かそうな下脹れの頬が目に入った途端、感謝よりも寧ろその頬を、今自分がやられた様にギュウッと力一杯振り上げてやりたい衝動に駆られていたのです。

そんな体験を持っているので、弟の置かれた位置は直ぐ私に解りました。

「顔を上げる。」

一雄がうなだれていた顔を真直に起しました。五十嵐が近附いて行った次の瞬間、ビシヤリと弟の頬が鳴りました。私の心臓は一べんに烈しく打出しました。ビシヤリ、ビシヤリと五十嵐は一雄の頬を二、三回続いて叩いてから、後に並んでいる六、七人の子を次々に撲って行きました。その半分位は私も顔を知っている子でした。皆、東京や大阪からの疎開学生でした。褌を締めて、肉の厚いお尻を剥出しにしている子もいました。中学生の方は就労時間が長いので、坑から上って着換えもしない中に呼出されたのだらうと私は想像しました。

「貴様は大体たるんでるぞ。」

一通り撲り終ると五十嵐は一雄の鼻先へ顔を差附ける様にして、しげしげと一雄を見ながら云うのです。

「ハイッ。」

「何かあ、その返事は。もっと下っ腹に力を入れて男らしい声を出せ。」

「ハイッ。」

「情ない声をしておって、こいつめ。」
 そう云いながら一雄の胸や腹を太
 い指の先でぐいぐい押すのです。

「もう一ぺんッ！」

「ハイッ。」

「駄目やこいつ。女みたいな白い肌
 をしてやがる。少し精神棒でもくら
 わせてやらんきや。」

別の上級生がそう云うのを待って
 いた様に太い棍棒を持って出て来ま
 した。

「こっちへ来い。」

「ハイッ。」

五十嵐が私達の方に向って歩いて
 来ると、緊張して頬のあたりをビク
 ビク痙攣させながら弟がついて来ま
 す。他の少年達は一塊りになってそ
 の後に続きました。裸の少年が一人
 ちよつと愚図々々している、その
 お尻へ例の棍棒が飛びました。

今更逃げることも出来ない、
 私達はボブラの幹の後に身をかくし
 て、そつと様子を窺っていました。

裏門の直ぐ先が中央昇降口の裏で

その横から校舎の裏へコンクリートの小さな渠が通って居ます。一
 雄はその所まで歩かされて来ました。その場所は私達と、始めに
 彼等の塊っていた石の段階との丁度中間位でした。渠を背にして一
 雄は向う向きに立たされ、五十嵐がその前に立ち、他の人達はその



後に塊っていました。

「パンツを脱げ。」

何と云うことを云うのでしょうか。一雄は流石に躊躇していました。
 「貴様、上級生の命令に従わんか。」

その頃は撲られっぷりが良い程、賞められた位の時代です。こうまで駄目を押されて支えきれぬ筈はありません。

一雄は素ッ裸になって上級生や同級生（下級生さえ少し混っていたのです）の前に立ちました。青白い月光が一条も纏わない一雄の肉体を照し出して、まるで海の底に立たされていゝ様な美しさでした。五十嵐や他の少年達の頬には卑しい薄笑いが浮んでいました。一雄は気を附けの姿勢で両手は太腿の外側にびったりと当てゝいました。

「渠を跨げ。」

云われた通り一雄はそのままの姿勢で渠を跨ぎました。

「底の針金に掴まれ。」

上体を蝦の様に折曲げて、両腕を二本真直に延すと二つの腕から下は渠の中にかくれました。

下水は炊事の直後などを除いて大概乾いていました。底のコンクリートが一ヶ所だけ大きく壊れて針金の鉄筋が三、四本出ていたのを、こんなまだ新らしい下水なのに、と私は以前一雄に会いに来た時発見して不思議に思っていたのですが、これで謎は解けました。一雄のお尻は大きく、丸く漲りました。棒で叩くには絶好の姿勢を取らされたわけです。棍棒を持った少年が裸の腰の横に立って棒を構えました。

バシリッ。バシリッ。バシリッ。

鈍い音がしました。

私は飛出して行って弟をかばってやらなければ——、と思ったのですが、幾ら生意気盛りでも女学生なんて意地地のないものです。バシリッ、バシリッ、という、まるで暴力をそのまま音で表現した様な音を聞くと、胸の中に真黒な恐怖が詰ってしまつて、身の震えを別にすれば指先一つ動かないのです。

と、いきなり愛子さんが走り出しました。私はびっくりしました。

男の子達も呆氣に取られてそれを見ていました。愛子さんの白い影は一気に裏門を走り抜け、中央昇降口の中へ消えて行きました。バタバタという足音だけがまだ聞えています。

お尻を棍棒で叩かれながらじいっと下水の底をみつめていた一雄も、何事が起ったのかと思つたのでしよう。針金を掴んだまま顔を横に向けました。ペソをかいいた様な表情がいじらしくて私は胸が詰りました。

「センサーエ。センサーエ。裏庭で、上級生が下級生を折檻してきました。早く行ってやって下さあい。」

表庭の方から愛子さんの甲高い声が聞えて来ました。その言葉が半分も聞えない中に五十嵐達はワツと蜘蛛の子を散らす様に逃げ散つてしまいました。

後には全裸の一雄が果然と立っていました。が、それも一瞬で、渠の横に脱捨てられていた白いパンツを慌てゝ穿くと、忽ち自分も逃げて行きました。

私も愛子さんと夢中で社宅へ逃げて来ました。若し途中で五十嵐達にでも捉つたら大変なことになるではありませんか。

それが弟を生きているまゝで見た最後だったのです。弟ははにかみ屋で、まだ小さい時分から母にさへ肌を見せなかつた位だったそうですから、全裸姿で見たのは最後であると同時に最初でした。私は弟を愛していましたので、時間が経って恐怖が薄らぐと同時に、月光の下に一条縋わぬ姿で立った一雄の美しい肢体を惱ましい気持ちで思出す様にさえなっていました。

五日後。私は公用でKI駅へ派遣されていました。KI駅はRI鉱山と室蘭との中間に在つて鉱石を中継する大きくはないが重要な駅なのです。鉱山の事務所から駅へは直通電話が通じていました。突然、私は電話口へ呼ばれました。

「もしもし、昭子さんね。私、愛子です。大変なのよ、直ぐ帰って弟さんがお亡くなりにな……。アラ、ハイ、直ぐ行きます。……もしもし昭子さん。私も忙しいから電話は直ぐ切ります。直ぐ帰って来てい……、とこれは所長さんから許可が下りてゐるのよ。」

R1行の客車は二時間後でなければ出ないので、私は駅長さんに



が勝った若い方のお尻に鶴嘴打込んだとか。本気には出来ない話ばかりでした。更嘘とも云切れない話ばかりでした。

私はその伝説の一つ一つに弟を当てはめて想像していました。坑木の十字架に素ッ裸の一雄が磔にされて、苦痛に顔を歪めているのです。一雄の掘られたお股の下にはダイナマイトが置かれ、火を

訳を話してまもなく出る空貨物列車に乗せて頂きました。鉱石を運んだ帰りの無蓋の貨車でした。

弟が死んだなんて、そんなことが——。私は直ぐあの夜のことを思出していました。そうだ。五十嵐に殺されたのだ。それに違いない。

鉱山には恐ろしい伝説が幾つもありました。大正から明治の昔。世の中全体が今よりももっと荒っぽかった頃の鉱夫のリンチの話です。或る坑を廃坑にする時、小頭が平素面白く思っていない鉱夫を坑木に縛附けたまゝ入口をダイナマイトで塞いでしまい、十何年も後に必要が出来てもう一度そこを掘返したところ、奥からミイラの様になった屍体が発見されたとか。鉱婦同志で男を取合って、負けた女

点じた五十嵐が急いで入口の方へ逃げて行く……。その間にも私の頬を伝って涙が流れ続けていました。

鯨山へついてみると弟の死因は只の心臓麻痺でした。母が心配した通りこんな重労働はひ弱な都会少年には無理だったのです。

弟の死体は倉庫の間に席を敷いて寝かせてありました。身体は綺麗に洗ってありました。色の白い、すべすべした美しい肌をしていました。

車が空かなかったので火葬場まで担架で運ぶことになりました。この担い手の一人に選ばれたのは皮肉にも五十嵐でした。私は口惜しくて、思いきり腕附けてやったのですが、彼は案外（考えてみれば当然のことですが）殊勝な顔をしていました。堰の切れた様な深い悲しみに浸りながら、私は心の底の方でちと、そんな五十嵐に好感を覚えたりもしたものでした。

何週間か、私達は不安をかくしてワイシャツ作りに精を出しました。出来たワイシャツが何百枚か纏ると、例のトラックが来てどこかへ運んで行きました。時には男の人達が一人か二人でリュックに詰め持って行くこともありました。又時には運転手さんが急にトラックを乗着けて斎藤さんに何か云うと、真夜中まで薄暗い自家発電の電燈の下で夜業をやらされることもありました。そんな日でも翌朝は又早く起されるのです。それが何日も続くこともありました。私達は皆目が疲れてしまつて、遠くの方など二重にも三重にもボヤッと霞んで見える位でした。それでも男の人達はいつもブラブラ歩いて炊事さえ私達にやらせ、大概はお酒ばかり飲んでいゝのです。時々仕事場へ姿を現すと、

「御国の為だ。皆しっかり頑張つて呉れよ。」

などと紋切型なことを云つて直ぐ帰つてしまひます。朝になると長い棒で天井板を下からどんどん叩き、

「オーイ起きろ。もう時間だぞ。」

と怒鳴るのです。私達は段々胸の中に不平が溜つて参りました。

或朝、私達は例によつて棒で文字通り叩き起されました。愛子さん一人は平然と目をあけて天井を見ていました。入口の所に梯子がかけられました。私達は先を争う様にして降りようと思いました。

「そんなに慌てることないわよ。私達がいつもおとなし云われた通りにするから、男の人達つけ上っちゃうのよ。今度から朝はもう少し人間らしくゆっくりさせて貰いましょうよ。そしてあんな、豚でも叩き起すみたいにとどん棒で叩くのは止めて貰いましょう。昭子さん、斎藤さんに目覚しを一つ買わせなさいな。」

愛子さんはそう云いながら蒲団の襟から細い腕を二本出して頭の下で組みました。ちよつとした姐御と云つた恰好です。

愛子さんは、とても気の強い所と、変に気の優しい所のある人なのですが、気の強い時には滅法強くて私や啓子さんも敵いません。

私達は夫々に幾らか頭が良い積りで居りましたが、やはり一番本を読んでいる故でしょうか、理窟では愛子さんに敵わないのです。それでこんな云い方をされると、私も級長だった田鶴子さんも逆らえない気持になつてしまつて云うなりになつてしまふのが常でした。

「コラア。何を愚図々々してゐるんだ。降りて来い。」

下からは烈しく天井を叩く音がします。どうなることかと、はらはらしながら私達は愛子さんの様子を窺つて愚図つていました。漸く愛子さんも起き始めました。ほつとして降りようとした時、待ち切れなくなった若い人二人が棒を持ったまゝ梯子を昇つて来たのです。

「貴様達、起きてやがる癖に横着しやがって。」

最初に昇つて来た、斎藤さん達からガタと呼ばれている若い人は亢奮していきなり手近に居た喜代子さんのお尻をピシリツと棒で叩きました。

「何をするのよ。乱暴な。」

寝巻を脱いで半裸だったので、向う向きに座ったまゝシユミーズを着ようとしていた愛子さんが、振り返りざま鋭く云いました。

「何を此の野郎。反抗する気か。」

「女の人をぶったりするなんて野蠻よ。」

「こいつ生意気な野郎だ。」

ガタさんが躍り掛る様に愛子さんの所へ走って行って、右手を掴んでずる／＼引きずって来ました。愛子さんは蒲団の中へ両足を入れたまゝ上体だけ起していたので、その両足が、腿、膝、脛とみる／＼裸で出て来ました。

ガタさんがズロース一枚の愛子さんを部屋の真中へ転がすと、起上る暇も与えず二人の手にした棒が、ビシッ、ビシッ、と裸の背中や腿に当てられました。

「酷いことは止して。」

私と啓子さんが殆ど同時に叫びました。

「おい待て。女共に何か不平があるらしい。下へ降りてゆっくり聞こうじゃないか。」

入口の所から首だけ出して斎藤さんが云いました。私はホッとしてました。

が、ホッとするのはまだ早かったです。愛子さんが上で着物を着ているので、下に降りると私と啓子さんが愛子さんの云っていたことを代弁しました。勿論、私や啓子さんの意見の様に喋ったのです。たった今酷い目に遇った愛子さんに何も彼も責任を負わせることなんか出来ませんし、それに私達にも見栄があつて、愛子さんの云うなりになっているみたいに見られたくはなかつたのです。

愛子さんも降りて来て、炊事などは私達が忙しい時は男の人達がやって欲しい。又私達が一生懸命に働いている時にお酒などを飲んで不真面目な騒ぎなどしないで欲しいと附足しました。私や啓子さ

んは亢奮と恐怖で声が恥しい位震え、うわずつていたのに、愛子さんの声はとてもしつかりしていました。泣いた形跡ありません。私はすっかり愛子さんの剛気さに敬服してしまいました。

斎藤さんはパイプを横ぐわえして、終始薄気味の悪い微笑を頬に浮べながら私達が交々喋るのを黙って聞いていました。

「お前達は何が感違ひをしている様だな。お前達は俺達の為に働いている訳ではないのだぞ。俺達の使用人なら不平を幾ら並べても構わん。併し国家の為に働いている者が、そんな少しばかりのことに不平を云立てゝ貴重な仕事時間を潰してはいかんじやないか。俺達だって人に知られぬ様にシヤツを軍に納める為に、いろ／＼と苦心してるんだ。だからこゝに居る時位のんびり骨休みをしておかなければ、次に出た時にどんなヘマをやるか解りはしない。解つたな。さ、下らん不平は戦争に勝つてから云うことにして、もう仕事を始めなさい。」

斎藤さんのパイプを握んだ右手が私達を追立てる様に二、三度前後に振られました。私は何か胡麻化されたみたいな心残りがしましたが、大の男を向うに廻して云捲る程の氣力はないので黙って居ました。

「斎藤さん、本当に軍は本土決戦をやるのですか。」

愛子さんが何か思い詰めたみたいな表情で云いました。

「勿論だ。」

「それに、どうしてワイシヤツが必要なんでしょう。ワイシヤツなんて平時に着る物じゃありませんか。」

「何イッ。」

斎藤さんの顔にさつと怒気が浮びました。

「貴様、小娘の分際で軍のやることにケチをつける気か。仕事も半人前の癖に。」

愛子さんはぐつと詰ってしまいました。私達縫製四人の中では、

愛子さんが一番不器用で仕事も遅く、いつも私の半分位しか出来ないのです。

「ことわっておくが、お前達、軍を批判する様なことは二度と云ってはならないぞ。俺はお前達が女学生だと思って今迄甘やかして扱っていたが、こんな不穏なことが起る様では考え直さなければならん。これからもっとビシビシやる。その覚悟で居る。取敢えず今日の処分だ。二度とこんなことを云出さない様に充分こらしめてやる。皆納屋へ降りろ。おいガタ。お前、手頃な木の枝を二、三本伐って来い。コバ、お前は梯子と麻紐を持ってこい。」

男の人達に追立てられる様にして、私達は母屋と一〇棟に続いている納屋の土間へ連れて行かれました。納屋はあちこちに太い丸太の柱が立っているだけでガラソとしていました。本当ならこゝには農具や収穫物や家畜などを入れてはおくのだと喜代子さんが云っていました。納屋の端は板囲いしてお便所とお風呂が作ってあり、その横には使い余した材木が沢山立掛けてありました。残りの部分はそれでも相当の広さでした。

コバさんは二本の柱の間に梯子を横に渡して紐で固定しました。「こんなことになったのは、凡てお前達の連帯責任だ。一人ずつあれを掴んで向う向きに立て。最初は田鶴子。」

田鶴子さんがびっくりした顔になりました。無理ありません。彼女は終始一言も物を云わなかったのですから。

「早くしろ。時間が勿体ない。」

せき立てられて田鶴子さんはおずおずと梯子の前に進み、両手を頭の先に伸べて、横に渡された梯子の下の方の軸木に掴まり、うなだれました。連帯責任と指導者責任は戦争以来の流行ですから、あきらめをつけたのでしよう。コバさんが田鶴子さんのお尻に手を掛けてもんぺを脱がせようとしていました。田鶴子さんは悲鳴を挙げて飛び退きました。

「待って頂戴。私が、私が全責任を負います。他の人達には何もしないで。皆が梯子を降りようとした時止めたのも私なんです。啓子さんや昭子さんの云ったことだって皆私が最初に云ったことなんだし、だから罰は私一人で受けます。そんな、若い娘に体刑を加えるなんて野蛮だと思ふんですけど、厭だと云ったって男と女じやどうにもなりませんわ。只、お願いだから他の人達には何もしないで下さい。お願い。」

「ふうん面白い。七人分の仕置を一人で受けようと云うのか。」

斎藤さんが厭らしい目附きで愛子さんの身体を上から下までじいっと見下し、又見上げました。

「ハイ。」

「それも良からう、みせしめになって。じゃ、裸になって、あの梯子に掴まれ。」

愛子さんはじっと下唇を噛んでいました。小さくて薄い、瑞々しい受口の唇に白い歯が喰入ってとてもチャーミングでした。やがて顔を上げた愛子さんの目には覚悟の色がありました。

上半身裸体になって梯子の下に進み、両手をきちんと伸べて梯子に掴んだ愛子さんの身体から、無慚にもコバさんがもんぺを剥ぎ取ってしまいました。

ガタさんが大き過ぎる位の楊と胡桃の枝を持って来ると、三人はズロース一枚で立たせている愛子さんを気持良さそうに見ながらナイフでそれを削って悠々と鞭を作っているのです。

鞭が出来上ると三人は代る／＼それで愛子さんの肌を打据えました。ピシリッ、ピシリッ、と鋭い音がして、削られたばかりの白木が、裸の愛子さんの背中に、肩に、腕に、飛びます。愛子さんは歯を喰縛って呻き声一つ洩らしませんでした。桜色の肌が赤く腫上って、腫目は段々増えて行きました。可愛い顔を毅然と斜上に向けたまゝ愛子さんはまだ鞭打たれています。

いつの間にか私は愛子さんのそういう姿に魅力と嫉妬を感じていました。私達の間で一番の英雄の地位を、これで彼女が獲得したのですもの。

でも、そういう感情を持ったのは私一人だったかもしれません。田鶴子さんや啓子さんは傷ましそうにじっと愛子さんを見守ってい



ました。珠子さんは見て居られないのか、横を向いて忍び泣いて居ました。文子さんは……、文子さんを見た途端、私はどうしたのかと思いました。彼女の円らな黒い目はいつになくキラキラと妖しく光って、まるで野獣か何かの目を見る様でした。

折檻が終ると愛子さんは始めて泣きました。シク、シク、シク……

……、仕事が始っても暫くその泣声は続いていました。心配して顔を覗込むと泣き濡れた目で極り悪そうに微笑みました。

その日は一日、男の人達が目を光らせていました。一人々々幾つ仕事をしたかを書留めているのです。夕食後私達は斎藤さん達の部屋に呼び集められました。

「朝云っておいした通り、今日からお前達が文句など二度と云えん様にビシビシやる。そのやり方を俺は色々考えたのだが、競争制と懲罰制を併せてやるのが一番良いと思った。縫製と仕上は二人以上居るのだから、毎日仕事の数をつけておいて、一番成績の悪い者は次に悪かった者との差の数だけ鞭を受ける。鞭打ちは一番成績の良い者にやらせる。裁断は一人だから今日の成績を標準にする。今日より成績の上らなかった日は、足りない分だけ鞭打たれる。よいか、

異議は認めないぞ。」

最後の所で斎藤さんは、ぐっと愛子さんを睨付けました。何か云掛けた愛子さんは氣勢を殺がれて沈黙してしまいました。

「愛子は一番生意気な癖に仕事は一番だらしないな。昭子の三分の一も出来てないじゃないか。最低の珠子よりも二十枚も少いぞ。」

「あんなに酷く叩かれたのですもの、身体が痛くて仕事になんか身が入りませんわ。」

「黙れ、お前のことだから、わざとサボったのだろう。」

此の晩、私は生れて他人様の身体を摸ちました。納屋にはまだ梯子があのままになっていました。愛子さんと啓子さんがそこへ麻紐で縛付けられました。両腕で梯子の横木を三つ抱きかかえて、真中の木の裏で手首を揃えて横木もろとも結え上げたのです。肘が一杯に横に張って二人とも両手は全然動かせません。コバさんが自分の身長のまままで梯子を固定してしまっているのです。身長五尺強。女としては中背の二人は土間に爪先が届くのが精一杯で、両足は二本きちんと揃ってビーンと伸び、真白な足の裏が四つ並んでこちらを向いていました。二人とも素っ裸でした。愛子さんが凄く抵抗したのでそんな姿にされてしまったのです。啓子さんは羞しそうに顔を梯子に押当てておとなしくしていましたが、愛子さんは口を極めて齊藤さん達を罵っていました。先刻は皆の身代りだったからおとなしく制裁を受けたが、今度はそうはいかないというのが彼女の考えらしい様子でした。

私と文子さんに鞭が渡されました。

「さあ打て。」

私達は躊躇しました。もう一度言われた時、文子さんが啓子さんの裸の背をビシッ、と叩きました。真白な肌に美しい桃色の線が走りました。ビシッ、ビシッ、ビシッ。文子さんの手には力がこもっていました。白い啓子さんの裸の二の腕から背中へ。背中からお尻

へ。長い鞭跡が三本、四本、とみるみる浮上ります。

それを見ながら私はまだ鞭を構えませんでした。私と弟が鉾山で制裁を受けた時、二度まで助けて呉れた愛子さんです。文子さんが啓子さんを叩く様なわけには参りませんわ。

「よし。昭子はそこで見物している。啓子の仕置は八回で終るのだから、そうしたらお前を代りに縛り付けて、愛子と同じ数だけ文子に叩かせてやる。」

「愛子さん、許してね。」

始めて私の鞭は愛子さんの丸い可愛いお尻を襲いました。ビシッ自分でもびっくりする様な鞭音が響いて、向う向きの愛子さんの首が痛そうに微かに動きました。肩の下二寸位の所まで切下げた柔かい頭髮がゆらゆら揺れて居ます。

「もっと強くウ。」

ビシッ。

「もっと強くウ。」

ビシッ。

「もっと強くウ。」

ビシッ。

「ようし。それ位の強さでやれ。」

私は何と酷い女なのでしょう。でも仕方がありません。私は愛子さん程強い女ではないのですもの。

愛子さんのお尻は本当に小さく可愛らしいございました。そして肌がとても柔かなのです。力をこめてそこを、ビシッ、ビシッ、ビシッといっている内に、撲るという行為には一種の快感が伴うものであることに気附きました。それは解放感の様なものと優越の喜びの様なものが混り合っている様に思いました。強く鞭が当るので、叩かれる度にお尻の内側下方の一番柔かそうな部分が、ぶるん、ぶるん、と震えるのも楽しい見物でした。

啓子さんの処刑は既に終って、真白い皮膚に八条の鞭跡を赤く縦横に走らせたまま、まだ素っ裸で梯子を抱かされています。愛子さんは罵るのを止めて、縛られた両手のあたりにびったりと顔を当てています、滑らかな桜色の肌が薄く盛上る様にふくらと張っている、彼女の裸の腕、肩、背には朝方、男の人達の打撃を受けた跡が酷いみみず腫れになって腫れ上がっています。此の上、お尻にも鞭を当てるなんて本当にむごいのですが、既に私の心にはそのむごさを肯定する様な感情が潜んで居ました。

二十回の鞭打ちの半分以上を過ぎた頃。愛子さんは、ウウツ、ウウツと呻き始めました。その呻き声さえ私には快く響きました。終り近くなると彼女は、シク、シク、と朝聞いたあの泣声を忍びやかに洩し出しました。幾ら気丈でも柔かな肉と肌を持った人間の女である以上、鞭打ちの折檻には敵わないのです。

折檻が漸く終ると、途中から前へ廻って梯子に縛り付けられている二人を見較べていた齊藤さんが、愛子さんの前まで進んで、指でぐっと顎を上げました。その途端、愛子さんが涙声で何か鋭く罵り、ベツと齊藤さんの顔に唾を吐きかけたのです。

「畜生、此の野郎。おい、こいつを滝壺へ連れて行け。」

今度はどうする積りなのでしょう。コバさんとガタさんが片手で愛子さんの二の腕を鷲掴みにし、片手に持った鞭で、ビシッ、ビシッ、と丸裸の腰を鞭打ちながら外へ連れて行きました。私達は啓子さんの縄をほどこいて暫く納屋の片隅に塊って不安な思いで耳を澄していました。轟々と滝の音ばかりが轟いて、愛子さんの悲鳴らしい物は聞えて来ません。

「私、様子見て来るわ。」

文子さんがそう言って出て行きかけましたが、戸口の所まで行くとガタさんが帰って来ました。

「さ、お前達はもう二階へ上って寝るんだ。」

私達は二階へ追上げられてしまいました。珠子さんが心配して、姉さんはどうするのか教えて下さい、と泣かんばかりに何回も頼んで居ました。

「今晚は帰らんが別に殺しはしないから安心しろ。親分の面（つら）に唾（つば）ひっかけたりして、大した阿魔（あま）だな、お前達の姉貴は。」

ガタさんは梯子を外して又出て行きました。

夜中に目を覚すと、私の枕許を珠子さんが、ごそごそ這って行くのです。

「珠子ちゃん？どうしたの。」

「私？お便所。昭子さん、梯子なんかなくなっちゃってあの入口飛び降りられるでしょうね。」

「うん、そりやあね、でも上る時どうする？」

「私ね、眠れないんで色々考えたの。お風呂の踏台を縦にしてその上から跳上れば手が届くと思うの。踏台には縄をつけておいて後から上へ引上げるのよ。明日炊事の時、男の人達の目を盗んで戻しておけば解らないと思うの。」

これを聞いて私には珠子さんの『お便所』が何か、ピンと来ました。敵は本能寺にあったのです。

「私も行くわ、珠子ちゃん。」

珠子さんは闇の中で暫く私の方をじっと見ていた様でした。それから呟く様に、悪いわ、と言いました。

私達は入口の縁に手をかけぶら下り、それから畳の上に飛降りました。忍び足で仕事部屋を通り、齊藤さん達の部屋は外へ出てから窓から覗きました。皆よく寝ていました。隅から隅まで見渡しても愛子さんの影も見えません。私達はホッとして滝壺へ通ずる細い径を歩いて行きました。二人共秘かに手足を縛上げられた愛子さんが男達の寢室に転がされて居るのではないかと案じていたのです。愛子さんは素っ裸なのですから此の心配は寧ろ当然だったでしょう。

小径は意外に長く細々と奥へ続いていました。中央辺でくの字に曲っていて、その内角に当る部分に大きな桜桃の樹がありました。そこへ近附くと珠子さんは私の手を力一杯握りしめました。此の家の主人が三年前に家族を皆殺しにして此の樹の、丁度径の真上に手頃に伸びている下枝で首を吊ったのが、此の家が空家になった原因だ、という話を齊藤さんがしていたことがあったのです。私は怖いのを抑えて梢から下枝まで丹念に見てみました。どこにも吊下っている愛子さんを見出すことは出来ませんでした。

くの字の頂点を過ぎると一べんに滝が見えて来ます。私達はアツと叫んで思わず立停りました。深夜のしじまを圧して轟々と響渡る滝の直ぐ前。深々と激んだ滝壺の水面上にきの字型の柱を組んであります。そのきの字型の柱には愛子さんの身体が、両手は肩の横に水平に伸され、両足は略々直角に開かれて、両脚の爪先までビーンと真直に伸され、下脛の顔をキチンと正面に向けて磔られています。

近附くにつれて月光が此の磔刑の輪郭を明かにして行きました。愛子さんは額と両の腕と手首、お臍の上と太腿。膝下。足の甲の附根の所をキリキリと麻縄で縛られています。二の腕や太腿の噴込みの厳しさ。強く縛られ過ぎてくびれ返っている胴と下腹。額、足の甲に巻附けられた余り見慣れない縄目。それ等が愛子さんの裸姿を一層凄艶にしていました。目は閉じていました。あのリンチの日以来、私が何回かちよつと抓ってみたいと思った、ポツチヤリした下脛の頬に涙の跡が二筋白く光っています。裸の胸から腹、腿にかけて、滝壺に来てから更に鞭打たれたのでしよう。無漸なみみず腫れが何本も横に走って、妖しい縞馬を見る思いです。

私達は滝壺の岸に立ちました。磔にされた愛子さんは五米程先の水の上真正面に居るのです。足先から水面までの距離は一尺足らずそれはまるで、此の不気味な滝壺に棲む妖怪に捧げられた犠牲の美

少女と言った感じです。彼女の背後は苔さえ磔に生えていない切立った崖で、右手に滝が懸り、左手は小川になっています。滝壺の半分は黒々と崖の影に覆われています。私達の立っている地点は丁度滝を懸けた崖が滝壺を抱え込む様にぐるっと廻り込んで急峻に下って来た裾に当るのです。

小径の両側の叢を採して、齊藤さん達が使ったらしい竹竿をみつけました。私は小径の先端に立ってその竿を入れ、深さを測ってみました。底まで届いた気配がないので、珠子さんに腰を抱いて貰って、身を出して上端が水面下に潜ってしまう程突込みました。それは随分長い竿だったのに、引上げてみると僅かに一尺位泥で汚れているだけでした。こんな深い、それも滝壺の真中へどうやって磔柱を立てたのでしょうか。

「愛子ちゃん。愛子ちゃん。」

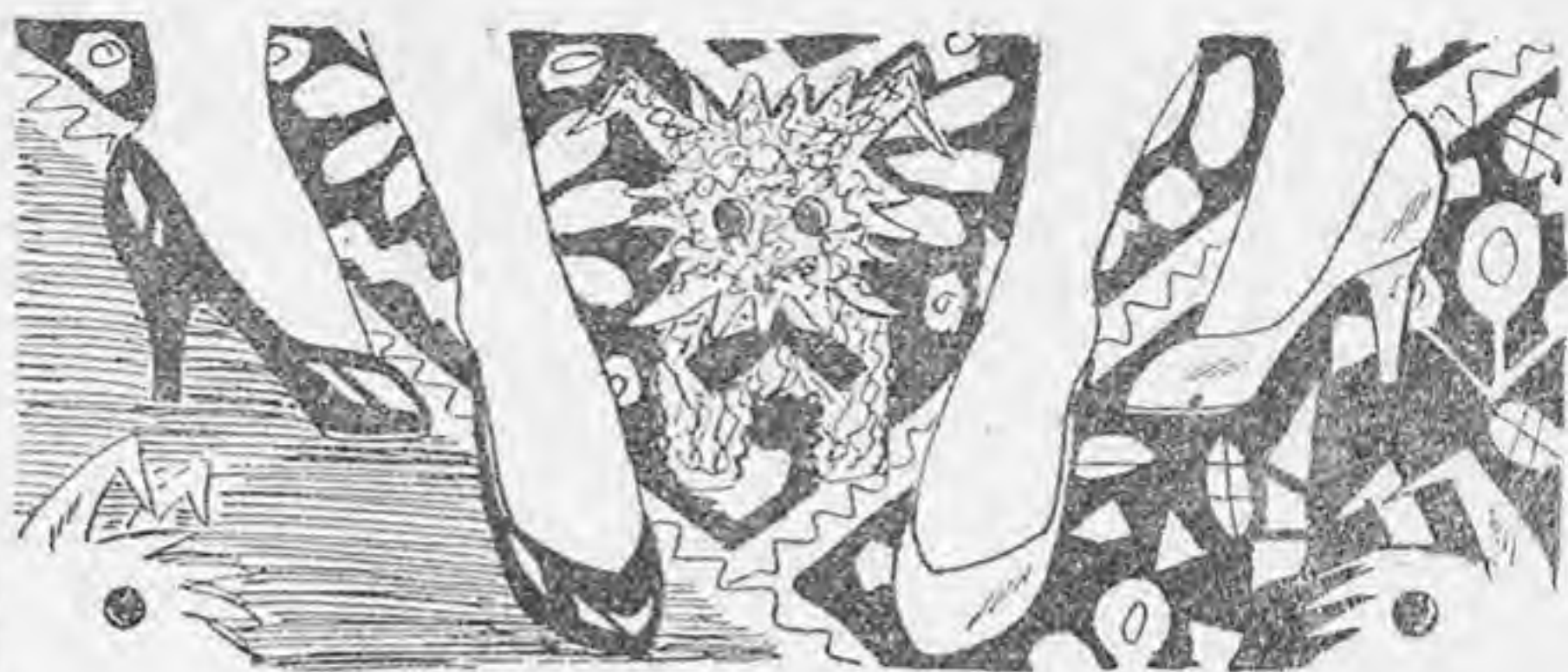
珠子さんが二回、三回と呼びました。私も声を合えました。愛子さんがパツチリ目を開きました。私達が解ったのでしよう。磔にされたままニツと泣き笑いの表情になりました。それを見た途端、私は愛子さんが可愛くて耐らない気持ちに襲われました。夜の内に彼女を何とか救い出して三人で逃げよう。此の儘放っておいたら愛子さんは殺されてしまう……。

不思議なもので、そう決心した途端、私は納屋の隅に使い余しの材木があったことを思い出しました。愛子さんの身体を縛った材木は確かにあすこにあつたものです。足先から水面まで、一尺程覗いている材木はあの中の一冊長くて太い物の一つです。それと同じ木はまだ二、三本ある筈です。それで梯子を作ってここから向うの崖の上へかけ……。

「愛子さん頑張ってるのよ。今直ぐ助けにゆくから。」

私は珠子さんの手を曳いて駆戻りました。

(次号へつづく)



☆私の好きな女靴☆

洋 路 波

一介のマゾヒストであり靴に対するフェチシストである私は日常生活の上にマゾを探り入れてゆく喜びを養っている。若し私の生活中にマゾが生きて居なければ生き甲斐さえ無くなってしまうことだろう。今此の文を書き

に心をとらわれた私は靴への崇拜や魅惑を探る目的をもった行動が成長し思春期になるに及んで断然多くなってきた。靴の知識を更に得るため東京中を歩いた。東京で靴の製造、卸商、皮革原料店、製靴材

綴って居る時でさえ靴が脳裏を去来している。今日も街を散歩して初夏の風爽やかな公園ですでに身軽な服装になったお嬢様やシツクな服装の淑女のおみ足を魅惑的に引立てている靴を眺めては踏まれて見たいなあとと思う欲望とマゾへの連想をこらして帰って来たばかり。だから尚更の事だ。黒光りするパンプス、赤いサンダル、ハイヒールやサブリナシューズが眼底にちらつく、私が靴を恋しあこがれる様になったのは幼い頃だった。それから私の脳裏には絶えず型の良い靴がくっきりと焼付けられてしまった。靴

料商が集まっている方面は大体二ヶ所に集中されている。その一ヶ所は荒川区で他は台東区浅草から聖天町を経て山谷に至る街である。この両区の靴屋は日本の靴の流行を造り出したり靴の値段相場を牛耳る力を持っている。日本一は勿論東洋一でもある。この集中地と同じ東京の屋根の下に居る靴マニアの私が見逃しは何ですものぞ、機会ある毎にこの街に出没した。これ等の靴問屋は大体春秋二回、流行靴の展覧会を開催した。荒川区三河島の区役所の隣の公民館と台東会館とが其の場所に選ばれるのが通例となっている。両場所はバスで連絡される事もある。期間は三日間位でそれこそ其の年の靴のニールックを千足位陳列する。春の時は春夏の靴、秋のときは秋冬の靴が色とりどりに陳列される。女靴愛好の私がこの機会を何んで逸する筈はありませんよう。この日の来るのを幾日も前から夢にまで見て待ちわびて居たのですから三日間、毎日通い続けます。見に来る人は全国から来た靴屋さんが大部分でしょう。ここでは一々手に取って観賞出来又香りを嗅いだり底をなぞ廻しても不審に思われないのがマニアの私を喜ばせます。私は一つ／＼手に取ってよく／＼吟味します。ことに知事賞を受けた名人の製作した型の良いハイヒール等は縫目まで手ざわりで調べ近視を装い靴に顔を近接して皮の香りを嗅いだり舐めたりさえし

ます。私は往々にしてそれだけで興奮其の極に達する事さえあります。靴の香り程素晴らしいものは無い。皮の香りには私の心をかきむしり屈辱を与える力が有ります。古く履いた靴は皮本来の香りは無くなるが、履いている婦人の足の香りと云おうか汗と垢の香りが泌みこんでいて、それに靴墨の香りとが加って又独得な快感を与えてくれます。足の香りは冬履く靴には少ないから靴墨を多く塗って補い、又夏靴はストッキングをお召しにならないで履くせいもあって垢の香りが強く抱いて寝る私を満足させてくれます。

話を元に戻そう、場所柄そう語める訳にも行かないので手で触れて充分耽溺します。手にとり角度を変えハイヒールにある独得な魅力的な曲線美をながめ色艶を羨しむ事が出来るのは私達靴フェチシストの特権だし、この展覧会は無料で気兼ねなく出来るので楽しい女靴を各種のタイプの物を何百足も手にとって観賞出来るのは他の機会には絶対ない。女靴マニアの私はここで靴をいじり空想をたくましくしては幸福にたっている。それでは、これで充分かと問われると、やはり女靴にはお美しい尊大な御主人様があつてこそその靴の魅力は幾百倍にもなるものです。美しく権力的な高貴な御婦人には奥様やお嬢様、有名な女優、ダンサー、キャバレーのナンバーワンの女給等々有りました。その

女主人のすんなりした豊満なおみ足に履かれて居る靴は陳列されている靴とは比べものになりません。私はうつとりしてお婦人のお歩るきになる靴の音をきき又良く磨かれてピカピカ光る艶を見て居る中に床の上に寝て踏まれてみたい、そして靴底に奴隸の接吻をしてみたい憧憬にかられます。私はかつて靴がどのような順序で出来るかを系統的に調査をした。私は自己の心をとらえる力のある靴の総てを知る義務があると信じ調査したのです。それで今日は全部を述べることを止め原料の皮の中犬皮の所が私のマゾを充分に満足させてくれたので書こうと思います。

私は友人の一人に「靴の出来るまでを知りたいが何か工場でも知って居る人がないかなあ」と話しました。幸運にも、その友人は捕犬を業とする人を紹介してくれました。その人を仮にA氏と云いましょう。A氏は私を荒川区三河島にある東京都の野犬抑留所に案内してくれました。「東京にはこう云う所が世田谷の方にもありますが、とにかく街で捕った犬は、ここに繋ながれます。一定期間に引取者が無いときは注射で薬殺されます。そして皮は鞣皮になり血と肉は肥料に、骨は骨炭になり脱色剤になって皆それぞれ役に立ちます。」

犬は死して良質の鞣皮を残し、その皮は女靴になる、その特性で薄く強靱で赤色に良く

染まるので女靴につかわれるそうです。私は且つて羊皮や牛皮で靴が出来るのは聞いた事がありますが、犬皮が靴になるとは驚いた旨答えるとA氏は赤靴は全部犬と思つて差支えないとの返事でした。私は彼の先導で場内を見物しました。そこには一種独得ないやな臭みがただよつて居て常人には耐えられず、はきけを催す程でした。檻が沢山あつて入れられた犬がおじけてクン／＼啼いていました。やがては殺されて御婦人の赤い靴になる運命にあるのです。そこで私独特の思考が初まりました。犬位マゾ的な動物はない。喜んで足にじやれたり、足でお腹を踏んづけられてクン／＼啼いて喜こんだり、悪戯をして鞭で受たれたり更に夜は一晩中女主人の門番をしたり、そして終いには殺されて、その皮は靴となり御婦人に履かれる運命にあるのです。「あゝ犬よ可愛そうに、だけど美しい女性のおみ足に履かれる赤いハイヒールになるのだよ。幸せと思わなければ駄目だよ」と独りつぶやきました。それから先は皮をはく所や肉と骨の処置等の設備の見学をさせて戴き、そこを辞去しました。その近所には皮屋が軒並にあつて犬皮が沢山鞣めされてありまして。私は死んで再び此の世に生を得られるとしたら犬になって生れたいものです。

(以下次号)

『吊し責め』の実験

△奇談倶楽部集会報告▽

岸 本 青 柳

…(禁庄の天気予報)…

今年の梅雨は断続的で早く明け、従って夏は早く訪れるだろう、と測候所の長期観測だった。由来甚だ失礼ながら地方測候所の観測の的中しないのは殆んど常例であつたかの感を与えていた。依つて地方民の中には、気候当りや食物当りには「測候所何々々々」と三度び唱えろと、決して当らぬという禁庄のようにならぬか。ところが本年に限り今のところでは、この地方測候所の観測が殆んど的中するので、京童ならぬ地方民までが、測候所の悪口を吐かぬようになったのは誠に以て千万忝ない次第ではあるが、何よりもお天

気続きの好天気には筋肉労働者をはじめ一般の人々は、お天統様に感謝の涙を流して飲んでゐる。これに反してお百姓衆の方では、麦の収穫には絶好の天候だが、降雨量が少なく余り慈雨に恵まれないので、田植の出来なところや著しく遅延してゐる土地の農夫らは、均しく天を仰いで嘆息を洩らしてゐるといふ塩梅で、歎かれたり怨まれたりするお天統さまこそ、さそやゴ迷惑なことだろうとお察しする。

…(雨の夜の荒寺)…

余談はさて置いて、われら奇ク讚美者殊にわれら奇談倶楽部の同志にとつては、この鬱

陶しい梅雨期の降りみ降らずみの物狂わしい夕暮から夜分にかけての一刻は、春宵にも増して一刻千金の値いを味わう時である。こんな陰鬱の晩に乗じて倶楽部員の非常招集が行われるのである。非常招集とは少し大袈裟ではあるが、降雨の夜には必らずと言ってよいほど部員の緊急総会又はブロック総会が開催されるのだ。昨夜も海辺に近い俗に隠坊山(おんぼう山)と称する弥陀山の林の中に建てられた法林寺の庫裡で全部員緊急総会が開かれたのだ。なるほど法林寺と言えば一廉の寺院のように聞えるが、寺と言っても無住の寺であり、その上屋根も土塀もお堂も庫裡も荒れ果てており、寺院の境内は言うに及ばず、その付近は草茫々と生茂り到るところ蜘蛛の巣が張り、樹木の手入れもなくジャングル同然の物凄い、それこそ幽霊でも恨めしやと出て来そうな寺である。此の寺を選る好んで倶楽部の当番幹事の世話で一晚借り受けたのだというまではよいものの、電灯もないので漁船用の沖ランブ一箇を点しただけで殊更に凄味を見せた試胆会みたような寄り合い場所である。

幸い当番幹事の注意書で各自が懐中電灯を準備してきたので、この寺の参道を照らしつつ参集したもののだが、その中に三人の婦女子も交っており、男会員はまた面白半分に女子

会員を怖がらせ幽霊やお化けの格好をして見せたり、キヤッキヤツ騒ぎ立てながら集って来た。丁度一同が集ったころから、ボツボツまた小雨が降り出し四面は文字通り陰気が嫌が上にも増し、恰も化物屋敷を思わせるものがあつた。先ず当番幹事の加藤春次君の主唱で、おぼろげな御詠歌が古びた木魚の音や鐘の音に伴われて合唱する。煤けた真っ黒な木造仏像の前に二本の蠟燭もまた堂内に光をさしていた。これが終ると加藤幹事が厳そからしい口調で、

加藤幹事「今晚急に皆さんのお集りを願つたのは、こんな陰気な晩こそ倶楽部目的の一端である怪談はなしを承わり、時間に余裕があれば責めの実演を致したい。」

と簡単な挨拶があつたが、何分にも突然のことでもあり、誰も意見を述べる者もなく、暫らくは無言の業を続ける。戸外の雨は稍々弱くなったのか、軒端の雨だれの音が心細く聞えて来る。男どもは煙草をスパスパ吸っているが、女どもはキチンと座って俯向いた儘で正座の業を続ける。遠くの方で犬の吼える声をする。寺内はシンとして静寂そのものの物淋しさである。約十五分間ぐらい経ったかと思われる時分、珍らしくも一人の女性がトツプを切つて発言したので、一同は呆氣に取られて、その女性に向つて一齊に注意の眼を集中する。この女性は数ヶ月以前に福井信夫君

という会員（薬剤師）の紹介で入会した新人であり、佐山綾子という二十四、五歳ぐらいの看護婦である。

佐山綾子「妾は始めてこんな集會に寄せて貰つたんですが、今までのことは存じませんが、今晚のような雨の晩にこんな淋しいお寺で寄り合うのは、どうかと思います。ですけれど寄り集つただけでは無意味であらうかと存じます。」

と勇敢に切り出したので、並居る人々は互いに顔を見合わせてニヤニヤ笑っている。

加藤幹事「お説御尤もであります、こんな晩に、こんな淋しい所で怪談や責めの実演をするのも面白からうと思つたので……どうぞ悪しからず。」

と微笑を含んで穏やかな口調で答える。それに勢いを得たのか、三十歳前後の山田豊子という未亡人の洋裁師匠が続いて、

山田豊子「妾も佐山さんの仰言るようになりますけれど、今晚は一つ皆さんのお化けの話承わり、それから責めの実演をして見ては如何でしょう。」

この場合は男子よりも女子の方が積極的であり、進んで怪談よりも寧ろ女子自らが責められて見たいような口振りから推察して、怪談を除外して一挙に責めの実演をしようとする空氣が漂うて来るのであつた。この空氣を察したものであらうか、

加藤幹事「では御希望に依りまして、早速責めの実演に移り度いと思ひますが、女子の方でモデルになつて下さる方は御座いませんか。」

と女子の方を向いて同意を求めるが、さて自分こそはモデルにならうと申出る女子は一人もなかつたのには、男子の側は再び呆氣と取られた。これでは折角集つた甲斐もなくこの儘で、散會せねばならぬ破目に陥つた。これを洞察したのか、白井俊男君と呼ぶ中年の画家が膝を乗り出して、

白井俊男「では甚だ潜越ですが、山田豊子さんにモデルになつて貰い度い、責めの相手役を山田さんから指名して貰つてはどうでしょう、山田さん？」

賛成々々とか同感々々とか山田さんお願いしますなどの声が、堂内から一齊に起り、笑い声も彼所、此所に洩れて来る。

山田豊子「妾がイの一番に縛つて責められたいと言つたのではありませんが、皆さんが妾にモデルになりなさいと仰言るのでしたら男さんの方にお願ひせねばなりませんので、二、三日お待ちを願つて次ぎの機會までに研究や準備をさせて戴けませんか……」

加藤幹事「山田さん、今晚は実演出来ませんか？」

田中豊子「ええ、着物も何にも準備して参りませんでしたので……」



加藤幹事「その着物で結構じやありませんか。」と和服姿を見て熱心に勧める。

山田豊子「でも、この儘では何だか気恥かしいので、どうぞ、この次の機会にして下さい。今晚は、誰か他の方をお願いしたいんで

すけれど……」

と豊子は何うしても即座に演出しようとはしないので、加藤幹事は改めて、他の会員に出演方を懇願したが、我れこそ責めの実験台に立って見ようとする勇敢な女子は一人も現

われない。止むを得ず各自は、女を縛って責めた実験はなしや、女装しての自縄自縛の体験談やら、縛られた女優の現われる映画や、新、旧劇の女優の縛り責めなどの雑談、或いは奇クの好評等で時を過ごし、幸い雨の竭んだのを機会に十一時頃夫々家路に就いた。

……（奇クが取り持つ縁）……

その後四、五日経った日曜の朝、私は裏庭の雑草の手入れしているところへ、上品な一人の婦人が「今日は」と訪れて来た。私は急いで両手を洗って玄関に出ると、何と山田豊子さんであった。その手には何か風呂敷包みと、菓子折のようなものを持っていた。そしてニコニコしながら、「先晩は失礼しました。」と丁寧に挨拶される。私も挨拶を交わし、奥の間に案内した。すると豊子は携えた風呂敷包みの中から今春以来の奇譚クラブ数冊と、菓子折とを私の前に静かに出して、「お粗末ですが、どうぞ、おさがり下さい。」と

述べてから、奇譚クラブを眼の前に置いて、山田豊子「彼の晩、妾の御転婆振りでお笑いになられたでしょう。あうは言ったもののサテ縛られるという何だか急に氣遅れして済みませんでした。帰ってから書店を漁って

漸やくこの奇譚クラブを見付けましたので、何遍も読んで見ましたが、彼の和装教室も好きですが、あんなのお書きになった奇談俱樂部の記事を読まして貰い共鳴したので、突然お邪魔した訳でしてね……」

と物静かな口調で話出すので、私もつい釣りに込まれて「奇譚クラブが奇縁になった訳すでな。総会では余りお顔が見えませんが……」と話している間にも、風呂敷包の中から写真、絵画、着物などを出しつつ、一々これは何店で買った、これは何処で求めた。この着物は、お弟子が友達から借りて呉れたなど簡単に説明するのであった。

……(被虐待がお好き)……

茲で一寸、山田豊子という婦人はどんな人柄であるか説明すると、私の町にある山田洋裁学院の女主人公だが十数年前に御主人が終戦直前中支で戦死を遂げ、独り子の可愛い娘が二、三年前に交通事故で重傷を負い間もなく病院で死亡したので、少しばかりの夫の遺産を資本に洋裁学院を借家に設け、十数名の娘達をお弟子として今日に至ったもので、性質は極めて柔順で、色白く背は少し高い方で小肥りのした未亡人である。それが独り居の気楽さから、附近の映画館へは映画の代る度に新らしい映画を観に行く内、知らず識らず縛られて責められる女優の姿に興味を惹き起

し、奇譚クラブ、映画雑誌、演芸雑誌等々を取り寄せては、夜分遅くまで読み耽り、要所を切り抜いてブックに貼ったり裏打ちしたりして保存しており、夜中にこれらの写真縛り画を秘かに取り出しては眺めるのを唯一の楽しみに行っている。それが昂じて奇談俱樂部にも入会したものだ、その会合へは余り顔を見せないという恥かし屋ではある。だがその内心はどうして今日私宅を訪れて来るような実行力に富んだ婦人ではある。

そして私の前に並べた写真は何れも雑誌から切り抜いたもので、挿画もまた何冊かの雑誌の中から切り取った何れも女優の写真、時代小説の挿画で、縛られた女や責められている女ものばかりである。持参の着物を見ると芸妓が仲居の着るような、小豆色地で裏の淡黄色、太筋と細筋の二本ずつの白筋の入った格子縞に黒襟のかかった袴、緋縮緬の単衣半縮緬、濃緑色に麻の葉を散らした帯、紅白まんだらの扱帯、紅の腰紐と丸髷のかづらなど並べてから、

山田豊子「この写真や画や着物は、みんなあんなのお好みのもものばかりでしょう。この着物は内のお弟子さんに頼んで舞妓さんから借りたもので、随分丈けも袂も長いでしょう。これを妾が着て実験して見たいの。あなたお手すきでしたら一寸お手伝い下さいませんか？」

と豊子から短兵急に言われると、嫌だとも言われず、素から好きな遊戯でもあるのでウソと首肯して見せた。

……(惨虐な皿屋敷)……

それから豊子と私の二人が先晩会合した法林寺に赴いたが、彼の晩見たよりも予想外の荒れ方で、思わず肌粟を生じるほどである。幸い人の来る心配も要らぬので、二人は草原に腰を下ろし、周囲を眺め廻すと、格好の松の枝振りがあったので、その松の下で実験することにした。先ず構想を話し合うと豊子は「皿屋敷」と注文するので持参のカメラを適當の位置に据え、庫裡から古びた間梯子を松の木に立てかけてから、

岸本青柳「豊子さん、今まで縛られた経験があるのですか？」

田中豊子「いいえ、ちっともありません。」岸本青柳「皿屋敷の注文ですが、両手を後ろに縛られて吊り責めされるのは随分辛いものですよ。」

田中豊子「それは覚悟しています。どうぞ思う存分に……」

と豊子の快諾を得たので、舞妓の着物を着て「かづら」を冠り、髪をうんと乱した江戸下町風の娘風になるようにと教えると、豊子は早速着物を着替え、教えた通りに髪を乱し胸を少し開かせ、帯を後ろに扱帯を前にダラ

リと下げ、裾を長く引き、白足袋を脱いでから、少々俯向加減の姿勢で

山田豊子「青柳さん、この格好でどう？可いでしょうか……」

と嬉しいのか不安なのか何だか分らぬ表情であるが、色白で細長な顔、そして顔を上げた時の眉、眼尻、口元は一寸思い出せないが映画女優に似ている。そうだ長谷川裕見子に似ている。苦み走った好きな顔形である。

岸本青柳「でも始めから吊り責めはチト冒険だろうと思うがネ。」

山田豊子「でも可いんですよ、どうせ今度の集會に妾が、あんたのモデルになって、お菊を出したいんですもの……」

と吊責めされて見たい気分に乗られているなアと察したので、太い松の樹の垂れ下った太い枝に下から、豊子の差出した棕櫚の太縄を、その下から振りかけ、これに古梯子を立てかけてから、豊子の両手を後ろ手に縛り上げ、豊子の縄尻を掴み二間余の草原を歩かせた。そしてその縄尻を強く後ろへ引くと、豊子の身体は少しく反身になったが、直ぐ元の俯向加減の儘で徐々に松の樹の下に歩いて行き、太縄の吊った下で立ち停るのを待って、私は豊子の縛った帯の上で太縄に結び付け、その太縄の端を強く引いて、豊子の身体は足の爪先まで立つようになるまで、引き絞ったが容易に上らない。そこで豊子の身体を後抱

えにして、古梯子の三段目まで持ち上げこいで太縄の端を、太い松の樹の下から一間ぐらいの処で二重に縛って、カメラを覗いてピントを合わせてから、その辺りに落ちていた松の枯枝を拾い、これを右手に携え再び豊子の側により添うて

岸本青柳「豊子さん、この枝であんたを揠ち毆って、お菊のお仕置をしても可いかネ。」

田中豊子「可いんですよ、責められている夢を見ているんですよ……」

そう念を押し、古梯子を取り除くと、豊子の身体は宙に浮き、その機みに二、三回クルクル廻り出した。豊子の頭は胸の当りまで下がり、お尻を高く丸く崩した帯と両足はタラリとブラ下っている。その背後へ廻って松の枝で強くお尻をひっ叩いたが、豊子はグーの音も出さぬ。続いて左の肩を頸にかけてまた強く打ち叩いた。すると、

田中豊子「あッ、痛い。」

と始めて苦痛の声を挙げる。それには構わず脛や膝かがみのところを四、五回続けさまに強く打ち据えると、

田中豊子「痛い、痛い、もう止めて。」

両眼から涙を流し額には冷汗を浮かべている。眼は釣り上げ口先をキリッと噛み締め、顔色も蒼味を帯びて来る。両足をバタ付かせ緋縮緬の半縮緬の間から、白い脛や素足を隠現させる。瀕りに頭を左右に振るので髪は自

然に散ンばら髪となり、何に譬えようもない凄惨そのものの、吊責めの甘味さである。凡そ十分間ほど責めた挙句、顔を少し上斜めに向けさせ、右足を膝の当りまで上げさせて、真の苦痛、惨虐で悲惨な姿をパチリパチリと二枚撮影してから、豊子の身体を梯子に立たせ太縄の端を解いて地上に抱き下した。すると豊子は「あア」とうめきながらその場に崩れるように座って了った。その背後へ廻って縛った縄を解いてやる。豊子は両手首についた縄目の形を凝視していたが、少々あつて

山田豊子「随分痛かったワ、でも妾の大好きな吊責めして貰ったんですよ、身体が締って、本当に何とも言えぬ嬉しいような、身体じゆうが溶けて終いそうだったわ……」

と始めて吊責めされた実感を、このように洩らすのであったが、責め役の私も汗ビッシヨリで、豊子を責め虐む間の気分はこの世の極楽のようにも思われた。

こうした醜態に浸った二人は、破れ果てた法林寺の仏堂に這入ってから、今度は私が豊子の脱いだ着物を着て「かづら」を冠り女装を整えて、豊子から「責め折檻をして呉れ。」と頼んだが、豊子は「妾はもう疲れていますので、今度の集會にして下さいません。」と体よく拒絶された。また実際私も多少疲労を覚えて来たので、強いて縛って責めて呉れとは言ひ出さず、私は女装した儘で豊子と差向

って縛られる女優やら、番町皿屋敷の芝居の話をした上で、自分も女装を解きこの着物を豊子に返し、次の奇談倶楽部集会には、二人とも必らず出席して、この惨虐な皿屋敷を会員の眼前で、真剣に実演することを約束してこの破れ寺を出てお昼過ぎるころ「左様なら」して右と左に兩人とも何食わぬ顔で帰宅したのであった。

然し法林寺境内での吊責めの写真は、一切他に発表もせず、またこの責め実験も会員以外は何人にも洩らさないことを互いに堅い約束で取り極めたのであった。

（高野山……での醍醐味）……

その次の土曜日の夕刻から荒れ果てた法林寺での奇談倶楽部会総会でイの一番に田中豊子をモデルにして私は青山鉄の責め役に廻りお菊皿屋敷の吊り責めの実験を演ったので、一同から感謝の言葉を贈られた。だが二人は前々日の責めの実験に比較して、お互いに相当身心ともに疲労を覚えたが、豊子の方は頗る満足感を喫したと飲んでいた。

越えて八月の臨時集会を涼しい高野山の竜王院で開催することに決めたものの、イザ集会日には田中豊子、佐山綾子ほか男子三人の僅か五名が参集したのみであった、一行は朝早く高野山電車で、大阪から来た六十余名の大師講の人々と共に、海拔三千尺の野山ケ-

ブルカーで登山することにした。途中石童丸で有名な学文路宿の玉屋旅館を訪い、更に我が国最後の犬伏討ちの修羅城で名高い、神谷駅麓の赤穂藩士の墓碑に詣でたため、大師講の一行よりも二時間も遅れて、午後三時ごろ竜王院に入った。この寺院は相当広大な構えであり、下界の酷熱を吹ッ飛ばして、涼風快味な、清澄閑静な幽邃境であり、長い広縁の前には苔蒸した遠州作という大きな枯山水がある。数十ヶ所の寺院という寺院には全国各地からの参詣者をはじめ大学、公共団体、官公署などの人々が夏期講習会、暑中鍛錬等のために数千人が宿泊しているらしいが竜王院にも一昨日奈良県の大師講員数百名がが一晚泊りで帰郷したところだと聞かされ事実、正門脇の大きな建物には徳島、高知両県下の大師講員百五、六十名が宿泊していた。幸い私達の一行は大泉水の渡廊下を伝った別棟の説教場の晴れやかな一室を旅宿と定められた。先ず旅装を解いて奥の院に参詣、お大名の墓所、道路沿の各寺院、金剛峯寺（総本山）、暮六ツの鐘、根本大塔、大門などを見物霊宝館を参観して夕刻頃に旅宿に帰り、一風呂浴び精進料理の晚餐に舌鼓を打ちながら、四囲やまの雑談を交わし、下手な将棋に時を過ごし、夜の九時ごろから、いよいよ責めの実演を行うことになった。

この間半時間も早く私は席を外して別室の

婦人化粧の間に入り、携えた皮のボストンバッグから姉の化粧道具を取り出し、顔に白粉口紅、眉毛捌けと丁寧にも化粧する。そして今度は近隣のある旅館の上女中から借りて来た濃紫地に、黄と淡桃色の太い線の入った銘仙縞の袴（裏は淡黄色）、白襟の付いた緋縮緬の長襦袢、黄地に茶の格子模様、塩瀬の帯、緋の腰紐、黄色に濃桃色藤の花を画いた伊達巻などをソツと鏡の前に並べ、先ず紅モスの新しい腰巻を纏い、順次長襦袢、伊達巻を用い、身丈に二尺余も剩る袴の着物を着帯と扱帯を締めたが腰紐を使わず、帯と扱帯を垂らし胸間を少し開け、最後に之も美粧院から借物の花嫁髷を冠って完全女装してからさて鏡で見ると和装は兎も角顔の方が気に入らぬので、改めて顔直しを附けると映画女優喜多川光子の怒気を含んだ神経質のような顔が出来上った。

漸く女装が整ったので三筋の長い麻縄を持って将棋に熱中している同人の間へ「姐さん今晚は？」と顔を出す一同は、「イヨウ別嬪」などと口々に爆笑する。中にも女性達は「ほんとうによく似合うワ」と賞めるやら、冷評すのやら複雑な表情で、私の顔ばかりチツと凝視する。だが此んなことには馴れっ児になつてゐる私は「早速始めよう」と切り出したので、将棋を癪め側で観戦していた女性達も一齊に起ち上り、広縁の外の広庭に出

た。枯池の上に置かれてある春日燈籠と雪見燈籠との電燈の光線を頼りに石畳の枯池を長い裾を引摺りながら、二つの燈籠の間にある大きな杉の木の下までボツボツ歩を運んだ。四人の男女も私の後に随いて来た。可い枝振りを見付けた私は、自分で一本の麻縄を二重にしてその枝に振りかけて、吊責めの用意を終ってから加藤幹事に私の両手を後ろ手に縛って貰い、残る一本の麻縄を前から後ろへ帯の上を二重に巻き、更に帯揚げのところで結び合わせて貰った。こうして少しでも苦痛に堪えようとした。そして二人の男会員が私の身体を支えながら、雪燈籠の笠の上に登り、吊した麻縄に結び付けてから、私の身体を前

に突き放した。すると私は少しく頭を前に俯向き、両足をダラリとブラ下げた。茲で完全に女装の吊り責めが展開されたのであった。平野寿太郎という新しい会員は、私の注文で縁側にあった竹箒で、頭部を除いて私の身体を所構わず無茶苦茶に殴打する。その痛さも痛さではあるが、吊られた身体の重みと、後ろ手に強く縛り上げられた縄目が段々肉に食い込んで来るので、苦痛の度が嫌が上に増し呼吸も苦しくなり、顔や身体から冷汗が流れ出る。それでも私は歯を食い締め苦痛に我慢している。この間の醜態は経験した者のみ知り得る素晴しさではある。加藤幹事はブラッシュをたいて、私の吊り責めされている

苦痛の表情を幾枚もレンズに収めた。他の婦人達は無言の儘、私の姿態を熟々凝視していた。私は頭や両足を上下左右に動かし種々の姿態を作ったが、身体を動かす毎に苦痛が弥が上に増すばかりで、この実演は約十二、三分間で終わったが、杉の木から下された私は同人の肩に縋って元の座敷に戻ったものの、身体中の痛さと苦しい呼吸の平時に返るまで、暫く女装した儘其所に寝転んで終わった。そうして同夜の实演は、私の吊責めの実験のみで一旦打ち切り、その批判や雑談やらで其の夜は静かに、真夏の夜の夢を炎暑を忘れて雲の上にも似た清涼な、この竜王院の別室で結んだのであった。(終り)

△女性ホルモンにより女性化

の実験を試みた手記を読んでV

女性化願望には、次の二つの種類があるようです。

(一) 男に愛されたいために、女になりたいという願望

この代表的なものは「おかま」(男娼)ゲイボーイです。彼等が男に近づくために自分を女性の姿に変えるか変えないか、という点

では異りますが、男に愛されたいという点では全く一致します。「おかま」は女装することによって、自分を心身共に女性の立場に置こうというのであって、技巧の面に於ても女性に擬装し男性そのものを全身で受け止めるというのが窮極の現象です。ゲイボーイはむしろ、そのありのままの姿で変態的雰囲気の中に存在することによって、男に近づくことを希うのでしよう。このように男は接触する機会を捉えるという点では両者は違った形をとりませんが、本質的には同じものといえます。

(二) 女に愛されたいために、女になりたいという願望

このタイプは複雑な心理を持っています。彼のはじめの動機は女の仲間に入りたいということから始まります。次第に女と全く同じことをしたいという気持ちに発展します。そしてそれを完全になしとげるための条件は、自分の身体を女の身体とそっくり同じものに変えなければならぬものだということを知ります。彼は男を嫌らしいものと断じ、女へ

それも美しい女を
対象として）を限
りなく尊いもの、
愛らしいものと観
念します。そうし
て彼の崇拜する彼
女達と本当に同じ
ものになるために
は、自分の男の身
体を女性のものに
すつかり変えてし
まわなければなら
ないと覺り、それ
を実行に移したい
と願うのです。

けれども彼はいきなり、それを実行する勇
気がありませんから、先ず女の身体に着けて
いるものを慕います。女の下着フエチシスト
等はこの典型でしょう。しかし単なるフエチ
そのものが目的ではないので彼はこれに固着
してしまいません。ここで彼は更に勇氣を出
します。そして社会には見えない処で女体改
造にとりかかるのです。女性ホルモンの服用
などはその一例でしょう。そうこうしている
中に、彼は自分の乳房がふくらみ、身体のお
ちこちが肉附いてきて女性らしくなっている
のに気づきます。女性ホルモンの服用という

女性化願望

と 男性思慕

古井眞哉

非常に簡単なことで、女性化の疑装が現実的
になるという事実喜び彼はなおも追求の手
をのばしてゆきます。一つは秘密裡に、一つ
は最早、乳房が女性のように盛り上っている
から残りのものと、男性を捨てる決心を強
めるのです。勿論、この間にいろいろの葛藤
があるのは勿論です。しかし、彼の目的が女
そのものになることです。しかし、女性ホルモン
に執着しているばかりではありません。彼
が現在溺れている処がどのあたりかというこ
とは、想像出来るではありませんか。手記に
も書いてるように彼の窮極の目的はサファイ

ズムかも知れませんが、それはそう単純には
いきれません。精神分析的に取り上げます
と、彼の心の動きは次のように説明されま
す。

先ず彼はナルチシストです。自分をこよな
く尊いものとして、それをより高めるために
女性化という観念に徹した手段をとったので
す。このナルスはフエチシストでもあるので
す。女性を恋うこと、それを手に入れるため
には自分の身体までも犠牲にしようとしま
す。更にマゾヒズムも見逃すことは出来な
いでしょう。第二の性である女性になりたい
ということ自身そうです。彼はナルチシストで
すが自分を至上のものにおくためには女性に
なることが必要なのです。彼のサファイズム乃
至トリバジズムはここから生れます。ともあ
れ、彼のこの手記は変性そのまゝの願望の貴
重な記録であり、変態性慾学の資料としての
価値を失いません。

〔註〕

女性になりたい為に、女性ホルモンを自分
の体中へ注射し、或は内服により女性化を計
った一男性の体験を如実に書き記した手記に
寄せて書かれた古井氏の一文を紹介しました
が、この一男性の手記は次号へ掲載する予定
ですから、どうか御期待下さい。いささか掲
載の順が後先しますが悪しからず。

未来幻想マゾ小説

家畜人ヤプー

(第十回)

沼

正

三

第十七章 夜明けの予備檻で

一 悪夢と指輪(上)

麟一郎は教会の中で、ヴェールを被いでオレンジの花輪を冠に戴いた花嫁衣裳のクララの横にいた。結婚式である。——良かった。とうとう此処まで漕ぎつけた。一時は二人の仲が……あ、そう云えば俺はまだ礼服を着ていない。何てうっかりしたんだらう。……花婿が素裸じゃおかしかろう、着て来よう……

その時並んだ二人の眼の前に小中大の日本茶碗を三つ重ねたものが妙な形の銚子二つと共に持ち出された。はて、三三九度の盃か？——挙式は卒業後麟一郎の祖国で、と相談し合った頃、彼女に話したことがある。「三三九度の盃と云って、日本じや結婚式に誓の酒

初めて読む方に 今から二千年後の宇宙帝国イース。女性が男性を圧倒し、貴族平民の別ある白人達の下に奴隷階級の黒人が仕え、更にその下にヤプーと称ばれる黄肌の家畜人が白人の生活を快適にする為使役愛玩消費されている。科学の力は人権を失った肉体に現代人の想像も及ばぬ変形を加え、畜人大畜人馬や、矮人を作り出し、更に肉便器その他の生体家具各種を誕生させた。——劣等人を家畜化し家具化し切った白人達の女権的貴族政治の世界、その精密図を描くのがこの小説の第一の狙いである。

イースの大貴族ジャンセン家の嗣女ボーリオン、その妹ドリス、その兄セシル、彼の義弟ウィリアムは、本国星カルーから地球別荘に來ている。円盤で時間遊歩に出たボーリオンの墜落事故から、現代の独乙美女クララは婚約者瀬部麟一郎と共に、二千年後の地球球面にやって來た。然し、彼女がジャンセン家の客人としてもてなされ、安逸の生活を享樂し得るのに反して、麟一郎はヤプーとして扱われ、畜化処置を施される。——この家畜化の過

程を細かく辿るのがこの小説の第二の狙いである。

撰餌排泄の為のボンブ虫を寄生せられ、皮膚強化により全裸を強制され、逆上の極、無理心中を試みて失敗した鱗一郎は、去勢されて予備檻に移された。早朝、海辺で一刻を過ぎたドリスが河童を随え、畜人馬に跨って帰途についた頃、予備檻では……

を呑むんですよ。面白いでしょう、先ず花婿が一番上の盃を一口飲んで……」

そんな言葉がそのまま実現した。鱗一郎は、三ッ組の盃にしては不恰好な、と思いつながら、上の茶碗を把った。牧師が饒子の一つを取り上げて注いで呉れる。黄色の液体が白い磁器に美しく満ちた。一口味って新婦に廻そうとすると、

「全部飲むんだ、三口で飲み干すんだ」

牧師が指図する。誰かに——そう、あのセシルに似ている。

「え？ 然し固めの盃ですから、交互に……」

「何だと？ それをクララに飲めというのか。馬鹿な。気狂沙汰だ……」

「でも、私はクララと結婚するのですから……」

「何を云ってる。持参畜（ダリ・ヤブー）（花嫁の持参金の一部たるヤブーの意）の分際で……彼女と結婚するのは、彼だ。これから式をあげる所ではないか」

「え？」

仰天して牧師の指さす方を見ると、胸から花を覗かして婚礼用の礼装に身を整えた長身の青年が、端然とこちらを向いて立っている。亜麻色の髪、灰色の眼、鷲の様な鼻……あのウィリアムだ。気が附くと、横に並んでいた筈のクララが長い裳裾を曳きながら、し

ずしずとその方に歩いてゆく。ヴェールから顔を露わし、彼に向い合って立った。美青年が微笑んだ。両手から手を伸して、重なる様な抱擁、顔をくいちがわけて長い長い接吻……

——じゃあ俺は一体どうなるんだ。俺を玩具にしたのか。俺の愛情を蹂躪（ふみこ）するのか。現在俺達は指輪を交換した仲だぞ。ええい、裏切者——

クララ目掛けて投げつけた婚約指輪が、今しも二人の方に近附く。牧師の黒服の背中に命中して、爆発した。天地晦冥。煙がはれると、総ては消えて、唯一つ、あの鞍形の背を持った怪物椅子が、鞭の様な触手を振って近寄って来ようとする。飛び退る。追って来る。又逃げる。……とうとう……

「ア——」

自分の声で目が覚めた。夢だったのか。……

敏捷に五官を働かせた。冷汗びっしりの身体はやはり素裸だ。軽金属製の床板の上にじかに寝て居るらしい。網目の天井、周囲の鉄の格子、檻だ。動物園で見る様な獣の檻なのだ。檻の天井の遙か上に見える室の天井から照明されているらしく、煌々と明るい。

昨日午後以来の怪奇極まる体験の数々が走馬燈の様に思い出されて来る。——全身麻痺、人犬、焦熱地獄、立廻り、皮膚痛、再会、心中……自分だけ死にはぐれた。去勢され、舌を嚙んだ……それも失敗したんだ……

昨夜心中に失敗した後で感じた自嘲の念は、去勢された上自殺に失敗した「死に損い」の今、一層強くて然るべきなのに、少しもそういう惨めな気持ちにならず、

——死ななくて良かった

と逆の喜悦が胸を暖めるのだった、生本能原液の注射が効いて、
 麟一部の個体保存欲は倍増し「生命を惜む」気持ちが嘗って経験しな
 かったほど強くなっているのである。

——だが、クララは居ない。

絶望が胸を締めつける。彼女を一時の嫉妬に駆られて殺した軽卒
 さを自責せずにはいられない。最愛の人を失ったばかりではない。
 この異境にあって彼の陥っている逆境から彼を救ってくれる人は彼
 女を措いて誰があつたろう。それを彼は絞め殺してしまったのだ。



「クララ、赦して呉れ」
 思わず口に出して云った。だが今更無分別を悔んでも詮ないこと
 だった。

夢で指輪を抛げつけたことを思い出して、左手の指を見ると、チ
 ヤンと嵌っている。総ての衣類を剥ぎ取られた今、この指輪は昨日
 まで自分が身につけていたものの唯一の記念になったわけだ。

『クララより麟へ』

と刻まれた細字が指輪交換の日の思出を引き出して、今の夢の場
 面の不快さを忘れさせた。逆境にある自分を励ます為にク
 ララがこの護符を呉れたんだ、そんな気がした。

——ひよっとしたら、生きてるのか？

いや、現在その指輪を嵌めた手で首を絞めつけた。音楽
 で眠り込む前に窒息してた筈、とても生きてるなんてこと
 はあり得ない。この指輪は形見になってしまったんだ……

「クララより麟へ、か。クララ、僕は何もかも失ったが、
 この指輪丈は残ってたよ。これが僕を君に結び附ける唯一
 つの羈絆……これで今後も僕は力附けられ、強く生きて行
 ける。クララ、上から僕を見守り、僕を導いてくれ、僕を
 励ましてくれ……」

麟一郎は生きてる人に云う様に、形見の指輪に話しかけ
 つつ、思わず涙した。……

……
 気を取り直して檻の内外を調べようとした。身体を動か
 すと便意を覚え、腹も空いてきていた。



二 悪夢と指輪(下)

その頃――

クララは麟一郎とワルツを踊っていた。大学の舞踏会だ。今日は彼女の誕生日、そして先刻二人は婚約指輪を交換したばかり。クララの身体は逞ましい男の腕に抱かれ、心は卒業後の華燭の典を夢見で浮き立っている。

急に、麟一郎が腕振りほどこいて、タキシードの上衣をかなぐり捨てた。ズボンも……

「麟、気でも狂ったの！」

彼女の悲痛な叫びも聞かぬげに、男は、どんどん身につけた物を脱いで裸体になってゆく。と、耳許で声がした。

「クララ、吹驚したでしょう」
ハツとして、振り退ると、ウィリアムの灰色の眼が微笑んでいる。

「どうしたことなの、一体？」

「クララ、奴はヤブーだったんですよ」

愕然とした。ヤブー、麟一郎がヤブー？ 嘘だわ！ 嘘

に定ってる！ ねえ、麟？

呼び掛けるつもりで麟一郎の方を振り向くと、見る見るその身体が縮んでゆき、同時にすると頸が伸びて、近寄って来るその顔は――確かに麟一郎だ！ 突然、口許が醜く歪んだ。何か訳の分らぬことを叫んだかと思うと、急に咽喉元を締めつけられた。――苦しいッ殺される。麟に殺されちまう。ウィリアム、助けてーッ

ひどく呻されて、クララは目を覚めた。額にべったり汗の玉が浮いている。下着に吸われてか、別に感じないが、全身に冷汗をかいだのに違いない……今思い出しても恐ろしいあの瞬間の麟一郎の狂暴な顔、野獣の様だった……よく死ななかつたものだ……

――麟。貴方、妾を殺そうとしたのね。

今迄ついぞ知らぬ憎悪を感じながら、額を拭う片手の指に固い物があつた。指輪……そう、夢に見直したあの日の舞踏会、ダンスの前に交換し合ったんだっけ……

『永久に汝の所有なる者より』

と銘刻のある品。「いつまでもあなたのもの」という陳腐な誓言が、空々しくて腹が立った。何て嘘ッ八な……

――叩き返してやるわ、こんな指輪。

尿意を覚えて、昨日使った浴槽傍の肉便器の所にゆくつもりで身を起しかけると、忽ち部屋の隅から何者か近附いた。ほの暗い照明だけだったのが急に一段と明るくなり、黒地のコンビネーション制服を着た黒奴の姿を照し出す。F1号ではない。彼は寝ている。ここに立ったのは寝台番——宿直黒奴ともいう。——で、一晚中貴人の寝台を守る役である。去勢されてない身で、貴族男女の寝室に待りつつ、心の平静を失ってはならぬ難かしい任務である。

「御用でございますか？」

「アジッコと云いたいだよ」(第八章二)

「はッ、ここにあります」

黒奴は寝台下から輻輳首型単能具を這い出させた(※)。寝台の掘近く位置すると長い頸を伸ばして、挟み易く輻輳形になっている頭部を掛布の下へもぐらせて来る。何のことはない。寝台を離れることは愚か、上半身を起すことさえ無用だったのだ。口笛で合図すれば充分、その中、専用読心具を持つ様になれば、口笛さえ必要がなくなるだろう。

照明が元の暗さに戻った。

彼女はもう一度眠気に襲われ、夜の明け初めたのも知らず、トロトロと快いまどろみに落ち込んで行った。

(※註。夜明け前の一刻は肉便器達の身嗜みの時間である。賤しい肉体に聖なる飲食物を与えられる光榮に、口腔を出来る丈清めて少しでも神聖さを汚すまいと、奥歯や歯齦を磨いて、無垢の容器にし、賜わった物を十分味い、異常あれば覚知できる様に、味噌(舌表面の粒々)の性能を増進する薬液に舌を漬け、更に唾腺に強力抗生物質ペロマイシンを注射して、舌で清

拭した時唾液の殺菌力で一紙で消毒できる様にする。最後に食事毎主人の肌身に触れる顔面や肉瘤の皮膚の手入、これは云うまでもない。こうして彼等は毎朝主人の起床前に支度を整えて一日を迎えるのだが、寝台下の単能具だけは別で、主人の就床中は身支度にかからず不時の御用に備え、離床後始めてその日の身嗜みに取りかかるのが常である。クララの目覚めた頃は他の肉便器達は支度最中だったが、此奴は直ぐ這い出してゆけたのはその為だ。

三 家畜適性検査

さて、下界に立ち戻れば——

クララの様な手軽な解決法を持たぬ驍一郎が、迫る便意を持て余して、狭い低い檻の中をうろろろしていた。何か便器をと求め廻る。唯一つ見当たったのは、径一輻の鉄棒を一〇輻間隔で植えた四方の格子の下方に張られた三〇輻幅の鉄の腰板の一つに、中央に首丈通る潜穴があり、その外に井状の容器が見えるのである。然し、支持腕が附いていて中へ入れることができぬし、第一その位置から見て、食器らしい。外に容器は何もない。檻の天井はやっとなんて頭のかえぬ丈の高さ。床は広さ二畳敷位で、部屋の床から五〇輻位上っている。奇妙なことに、檻の外は、四方いずれも、格子から二米位の所迄しか見えない。壁も衝立も垂幕も、何も邪魔物のない空間に違いないのだが、ゆらゆらと陽炎の立つ様に輝き揺れる光の壁があつて、視界を限っているのである。その向うに何があるのか、部屋全体の大いさ、この檻の位置、皆目見当のつかないのが不安だったと、上から、妙な形の物体が下つて来た。ゴム管らしいものの先に

人工肉質の先端部——読者諸君には、それが黒奴用真空便管の先端器と見当がつくだろう。だが麟一郎には分らない。見覚えはある形だが……

彼が先端器をいじっている間に、簡単に家畜適性検査について説明するでしょう。巨人ヤブーのアマデオが畜人馬にされたのは、その脚力を買われてだった。その様な個体の性能による使用区分は、人間として育てて来た土着ヤブーを飼ヤブーにする場合特に必要な手続である。これが家畜適性検査で、家畜化を前提としてその個体のもつ種々の可能性を計測し、家畜としての用途の決定に資せんとするものである。入社試験の際の適性検査と思想は同じだが、家畜化の前提が異なるから、評価が自ら変って来る。

知能指数、これは人間の時と変りがない。

愛情指数というのがある。これは慕主性係数と相関させて意味をもつ。秋田犬の様に一人の主人丈に懐くが、西洋犬の様に主人が變っても平気か、そしてその懐き方はどの位か、こういう問題である。

性格指数というの、各種因子を正負十点で評価した総合点であるが、正負の評価が人間とは逆になる。独立自尊性・批判性等が負で卑屈性・依存性等が正だ。更に多くの項目では一次形成と二次形成とを分つ。前者は人間的意識に基くもので負、後者が家畜的意識から形成されるもので正になる。羞恥心、名誉心、自負心、競争心、潔癖性など、いずれも一次と二次とで評価が反対になる(※)

(※註。ヤブーに羞恥心がある訳はないし、あつてはならない。誰でもそう思う。然しそれは人間的羞恥心のことで、ヤブーにヤブーなりの羞恥心があつても差支えはない。生れてから首輪

を外したことの無い生ヤブーは、首輪の外の部分を露出させることに、人間が素裸になる時の様な羞恥を感じるという。口唇を閉ず童貞膜を舌で破られる時 *Timbana* の示す羞恥は、前史女性の初夜の羞恥に似て、使用する者にはこよなき刺激となる。食物の器を飲物の器より先に舐め上げ、ドリスからその誤りを拍車の一撃で教えられた時、*Si Si* は恥かしく思ったに違いない。肉便器としての名誉感が傷ついたからだ。

品評会で全犬最優勝したタロ、競馬で勝ったアマデオ、いずれも犬として馬としての競争心をもち、名誉心をもっていた訳である。それが満され、自負自信となる時、驕慢なヤブーも存在しうる。ヤブー仲間への驕慢なら、悪徳とはいえない。肉便器の選民意識などそれが彼等の心の支えなのだから。要するに人間とは別の次元でヤブーにはヤブーの誇りがある、これに基くのが二次形成なのだ。……潔癖性なども一次形成のものは畜化段階の初期に捨てねばならぬが、二次形成の方はむしろ高い程よい。白人のものを汚いと思う心があつてはならぬが、それ以外の汚れには敏感な程良い。肉便器が毎朝歯を磨き、顔を洗うのはそれであつて、自分の身体の垢には潔癖なのである。それが使用者側にとっては気持よく使えて好都合なわけである。

更に徳目指数もある。これも美德悪徳の標準が人間と同じでない。孝行・友愛・博愛・信義といった人間関係を基くものは全然問題外である。質素など私生活を前提とするものも不要である、隸属関係から来る忠実重要で、その点数は慕主性係数と並んで重視されている。更に、勇敢・忍耐・勤勉・報恩・奉仕等の徳目が厳重に採点

される。

こうした各種指数が計測され、同時に、その土着ヤブーの心裡に眠る服従本能の量と質を知る為の服従度検査がなされて、すべてを総合した上で、「家畜精神評価」が結論される。これと肉体的諸数値とを合せて初めて、一匹の土着ヤブーを「家畜人」human cattleとして評価し「性能表」を作り得るのだ。

ヤブーの市場価格を決めるにはこの外、畜化度（土着ヤブーの場合、畜化度は低い程高価である。第十三章五）、血統書（飼育所生れのものとは違って、邪蛮国民としての門地家系である。）、前歴書（昇天即ち捕獲されてからの飼主の変遷で、これは登録簿に記載される。）、も問題にされるが、とにかく一番大切なのは「性能表」であるから、これを作成する家畜適性検査（domesticating aptitude test）（略してDATとかドメス・テストとかいう。）の重要性は、極めて大きいといわねばならない。

麟一郎はこれからこの検査を受けるのだ。

四 先端器試験

ヤブーが先端器をひねくり廻している檻から二米余り離れて二人の男が立ってヤブーを観察していた。一人は中年の白人で、小柄だが見るから精力的な風貌、広い額と鋭い眼は学問一途に打ち込んでいることを思わせる。地味な模様のジャンパースカートの着こなしもなげやりな感じで、イース男性に珍らしい服装への無関心を物語っている。これがコラン博士だ。畜人学ことに家畜適性検査の専門家で、畜人省畜籍局嘱託として、研究のため地球支局分類課に籍を置いている。



昨夜ジャンセン別荘から地球支局歐洲分室に、新捕獲の土着ヤブーを明朝登録したいと連絡した際、二十世紀球面で獲れた珍品であると申し添えたので、登録課員が気を利かして、南極飼育所の博士に「明朝旧ヤブーの登録あり」と急報した結果、登録に先立ち是非直接調査したいとの熱意に燃えて、南極の研究室から飛来したのだ。檻のヤブーは眠っていると聞き、立体像映写器と録音器を装置させ、別室で昨日の大暴れの模様など聞いて予備データを仕入れている中、ヤブーが目覚めたと報告があった。生畜舎の飼育係でこの予備檻の看守をしている黒奴B2号に案内されて、檻の傍迄来て、先ず行動観察により、精神諸元の評点のデータを得ることにした所で

ある。

博士の方から檻を見るには何の邪魔もないが、ヤブーからはこちらは見えない筈だ。檻の鉄格子から二米離して磁界片・レイ・スクリーン視光幕を張り廻してある。ある局部空間に特殊の磁場を作り、その界面が内部から外部への光線文を通し、外部から内部への光線は全部乱反射してしまふ様にした仕掛けである。おまけにその界面と重ねて強力空気幕と吸音装置を連動させてあるので、こちらで喋ったことも中へは聞えない。そこで檻の中のヤブーには姿も声も隠して、自由に観察することができるのである。

精神検査の手始めに知能検定の目的で、博士は先刻真空便管の先端器を檻の中へ下してやった所だ。捕獲された土着ヤブーはポンプ虫の尾部が成長し切る迄は栄養出管への排液ができない。然し、虫の出す体液の特殊な効果で水分も大腸に集る（第十五章五）ので、軟便になり、先端器の使用に耐える（第七章二）。そこでポンプ虫を吞ませて以後百時間は先端器を使わせるのである。黙ってこれを渡して見ると、独りでこの未知の道具の使用法を悟るまでには相当個体差があるので、智慧試験ができる。これを先端器試験という。

先端器を持つヤブーを、チンパンジーに道具を与えて知能検査をした時のケーラー博士の様な目附で見守りながら、B2号に

「給餌はどうなってる？」

「へい。昨夜生本能注射の時一緒に高栄養液を注射しました」

「分量は？」

「エー、二〇CCで」



「ふん、じゃ百時間もつな」

「へい。尾の出る迄給餌しなくて済む様……」

「やッ、股に挟んだ」コランは対話を中断して目を丸くした、

「もう使用法を悟ったんだな。これは仲々賢いヤブーだぞ」

麟一郎が簡単に物体の用途を発見したのは、一つには、緩解注射前吐瀉した時（第十二章二）、看護婦がこれを使って口の周りを拭いて呉れた記憶が復活したので、真空吸引装置ということが判って

来たからだ、やはり頭脳明敏の為だろう。先端部のくびれが股に挟むのに都合よくできていることを看破すれば、使用法は自ら明らかだった。

排泄し終ると湯で肛門が洗われ、次いで熱気が乾燥させる。快適清潔、甚だ文化的だった。用が済むとそれは上に引き上げられて行く。誰かがこちらを見て動かしているのだろうか？

空腹感が一層ひどくなった。高栄養液注射がしてあるから、栄養の点では心配はないのだが、この注射では空腹感^いは医^いせないのだ。

大多数のヤブーにとっては、飢餓感や排泄要求は、ポンプ虫膨満による排液及び充填への一体化した欲服（第七章二）に過ぎず、空腹感即ち食欲とは縁がないのだが、既に口からの摂食の経験ある土着ヤブーの場合は、それを訓練に利用しようと、ポンプ虫による尻からの摂餌が始まって以後も、栄養摂取とは全然無関係な口からの摂餌が続けられたので、そのため食慾も持続させられる。こうして高尚な精神活動を忘れて食物ばかりに関心を持つ畜生に転化させるのだ。鱗一郎を悩ましている空腹感^いは、目下彼の腸内で刻々に伸びていっているポンプ虫が成長し切って、尾が外に出る様になってからも絶えず彼に働きかけて、彼を畜化してゆくことだろう。

五 赤クリーム馴致

「さて次は、と」コラン博士が檻を見つめて考えながら云った。

「おい、赤クリームは？」

「はい、一杯分文用意してあります」

「よし、先ずクリーム馴致だ。電気針の味を教えながら舐めさせる、良いな」

「はい」

と黒奴は壁の把手^{ハンドル}を動かした。餌皿が一人の方に引き寄せられた。鱗一郎は油断なく四方に気を配っていた。と、例の井状容器が檻の縁から離れてスーッと光幕の向うに隠れた。屈伸自在の支持腕の先に附属して、水平運動ができる様になっているのらしい。

やがて井は、輝き且つ揺れる光の壁を突き破る様にして再び姿を現わし、檻の縁へ戻った。檻の床と同じ高みである。中になみなみ何か赤いものが入っている。血糊？ 暗赤色でアイスクリームのように半ば固まりかけている。……この井の中に入って来る以上、食物に違いないのだが……然り、食物だ、これは、飢えた肉体の動物的な本能は、理性による判断をまたずに、それが食べられることを嘆き当てていた。

潜穴から首を出す為には檻の床に腹這いにならねばならぬ。踏み潰された蛙見たいで、我ながら見つともない姿だ。彼の目にこそ写らね、どこからかこちらを見ている人がいることは、先刻の便器やこの食器の動きでも明らかなのだが、それを承知の上で、尚彼は潜穴から首を突き出すことができた。いつか彼の羞恥感^いは減少しているのである。それは素裸でいることが大きな原因になっていた。人類の文化は智慧の木の実を食ったアダムとイヴが素裸に羞恥を覚えて前を蔽う着物を作った時に始まったという寓話は、まことに故なしとしない。イス人^いがヤブーに素裸を強制するのは、畜化のための羞恥感の剝奪が狙いなのだ。

光幕の彼方では、コラン博士がにっこりして呟くようにいった。「一次羞恥度マイナス7か……頭は良いし、羞恥心は減ってるし、これは仲々良いヤブーになるぞ。……おい、電気針が遅れない様に」

気を附けるよ」

「大丈夫です。博士」

「そら、舐めるぞ」

手は腰板に遮ぎられて使えない。舌でペロリと赤いクリームを舐めた途端、ビリリッとして電撃を感じた。

——畏だったかッ

慌てて首を引こうとしたが、引けない。舐めた瞬間電撃と共に逆U字形の金具が潜穴に落ちて首筋に掛ったのだ。苦しくはないが、檻の床に腹這ったまま首根ッ子を抑えられてしまったのである。

「フフ……」

含み笑う男の声が聞えて

「よし、といわれる前に舌を出すからだよ。分ったか。……よし……」

「食、べて、よし」

何処から話し掛けているのか？ 流暢な日本語（以下、一々片仮名書きにせぬが、適宜判読されたい）である。何者だろう？

「食、べる、というのに食べないのか？」

叱責する様な口調が飛んで来たかと思うと、又もやビリリッとして来た。慌てて舌を伸す。舐め始めると共に電撃は止んだ。

ドロリとした流動体で外からは無臭と思えたが、口に含むと一種異様な臭がツンと鼻を衝いた。然し同時に今迄一度も味わったことのない珍らしい味が彼の舌を一遍に虜にってしまった。電撃に追われるまでもなく、最早全部味わねば到底止まれない。井は丁度顔の真下にあるが、犬の様な大きな舌ではないから、少し宛舌で掬うのは仲々骨である。

彼が懸命に舌を動かしている間に、この食物について、少々解説しておこう。

前節未で述べたように、一般の生ヤブーと違って、土着ヤブーから飼ヤブーにされた奴等は食欲を持ち、その故に、「餌を欲しさに」芸を憶えさせられるに至るのだが、この土着ヤブー訓練用の餌としては、栄養に無関係で特異な味をもつ人体分泌物を原料とする菓子を作られている。月の羊羹、血のゼリー等呼ばれる *menses* 系菓子、愛のビスケットと呼ばれる男女の *love-juice* を浸ませて焼いた小型煎餅、垢飴と呼ばれる *snogena* を捏ねた玉菓子などが主なものであるが、いずれも唾液に接触して溶けるとそれぞれの強烈な異臭を發し、一旦嗜好物化してしまうと酒や煙草などの比較にならぬ強烈な魅力を感じさせるという。然し、それらが悪魔の味覚と呼ばれて、土着ヤブー訓練用以外に絶えて使用されることがないのは、材料のせいでも法律で禁じたからでもない。その異味異臭が強烈すぎ、反撥が激しすぎて、とても人間の舌には合わぬからのことである。

だが何故土着ヤブーにはその味を教え込めるのか？ タークアンを混ぜるからである。土着ヤブーの昔から、味噌とか沢庵とかくさやの干物とか白人の到底口にし得ぬものを喜んで食べていた。これらヤブー的な食物を調理科学的に分析し、それぞれのエキスを抽出してから再合成した味の素風の粉末は、白人黒奴にとっては嘔吐的であるが、土着ヤブーにとっては珍味中の珍味であり、一舐めた丈で魂を天外に飛ばすという。この味素は、ヤブー系食品の代表選手だった沢庵に因み、タークアン *Turkian* と命名されているが、これがヤブー餌料の異味異臭に打ち勝つのだ。

そこで前記の色々な餌に一度に慣れさせる様全部を混ぜて赤クリーム(※)を作ってこれにタークアンを加えたものを土着ヤブーに与えると、初めはタークアンに惹かれて喜んで食べる。それを次第にタークアンの分量を減じてゆくと、段々赤クリームの魔力に囚えられて来て、その異味異臭自体を喜ぶ様になり、遂にはタークアンなしでも、いや、ない方が、結構となり、クリームの濃い程美味を感じる様になる。この転化を赤クリーム馴致レッドクリームコンディショニングといい、馴致後の土着ヤブーは、血のゼリーや愛のビスケットの味を喜び、これを貰う為には、どんな珍芸でも憶えようと欲するに至る。そして命ぜられれば……………を直接口に吸い、飲み……………を舐め取ることを

辞さないだろう。

(※)註。第十章三註(5)で触れた様に mens-pigmy という矮人がある。これを band から取り出すとすぐ胃の内容物を吐かせ、特殊なセラチンの中に混ぜると、酵母の作用で全体が変質し、血糊の様な膠質物血のゼリーを生じる。これを主成分として各種分泌物を添加したものが赤クリームである。

麟一郎が喜んで舐めているのは、たっぷりタークアンを混ぜた赤クリームなのである。今後が思いやられるというものだ。

〔次章では、海辺から帰ったドリスが予備檻の部屋に来て、テストに参加します。麟一郎の畜生化の一步進展を御期待下さい〕

東京の人よ何を穿く

―腰巻とパンティとふんどし―

松原三千代

去る五月から六月まで、東京の伯母の家で暮しました。(私は名古屋に住んでいました)その間、主として世田谷、杉並区、渋谷区を歩いて浴場やアパートの窓や住宅の物干場などで目についた結果をまとめて、東京の概ね中流の一般家庭の男女が下穿きとしてどんなものを使用しているか、とい

う大体の状況を知ることが出来ましたので御報告致します。数量その他の詳しい統計もノート致しましたが、繁雑になりますので省略致します。

先ず男の下穿きについてみると、パンツと猿又が圧倒的に多く、私の見たうちの八

割までがこれです。パンツも股割のあるものですが、男の体の特徴の上から考えて、股割が邪魔になる筈と思うのですが、事實は明らかに逆の傾向を示しています。次に股割のないブリーフ型が、かなり行き渡っています。それについて意外に多いのは、(といっても全体から見れば極めて少ない)越中褌です。後から股をくぐらせ前へ回し、臍の辺で紐にかけて余った部分の布を前へ垂らす型です。東京の、しかも中流住宅地といわれる地区に尚、猿又や越中褌がこんなに見られるとは予想外のことでした。もっこ褌、六尺褌その他の褌類は殆んど見つかりませんでした。もっとも六尺褌が腹巻かの区別は洗濯物からでは判り兼ね

ますので、浴場で確認する以外は全部計算から外しました。浴場で確認した六尺褌は僅か二人でした。

下穿きの色は九割九分までが白。薄茶の猿又や薄青のパンツが少々。ブリーフ型のうちに時に黒を見かけたので、女物ではないかと注意しましたが、前部に『打合せ』があるので男物だと確認しました。以上の通りで『下穿き』に関する限り、私は東京の紳士方に失望した次第です。

〔註〕名古屋では赤の六尺褌や三角褌を時々浴場で見かけます。

次に女物を見ると、先ず最初にお知らせしたいことは、東京でも名古屋と同様に女はやはり『ノー』が好ましいということなのです。何も穿かないと思われる点が見られるのです。パンツや猿又が干してあっても、女の下穿きが一つも出ていないという物干場が何度も目つきました。全体の比率からすれば二割位に当る人が、何も穿いていないでシユミーズ一枚の下は裸という計算になります。勿論、腰巻もしないわけですね。下穿きでは、パンティが断然愛用されています。更にパンティより小型でクリの深いV字型の一見褌に近いショーツが二割で、両方合計して結局、股割のないパン

ティ型が八割となります。後はズロース型(股割)と腰巻が半々ずつです。こゝでも腰巻使用者が案外に多いのは注目すべきでしょう。東京の女が十人並んだら、必ず一人は腰巻をしているという計算になります。

パンティ(ショーツも含めて)の色は白が殆どです。七色パンティの一つと見られる色物は、もっと普及し、流行しているかと思いましたが、三十五枚に一枚の割にしか使われていませんし、色は青かピンクで、赤やグリーンは一枚も見られませんでした。布地は薄手のものが好まれていて、ナイロンかアセテート、ベンベルグ、レーヨン系のものが数多く、綿製のものと大体同じ位になっています。浴場で見たピンクのレーヨンショーツは薄手の上に肥った人が穿いているので編目が一杯に横に伸び切っていました。薄手のパンティは透けてもそれ以上に穿き心地がたまらなく快適だから喜ばれるわけです。ついでズロースは黒が多い。以上のほかにレース付パンティやメンスバンド等があったが詳細は省きます。

腰巻を大別して紐付と紐なしの二つに分けると、紐付一に対して紐なし二の割で、紐なしが好まれています。丈の長さは短か

目で、膝小僧より少し下に来る程度の人が多いです。浴場観察によれば、腰巻の下には何も穿かないのが普通ですが、中には極めて短い褌型ショーツを穿き込む者も時々見られます。但しさすがに洋装で腰巻という者は一人もなかったように思います。腰巻の色はピンク、赤が多いのですが、白い腰巻もかなり多く、ほんの僅かですが青、緑、黒、青白の縞物なども使われています。緑の目も覚めるばかりの洋服地の腰巻にぶつかった時には思わず『素敵』と叫ぶ程の美しさでした。

以上が大体の下穿き調査ですが、最後に女の『ノーパンティ』について私の経験から申しますと、これは和服の人に多いだろうと考えられます。和服の場合のスタイルの要点は帯で、これが緩むともう台無しです。生理的要求のあった時、パンティを下したり上げたりする度に着付が緩むので、つい最初からパンティ無しということになります。この場合に最も適当な下穿きは、私達が常に声高く呼びかけている『三角ふんどし』なのです。和服用下穿きとしての三角褌については、特に着脱等に便利のようにならぬ研究実用化していますので、改めて発表させて戴きます。

『艶美なる捕物帳』

—事実を画にした話—

牧 高 志 文・画

ほろ減しに線香の灯を点じましょう。

一、とつても、お急ぎの巻

「おいッ、早くしないと時間に間に合わないぞ。」

「そう、じゃ急いで浴びてくるわ、一寸お待ちになって。」

御存知細帯一つとはいっても、そこは着物が商売、四、五本の腰紐が解かれ、紅匹田紋りの長襦袢の伊達巻がサラサラ鳴って、パツとうつむいての立膝、ボンと投げ棄てられる白い足袋。

「じゃ、大急ぎでね。アラ、御覧になっちゃ駄目よ。」

念を押したつもりか、御馴染の心易さか、パラリと落したピンクの裾除け、

「御免なさい、このまんまで。」と下はは真紅のお腰一枚とは何んと色っぽい—のが手拭いひったくつての戸襖、向うはいわずと知れたお二人さん家族風呂ノ

さて煙草吹かし吹かし、つらつら彼女の裾除けとやらをおもむろに拝見したのである。いや、忘れ申した、それより先にスケッチこそ肝心なれ。

(第一回)

成る程ね、パンティなんぞ、おかしくつてとはよくも抜かしたものの、真紅の腰巻こそ手元がないが、いみじくも女盛りの移り香を吸った、いや寧ろ紫地、白浮かしの源氏車の着物の余香をふくんだ匂いはまた格別かなノ

地は勿論、さらりとした高級化繊物、前で結んだか後結びか判らない。腰布の白は純白で奇麗である。無難作に脱いだピンクの裾除けをたたんで置く必要はあるまい。下手にたたむ程下衆張った根生はあっさり棄てた方がよからう—というもの。

「アラ、嫌やよ、女の腰の物ナンすお片付けになったりして」なんぞとよもや彼女はいうまいけれどさ。

一寸スケッチが俯視し過ぎたかな? コトノと湯桶の音が聴えて来た、もうすぐ上って来る頃合だ。

画帖に赤く添書して曰く

—昭和〇〇年九月十七日午後、於〇林温

誰しもあることです——この捕物帳は何も銭形平次や伝七親分とはいささかの関連もありません。町や村を、いや近所近辺をよく注意深く歩いて御覧なさい。そこには別段、不心得の感情を起さなくとも、きらびやかに色彩いとも鮮かな物が——、毎日とはゼイタクですぞ、折に触れ季節に伴って眼の中に飛び込んで来る筈です。遠廻わしに斯く御披露する所以はもうお判りでしょう。

数えて三冊になろうとする私のメモスケッチ—捕物帳は、とりとめもなく乱雑に描き散らしてはありますが、その一つ一つがそれぞれ仔細が籠っており、面白いと私は思っています。

今日はその中から二、三拾うて満天下の和装フェチの皆さんに御覧に入れてくどくの罪



泉、芸妓薦吉事八重子23才、色ピンクのホー
ゼを落してのお急ぎ湯浴み、馬鹿は死ななけ
や直らない——。

二、初めましてと隣の花嫁さんの巻

「節子と申します。どうぞ宜敷しく……」

庭続きで皿の音までチンチロリと聴こえよ
うという新築小住宅に美しい花嫁さんが引越
して来たと思ひ給え。そして引越荷物の唐草
模様混って三味線にお琴が乗っていた上に
一挙手一挙手が誠に以て淑やかさ。徒らに隣
の畑の花は赤いとは限らぬけれどさ、今以て

第1回

くたびれたスカートを召さぬ処が嬉
しいとね、即ち日本趣味殊によると
さる御大家の一人娘で踊の名取りか
も知れぬと噂話がしきり……。

或る雨上りのキラキラと光った朝
の事でした。おお、待ってました！
何んと浮び出た御内儀さまの美しか
ことよ。むじな菊散らしの浴衣に赤
い夏帯一本締めて今日はたんまりお
洗濯とは……。井戸の水こそ面恥し
う御座らぬか。

「あなた——」と呼んだかどうかは
判らない、して見ると今日はサンデ
ーお休み日だ。

「ホホホ……だって随分たまつたん
ですもの、いいわ、そんなことなさ
らないでも、じゃ、そこへ干しますわ、棹は
こんなに濡れてて……」は本当の話。

で——御新婚の夢を重なるお腰の物を、そ
うです。本日はたった一枚、眼も覚めるよう
な真赤な、中級縮緬物とにらんだものを紐に
おかけになりましたっけ。

やがて正午の真夏の太陽はさんさんとお腰
にふりそそいでいます。あるかなしかの微風
は物の見事に乾かすことでしよう。

しずくが取れた頃……。

「あの——誠に恐縮ですがそのお腰、スケッ
チさせて頂けませんか？」とはいくら馬鹿で

もいわれないから、こっそりカメラで撮って
引伸した奴がこれなんですぞ（第二回）
例によって側に添書して白く

——昭和〇〇年八月十一日、晴、至極和風
好みの細君（但し隣の新家庭）御愛用の品を
干しにけり。惚れた奴が阿呆か、目に青葉、
山ほととぎす、初洗い！——でも御苦労千万な
話、午後四時半、既に取入れてお腰の影や求
むべくもなし、あゝ……また残念な。

三、両国の花火をかい間観るの巻

ポーン、ポポーン、パアーン

玉や……玉や——それは語り明かした昔の
お話。

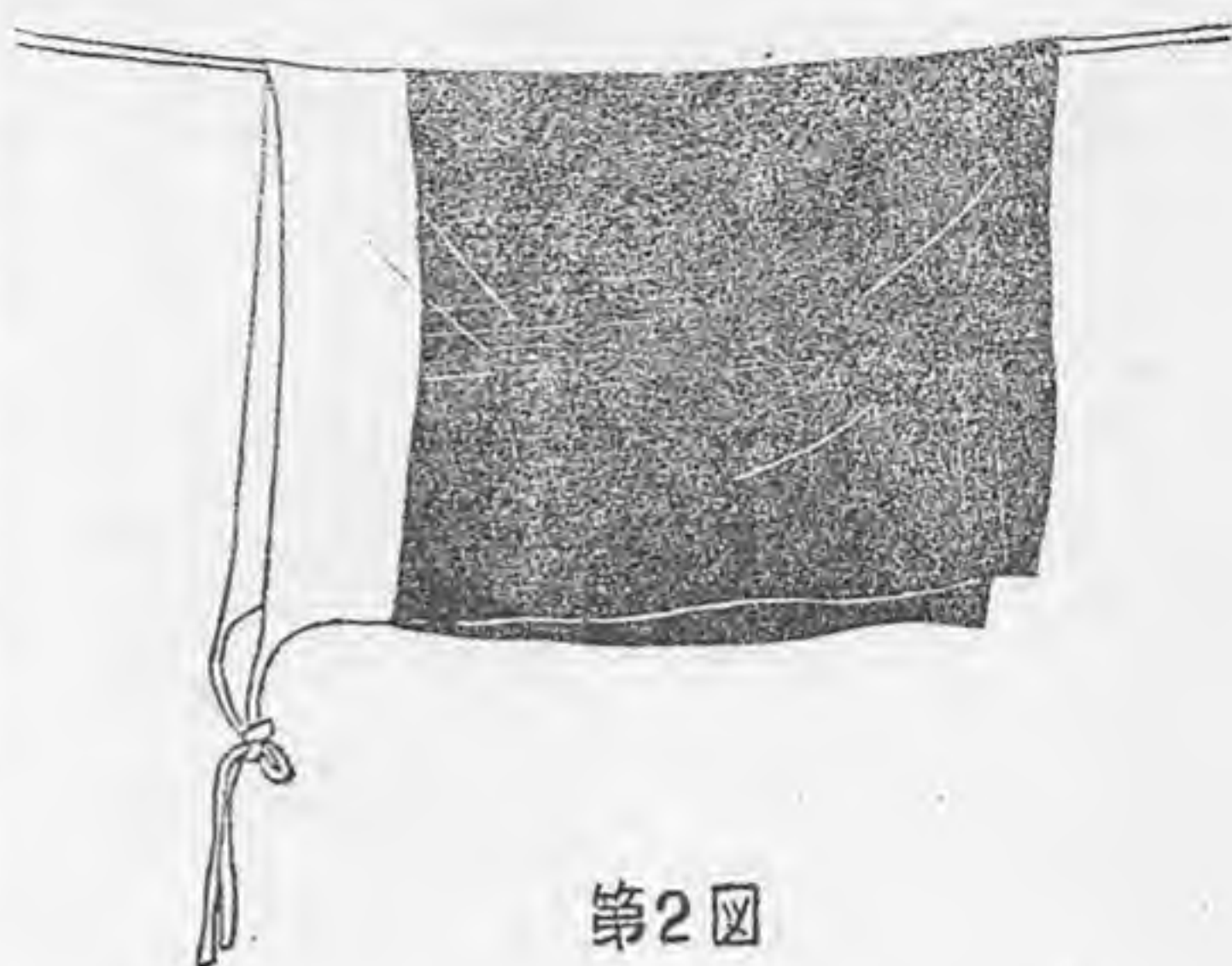
「いらっしやいませんか？ 川面は一寸見辛
らいんですけど、よく見えますから——」

誘われるままに足を運んだ処が何んと知り
合いの料亭、いやどうも置き屋臭さかった。

「さあ、どうぞ、屋上ですけど、アラ、誰あ
れ——こんな物干して？ どうも失礼申上げ
て、濡れてるわ、まあ、片隅にどかせて置き
ますからお目障りでしょうが、ホホホ、我慢
して頂いて……」

「いや、いいですよ、御心配なく、随分長い
雨でしたわ、今晩はよく晴れて結構です。ど
うぞ、おかまいなく、もうこの盛んな川開き
を見るだけで……」

とは心は紳士だからしようがないでしょ、



第2図

至極真面目の会話のやり取り、滑り出しは上乘である。

ポポーン、もう一つパパーン、おまけに天空高くさあッと散らすは花ある雨に似て……

「あゝ奇麗／＼ ほら、五色に散った星よ、まあ奇麗／＼」

「いつの間にか、あんた達まで上って来て……」

……ホホホ、いいのよ、お酌でもして頂戴／＼

あれ？ お断りして置きましたから、アイコ

姐さんの？ チカコのだって？ まあ

今時の娘は平気で困っちゃう。いいの

そのままにしといて、さあ、お一つ如何？ 一つお召上りになって……」

「いや、どうも今日はお奇麗どこに囲

まれて、天下天下、満点、いや、いい

風ですね。こりや、ほんの座興物なん

です。あんまり花火が奇麗なもの

んですから、まずいスケッチで

すよ、下手な横好きの……」

と抜かした花火の裏一枚めく

ってが曲物、アイコが姐さんで

チカコが娘であらうとかまうこ

とはない、珍しい物は盗み描

きすることこそ楽しけれ……

見辛らい仕掛花火はこのお腰

の下から見させて頂きます。何

んの、何んのお奇麗ですこと／＼

何んで御座います？ いえ、こ

っちの話でとんとおかまいなく……

片やピールにうつつを抜かしての忙

しさ、

「お済みになりましたら、お冷やでも

一つ」は本当に恐縮に堪えません。

花のお腰が取り持つ縁かいな……

酔うて帰って、さて筆太々にメモし

て曰く

——おゝ奇麗なこと／＼ ホラ、五色

に、あやなした花模様のお腰よ／＼御覧なさい、

打上げた花火はどれも同じで大いに飽いた

たださ、腰巻を中にはさんで飛び散る花火

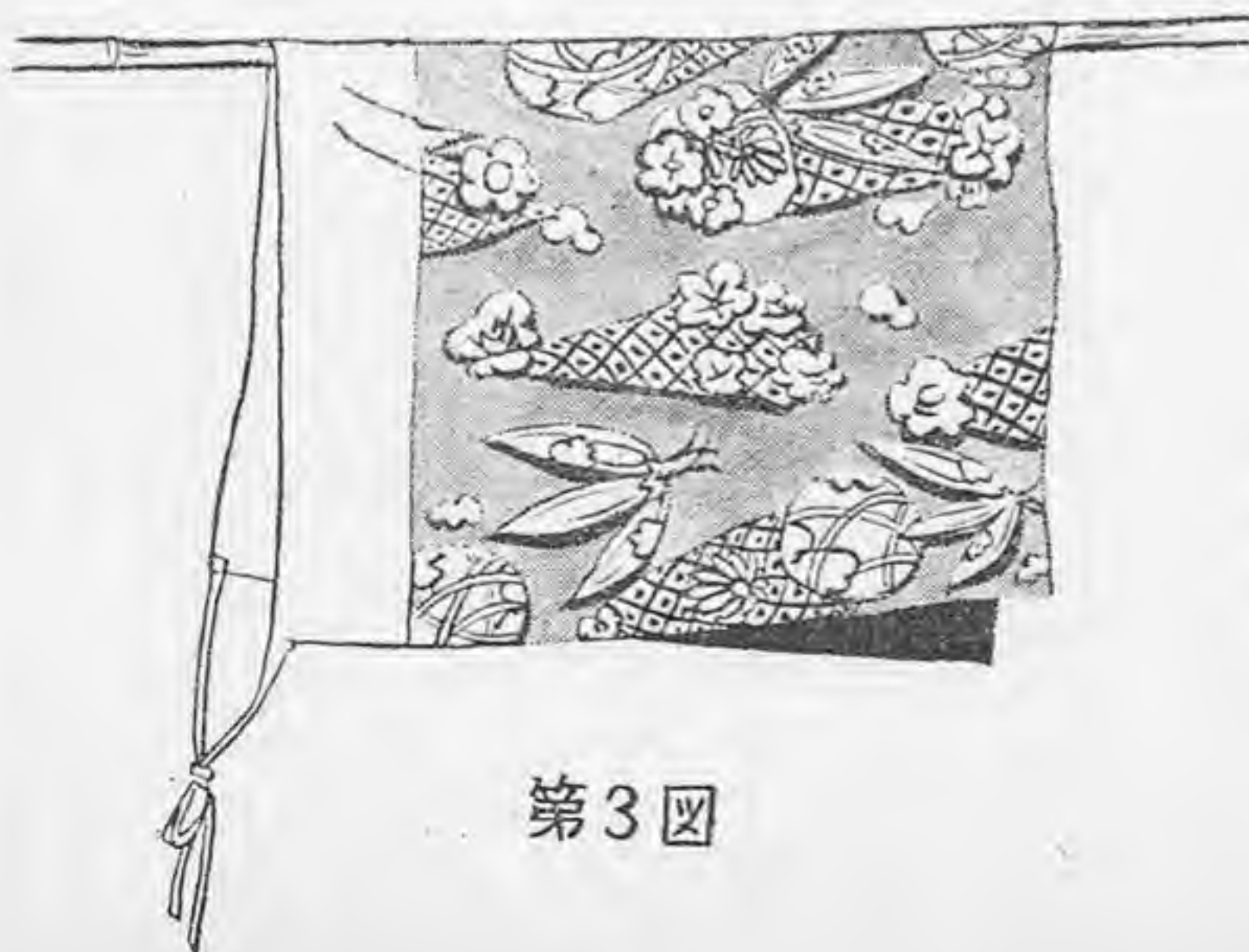
の何んと妖美なることよ、今一度、見たきも

のかな……

——あなかしこ、あなかしこ、

昭和〇年七月、於兩國、某氏に招かれて

誌す…… (第三図)



第3図

ある夢想家の手帖から

沼 正 三

ある夢想家の手帖から

第百十八 マゾヒズムとアルゴラゲニア

収容所の文学として、ルマルクなどの傑作をさしおいて、武林文子の作品だけを前項で紹介する気になった心理を、自分で内省して見た。疑もなく、エリザ・ビノバーという女芸人の演技の内容が、私にとって印象深かったからに違いない。

単に生命の軽視といえ、アシユヴィッツの大量ガス殺の方がずっと程度が高いのだが、私はそんな例を引かずに、飢えた囚人にかびたパンを与えて喜んだ看守達の方を引用した。(第百十七項)

戦争の惨酷は、南京大虐殺を初めとする、いわゆる三光の方こそ典型的に示されるのだが、私はそれよりも捕虜の生体実験の方にマゾ的なものを感じる。(第百十六項)

「美国横断鉄路」は全篇残酷に満されるが、私を一番昂奮させるのは、チャイミング・ショウの中で、鼻綱引きの勝負に、見物の白人達が失笑した、とある部分だ。(第百十四項)

これら全部を通じて、私は一体何にマゾヒズムを刺戟されているのだろう。

これに答える前に、もう少し、別の例を考察しよう。

本誌二十八年十一月号に、緑猛比古氏が「マゾヒスト木鼠吉五郎の半生」というのを書いておられる。拷問が好きだった男である。肉体的受苦をそのまま性的快感と感じた症例である。この記事を喜ばれた読者も勿論あったであろう。青柳謙次氏とか獄収一氏とか、いわゆる緊縛を、緊縛それ自体として、快感の源泉と見ておられる方々が、このグループに属すると思われる。

所が、私のような、自他共に許す正真正銘のマゾヒストが、あの記事には何の感動も覚えなかったのだ。いわゆるマゾ派にして、私と同じ印象を持たれた方も多かったに違いない。天泥氏、鬼山氏、真砂氏、芳野氏等多数の方々がこのグループに入ると想像される。

前のグループは、肉体的受苦の方に重点を置く。後のグループは、精神的凌辱にこそ快感を覚える。縛られ、鞭たれることの妄想という点では、両者は似通っているが、後者の場合は、緊縛や鞭撻を精神的凌辱の表現として受け取っているものであって、実は、根本的に異なるのだ。例えば、恐ろしい拷問に堪え抜いて死んだスパイの話を読む。前者はその拷問の記事そのものから昂奮を覚えるだろ

う。ところが、後者にとっては、拷問に遂に屈服しなかったことは崇高な精神以外の何ものでもないから、それだけでは昂奮しない。逆に、跨るといふ様な動作は、跨られる方にとって何の苦痛でもないから、純粹に前者のグループに属する人には、これは殆んど感興の源とならないだろう。ところが、後者のグループにとっては、——六月号で山本節夫氏「私のキタ・セクスアリス」がいみじくも喝破された様に——、これは深甚な愉悅感を惹き起す観念である。屈服即ち精神的凌辱を象徵するからである。

二十九年五月号「ダイアナ夫人」に、戦前ハルピンの関東軍特務機関に、スパイ容疑者に自白を強要するとして、人間用馬具で拘束して白状する迄馬代りに乗り廻した大尉夫人がいたことが書かれている。これは拷問の一種だが、自白の有無を問わず。私を昂奮させる。拷問ということより跨るといふ観念がそうさせるのであることが分る。 (更に云えば、それが夫人のスポーツとしての乗馬練習——おかげで食事が進み目方が増えた——とある——) だつたという手段性が加わっているのだ。この手段性については次項に述べる。

昔はこの両者が区別されなかったし、前者のみをマゾヒストと考えた学者もあった。シュレンク・ノチングがサディズムとマゾヒズムの上位概念を立ててアルゴラグニア(苦痛淫樂症)と呼んだのも苦痛と性快感との結合を重視した、前者のみを視野に入れた見方に近い。オイレンブルグなども、その「サディズムとマゾヒズム」なる論文で見ると、日本での被緊縛症にあたる被鞭撻症即ち前者のグループの生理的機制(一種の条件反射)を論じるに得々とし、両者を峻別し得ていない。こういう所から、例えば、有名な小口末吉(仮名)の妻ヨネ(仮名)が、日本でマゾヒズムを論ずる時には、殆んど唯一の症例のように担ぎ出されることにもなるのだ。彼女の夫を診察した三宅勉一博士の著「精神病学余瀝」で、夫の述

べた所を読むと——今ごろこんな所でからかっても仕方がないが、高橋鉄氏が、この供述を自分が初めて公刊の本で発表したような口吻をもらしているのはウソである——、或る程度精神的凌辱の契機もあつたとは思われるが、主たる症状は肉体的受苦と色欲強盛異常との結合だつたことが明らかである。つまり、前者のグループに属するのだ。これに反して、谷崎潤一郎は言うまでもなく、後者中の人物である。だから、私をしていわしめれば、高田義一郎、浅田一杉田直樹といった古い学者達は論外として、「異性ノイローゼ」や「異常心理学」の著者加藤正明氏のような新しい学者までが、マゾヒズムという名の下に、この二人を並べ立てる無定見さにいささか腹が立つ——或いは落胆する。

脱線したが、とにかく、この二つは区別すべきである。それは一次的、二次的などといった關係に立つものでもない。別物なのだ。そして私は後者のグループこそマゾヒズムの名に値する——クラブト・エビングは後者の意味で命名したのである——と信じるので、前者を、マゾヒズムとは区別した意味で、アルゴラグニア(受動的苦痛愛好)と呼びたいのである。

第百十九 手段化法則

前項で、広義にマゾヒズムといわれている中に、アルゴラグニアと狭義のマゾヒズムとが分類し得ることを見た。そして、狭義のマゾヒズムは精神的凌辱を快感の源泉とするということ述べた。

この精神的契機をもう少し考察して見よう。内省の結果、私はこういうことが云えると思う。『被虐者が他の人間の手段(道具、材料)とされる程度が高い程、マゾ的昂奮が大きくなる』と。これを手段化法則と言おう。

復讐とか憎悪とかいう強い本能的感情は、それ自体残虐行為への原動力である。この場合虐待者の意図は、虐待によって相手を徹底的に

否定しようとするにある。つまり、残虐は自己目的になっている。そして、このことは、見方を代えれば、相手を「否定さるべきもの」としてそれだけに高く評価している。ということの意味する。否定活動を要することは無視できないということなのだ。対立する人格者としての相手を認めているのだ。そこで、残虐行為へのこのような目的付けの動機は、マゾ的感興に対しては、マイナスの作用を及ぼす。人格を認められている被害者には、いくら感情移入の技術を仿かしても、精神的凌辱感は起り難いからである。

生体解剖の場合を考えよう。この場合、捕虜の足を一寸した傷にかこつけて切断してしまうのは、憎くてするのではない。目的は医学生の実術の訓練である。捕虜の肉体はその訓練材料（手段）なのだ。勿論医術の修得は尊い仕事である。手技をマスターした医学生は、本国で今後何百人もの（白人の！）命を救うであろう。然し、そのために捕虜の人格が無視され、手段化されているところに、マゾヒズムが感じられる。それは戦争の昂奮に支えられた虐殺のための虐殺よりも、単に殺人のための殺人になっていたアシュヴィッツのガス殺よりも、マゾヒスチックな要素を含むのである。

囚人を飢えさせてかびたパンを投げ与えた話、エリザ・ビーパーが逃げまどうユダヤ人を罵り撃ちするのを見物したドイツ将校の話、チャーミング・シヨウの話……これらに至っては、目的は更に墮して、単に虐待者側の遊戯として酒間の余興として、虐待が行われている。そしてその目的に仕える手段として被害者達の肉体が捧げられているのであり、そこに、より一段と強いマゾ的昂奮が感ぜられる。そこでは、人格は既に否定せらるべきものとして認められていないのである。全くの手段に化し終っている。

カントは、実践原理を追求しつつ、こう命令した。

「汝の人格及び他のあらゆる者の人格における人間性を、常に目的としても取扱ひ、決して手段としてのみ取扱わぬ様に行なせよ」

道德の形而上学の基礎づけ

単に手段として存在するのは「人格」ではない、「物」である。（古代ローマで、奴隷が法律上「物」であったとは、このことを意味するわけだ。）だから、単に手段として人間を取扱った場面に接するとき、常に精神的凌辱を願望し、自己の人格を無視されたいと欲している私達マゾヒストは、望みどおりの事態を見出して昂奮するのである。奴隷妄想、家畜妄想等も、奴隷や家畜が、人間の「手段」たる存在だということから、右の原則の例外でないことが明らかである。

前項の初に提起した私の疑問は、これで一応答えられたことになる。私は、これらの諸例に「手段化」の契機を見出し、それに昂奮していたのだ。

いわゆるマゾヒズム現象から「苦痛」の契機を排除して、狭義のマゾヒズム概念を立てようとするとき、統一的説明を可能にするには色々な行き方がある。「罪の意識即ち贖罪願望」が根本にあることは否定できない。「去勢懲罰願望」の表現形態としての剝奪の諸段階を以て各種のマゾ的空想を分類整理することもできる（地位の剝奪Ⅱ奴隷空想、成人性の剝奪Ⅱ幼児空想、男性の剝奪Ⅱ去勢乃至女化空想、人間性の剝奪Ⅱ畜化空想、生命性の剝奪Ⅱ器物化空想等々）。スクビズム（下部願望）を以てするものもその一つである（これは近々に手帖で扱うからここでは全然省略しておく）。本項ではそういう空想内容を離れて、相手方との関係を眺めた場合について手段化法則について略説して見た次第である。

手段化——あのカントの定言命令に背いた取扱を受けたいと望むもののみが、狭義のマゾヒストの名に値するのである。尚本項に関連して、第九十項「丹夫人の化粧台」においてマゾ効果の性質を考察したところを参照されたい。



大陸暴行列車

—内股烙印38号の女の手記—

△浅草ロツク座公演の軽演劇より▽

本 田 由 郎

私は暗い過去を持った女です。そのために妹が、相愛の仲であった青年との結婚の話も遂に破談になってしまったのです。多くの人達から後指をさされ、たった一人の肉身の妹からも裏切られた私は、一体どんな悪い罪を犯したというのでしょうか。私は何も悪いことをした覚えはありません。ただ終戦当時、満洲の大陸にいたことが、現在の私の運命を生み出したのです。それは今思い出しても身震いのする怖い思い出です。

昭和二十年八月十三日、私は満洲の僻地でソ連の参戦のニュースを知りました。当時の日本の戦力は目に見えて低下し、武器弾薬は使い果し戦いに消耗出来るのは人間だけとな

っていました。無敵関東軍といわれた精鋭もソ連が開戦した時は殆んど南方方面の戦場に転出され、国境線を警備する軍隊は、少量の武器しか持たない老兵ばかりだったのです。

ソ連の強力な銃火の前に脆くも国境線は破られ、ソ連軍は雪崩をうって満洲に進入して来ました。私達は満洲の地に王城築土を築く夢を描いて渡満したのですが、その夢も儚く消えて昨日に変わる今日の姿は敗残者の惨めな恰好となりました。「川の流れと人の世は……」

と申しますが、全くその通りです。日本人である以上、日本の勝利は信じてても日本の敗れることをどうして想像しましょう。私達はモンペ姿に身をやつして僅かの身の廻りの物だ

け持って、命からがら戦火を逃がれて新京に向ったのです。勿論汽車は動かず、どういったら新京に行けるのか皆目わかりませんでした。だが、夢中で鉄道の線路を伝って逃げのびました。途中で幸いに新京まで行くという汽車に乗ることが出来ました。汽車の中は溢れるばかりの人又人で、息も満足につけない程の有様です。でも私達は一条の光明を見出した思いでした。人々の話で、この汽車が新京に向う最後の車だということを知りました。

私達がお互に手を取り合って感激の涙を流している中に「ポーツ」と汽笛を鳴らして汽車が動き出しました。しかし私達の苦しい逃避行もこれでやっと終りをつけたと思ったのも

束の間で、やがてもっと恐しい悪魔が牙をむいて待ち構えていたのです。言語に絶する苦しみは、この汽車に乗った時から始まったのです。

満洲の草原は果しもなく、私達の眼前に広々と拡がって行きます。汽車は時折、汽笛を鳴しながら一路、新京に向って驚進しました。やがて夜となりましたが、空には星一つなく真の闇です。僅かに線路上を照す汽車の前照燈も、夜霧に包まれてぼーっと霞んでいます。私達は今までの疲労と汽車に乗れた安心感で気がゆるみ、ついうとく々と居眠りをしてしまつたのです。それからどの位の時間がたったかわかりませんが突然、「ギーイ」と長く尾を引いて急停車しましたので、私達は急激なショックを受けて前に倒れました。同時に「ダ、ダ、ダ」と耳をつんざく機関銃の音。「パン／＼／＼」と間を置いて小銃の音。私達の汽車が敵襲を受けたのです。味方も直ちに応戦して数十分の間、戦いが演じられましたが間もなく銃声も止まりましたので、私達は「ほっ」と胸を撫で下し安心しましたが、汽車は一向に発車する模様がありません。その中に私達の間に不吉な予感が漂いました。或は汽車が敵の手に分捕られたのではないかと云うことです。しかし不幸にこの予感が本当に当たってしまいました。私達を襲った敵は正規軍でなく、この附近に跳梁する匪賊の一

団だったので。若し正規軍の兵隊だったら私達もこれから行われるような無惨な目に会わずに済んだかも知れないのです。

匪賊の一群は、どや／＼と私達の乗っている車内に入って来ました。青竜刀や小銃等を手に手に持って、服装も或る者は満人服を又或る者は中国の軍服等を着た異様な姿の一群でした。一番最初に私を発見した彼等は、私の手首を力まかせに引っぱりました。私は泣き叫びながら暴れましたが、満人服を着た男は軽々と私を抱えて車外に連れ出しました。汽車に乗っていた若い女は、私同様に無理矢理に引ずり下され車外に連れ去られました。その後で匪賊達は、私達の乗っていた汽車を避難民を満載したまま、爆薬で木っ葉微塵にしていきました。私達若い女の目の前で、同胞の肉体が一瞬の中に一片の肉塊と化してしまつたのです。この鬼畜のような残忍な敵の手に捕えられた私達は、これからどのような運命におかれるのかと、生きた心持がしませんでした。

先ず私達は匪賊の本部らしい所に連れて行かれました。そこから私と、その他四人の女が更に地名さえわからない奥地に連れて行かれました。そしてそこで私達五人の女は、犬小屋のような粗末な堀立小屋を住居として与えられました。私達はその小屋の中で、自分達の呪われた運命を数き合つて、一かたまりとなつて泣き濡れました。こんな私達に情容赦なく、大陸の冷たい風が隙間から吹き込んで来ました。その時、急に外が「ガヤ／＼」と賑やかになったので、私達は或は救助の手が延びて私達を助けに来たのかと期待しながら戸を細目にあけて外をのぞき見ると、焚火を中心にして大勢の匪賊達が酒を飲んでゐるのです。「あつ」と驚いた私達は、落胆の余りその場にくた／＼と膝をついてしまいました。そして酒宴も最高頂に達したと思われ、頃、堀立小屋の戸が荒々しく開け放たれて、髪だらけの顔を真赤にした男が中に入つて来ました。私達はお互に手を固く握り合つて、隅の方で震えているばかりで、どうすることも出来ません。匪賊達は私達を手取り足取りして、小屋の外の焚火のそばに連れて行き、大勢で取り囲みました。中央の焚火に照らされた匪賊達の顔がまるで赤鬼のように見えて私達は地獄で赤鬼に責め苛なまれているようで、恐怖におののいて震えていました。その時、数人の匪賊達が私達に襲いかかり、その場に押えつけてしまいました。しばらくして突然、太股に挟られるような激痛が走り、思わず「ギヤア」と悲鳴を上げ跪こうとしたが、四五人の匪賊達に押えられているので、どうすることも出来ません。余りの激痛に氣を失いそうになった私の鼻に、肌を焼く異臭が臭います。匪賊達は私達の太股に焼印

を押しつけたのです。ようやく手足を離されましたが、下半身は麻痺して立上ることも出来ません。私は恐る恐る太股をのぞき込んで「あっ」と驚きました。太股は痛ましくふくれ上り、肉が外側に弾け返り三十八の数字がくっきりと画かれているのです。こうして私達五人の者は、或は尻に或は下腹部に或は太股にと焼印を押されて女奴隷に、いやそれ以下の家畜にされたのです。しかし私達は、飽くまでも日本軍隊が助けに来て呉れると固く信じていましたが、匪賊達の会話から日本軍がソ連参戦後数日にして、早くも敵の軍門に降ったことを知りました。私達は、このままでは誰も救ってくれる訳ではなく、一生匪賊のために監禁されて玩具になって持て遊ばれるのかと思うと、いても立ってもいられない気持でした。

そして或る日の夜半過ぎ、私達五人の女は手に手を取り合って脱出を試みたのです。しかし不幸にも見廻りの匪賊に発見され、小銃で射撃されました。私達は必死になって逃げましたが、脱出することが出来たのは僅かに私と三十三号の烙印を尻に押された美佐子さんとの二人きりでした。他の三人は小銃弾に傷つき倒れた処を追手のため捕えられてしまったのです。こうして命からがら逃げ出すことに成功した私と美佐子さんは、幸いに新京に向うという開拓団の人々と合流することが

出来ました。この一団と一緒になれたお蔭で二人は無事日本の土を踏むことが出来たのです。この開拓団の中に、私に特別に親切にしてくれる新井という人がいました。そしてこの新井と私は、帰国と同時に結婚しました。両親と妹と、そして愛し合っている新井と幸福な生活に入った私は、近所の人にも羨まれる程の仲の良い夫婦でした。勿論、夫は私の過去のことを承知の上で結婚してくれたのですが、それが思わぬことから平和な家庭が覆えられてしまったのです。

或る日、私が満洲にいた時、隣の家に住んでいた酒井さんという人が、夫の留守に尋ねて来ました。私は何年振りかで会った懐しさに、挨拶だけで帰るといふ酒井さんに、無理に座敷に上って貰いました。そしてお互に色々苦労したことを話し会いました。話の途中で酒井さんが急に真顔になって「貴女は随分と変りましたね」と私の顔をまじ／＼とみつめるのです。

「ええ、そうでしょう。短いようでも、あの頃からは十年も過ぎてしまっているんですから、私も随分おばあさんになったでしょう。」「あの、そんなつもりでは……」

酒井さんは、少し顔を赤らめてあわてました。私は思わず「ホホホ」と笑ってしまいました。酒井さんも照れながら苦笑を洩していました。その中に積る話について時間が経っ

て、やがて燈火をともし頃となりました。「いやどうも、思わず長居をしてしまった、挨拶だけで帰るつもりでしたのに」

酒井さんは失礼を詫びながら立とうとしました。

「そんなことをおっしゃらずに、もう少しゆっくりして下さい。やがて主人も帰る頃ですから、主人と一緒に夕食でも食べて下さい。」

「しかし、それでは余り厚かましいようで」「そんなことはございませぬ、主人は至って気さくな人ですから。では私は夕食の支度をしますから」

私は電灯をつけて台所へ行こうとしました。この時、突然、電灯が消えました。私は嘗ての気やすさから

「酒井さん、マッチを持って居られたら、すみませんが擦って下さいませんか、急に停電してしまったので暗くて足元がわかりませんのよ」

「はい／＼」

酒井さんはマッチを擦って消えないように手で蔽いながら私のそばに近づきました。

しかしこの停電が、私と夫の仲を裂くような大きな原因になろうとは、夢にも思いませんでした。

丁度、酒井さんが私のそばに寄りそった時夫が帰宅しました。大きな家でないので玄関

に立つた夫の目には、奥の部屋にいる私と酒井さんの姿が嫌でも映る筈です。いつもの物静かなおとなしい夫に似合わず、物凄い剣幕で私に喰ってかかりました。私は夫に

「この酒井さんは私の幼な友達で、今日始めて訪ねて来られたのです。先程、急に停電したので私は何も見えなくて困りましたので、酒井さんに御願ひしてマッチを擦って戴いたのです。」

と話しましたが、腹の立つた夫の気を静めることは出来ませんでした。酒井さんは夫に挨拶しましたが、夫はただ「早く帰れ」と云うだけでした。酒井さんは夫の冷い視線に追われながら帰りましたが、その後で私に酒井となにをしていたのだと責め立てるのです。

夫は、私と酒井さんとの間に何かやましい関係があると疑っているのです。私は一生懸命に誤解を解こうとしましたが、それが一層、夫の怒りに油を注ぐ結果となりました。夫は怒りに燃える瞳で私を見詰めていましたが突然、私の帯に手を掛けて解こうとするのです。

「貴方、何をするのです」

私は思わず、あられもない声を上げてしまいました。夫は

「お前は満州で、どこか誰ともわからぬ土民達に肉体を弄ばれた上、太股に焼印まで押された女だ。私達がお前を助けなければ今頃は

あの獣のような男達に日夜責めさいなまれていることだろう。その恩も忘れて俺の留守の間に、昔の色男を家に入れるなんて、お前は淫婦だ」

「いいえ、満州で貴方に受けた恩は一生忘れはしません。貴方、信じて下さい。酒井と私の間は清い仲です。お願いします。信じて下さい。」

「いや、信じるものか、満州で沢山の男と関係したその肉体が、俺一人の男では満足出来なくなっているのだ。さあ、淫婦、仕置をしてやるから裸になれ」

「そ、そんなことを、私を信じて下さい」
私は火鉢の前に座り込んでしまいました。

「この淫婦め」

私は夫に足で蹴られましたので、一とたりもなく倒れてしまいました。その上に夫は馬乗りになって帯を解き始めました。

「許して下さい、許して下さい」

私は帯を解かれまいと抵抗しましたが、所詮はかない努力でした。夫は帯のはしを持って強く引きましたので、私は畳の上をごろごろと転りました。そして長編絆一枚のしどけない姿にされ、扱帯で固く後手に縛られてしまいました。夫はぞーっとするような冷い微笑を浮かべ、

「さあ、ローソク責めにしてやるぞ。満州で烙印を押された時と、どちらが苦しいかよく

味わって見る」

夫はローソクの炎で私の身体をじりじりと焼き、思う通りに責め苛みました。私は悲鳴を上げて悶えましたが、夫は私の苦しむ姿を楽しむかのように責め続けました。そして私は、終いには苦しみの声を上げる元気さえなくなっていました。夫も又、責め疲れたのか火鉢の前に坐り、煙草に火をつけて一服喫いました。その後で私は腰巻一枚で高手小手に縛られ、巾の広い皮バンドで鞭打たれました。夫がビシリビシリと力一杯打つたびに私の肌に赤い縞模様が出来ました。そして私は呻きながら、ごろごろと芋虫のように転げ廻りました。

このような出来事が、小さな町のことなので忽ち町の噂になってしまいました。その後私が外出すると

「あの女の人は満州で匪賊のために、太股に焼印を押されたそうですよ」

「でも、心臓なものですな、私等でしたら恥しくて外へなんか出られませんよ」

私はこんな噂にたまり兼ね、自分の太股の焼印を硫酸で消したのです。しかし、この噂が妹の恋人の両親の耳に入ったので、そんな女の妹などは家の嫁に出来ぬと反対され、結局、妹の縁談は破談となりました。そして妹は、私に恨みの手紙を残して家出しました。

(作並に演出、緑川士朗)



可憐なサド

可憐なマゾ

佐々木ツトム

私は或る場所で「落城」という題の絵巻を

くまでも作者の想像して画いたものだろうと
解釈していたのです。

見たことがあります。燃え盛る城を背景にし
て池の畔や築山の蔭で、切腹したり或はお互
に差違えたりしている無惨画で、素人の作品
でした。その中で、兄弟か或は親友かも知れ
ませんが、二人の若い武士が血に染った顔を
にっこりと微笑しながら、お互に差し違えて
いる場面がありました。その横には「快絶！
男子の本懐！」という文字が印してありまし
た。二人の武士の顔には若悶の表情は微塵も
なく、かえってエクスタシーの表情が浮んで
居ります。私はこの画を見て、随分出鱈目な
画だなあと思いました。お互に刃をぐさりと
背中まで突き抜かれているのに、このうっと
りとした表情はどうでしょう。果してこんな
馬鹿なことがあり得るでしょうか。これは飽

処がその後、私は本当のマゾヒズムを知っ
たので、実際にこの様なことが起り得ること
を認めざるを得ませんでした。真のマゾは、
肉体上の苦痛がそのまま快感に変わってしまう
のだそうです。ピシッピシッと激しく鞭打た
れて痛い筈の女が、少しも痛がらずにもっと
もっととせがむのは、精神的な面だけでなく
肉体的にも非常に快感があるのです。

話は少し逸れますが、私は鞭を使うサドや
マゾには大して心を引かれません。況して縄
で縛ったり、刃物を使って血を流したりする
ようなことには一層理解が持てません。私の
サドやマゾは極く初歩で、もっと可憐で微笑
ましいものがよいのです。

横光利一の作品に『セレナード』というの
がありますが、私はこの小説ではじめて微笑
ましいサジスチックなものを覚えました。登
場人物は二人で許嫁の間柄です。遠慮のない
極く親しい友人や恋人同志でも、時々喧嘩
をするものですが、それにしてもこの二人は
寄ると触ると喧嘩ばかりしています。作品は
殆んど会話から成立っていますが、一寸紹介
して見ますと

「昨日は失礼致しました」

「なあに？」

「何だか失礼なことをしたように思うのです
が……」

「まあ厭な方」

「いや確に」

「でも昨日はお逢いしませんでしたわ」

「処が私は貴女の夢を見たのです」

「どんな夢？」

「甚だ失礼な夢でして」

「おっしやいよ」

「貴女にとっては憂うつそのもののような夢なんです」

「厭ねえ」

「だから失礼なことをしたようで」

こんな風な会話で、二人共笑ってしまいました。そして次のように発展して行くのです。

又、籠の中の小鳥を見ていた女が

「寒いのかしら、震えているわ」

と云うと、男は素直にあいづちをうたずに

「それは何んの暗示です？」

等と云うのです。相手は美しすぎる程の女です。男というものは誰でも美女を虐めたいらしいのです。

「可愛いいわね」

と女が云うと

「センチメンタルだ」

と男がまぜかえします。

「いやよ、そんなこと、云うものじやなくてよ」

「幸福そうですね、この小鳥は」

「本当にね」

「お気に召しましたか」

「ええ可愛いいわね。本当に幸福そうだわ、見ていて気持ちが晴れ／＼するわ。幸福そうなものって何時見てもいいものね。私、小鳥を飼おうかしら」

「犬を飼いなさい、それから、猿も飼いなさい」

「そんなことをしちや喧嘩ばかり見ていなくちやならないわ」

「いや、そうするといいいんですよ。喧嘩ばかり見せられると、喧嘩をすると云うことが非常に下品なくだらないことのように見えて来るんですよ。あんまり幸福そうなものばかり見て居られると、現在が非常につまらなく見えて来るのです。あなたが現在のことがつまらなくなってくると、第一に損をするのが、この僕なんですからね。して見るとこの小鳥は敵だ」

ハ中略

「じゃ私、猿を買いたしうか」

「冗談ですよ」

「私、猿に貴方の鼻を引っかかしてやりたいのよ、一度でいいわ」

「これは驚いた」

「貴方が余り美しいと私いやになるの」

「そう、それは有難い、つまり心配になるというのでしよう」

「ええ心配だわ、うるさいわ」

「それで猿に僕の鼻を」

「一度でいいのよ、二度引っかかすと私、貴方を見るのがいやになるわ」

「じゃ猿でなくなつていいわけですね、僕の鼻を引っかかるなら貴女に引っかかる方がいいですね」

「いやよ、私が引っかいたら、一生恨まれるわ」

こんな他愛もない会話から、だん／＼争いに発展して行くのです。

作者は二人の争いについて、こう書いています。

実際、町子は和解を求めに常に梶(男の名)の傍へ行ったのでよかった。それに逢つて見ると待つていたものは争いだった。何故か、町子は梶を愛していた。彼女も梶が自分を愛していることを二年も前から知っていた。それに二人は逢うと、飲むべき薬のように飲んだ薬は争いであつた。しかし争いは確に二人にとっては薬であつた。一見、争いは毒薬でもある。しかし若しも二人の間にこの可憐な毒薬がないならば、恐らく二人は平和であつたに違いない。しかし平和は必ずしも幸福であらう筈はない。無風の平和には死に近づいた倦怠が潜んでいる。争いは必ずしも不幸でないのにきまつている。若し二人が聡明であつたならば、二度と同じ種類の争いはしないであらう。彼等の間の争いは絶えず質を変え

進化し乍ら続けられるに違いない。新鮮な平和を抱いて、何時までも微笑と共に続けられるであろう、それは夜と昼とのようにリズムをうって来る満千の潮のように……。見るがいい、この平凡きわまる真理を体得しているかの如く町子は梶を追って駆けて行くではないか。

「梶さん」

「もう貴女になんか用はない」

町子は梶の手を持って

「貴方、謝りなさい」

「なぜ僕が謝るのです」

「謝りなさいよ、貴方が悪いのよ」

「貴女が先に僕に謝ったら僕も謝りますよ」

「私が貴方に謝る必要がないわ（中略）」

「馬鹿らしいことは、もういい加減にしておいて呉れ給え」

「謝りなさいよ、謝りなさいよ、さあここへ手をついて」

町子は無理に梶の手を芝生の上につけた。

「さあ早く、私が悪うございました。以後決してあのようなことは致しません」っておっしゃいよ」

梶は犬のように這わされ乍ら

「君も云い給え、一緒に云わなきや嫌だね」

「私は嫌よ、私は」

「じゃ僕も止めだ」

梶は立上ろうとした。

この作品は結末もなく終わっています。

私はこの二人が若し結婚したら、どんな風になるだろうかと空想しました。この二人の争いは恋人時代から許嫁時代になるに従い、変って来るのは当然なことです。それはこんな風になるのではないでしょう。

愛する彼女は、愛する彼に仲直りの美味を味わせたいために、先ず云いがかりをつけるようになる。一寸した難癖によって喧嘩を吹きかける。男はそれに対して或は笑い或は弁明する。しかし男のこういう弁明的な態度を見ている中に、女は本当に怒り出してしまふ。愛する男女の間にとりかわされる不用意な言葉は、しば／＼とんでもない方向につつまることが多いものです。

「いくら何だって……」

「だって君がそう云ったんじゃないか」

どこまでが冗談でどこまでが本当なのか區別がつかなくなつて来ます。本当は互に結ばれようと願っているのです。こんな時の喧嘩は実に異様です。そしていくつもの型があるようです。照れ臭いから一層争いの激しくなつていく型。結ばれ乍らも未だ口だけは深刻にやっている型。悪かったと謝る型等です。こんな時、二人の体力が余り違いすぎていると面白くないのです。女性の方が男性より少し体力が強く大柄なのがうまく行きます。次

は大女の魅力について記したいと存じます。

戦争中のユーモア小説で林二九太作の「のみの夫婦」がありました。これは他愛のない軽い作品で、さしてサジスチックな処があるわけではありませんが、それでも私の好みを満足させてくれました。

男は養子の上に妻の父の会社に務めていまして、精神的に妻に頭が上らない上に彼自身、体重十三貫五百という小男に反比例して妻の方は十七貫八百という大女なので、肉体的にも常に威圧を感じています。この細君はお姫様育ちなので我儘な処がありますが、亭主をこの上なく愛しています。しかし多分に無知な処があり、どう見ても教養等は感じられません。近所で「のみの夫婦」と云われるのがつらくて夫婦で一緒に散歩の出来ないのをかこっています。どうにかして瘡せたい瘡せたいと色々苦心し、ラジオ体操でも毎日やったら運動になつて少しでも瘡せるかも知れないと始めますが、我儘ですので自分一人でやらないで必ず夫を起して一緒に毎日欠かさずに実行します。そればかりではなく食事も減食します。しかし夫婦は一心同体とあってこれも亭主にまでお相伴させる処等は、どう考えても変てこですが、それにも拘らず細君は益々肥る一方だし夫は瘡せる一方です。

小説はユーモア物だから可笑しく滑稽に書いてありますが、結末はなんだと思わせる程

他愛のないものでしたが、同じ頃読んだ『大下宇陀児』の作品で大女と小男を扱った探偵小説は深刻なものでした。看護婦と患者の愛慾なのですが告白の形式の小説で、その中の一節に、

お村はとても執念深い女でした。私はお村以外の女を知りませんけれど、女というものは誰だってあんな具合のものでしょうか？私と同棲するようになってからも相変らずM派出所看護婦会から派出所看護婦として出ていたので、時々家を明けることがあったのです。時には三、四日帰ってこないことがありました。こんな時の私は、のんびりした気分がゆっくり休めました。しかしお村が帰ってくると又、一時も私を離しませんでした。真昼であろうと真夜中であろうと、そんなことにお構いなしです。お村が二日も家にいると私はへとへとにされました。私はお村のこの濃厚な愛情を腹の底から憎むようになりました。お村もこの事は薄々気附いていたようです。

少年の頃読んだものですから、一体どんな風にされるのか皆目判らず、色々空想を逞しうしたものです。

これに似た作品で同じ大下宇陀児の探偵小説『星四郎懺悔録』というのがあり、これも執念深い女を持て余して殺害した男の話です

が、この様な作品は少年の私にマゾヒスティックな気持を抱かせました。男は誰でも少年期には自分の理想の女性の像を胸の中に描きます。そしてその女性と愛し合い生活を共にするばかりでなく、更に冒瀆をその人の上に加えるという夢を描きます。その女性は現実には兄嫁である場合もありましょう、或は街で会った他家の人妻であることもあります。又全然モデルのない空想上の女である場合もあります。只一つきまっていますのは自分より年上であるということです。私の研究した処によると、更にその女性は大概であるということとです。そこでは純潔とか処女性とかは余り問題になりません。色々なことを知っていて、うわべは優しそうだが、心の底には意地悪で残忍な性質を持っている女——これが理想の女性だと少年の頃は虫の良い考えを抱きました。だから男を知らない大人しい女では困るのです。邪しまな自分の慾望を通すような女、それは前に述べた『のみの夫婦』のような細君です。我儘で自分の思うままに振舞うので、大人しい亭主も遂には腹を立てて力ツとなって、何時も威張っている細君の頬べたを張り飛ばします。殴られた細君は元より親からさえ手を上げられたことのない女だから、憤怒の形相で亭主に向かって行きます。そして二人の間には激しい大立廻りが始まる。私はそれがどんな風に展開するだろうか等と

空想するのが好きでした。

大女と小男の斗争シーンを始めて読んだのは、林房雄の『一文銭殺人事件』でした。これは今は廃刊になった『妖奇』という雑誌に連載された探偵スリラー小説で、随分滅茶苦茶な作品でしたが、その中に丘乙大という支那人(男)が、半鐘というニックネームのあるおしやべり女(これは大女)と猛烈な喧嘩をします。組んずはぐれつの大格闘となり、近所の者は男女相撲を見物するために弁当を持って駆けつけて来る。喧嘩は小一時間も続いて二人は完全にのびてしまったのです。

このように大女の魅力は、斗争相手を圧倒する力にあるのですが、その他に母性的な魅力があることです。それについて素晴らしい作品が『リベラル』に載っていました。確か貴司山治作の『地底の聖母』という作品だったと思います。男は軍人で女は慰安婦という処に倒錯的な微笑まじさが感じられました。女は天草の出身で二十七才、色は白く体重十九貫です。彼女の理想は三万円(当時の)の金を貯めて、故郷に帰って家を新築すること、その他は何んの私心もない極めて無邪気な人のよい大女です。男を包み込んでしまった見事な恰幅の描写を見て、私は小兎と乳牛の戯れを空想してしまいました。斗争相手としての大女は私達、マゾ心理を充分満足させて呉れます。

製^{せい}絲^し工^{こう}女^{じょ}

木 口 房 代

一

十一月三日、文化の日。工場では定例の慰安運動会が催された。

運動会はずっと以前から、繰繰倉庫組、煮繭揚返組、仕上検査事務所組と三つに別れて優勝旗を取合う仕組になっていて、各組は今日に備えて前から秘策を練っていた。事務所組は人数は多くないが、学校を出た人の多いことで、実力競投で点をかせいで、これまでの優勝回数が一番多かった。今年も優勝を噂されていた。それにもかかわらず、新入の私が、百米、二百米、走巾跳、走高跳と四種目

に出場して、全部記録を更新する好成績で優勝して、予定をすっかりひっくり返してしまつた。繰繰倉庫組の総帥、若主人から「お前のバネは全く素晴らしい。努力次第では国際選手にさえなれる」と賞められた。そのあとで「真剣に仕込んでやるが、やって見る気はないか」と聞かれた。「やってみます」と私は即座に承知した。

練習は翌日から始つた。初めは怪しいトレーニングであつたが、日を重ねるごとにむづかしい動作をやらされた。足を交互に前に蹴上げて軽く両方の手でサット止める。上体を前に曲げて掌を地面につける。背を反らして両

手を後ろ向きのまま地につける。これは若主人が背を抱いていて下さるが、一番難儀であつた。背へかけている手で早く上体を起して下さればいいが、さもないければ自分では起き上れない。長くなれば眩暈がして倒れそうになる。身体が柔らかくなると、跳躍が不思議に軽くなる。秋から冬に入る頃、私の記録はかなり良くなつていた。

冬に入ると繭の乾燥場で練習がつづけられた。乾燥場は一万貫、二万貫、時によれば三万貫位の繭を拡げることが出来て、運動場のように広い。寒さは何といつても外とは違ふからしのぎよかつたが、走っても、跳んでも

反動が強くて疲れがひどかった。疲れて練習を怠けて度々叱られることがあった。

三月、運動場から雪が姿を消すと、早々外へ出た。

四月になると県の保険組合の慰安運動会がS市で開催されると発表された。この時から練習が一層激しくなった。

製絲に入って一年、私達はお姉様達のように成績で給料が決まるようになった。努力次第で、どのような給料も貰えるわけである。実力給になってから、私は一度も中以下にならなかった。教婦のお姉様から「木口さん」「房代さん」と言われて、目をつけて頂くことが出来た。それであるのに、その日はどうしたものか、頭がぼおうつとしていた。そのせいであろうか、デニールを外してしまつた。繰絲の罰でこれが一番重い。今繰いている絲は二十一中という太さで、上下二デニール差までが上、次の二デニール差が下、それ以上を越えると等外で罰点にされる。私はその日、十本繰いて四本も等外の罰点を出した。一本繰いても大勢の前で、誰々さん罰点と読み上げられた。一度に四本も繰いた私である。私の絲は赤紙をつけられて、全部別扱いに廻された。私はその日、お姉様から仕事ですんでから残りなさいと申渡された。恐かつたが「若主人が運動場で待っていないさるの、行かなければならない」ことを告げた。

お姉様は不機嫌そうに「練習がすんだらいらつしやい」と言つて、許して下さらなかつた。

私は、私の失敗を弁解すると言うのではないが、製絲の仕事を理解して頂くために、製絲という仕事の説明がしてみたい。私は製絲の中の繰絲という作業をしている。繰絲というのは、華氏の百六十度から百七十度の湯の中へ一日中手を入れて、繭の緒口を引き出し、棒によって巻き取られている本絲に補充する作業である。二十一中といへば、大体七粒の繭の太さである。それを六緒、都合四十二粒の繭を操るのである。参考に、絲の太さ一デニールというのは、四百五十米の長さの絲の目方が、〇・〇五グラムあつた時のことである。生絲がいかにか細いということがお分りになります。製品になつた生絲は強靱であるが、製絲の鍋の中にある生絲はあまりにも細すぎて弱い。よく切れる。切れて繭が落ちれば、間髪を入れずに補充しなければならぬ。繭の始めから終りまでの絲の長さは六百米から七百米で、その間に平均で半分位、百粒の中五十粒位が切れて本絲から脱落する。言い換えると四百米から四百五十米繰り上げられる毎に、一回補充しなくてはならない。四十二粒宛繰り上げられているとすれば、十米繰り上げられる毎に一回宛補充することになる。この絲を繰り上げる棒が一分間

に二百二十回程廻っている。棒の周囲が二尺ある。〇・七米だから一分間に百五十米繰り上げられている。常時一分間に十五回補充する必要にせまられることになる。一分間に湯加減を行いながら、百六、七十度の湯の中で操作しながら、十五回、しかもどれに補充するか判別しながら行う操作は、決して容易な事ではない。機械には休みがない。私は疲れていて、大きな間違いを犯していたのである。

運動の練習を終えて、重い心に鞭打つて、工場の敷居を跨いだ。机の前に私がかりの教婦、太田草子お姉様、右側に隣りの教婦、井上典子お姉様が居られる。

「分っていますね」

草子お姉様がじろりと私の身体を、上から下まで見廻してから、氣味の悪いほど落付いた口調で仰言る。

「はい」

消えて終いたい様な氣持で返事をする。

「分っていますね」

もう一度念を押して、私の側へ寄つてきて垂れている私の両手をとつて、肩から直角になるところまで上げて、上下に重ねられた。

「これはあなたの絲です」

手にのせられた十かせの絲は、二百匁足らずの軽いものだが、肩の線に上げて捧げているということは、苦しいことであることが、

時がたつと共に深刻に分ってくる。私は十分位で少し疲れを覚えた。二十分でもう耐えられないと思つたが、懸命の努力で三十分になるまで堪えていた。その時両手を上げていた疲れと、耐えていなければならぬという精神的な疲れで、私の手は最後の精根がつきて、肩からだらりと私の意志に反して下つて終つた。一度下つた手は、私がどんなにあせろようと、二度ともう私の力では肩の線へ上らなかつた。「何です。断りなしに手を下げたりして」

尻を梓差しの檣棒でいやっというほど叩かれた。二度目の檣棒が空で唸つた時、私は無意識に尻をひいていた。それだけ腹が不自然に前へ突き出ていた。お姉様はその格好に興味を感じたらしい。檣棒を典子お姉様に渡すと、

「今お腹をうんと突き出したでしょう。もう一度やってごらん」

とお仰言つて、私の上体に右手をかけてぐつと後ろに反らせた。この程度のことは、若主人のトレーニングで毎日行っているのので、私にはさして苦痛ではない。私は思わずほつとした。お姉様はほんの一瞬のその表情をも見逃がさず。

「あなたは今ほつとしたようね。でも泣くのはこれからよ」

と意地悪をお仰言つて、私の出張つたお腹

の上へ絲をおのせになつた。私はこの姿勢で絲をまた支えていなければならぬ。いつか自分に意識していかないのに、涙がとめどもなく頬に垂れていた。

「何で泣くことがあるの」

お姉様は叱る度に私のお尻を打つた。容赦のない檣棒が私を跳び上らせた。頭のしんが空になって、あたりが霞んで、今にも倒れようとするところで、

「明日からはよく注意してね。今日はこれにかんにんして貰つて」

という典子お姉様のお詫びで、やっとなんとももらえた。

二

今日は県の保健組合の慰安運動会である。

風こそ少しあるが、秋の空はよく晴れていて、絶好の運動会日和である。

私は百米と、走高跳、走巾跳に出場することになっている。百米が早い番組なので、運動場に入つて、直ぐ仕度にかかった。若主人がスパルタを足にしっかり揉みこんで下さつた。足が宙に浮くように軽くなった。予選、第二次、それから最後の決勝まで一着で押し切つて終つた。一種目に優勝すると、後の二種目が不思議に勝てるように思えた。怪しい気持で、ほんとうに楽な気持で、跳躍の二種目を優勝して終つた。

最後の走高跳に優勝して、褒美を一抱え、かかえて控室に帰ると、主人がニコニコ顔で迎えて下さつた。若主人もうれしそうな顔で握手して下さつた。

「木口、出かしたぞ。お前のお蔭でうちが優勝出来るかも知れない」

二人の顔は喜びそのものようであつた。幸いに私の工場が優勝した。若主人につれられて、私は優勝旗を貰いに行った。その夜の祝賀会で、私は生れて初めての胴上げをされた。いい気持であつた。

翌日、主人がわざわざ工場へやつて来て「御馳走をするから、仕事が終わったら私の部屋においで」

と言つて下さつた。作業服を外着に更えて出かけた。

「やあ、昨日は御苦労さんだった。ほんとうにうれしかった。今日は心ばかりの御祝をしようと思つてね」

主人は気軽に言つてから、老眼鏡を外して机の上の整理をされた。それから受話器を取つて自動車を呼ばれた。「自動車で連れて行って下さる」私の胸はわくわくしていた。昨日スタートラインに立った時よりずっと動悸が高くなつていた。主人に聞えはしないかと恥かしくなるほど。

「君、先にお乗り」

自動車が玄関についた時、主人が叮嚀に言

って下さった。

ハイヤーの振動は、バスの揺れ方とは全くちがう。トンと跳ねると、次の瞬間には腰掛の中へ身が沈んでゆく。

料亭は工場と反対の町外れの、山の麓にあった。番頭がもみ手をして出て来て、主人と私の下駄を受取って、下駄箱に入れて錠を下した。主人の下駄はともかく、私の下駄は桐が張ってあるだけで、こんな綺麗な料亭には不釣合の代物で、叮嚀にされて恥かしい。

玄関から廊下が一直線に見えている。手入れが行届いていて、顔がうつるほど磨き上げられている。あやふくころぶところであつた。主人はスリッパで上手に歩いてゆく。

先きに部屋に入った主人は、とっとと下座に着いて終った。私がぼんやり立っているの

「何を躊躇しているんだ。うちの英雄じゃないか」

と言って、床の方に坐らされた。

「私は酒を飲むから、君は何でも好きなものをほつぽつ食べていなさい」

主人は私に断ると、ひとり酒を飲み出した。いつかいい気嫌で、私に杯を差し乍ら

「君も一ぱいつき合わないか」

「一ぱい注いで呉れ」

と言ったりされた。私も二、三杯飲んでみた。顔がポーツと温くなって、心がうきうきして来た。

「呉服屋さんが参りました」

女中について呉服屋が銘仙のいい着物を一

重ね持って入って来た。呉服屋が帰ると、主人は着物を左手にかけて、柄を私に見せ乍ら

「ほう。見つくるって大急ぎで縫わしたんだが、これは案外良さそうだ。君にあげる」

と言って下さった。

「ほんと」



この時こそ、ほんとうにうれしきで胸の動悸が破れそうになった。

「気に入ったようだね。気に入ったら、その代りと言つては何だが、着た姿が見たくなつたよ。ここで着て見れないかね」

主人が満足そうに私の方を見た。

「はい」

「着更えは寒い。一、二杯酒を飲んで温つてからにしろ」

杯をさされて、三杯つづけさまに酒を飲んだ。身体がかつかつとして、顔が燃えるように熱い。着物を脱ぐことが、ほんとうに気軽になった。

「いい身体だ。綺麗な足だ。全く素晴らしい足だ。そんなだから走れるのだな。着物も着物だが、その立派な身体を包んでしまうことは惜しい。もう少しそのまま私に見させておくれ」

「綺麗な足だ。ほんとうに綺麗な足だ。アメリカの何とやという女優が、脚に百万ドルの保険をかけたというのだが、君の足のようなんだらうな。あんたの足にも保険をかけなければいかん」

賞められるうれしさに、私は主人の手招きに応じて、そのまま傍へ寄って行った。そしてさされるままにまた酒を三杯飲んで終つた。眩いがして自分から主人の膝にくず折れてしまった。

それからのことは何も夢のようだった。

三

生憎今日は雨で、練習は乾燥場である。

若主人の練習は一年を通じて、乾燥の忙しい間を抜いて、雨が降っても休みがない。庭の練習が室内に変わるだけである。それなのに昨日一日、断りなしに黙って主人のお伴をして終つたので、今日は早速、そのことに触れられた。私は若主人も大切だが、主人の方が尚大切だと思つていた。昨日のことを悪いこととは思つていない。

「御主人に言われて御伴をしました」

素直にほんとうのことを話した。

「ほかッ」

いやと言うほど、いきなり頬を打れた。鏡がないから分らないが、指の跡がついていたのではないかと思うほどはげしかった。私は思わず

「あッ」

と言つて頬を押えた。若主人は頬に上げた私の手を邪慳に払うと、逆に捻じて後ろに持つていった。私は抗つてはいけな思つてそのまま握られていた手を預けていた。一方の手も逆にとられて、背中中で合せて縛られてしまった。とても緊くて、直ぐにも痺れそうである。そつと若主人の目を見る。気味の悪いほど据つてゐる。私は何故かなく悪感を覚

えた。縄尻をとられて、乾燥機の方へ誘導された。乾燥機の台の上に立たされ、手を広げ足を開いて、乾燥機の鉄骨に身動きの出来ないように縛られて終つた。

「ほか。ほか」

若主人は、私のお尻を叩くほどに泣いていた。私は叩かれる度に痛さが全身にビーンときて、頭が空っぽになるような気がした。

これだけでは許してもらえなかった。

尻叩きが終ると、両手を縛つた縄の先を環に直して、二階から下つてゐるチェンブロックの鉤にかけられた。チェンブロックは一石一斗の藁を入れた袋を、十本宛二階にあげる機械である。私の身体の如き、私の抵抗のとき、問題にはならない。私の身体は静かに、若主人の意の儘に吊り上つてゆく。「ああ、ああ」「うう、うう」ロープを握つてゐる若主人を目の下に見下すころ、私は軽い吐気を覚え、更に意識が朦朧としてきた。二階について、吊りから解放されても立ち上る力がなかった。

「どうだ。こたえたか」

私にはもう意識というか、気力というか、すっかり抜けてしまつていた。

「ひどく参つたようだ。いい気味だ」

若主人の尻尻が吊り上つてゐる。射すくめられるような視線にあつて、殺されるのではないか。そんな戦慄が背筋を走つた。

私は三度目、手と足をトロッコの両端の押手に拵げて縛られた。今度は目隠しまでされた。

「ガラガラッ」

トロッコは頭を先に走っているかと思うと、今度は足を先にして走っていた。レールの上を走っているといっても、何も見えない不安は、どこかに突当るようで恐くてならない。神経だけがだんだん鋭くなってきて、身体から抜け出しそうになる。

正気にかえった時、私は藁袋をきせられて首だけ出して、袋ごと吊るされていた。背伸びをすると、足がやっと床についた。

「ばか、ばか」

若主人はまだ泣いていた。泣き乍らバーの折れで私を叩く。布袋の中で、足こそ少しは使えるが、身体全体の動ける範囲が決まっている。バーを除けることが出来ない。柱に縛られて自由のきかない方が、かえってあきらめがついて、辛抱が仕易い。それと、袋の外からで、私の身体が見えないために、見定めて打つというのではないから、骨の上を叩かれる。これが特別痛い。じいんとこたえて身体中にひびく。

「かんにんして」

何でこんなひどい目に遇わなければならぬいか分らなかったが、精根つきで、わけも分らず、一心にあやまった。若主人は縄をとく

と、さっさと足どり荒く工場を出て行った。まだ怒っているのだろう。後姿を見送っていて、立つことも、口をきくことも出来ない。

倒れたまま、身動きもしたくない。疲れ果てていた。日が暮れて、乾燥場は真暗になっていく。私のうめく声が陰に籠って、無気味に自分の耳にかえってくる。ひどい目に遇っていた時より、一人でいるという不安におびえている。何をされようと今は全く非力である。夜が深くなるほど、広い乾燥場の中は静まりかえってゆく。吐く息さえひびきになるように思えて来る。何度も立って見ようと試みる。何度目かにやっと立つことだけは出来るようになったが、関節がだるくて、その上疼きを喚び起して、一足も歩けない。暗闇の中で、冴えてゆく神経に怯えていた。

家では私がこんな辛い目をみていることなど知らないでいるだろう。お母さんや、お父さんは私の苦心してもらったお金を、どんな風に使っているかしら。お父さんはまた酒を飲んで、お母さんをいじめてはいはしないだろうか。お母さんはお隣りの大工さんと遊ぶかしら。お母さんはお隣りの大工さんと遊びに行ったりしてはいはしないだろうか。弟は破れた服を新しい服に更えてもらっただろうか。か。私くらい不幸な者はない。考えている中に若主人の据った、憑かれたような目が著れてきた。優しい言葉をかけてもらえないといっても、これと言って思い出すほどひどい目

にあわされたのは、今日を除いて、一回だつてない。むしろ、同じくらいの成績だと思えるのに、一緒に入った人達の中では一番沢山いつも給料を貰っている。若主人の手心に違いない。工女は給料が目当である。私を愛して下さる。今日のは嫉妬かしら。それにしても嫌われているとは思えない。主人にお父様に御馳走になったことが何故そんなに悪いことなのかしら。去年入ったばかりの工女が、工場で一番えらい人の言うことをきくのがそんなに悪いわけではない。給料、着物、工女はそれだけが目当なもの。

私はいつか疲れて眠って終ったらしい。

「こんなところで何してんのよ」

絹代お姉様に起されたのは、九時の消燈時間過ぎてからである。消燈の点呼になって、私がいないので、お姉様は黙って外出したと思つて、門衛を調べられたそうである。外出してないことが分つて、文代お姉様と二人で、工場中を探して下さったのだそうである。

「まあ、冷めたい身体！」

文代お姉様は、私を起そうとして思わず声を出した。

「いったいどうしたというの？」

「身体、何ともない？」

二人は懐中電燈で照しながら、私をのぞき

こむ。

「ありがとう。もうだいじょうぶ」

のぞかれて恥しくてならない。いそいで立ち上ろうとしたが、腕の附根、足の関節の疼きが強すぎて、又坐ってしまう。二人が肩を貸して下さった。

「まあ、どんなことされたの」

部屋の明るい光りの中に曝されて、乱れた姿が今更恥しくなる。

「言ってごらん」

「言って悪いこと？」

親切な二人のお姉様に、昨日主人に御馳走されたことから、今日若主人にされたことを話した。

「ひどいわ」

「ひどいわ」

初めの頃は確かに同情されていた。それがだんだん合槌が少くなったと知っている間に、冷めたい眼に交って私を射すくめているのだった。悪いことを言ったに違いない。

翌日工場を休んだ。身体が痛くて、絲を

繰くような細かい仕事が出来ないのだ。午後若主人が葡萄酒を持って見舞に来て、昨日は自分も少しどうかしていた、手荒なことをして済まなかった、と言って下さった。

四



主人は、その後も時々料亭へ誘って下さった。よく着物を下さった。主人の御伴をした翌日は、必ず若主人に責められた。ハイヒールの靴をもらった翌日である。この頃は寒いので、乾燥場が練習場になっていた。私が入ってゆくと

「ほか」

といきなり頬をなぐりつけられた。いじめられる。私はそう直感したが逃げなかった。「裸になれ」

パンツとブラジャーだけになるのは、もう毎日のことである。言われて脱ぐのと、自分

から脱ぐのと違うだけである。打たれたこと、上吊った声で「ばか」と言われたのが、何かしら不安なだけである。この頃では度が重って、意志とは別に、身体が待っていて、素直に裸になっている。

「ここへ仰向きに寝ろ」

繭袋の上に言われたように寝る。

「うん」

若主人は両手首を揃えて竹の真中に縛りつけた。何をされても抵抗をしない。右足を開いて竹の一方の端に縛った。左足をぐんと開いて反対の端に縛りつけようとする。跳躍の練習で私の股は大きく開くようになってはいるが、開くだけ開かされて、縛られて終うと、股がさけてしまうかと思うほど痛い。私を抱いてゆっくり俯向きにする。尻が上って、顔が床にくっつく。横を向かなければ鼻が押しつけられる。横を向けば手が抜けそうなほど痛んでくる。手が肩からもぎとられそうになる。背が時とともに痛んでくる。

「じっとしているんだ」

ポケットから蠟燭を出した。三十匁はあるという太いものである。火をつけて背中の上に立てる。動けと言われても動けば蠟燭が倒れるので、苦しくてもじっとしているより外ない。無理な格好というものは、永く続けられるものではない。身体中から脂汗が滲み出てくる。

「苦しいか」熱い蠟涙が新しいところに広がってゆく。返事どころではない。口を喰いしぼって「むう」と耐えているのが精一ぱい。

「熱い」

必死に苦しむと若主人は許して呉れる。この間の呼吸を多少は心得てきた。と言つてこれだけで全部が許して貰えるわけではない。第一の責めがすむと、第二の責めが始まる。

股を少し開かせて膝で立たされた、足首と膝を開かせて竹に縛られた。第一の準備をおえると、身体をうしろに反らせた。股が閉じないし、若主人が手を副えているから、どれだけ反つても横に倒れることはない。私の腹の皮が伸び切つて痛むだけである。若主人は左手で腹を押えて、右手で脚の前方から髪をひっぱって、私の頭が股の先きに出るまで、少しの間も手を緩めない。じわじわと絶えず力を入れてくる。髪をひっぱられる痛さに、私は少し宛、その力に従つてゆく。やがて頭が脚の先へ出た時、両手で脚をかかえさした。そのまま両手と足を一方宛縛られた。アクロバットである。顔は普通に下を向いているが、脚と腹の皮は最大限に伸びきっている。長い竹が足の二個所で横倒れを支えているので、転びも出来ない。

「苦しい」

私はうめくさえやつとである。

若主人は、気持よさそうに煙草を吸つてい

る。私は間もなく気を失つて終つた。

若主人は次々に新しいことを考える。

私の鼻へ鑲を通した。意識が朦朧としていたせいか痛みを感じない中に、金の鑲が鼻の下に垂れていた。後手にされて、鼻鑲で天井に吊り上げられた。爪先が少し床についているだけである。またたく間にふくらはぎが痺れてくる。立とう、立つていようと思う意識の下から力が抜けて、鼻に重みがかかってくる。息さえ塞ぎてくる。

私は責められる度に、二回から三回気を失う。今日も二回気を失つてしまった。

私は若主人にこのようひどい責めを受けている中に、何とはなし、若主人の息吹きを近くに感じて、それをいつか自分の血の中に感じたりして、苦しみもだえ乍ら、全然別な血の騒ぎを感じたりしていた。それでほんとうは決して悪い気がしないというより、愉しいのであった。それに比べて、一番辛いのは、同僚が口をきいて呉れないで、寮にひとりぼっちの生活を余儀なくさせられることだった。

この頃では私は乾燥場で倒れていても、一人で帰らねばならなかった。

鼻の障子に穴が開いている。私は耐えられない屈辱にしおしおと部屋に入った。

「お帰り」

もう久しくきいた言葉ではない。「何かあ

「私はそう思って部屋へ入った。私は用心
しいしい、うまい具合にみんなの真中に坐ら
されていた。」

「猫は飼われている家のものには、どんなに
されても抵抗しないものよ。そうだねえ」

私を猫だという。腹が立ったが大勢に一人
で敵いそうにない。うしろに廻った絹代お姉
様に、両手をうしろ手に捻じ上げられてしま
った。更に首輪をされて、鈴をさえつけられ
た。

「猫はこうすると喜ぶものよ」

文代お姉様があごの下に手を入れてくすぐ
った。もがくと鈴がなる。これ程の屈辱はな
い。若主人は身体をせめさいなんだが、精神
的な屈辱は決して与えない。屈辱ほどひどい
仕打はない。それを私は今受けている。私に
はそれをどうする力も持ち合せていないの
だ。

「あきらめのいい猫ね」

絹代お姉様に肩を払えられた。お姉様は二
十三、私は十六、その私は疲れている。力が
違う。気の遠くなるほど部屋中のものにくす
ぐられた。それがすむと、後手はそのまま
で、坐らされて、膝を二カ所叮嚀に縛られ
た。

「起き上りこぼしよ」

また部屋中の人達にさんざん突きころばさ
れて弄られている。起き上らなければ髪を持
って引起される。膝と手を縛られていて、や
つとのことで起き上れば力一ぱい突きころば
される。私は声こそ出さないが、口惜し涙が
流れてきた。

「親子を手玉にとる鬼でも涙をこぼす」

手玉にとっているのは主人親子である。私
は二人の手玉である。絹代お姉様はほんとう
にひどいことを言う。

討してみよう。

製作会社 りやんこの弥太郎 お雪

大 都	阿 部 九 州 男	佐 久 間 妙 子
マキノ	沢 村 国 太 郎	月 澄 江 子
新 東 宝	鶴 田 浩 二	岸 恵 子
東 映	片 岡 千 恵 蔵	高 千 穂 ひ づ る
大 映	市 川 雷 蔵	浦 路 洋 子

先ず大都映画では（これはサイレント時代

「こんな涙ではうつらないわ」

文代お姉様もほんとうにひどい。
私は涙のあとへ墨をくろくろと塗られた。
墨を塗られた真墨い顔で、長い廊下を渡っ
て洗面所へ行くつらさ。

墨を流した時、私はさっぱりした顔を鏡に
合せて、

「私のスポーツは工場一、今に県一番。あんな
達がどんなに意地悪をしようと、木口房代
は日本でのジャンパーになって、あんな達を
見返してあげる。きつとなつてみせる。」
そう心に誓ってニッコリした。

—— 完 ——

× × × × × × × ×

の作品である）旅立つ弥太郎がお雪の家へ
最後の別れを告げに行くが、生憎お雪は留
守であった。残念そうに田舎道を立去る弥
太郎の淋しげな後姿をカメラは夕陽の沈む
山々を背景に追う（こゝで弁士の説明が入
る）——居ないのも道理、その頃お雪は大
八宅の土蔵の中で柱に縛りつけられ、その
上、口を覆う猿ぐつわの憂目——こゝで丁

〔緊縛映画雑感〕

再映画化作品について

(その一)

阿部 秀

度場面が変り、薄暗い土蔵の中で口には豆絞りの手拭で猿ぐつわをされ、ぐったり俯向いてお雪の横顔のアップ、序々にカメラが離れ荒縄で後手に縛られた手首が見える。と、扉が開きローソクを手に入って来る大八、その音で思わず顔をあげるお雪、またカメラが序々に近づき、大八とお雪の胸から上だけが写る。こゝで

——器量のよい女と云うものは泣いた時も笑った時も美しいが、こうして物云ぬ花の時の美しさは又、格別なものだな——との弁士の説明が入り、お定りの口説きのシーンが展開されるが、急を知って駆けつけた弥太郎に救われる。

マキノ映画では、お雪がだまされ大八宅へ連れて行かれたとの報に接し、助け出さんと大八宅玄関に訪れる弥太郎、その頃、奥の間の一間では大八の前に座らせ、無理に酒の酌をさせられているお雪、そこへ子分の一人が弥太郎が来たことを知らせに飛んで来る。「飛んで火に入る夏の虫だ」

と刀を手に立上った大八は、「弥太郎さん」と叫び乍ら逃げ出そうとするお雪を子分達の方へ突き飛ばして「ふん縛っておけ」と云い残して去る。倒れたお雪が起き上がろうとするのを、子分の一人が細引で後手に縛り上げる。縛られ乍らも必死になって逃げようとするのを押えつけて、今一人の子分が懷中から取り出した白布で猿ぐつわをかける。

やくざ者が豆絞りでなしに白布の猿ぐつわをするなど、ちよつと不自然な気がしたのを今でも覚えている。しかしこの二つの映画が共に緊縛感としてはA級だったので、終戦後昭和二十七年十月三十日、新東宝にて再映画化され、ましてお雪は岸恵子なので封切を待ち兼ねて見にいったが、このお雪は病氣ば

われてしまう。私は高千穂のフアンだけに本当にがっかりしてしまった。

そして再び二年後、今度は大映の弥太郎笠予告篇にそれらしいシーンもなく、前の二つの失望が大きかったので、それ程期待せずに見にいった処、案に相違して可憐な浦路洋子の縛りシーンがあった。

大八に拐わかれたお雪は、後手猿ぐつわのまゝ子分達に山道を引立てられる。呼吸をするたびに猿ぐつわの手拭の鼻孔の辺りが、ヒク／＼と息がはずんでいるのがよくわかった。そして自分を助けに来た弥太郎が子分達と戦っている間、義母お牧(矢島ひろ子)に押さえつけられ乍らも必死に蹴く。アップが一度もないので採点はB級とする。(以上)

かりしていて縛りシーンは全然なく失望した。越えて昭和三十年六月十四日、今度は東映で再映画化、封切られたので、縛りの東映のことだから、どんな素晴らしい緊縛シーンがあるかと期待していったのであるが、たゞ、やくざ者に横抱きにされ拐わかれそうになっただけで千恵蔵に救

△私の告白▽

恋する夫人への手紙 (三)

麻 生 和 夫

時は春でございます。厳しい冬の寒さも消え去り百花爛漫と咲き乱れる季節でございます。華麗な牡丹、桜の花等と共に先生のお肥りになった、お身体が、その美しさを競う季節でございます。鳥はさえずり、人は陽気に浮かれ、世をあげて平和を謳歌する春、四月でございます。先生も普通なればお教えになっただけのお花のお弟子さん達と花を賞でて散策される頃でございますが、ひとり先生は、こうして、お身体を縛られて自由を奪われて立ちつくしている。花は満開で美しい花びらがチラホラと風にさそわれて散りそめていきます。それを眺められる先生のお心は如何でございますでしょうか。この結構なお庭、置石、立派なお邸、これはまぎれもなく先生のお住居でございます。この御立派な思い出も多いおすまいの庭に先生は今、浅間しくも後手に縛しめられたお身体に春のうらかな陽ざしをあびて泉水の中に立たせられているのでございます。水の面には先生の肥つたお身体が逆さに、まるで、おのき震える先生のお心をそのままあらわす様にユラユラとさざなみにゆれ動いているので

ございます。先生のお肩へ悲しみの乳房へ黒髪へ、桜の花びらがハラハラとふりかかって生温い春風は、先生の素肌の隅々をスウィットとからかう様に撫でてゆくことでございます。

私はこうして、同好の趣味を持っている人々を招待して、私の所有物である先生のお身体を鑑賞して貰うために出品した光景でございます。先生に対する屈辱をより一層高め、私好みの風流味を満足させるためにあえて、豪荘な先生の元のお邸を使い日も四月七日の先生のお誕生日と花の盛りの季節を選んだのでございます。そのつもりで御覧下さるようお願い申し上げます。

先生は、この図では身に一糸もまとわぬお姿でございます。せめて先生ともあろうお方にはパンティか、さもなくばストリップのつける様なバタフライの一つでもお許ししたならば、どれ程先生に感謝されることでございます。又それだけでも十分先生は羞恥に耐えられぬ思いでございます。敢えて私が先生にそれを許さないのは、あまりにも先生がお美しいからでございます。同好の人々に私の所有物たる先生のお身体の素晴らしさを誇りたいからで

ございます。勿論、それまでは徒らに先生を丸裸に放置して、先生のお気持ちを裸に馴れさせることを避ける為に、いろいろの御用物を許し、この日も皆さんの前で、先生の御愛用の和装美から一枚一枚はぎとって行って、高価な着物に包まれた美しいお身体を最後の布の一片迄はぎとったのでございます。会員の中には先生と同性の方もおられますし、野卑な男性も混っております。その彼等の目の前でだんだんと剥玉子の様に剥れてゆく先生のお心を十分勘定に入れつつ、ゆっくりとむいてゆくのでございます。

先生の乳房がこの様に偉大な張り切った乳房であられることを願ひ、お肌は毎日毎日の手入れに全くの珠の肌と申しましょうか、年令は廿幾才になられても、お肌の輝きは二十代の女性の如く肌荒れ一つないことを夢みるのでございます。中年肥りに肥満されていると申しまして、同じ町内のT未亡人の様に色の黒い下品な、しまりのない肥り方やK夫人の様な背が低く横巾のみ広く、まるでうみ月の様なつき出したお腹の持主では、私は矢張り夢を託することは出来ません。先生はしまりのある健康的な肥満体で、白い肌に丸いお腹も大きくはっていることはあっても、あくまでふくらと肉づきよく、この様に二重にくびれてはいても、あまりつき出しておられない御様子がより嬉しいのでございます。しかし乳房とおしりは偉大な程、私の喜びは大きく、こうした夢が現実に望めるのは、先生をおいて他にはございません。

先生のふくよかな二の腕に巻かれた荒縄は、蛇の如く二重に喰い込んで豊かな胸へと、わざと双つの乳房をさけて大きく廻して先生のお腰に両手首を後手にきつちりと組合わせてギリギリと縛りつけているのでございます。荒々しい縄と先生の柔肌との対照がとても素晴らしく、私は先生の重々しくたれる両乳房を手で押し上げて、まるで荷物でも荷造りする様な気軽な気持で、端唄でも口ずさみながら必要以上にグイグイと締めつけて緊縛することとございます。

後手に縛りつけられた先生のお身体、それはもはや如何ともしがたい逃れられぬ絶対絶命の形でございます。先生は如何にお悶えになろうとも私達の眼からさけることは出来ないのです。顔も丸いお腹もどこもかしこも暖かくすることが出来ず両手は後で組合わされたまま、いたずらに空を掴んでいるに過ぎないのでございます。身も世もなくなった先生は、私の眼をさけ私の手から少しでも遠ざかりたくて懸命に身をよじり逃れようとなさいますが、それは、美しい眺めに一層の魅力を加えるはかない努力に過ぎないのでございます。

緊縛も唯後手に縛って眺めるだけでも面白いとは思いますが、私は美しい肌の先生にいろいろな姿勢をとらせてそれぞれ縄や紐、あるいは扱帯で細引で乳房がひょうたんの様にくびれたりむっちりとかふくれたお腹へギユツと喰込ませ、その縄が先生の肥ったお身体へ糸の様に細く食入るのをうっとり、眺めるのでございます。

この他に先生の太いお首に古縄をまきつけたり、油や埃にズタズタになったボロぎれでもアクセサリーとして、まきつけるのも生きた見事な玩具としての先生のお身体を飾り楽しむ為でございます。この絵では先生の柔肌が少しでも多く皆の前で鑑賞される様にと、わざと縄も少な目にいたしました。先生、身に喰いこむ縄に自由を奪われた悲しさは如何な味わいでございましょうか。

先生のお身体をいろいろと飾るアクセサリーは私のくせで後から後からゴタゴタとつけましたが、どれもこれも先生の心をより悲しませるものを選んだのでございます。まず月並な猿ぐつわでございますが、本来の声を出せぬ様にと目的も勿論重大でございますが（助けを求めるというより、苦痛を訴え許しを乞うのを聞きながら、いじめるのも、又乙なことと思うのでございますが、その声も声にならぬという不自由さを……）先生のお心を無茶苦茶に粉碎するという凌辱感を高めるために矢張り手拭等よりも私の常用してお



ります。越中輝を先生のお口へ丸めて押込み口の中が布の部分で充満するまでほほばって頂くのでございます。

先生の豊かな頬を紐の部分でギュッと強く締めつけて絶対に吐き出せない様に縛るのでございます。輝の汚い布が先生の唾液でしめされて何ともいえない臭気が口一ぱいにひろがり先生の口の中の水分をすつかり吸い取ってカラカラに乾かしてしまふことでございますよ。

う。

首には犬の首輪を、先生の二重にくびれた顎の下に猫の鈴をぶら下げましょう。先生が憤怒にもだえ、苦痛に身体をよじて引き廻される度に、首輪が首にしまりチリチロと鈴が可愛らしく鳴り響くことでございます。鈴の音が高くなつてゆくのは先生の苦痛と屈辱の増進してゆくしるしでございます。

先生はこうして浅間しい姿と変つてゆく御自分の姿を如何に思召してございましょう。まるで犬や猫の様に扱われる身のどこまでも本心は畜生になれぬ悲しさ、普通の婦人以上の教養をおつけになった理性が、この様なけだものの姿におちた地獄の苦しみを耐え人格をお捨てになり辱しめを忍び、裸の玩具たる運命をあきらめるのには大きな障碍となることでございます。されば先生の両眼（とても見開いておれぬ情なさになりと閉ざしたままでございましょうが）からとめどもなくポロポロと熱い涙がしたたり落ちて頬をしめつける猿へ描きました先生の涙はこうした先生の理性と逆境にはんろうされる怒りと苦しみの結晶でございます。

先生、こうなればなまじ人間の心をいつまでも抱いて、悲しむことをお止めなさいませ。図の如くけだもの扱いをされる先生は心も畜生にお成りになつては如何でございますか。

飼いなされた犬の如く、主人である私の前へ這いつくばって肥満した偉大なおしりをおふりになり、私の命ずるがままに芸をし、私の親しい仲間達に媚をお見せになって身体をすりよせられたら、先生はその大きなおしりへうける鞭は二度の処を一度にされてすまされるでございましょう。そうです、先生はもう人間ではないのでございませう、飼いなされたけだものでございませう。新しい家畜の一種なのでございませう。家畜は所有者の財産でございませう。先生の見事なお身体を何に使用しようが、どう扱おうが主人たる私の自由でございませう。私達は先生の様な美しい方々を、新しい家畜として飼育するグループをつくり、各々自分の手に入れた家畜を自分の好みの姿に馴致して十分鑑賞して頂くためにこうして紹介するの でございませう。つまり私が飼育し出品するけだものは他でもない私にとって大恩ある先生なのでございませう。

人権の侵害、今、日本各地でこの問題が大きく叫ばれておりますが、先生も苦しまぎれにそれを云われても、人権の侵害とは人に対してその自由を束縛し権利を侵すこととございませう。人間でないけだもの、家畜がいくら人権の侵害だと叫んでも、お笑い草にしかすぎませう。口のきける面白い家畜だと益々重宝がられるのが関の山でございませう。そこで私達は遠慮会釈なしに先生に数々の試みを施し柔肌を楽しむことが出来るのでございませう。

そのために私は先生の真白のけがれを知らぬ珠の肌へ家畜としてのしるしである刺青をチクリチクリと施したのでございませう。その場所を私は先生のふくらしたお腹に選んだのでございませう。先生の大きく張った腹の中央に深く凹んだお臍のまわり。指でつついても抓ってもはね返す様な弾力性に富むお腹は絶好の刺青の場所でもあります、又、日本的な女性にとっては致命的な絶好の刺青のひきたつ場所とございませう。BUTA、音はぶたでございまして日本という豚という家畜と解されるでございませうが、所謂豚の如く肥満され

た先生とはいえ、その美しさ、高雅さはとてもあの汚らしい醜いけだものと一緒にすることは出来ないでございませう。新しい品種のぶたと申し上げるより豚即ちPIGでなくBUTAである処に私の夢、自己満足を見出すのでございませう。私が奇ク二月号に発表を致しました通り私のイメージと白人崇拜の観念を結びつけました処の家畜市場に於いて取引される人間家畜がBUTAでございませう。唯今奇ク誌上に私の夢をそのままに無限に展開して戴いている沼正三先生の『家畜人ヤブー』を読まれると合点のゆくことでございませうが、日本語が人語として通用しない国に於ける日本産の新しい家畜の名が『BUTA』でございませう。『家畜人ヤブー』に於けるアシックの語の如く日本語がそのままこの国の名詞になったもので所謂『PIG』と同じ様な否それ以下の家畜『BUTA』なのでございませう。この『BUTA』によせる夢想は又改めて機会があれば、お話し致しますが、先生は松宮家の奥様でも松宮先生でもなく一びきのけだもの『BUTANO一二三号』なのでございませう。申す迄もなく家畜は人間の欲望を満足させるために飼われて一本の毛、一滴の血に至るまですべてのものを提供し利用されるもの程価値が大きいのでございませうが、さしづめ先生はそれのかけふくといひ利用価値といい、あらゆる家畜以上に貴重なものであり、無限の価値をもつ家畜界の女王の存在でございませう。

先生、先生のお眼は固くとざされても、頭脳は悲しみに混乱していても、私が先生のふくらとしたお尻に揮う惨酷な鞭や、不気味な毛虫の様な視線や、お腹に刻みこむ刺青の針の入念な痛みは先生のとがった神経をどの様に刺激するでございませう。私の口から家畜とされる宣言をどの様な恐怖のおののきで聞かれることとございませうか。

先生の巾の広いなだらかな背に負わされている鞭は牛や馬の尻をひっぱたく代物と何の変りもございませうし家畜たる先生のお尻を

ひっぱたいて訓練を行い又鞭打ちという同好の人達の遊戯に先生の肉づきのよい肌の上に、或は強く或は弱くピシリピシリと喰い込んで快適な音をたてた鞭でございます。先生の珠の肌の温さ甘さを十分味ったその鞭を私は先生の両腕を組合わせて縛った後手の縄にさしこんで意地悪く先生に鞭を背負わせた形をとらせて征服者として自由自在に先生を虐げる主人として好ましい風景として眺めるのでございます。先生にしてみれば残虐あくことなきサジスト達の目の前にさらされた上に自らの肉体を責めさいなんだ皮鞭を背負って、丁度『さあ、この鞭で妾の丸く並んだ二つの尻を、白い太ももをお腹を、どこでもお好きな処をお打ち下さい』と示している様な形で珠の肌を覆いかくす両腕は後で縛られ、許しを乞う声は猿ぐつわにかまされた私の汚いふんどしに吸い取られてうめくばかりでございます。

あの日の夕方、チラと拝見した湯上りの先生のお肌。特にお見事な盛上りとたくましさで私の心を捉えた先生の豊満なお尻に思う存分この皮鞭を揮う、その恍惚たる夢想の桃源境——。ああ、何という素晴らしい嗜虐感でございますか。

先生が毎日、毎夜、ゆったりとお寛ろぎになられていた結構なお座敷では、百花咲き乱れる庭園の美に加えて、どの花も及ばぬ生きるものの美麗さに輝く、先生のお身体を賞でての酒宴がたけなわでございます。その人達の何十という視線は先生の苦しげに波うつお身体を隅々まで觀賞し、酒盃はこの又とない眺めを肴にしらずしらずに重なり、酔が座席に満ち溢れば客人達はそれぞれ好みの方法により、又廊下に並べられた数々の恐ろしい巧妙な責道具を手に手に、私の自慢げに出品した先生の生ける裸像に数々の苦痛と凌辱を余す処なく注ぐのでございます。針は先生の豊かに垂れた乳房をつらぬき、ローソクの炎は先生の鳥肌だったうぶ毛をシリシリと焦がして、春とはいえ水の中に立たされた先生の冷えきった肌を温め廻

ることでございましょう。鞭は間断なく肌に派手な音を立て、猿ぐつわの下で唯けだもののようにうめかれる先生のお声と合奏し、鳥の羽根は肥満した先生の身体をくすぐり、荒縄は先生の肌に締まって、牡丹の花の散る様に心は無惨にズタズタにひきさかれてゆくことでございましょう。

先生はこのお庭の一本の木、一個の石にも、懐しい思い出があまりのことでございましょう。私は世にもまれなる私の嗜好にマッチする先生のお身体を私一人で楽しむことはあまりにも勿体なく、サジストの一人として同好の人達にお裾分けするため、こうして沢山の男女の方々に、見事なる出品物を賞でて頂き、味わって貰うことにより又一層の喜びを抱くのでございます。この御立派な先生のお邸の中で先生はあられもない御姿で人間では到底なし得ぬ浅ましい数々の動作をくりひろげるのでございます。哀れな一個の畜体と化した先生をつつき廻し追いついてお庭を四つ這いに這わせお座敷に逆さに飾り、肥っていられる上に自由を奪われた先生のむき出しのおしりを鞭で叩いて急がせたり、ひっぱり廻したりして、家畜としての数々の芸を多数の客に御披露するのでございます。先生は私の手の鞭に恐れ、到底想像だに出来ぬ筈のあられもない姿勢で女性として忍ぶに忍びがたい屈辱を御健康とは申せ限界のある身心のつづく限りおうけになられるのでございます。色々な薬品や器具が先生の柔肌にどういう作用をするか、くどくどと申し述べると際限のない話でございますので省略致しますが、宜敷く御推察を頂きたいと思っております。まだまだその他にも面白い方法や趣向もございします。数いるその道の達人が先生のお身体にどの様な折檻を与えてくれるか、どの様な実験をされるか、いうにいい得ぬ妙味を限りなくお味いになって頂けることでございましょう。

先生、本心、恋しくてたまらない魅力を感じるといふ先生に、私が抱いているこの最大のあこがれをお分りになって頂き得たことで

ございました。私がどの様な希望をもって先生のお身体を求め先生のお心を頂戴したいか、よくお分りのことと存じ上げます。拙文ゆえに十分には私の意思を通じることが出来ず、先生の美しさを形容することが出来ないのを遺憾と思うのですが、私がこれ程、先生の被虐のお姿を狂気の如く追い求めるのも先生があまりにも美しく、気品高くいらっしやるが故でございます。そして私の宿命的な欲望が先生の様な御婦人を求めてやまなかったからでございます。私としては愛すればこそ、全き愛をこうした形で表現せざるを得ないということを悲しむものでございます。先生の汚れなき雪の肌を愛し、気高い高嶺の花なればこそ、先生のお心を完全に手打って自分の掌の中で、その美しさを賞でたい、私のものとしたいのでございます。決して「可愛さ余って憎さが百倍」とか「叶わぬ恋の意趣ばらし」というような浅慮から出たものではございません。私の普通人と一風変った欲望は先生が苦しみ悶えられる程更

甲斐仁参案 四馬孝画

『涙のダイヤモンド』

略号
(なみ)

大中判印画紙焼付 二枚一組 三百円

胃の洗滌

彼等に手取り足取りされた娘は真白い肉体を梯子の上に仰向けに固定され、両腕は後手に梯子の下で縛られ、両足首はそれぞれ梯子の棧に縛りつけられた……ゴム管の端についた漏斗からは、幾杯もの水が次々と注ぎ込まれ、胃が水で一杯になるとゴム管を引き出し、梯子を逆さ

に立てて水を吐かされる苦しき……

ヒマシ油責

マダムは娘の手足を奇妙な椅子に縛りつけさせた。尻当てのない骨ばかりの罪の椅子に全裸のまままで坐らせられた娘は……
△詳細解説は本誌七月号及八月号に掲載してあります。▽

一層先生の美しさを感じ、先生の被虐の苦しみが増せば増す程、私の喜びは大きく、先生の羞恥に反比例して私の昂奮は高まってゆくのでございます。

先生、如何でございましたでしょうか、先生の近くに住む一人の男が先生のお身体に寄せる想いを赤裸々に綴った、この手紙を読まれている御感想は。先生、人間の心が虚飾をなぐりすてて思いつめ出来ない複雑なものでございます。先生、私の思いつめた、この告白をお寄せすることをお許し下さい。先生がどういう風に御指摘になられようと、今後も尚続けて先生の立派なお身体をぬすみ見てこの様な怪しからぬ光景を想定して先生のお身体、お心を徹底的に凌辱し、蹂躪することをお許し下さい。すべては夢でございます。何という甘美な夢でございましょうか。中年になられた先生の御肥満したお身体に寄せる私の想いをせめてこの数々の方法の中一つなりとも叶えて頂くことが出来たとしたら、僅か数十年のはかなくしぼんでゆく人生をどの様に華やかに彩ってくれることとございましょう。又先生もあたら恵まれた美しいお肌と柔かく肥えたられたお身体を唯虚栄と粉飾の衣の下で隠ぺいして滅ぼすこともなく、もって生れた全く自然の麗わしき神のつくり給うた赤裸々な生命に還元して極楽の境地に生の意義を見出される程の喜びをお味わいになるのではございませうか。言葉のいい廻しは下手でございますが、これは必ずしも自分勝手な享楽に酔うた独善的な解釈とばかりは、いい得ないのではないかと信じつつ筆をおくものでございます。何卒、この無礼きわまりなき一人の男の夢のような空想をお怒りなさいませうように……。

不肖 豚児 拜

此の世の中で最も恋しき

松宮先生さま

(本篇の前半は本誌八月号を御覧下さい)



アブ・モード・オール・スクラップ

矢 桐 重 八

私は「モモ切り魔」だった

これは、おそろべき悪夢にとりつかれ、十数件のモモ切りを犯した二十七才の青年、高尾悟の告白である。

しびれる興奮

去る五月二十九日夜八時四分、立川行の南武線が武蔵小杉駅を発車して間もなく、私は異様な興奮に燃えて、左側ドアの近くに立っていた若い美しい女性のスカートを三纏、二纏と二カ所、軽使用カミソリで切りました。

実は、スカートを切ったのは、このお嬢さんで七人目だったので。若い女性を見ていると、衝動的に興奮して、悪いとはしりながらも、つい切ってしまう自分を、私は一種の病気だと思っています。治さなければならぬ。だが、あのころ私の病気はもう自分の意志だけでは治らないほど進行していたのです。

八人目のお嬢さんは、後から聞いたのですが、神奈川県川崎市中原区一七〇事務員三橋みどり（二四）さんという方でした。三橋さんのスカートを、例のようにつまみあげたとき、三橋さんはすでに気がついていたらしい。それでも私は「切る」衝動を押えることができませんでした。私はしびれ

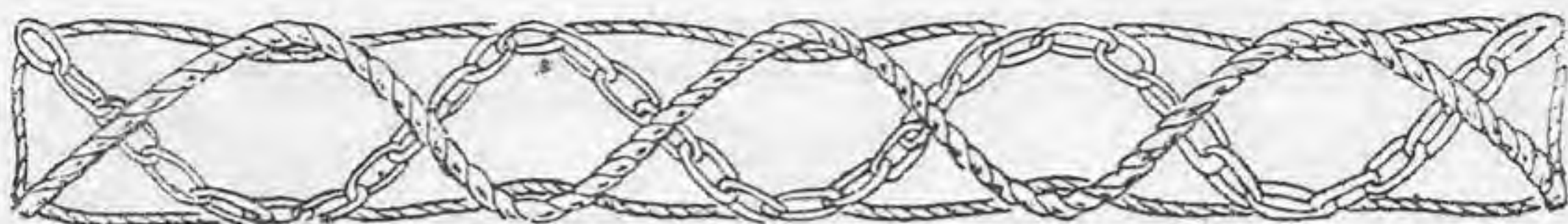
るような興奮のうちに彼女のスカートを二カ所切りました。音もなく切れるカミソリの切れ味。一度切ると、私はもう完全に自分を押えることができなくなっていました。何が何だか自分でもわからなくなるのです。電車がつぎの武蔵中原駅へ着いたとき、私はポケットのカミソリの刃の冷たい感触を楽しみながら、次の女性を求めて隣の車輛へと移ったのです。このとき、三橋さんは私の後にそっとついてきていたのだそうですが、興奮した私はむしろ気づきませんでした。これが、私の秘かな楽しみの終りをつげる時だったのです。

とりつかれて

車内であちこちと物色したすえに私は後部で押されている工員風の女性に眼をつけました。これも後から知ったことですが、その人は川崎市中原区四二九の工員宇田芳子（二〇）さんでした。私はなんの躊躇もなく彼女の背後に迫ると、白いレインコートを五纏、四纏、三纏と三カ所切ってしまうしました。

続いて隣りに立っていた同七八二の店員中谷久子さん（二〇）のレインコートとスカートを切ってしまったのです。

その時の自分の気持を、いまそのまま思い出すことはできません。あるいは切っているときは冷静そのものだったよう



な気がしますし、雲の中を歩いていったような気がします。

やがて電車は宿河原へ着きました。私の降りる駅なので、ムンムンする電車を降り、冷たい風に吹かれたとき、私はハッと気づき、駅を出るや暗がりにかミソリを捨てました。そのくせ刃が小さな固い音をたててどこへ落ちた瞬間、私は、再びスカートを連想していました。

自分の部屋ではひとり暮し。そのままフトンをかぶって寝ながらも、今日切った女性のスカートやレインコートの布が眼の前にヒラヒラ揺れて、バラ色の興奮にとりまかれてしまうのです。

捕われてホツと

次の朝七後半、私はいつものように出勤のため宿河原駅のへ向いました。ところが出札口を入ろうとしたとき、私は二人の男の人に呼び止められたのです。そばに一人の若い女性が立っていました。彼女は私の顔をみつめて二人の男にうなづきました。私はまだ何のことかわかりませんでした。ところが、とたんに私の腕には細い鉄の環がはめられたのです。私は逮捕されたのです。でもそのとき私はなぜかホツとしている自分を発見しました。これで何もかもすんだのだ。スカートを切る時の異様な興奮は、何とも表現できないところよいものですが、永い間には、その興奮はやはり深い疲労として私の中に残っていたのちがいないのです。二人の刑事と一しょに来ていた女性は八人目の三橋さんその人だったのです。

相手にされぬ男

私は昭和四年、神戸市長田区駒ヶ林町一の九二番地に生まれました。六人兄弟の五番目。姉が一人、兄が二人、弟が一人。前までは父が船員をしていて、どうにか生活も送っていました。

だが、あまり恵まれた家庭とはいえませんでした。船員だけに父が家へ帰ってくるのはたまで、帰ってきててもよく母と喧嘩して、家庭は暗くなりがちでした。今の私のどちらかというと陰気な性格は、その頃から知らない間に養われていたものと思われまふ。

戦後、戦災で神戸の家も焼かれたので、私たちは一家をあげて、郷里鹿兒島県指宿市指宿町十二町三九四二へ移りました。そこでいつの間にか船員を止めた父と一しょに百姓をして案外気楽な生活が続きまふ。

ところが、昭和二十五年三月十五日、突然父が死亡して、行き場のなくなつた私たちは再び神戸へ舞いもどり、私は今年の一月まで人夫をして働きまふ。母も内職をして私たちは貧しい生活ぶりだったのです。

そのころ、私は女性がほしくなりました。ところが皮肉なことになれもかえりみてくれません。自分ではボクサーのレオ・エスピノサに似た精かん顔だと思つたこともありまふが、女の子は一向によりつかず、こつちが積極的に出てもたいていは逃げてしまふのです。こんな女性に対するにくしみが、そのころからいつかしらぬまに自分の内部につちかわれていったのだらうとおもいまふ。

気がつかない女

その後、私は栗原工業という会社に電機工見習として入社することができました。そして、五月十一日、東京都港区浜松町二の二大門ビル内にある東京支店へ転勤を命ぜられ、川崎市宿河原一五九九の二の社寮へ移つたのです。

小さいときから家族といつも一しょに暮らして、二十七歳になる今日まで一人で生活したことのない私は、東京へ移転していくらか不安はあつたものの、これで自由になつたとい



う気持の方が強かったのです。

上京した翌十二日、私は早速社内の子をからかってみました。ところがその子は手ひどく私をはねつけました。これで私はすっかり自信を喪失すると同時に、女というものが何となく憎らしくなってしまったのです。

その日、会社からの帰り、南武線の混んでいるのを利用して、矢向駅と鹿島田駅の間で、はじめて女の子のスカートを切ったのです。カミソリは、国電浜松町駅の近くで買いました。その瞬間の背すじを走るような快感は今も忘れることができます。二十七歳になる今日まで、あの時ほどの全身を駆けめぐる快よいしびれを感じたことはありません。女の子は何も知らない。口を開けたスカートをつけたまま、私の目の前に立っている。

やりやすい相手

それから私は、ほとんど毎日のように南武線、あるいは東横線まで遠征しスカートを切るようになったのです。中には切りとった布を自分のポケットにしのばせておいたものもあります。私はそれを取りだしては戦利品だと一人ほくそえんだものです。私はもっぱら、若くて派手な女性をねらいました。彼女らにはどこかスキがあります。スキのある女性を切るほど私の快感が強まるのです。

こうして、私は自分で知らない間にスカート切りの常習犯になっていたのです。最初は一度で止めようと思ったのに……だが一度やると、私はつかれたように第二第三の犯行を何の疑問もなく犯していったのです。そして前にも書いたように一種の病人になってしまったのです。

だけど、私はやはり宿河原駅でつかまったとき、ホッとしていた自分を今まざまざと思い出します。私は疲れていたん

です。自分に疲れていたんです。キザない方ですが、あの薄いカミソリ刃さえじっさいの自分にはもう重くて仕方がなかったのだらうと思います。十九日間に十人の女を切る。今は考えだけでもゾッとするほど恐ろしいのです。皆さんに迷惑をかけて、ただただ申し訳なく思っているのが今のいつわらぬ心情です。

(「週刊アサヒ芸能」6月23日号)

(矢桐註)

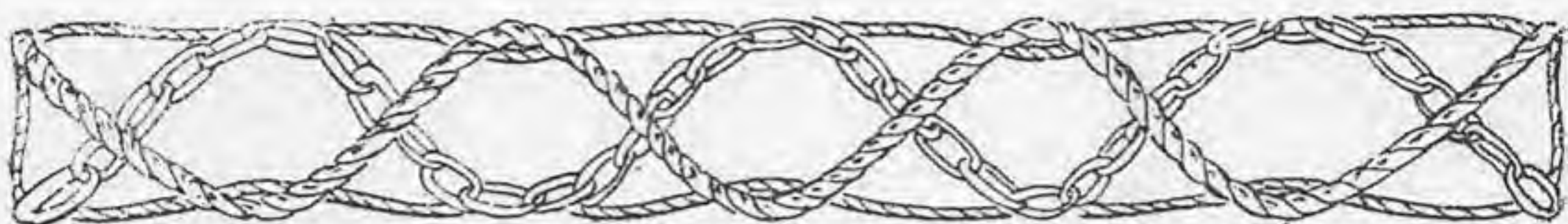
春から、夏にかけて、毎年新聞の社会面をいろいろ「モモ切り魔」の告白記事を、週刊誌各誌がとりあげているが、その中でも、この記事は、なかなか真実性があるので取りあげてみた。

もちろん、編集者の筆もはいつていることだろうが、当人でなければわかり得ぬ実感があるので、貴重だと思った。終りのほうの、「私は疲れていたんです。自分に疲れていたんです。キザない方ですが、あの薄いカミソリ刃さえ、じっさい、自分にはもう重くて仕方がなかったのだらうと思います。」などは、文学的でさえある。つまり「人間」が、わりによく表現されているので、単なる「変質者」ときめつけられない、社会的な問題もふくまれているような気がするのである。

演出された倒錯の魅力

和製シスター・ボーイのシャンソン歌手丸山明宏が日劇に初登場した。白のレース付ブラウスに、黒のトレアドル・パンツといういでたちである。

髪はヘップバーンまがいのザンギリ。マユを引き、目ばりをキュッと入れて、ルーシユの口紅までしている。どこから



見ても、まず女の姿だ。彼が歌い出すと、客席から「ピー」と口笛が鳴る。

低い、割合に落着いた声。舞台からの彼の視線にまともにぶつつかると、たいがいの女性観客は目を伏せてしまう。「得体の知れない、性の錯覚からくる魅力」のトリコになるのだそう。

それかあらぬか、彼の周囲にはいつも二百人からのガール・フレンドが取りまわっている。女性ばかりではない、作家の三島由紀夫や安岡章太郎も「その不思議な魅力」に大いに関心を持ったとある。

丸山明宏はまだ二十一歳の青年。最近までは毎夜、銀座の喫茶店で好きなジャンソンを歌っていたが、日劇進出を機に七月三日は日比谷公会堂ではじめてのリサイタルを開く。ブームに乗って、まさに順風、帆をはらむ——といった勢いである。

が、目玉の大きいこの青年の希望は大きく「このくらいでは、まだまだ満足できない」ようだ。

話す言葉や動作にはミジンも女性的なところはない。テキパキした態度である。

奇抜な名物男

生れは長崎市本石灰町、五年前の三月、中学を出ると、彼は単身上京した。父は骨とう品屋で、九段の暁星高校に通わせるつもりだったが、彼は考えるところがあって、国立音楽学校の高校部に入学してしまった。

幼年時代から音楽の好きだった彼は、フランス映画のフアンで、「望郷」を見て感激、そのバック・ミュージックの素晴らしさにうたれた。つまり「なんとしても音楽で身を立たい」という希望はすでにこのころから芽生えていたわけ。

音楽学校では、オペラを本格的に学ぼうと思った。が、折から来日中の本場オペラ歌手ヘレン・トラウベルの歌を聞いて方向転換した。

「あれだけのポリュームは、とても日本人には無理だ」と思ったのと、映画「望郷」の甘い旋律が頭にこびりついて離れなかったのにも理由があったらしい。

彼はそこで「ジャンソン歌手でいこう」と初めて決心したのである。

真赤なシャツを着たり、女みtainな薄化粧をする奇妙な彼の生活はこうしてはじまった。その理由は二つ。まず学校そのものに失望した。自分が本や何かで知っていることのムシ返しを教えているだけではないか……。そこで彼は学校生活の六年間を、自分を社会に持って行く踏台として、有意義に送ろうと考えた。それには「人と違った目立ったことをしよう」としたのだ。

トイレに行くとき、きまって婦人専用を用いたのもこのころである。たちまち学校周辺の名物男になったが、学校当局からは「好ましくない」という理由で退学処分を申し渡された。入学してちょうど一年目の春である。これを長崎で伝えた。入学して、怒って送金を断ってきた。それなら——というので彼は新宿、渋谷、銀座とボーイで渡り歩いた。不思議に彼がいるときの店は繁栄して、やめるとその店はいがいツブれたという。収入は下宿代を払って、やっと自分一人が食える程度。その中から譜面代をねん出して、新しいジャンソンを覚えることは、並大抵の苦勞でなかったそう。

人生は損得づく

ジャンソン歌手として、彼がクローズ・アップされ出したのは、昨年の暮ごろからである。早稲田の学生たちでやって



いた「ジャンソンの夕」で彼が歌っているのを橋本がまず注目した。続いて原孝太郎氏に紹介されたのが幸運のはじまりで、トントン拍手に名を売り出した。彼の特異なマスクと奇抜なふん装が、あるいはそうなる下地を作っていたのかも知れない。

同時に大変な負けずらいで、「体はこんなにキヤンヤだけど、意志の強さでは、そこらへんのガツシリした人にひけをとらない」と自分でもいっている。また彼は「現在の自分というものを、五年前に想像していた」という。

その処世訓ともいうべき「わが調理法」がふるっている。つまり自分の生涯を作品に見たてる。彫刻家が像をほるときに構図から始まって手、足、胴、頭ときざみ、最後にヒトミを入れるように、自分の毎日を計算で打ちたててゆくわけである。それには、何ごとにも損得で計る。献立表を作って、これで十分得すると思ったら、それに理想を加え、さらに情緒を入れる。それらをうまく調合して仕事をする。ケバケバしいナリをするのもその調理法の一つだそうである。こんな調子で五年、十年と自分の先を読んで、六十歳ぐらいになったら、いつ死んでもよい——。

作家の安岡章太郎氏は「とにかくテレるということを知らない男だ。日本のジャンソン歌手が日本語に訳して歌っている文句に対して、だいたい似合わない人が多い中で、彼は堂々とテレもしないで似合わせてしまっている。押しの強さは服装についてもいえる。あれは一面からすれば、人を驚かして成功しようとする演出だと思うが、それにしてもだれでもができることではない。興味ある男だ」と語っている。

服装やメーカーヤップについては「いやらしい」という声を彼自身も随分聞かされている。だが「人の口なんてものは無

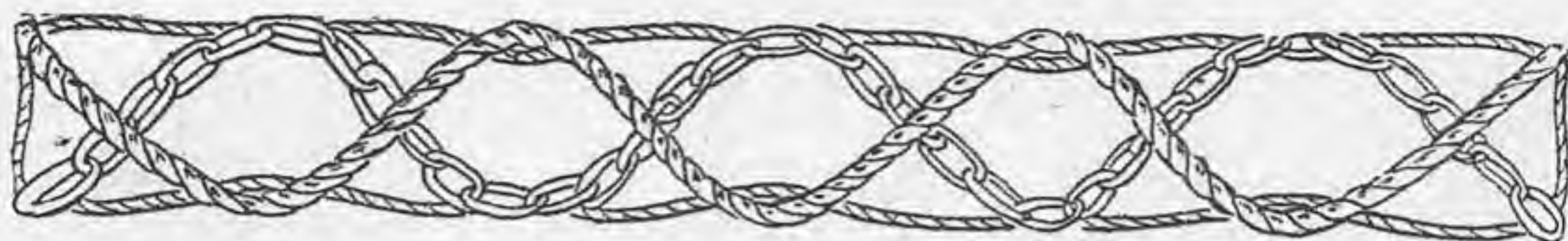
責任なものでどういわれたってかまわない。人間は一人で生れて一人で死んでいくものだし、すべてに他人は責任を負わない。もっとも昔のように自分が死んで殉死してくれる人がいるというなら話は別だけど……」

と割り切っている。「だいたい他人のことをとやかくいう人は、どれだけの資格を持っているのかとボクはいいたいです。キリストの教えに『罪なきもの石を持って打て』というのがあろう。それと同じですよ」とヨハネ伝八章を持ち出してみせた。そして「ボクには誠意があるから、そうした人でも、二度、三度話せば必ず味方にしてみせる自信がある」と心臓の方も相当なもの。

三島由紀夫を評して「あの若さで古典ものをあれだけこなす人はほかにいない」といい、案外自分は四畳半趣味で着物は大好き、とくる。庭にバラバラと散る枯葉をみては、すぐに一句が浮かばないまでも、情緒を味わう鑑賞眼はあると自負する。だからといって、石原慎太郎の「太陽の季節」を真向から否定するつもりもないが、ただ虚無的なのはいやだという。もう一ついやなのはハダカ、ハダカのいまの世の中。セックス、快楽だけでなく「それまでのふん囲気が好き」なんだそう。つまり十九世紀末から二十世紀初頭のパリの「ベル・エポック時代」が彼の理想だといいたのである。

恋愛は肥料

結婚はしないという。大きな仕事をするのに家庭を持っていては邪魔。彼はまだまだ奇想天外なことをやろうというのに妻に肩身の狭い思いをさせるのはしのびない——。それにボーイをやっていた経験で、中年の人の家庭の悩みをまともに見せつけられてきただけに「結婚はこわくて出来ない」



その代り、恋愛となると話は別で「仕事に応用する肥料だから大いにやる」こんな風にも割り切っている彼でもある。では音楽的な面での評判はどうなのか。

シヤンソン歌手の芦野宏は「バタクささというか、とにかく強烈な個性がある。最近では歌うことを心得てその方の進歩もめざましい。ただ難をいえば、変った持味が第一印象にきて、歌を聞いて内容が判らない」

つまり「もの珍しさ」だけで、彼が歌手として単なる「愛ガン用」になってしまったら、つまらないというわけである。

「もの珍しさ」といえば、彼は幼年時代は長崎、青年時代を東京、さらに壮年時代はヨーロッパでという工合に、自分の生涯をハッキリ地域的に割り切っている。

パリへいったら何をするか。

白地に女郎グモをからませた着物や、黒羽二重にガイコツを白く抜いた着物で巴里ッ子をアッといわせたい。「四谷怪談」のお岩さんを衣装に染め抜いたら「これはケツサク、無気味でしょうね」とニヤリとした。計算屋で気が強そうだが、こんなところにふと無邪気な一面が出る。「どこへいったって楽しめる人間になりたい。日本だったヨーロッパだって——」そういつて大きな目玉をむいてみせる。複雑な世相が生んだディレクタンチズム——そんな言葉が彼にはピッタリあてはまらないだろうか。

(矢桐註)

(「週刊東京」六月二十九日号)

まさにこれこそ、「アブ・モード」にちがいない。そろそろこんなのがでくる頃だと思ったら、案の定、である。

いくら売名のためのキバツな服装やメーキヤツプだとしても、本人にその傾向が全然なかったとしたら、思いもつかなかったことだろう。昔だったら(昔でなくても、つい四、五

年前にしても)キチガイ扱いにされて、人気どころではあるまい。人間社会の風俗が、広がり自由になり複雑性をおびてくる、そのテンポの早さ。

二、三年前の公刊紙だったら、こんなものは、良家の子女? に災いするといって載せなかったものである。このようなアブ・モードを堂々と掲載できるだけの、風潮になってきたのであろう。

みだりに他人を「変質者」よばわりして、自分を「上品」にみせる者こそ、軽卒と呼ばねばなるまい。

男性のお化粧が流行

男性美容師の登場、洋裁学校の男子入学など女性分野への男性進出が活発だが、最近では男子専門化粧品が続々と誕生している。

そこで東京日本橋のM百貨店はこの一日から「男性化粧品会」を開き、男性化粧品の売れ行きをあおっているが、会場には男性マネキンまでお目見得、「世の男性よ、美しくなれ」とばかり、美しくなる方法あの手この手の紹介に懸命。化粧品メーカーは「男性も大いに女性と美(?)を競うようになれば」と胸算用をしている。(「週刊読売」六月三十日号)

(矢桐註)

最近、東京の銀座を歩いていると、アイシヤドウをつけている男性に逢うことがある。考えてみると、男が化粧してわるい理由の一つもないわけで、今までしなかったのは、ただ風俗習慣の故である。こんな調子でいくと、女装マニヤが、「マニヤ」などと呼ばれる時代は、もうなくなるかも知れない。一つの趣味として、誰にでもヘンに思われなくなるような時代が、すぐ来るかも知れない。

痛められし桃の実

(第二回)

(マリアンヌの手記より)

原作 セシル・フォーレ

翻訳 鴉 嘔吐 夫

前回の荒筋

村の人気者だった、美しい乙女のマリアンヌは、金持のローランドと結婚しなければならなかった。ローランドは醜い中年の男であり、その上、忌むべき悪習を持っていた。彼は生れつきの、サヂストであつたのである。

何も知らないで嫁いできたマリアンヌは新婚旅行のその夜から、夫の厳しい鞭の下

に呻吟しなければならなかった。

旅行の途中、夫はリヨンの町へ寄り、一軒の有名な婦人服屋へ寄つた。彼女は美しいドレスが着れるものとばかり喜んで、裸になつて、さまざまな恥しい姿態のままでデザイナーに体中を計らせた。デザイナーは、夫と共に喜んで帰つて行く、マリアンヌを見て「可哀そうに、あの人も……」と呟くのであつた。

一

巴里のオートユイの通りを少し入った処に夫のローランドは、小綺麗な家を買つてあつた。そして、そこが、二人の為の新居になつた。寝室と居室、応接室の外に、二、三の小

部屋があり、豪華な家具も全部揃つていた。

連日の旅行と責苦で、すっかり疲れきつていた彼女も、一歩家の中へ足を踏み入れた瞬間、見るからに清潔そうなその家の様子に「まあ綺麗、素敵だわ」と

と思わず感嘆の声を発した程であつた。

まだ子供供した顔の可愛い女中が、恭々しい態度でマリアンヌを迎えた。

「奥さんお帰りなさい」

マリアンヌは、初めて、奥さんと呼ばれ、思わず顔を赤くした。

「女中のジュリヤだ。私達の身の廻りの世話をする為雇つてあるのだ。お前は、家事は何もしなくても良いのだ。唯私の相手をしていれば」

そう言つて夫は、どんどんと家の中へ入つて行つた。

彼女も旅行鞆を、ジュリヤに渡すと、夫に続いて新しい二人の寝室に入つて行つた。

「ここが私達の寝室だよ」

そう言つて、ローランドは、閉めきつた薄暗い部屋の明りをつけた。

普通の天井の照明の外に、部屋の中央の床

にはめられた、下から上へ照すようになって
いる明りに、彼女は吃驚した。しかしもつと
吃驚した事があった。それは窓際にがっしり
据えられている、見るからに豪華な寝台であ
った。

俄にローランドは厳しい口調で言った。

「さあ私の小猫ちゃん。そこへ寝転がってこ
らん。良い事を教えてあげるから」

流石にマリアンヌは一瞬躊躇した。まだ昼
間であり、それに旅行から帰って来たばかり
で疲れきっている。

「早く言う事をききなさい」

ピシリときめつけるように言った。扉口の
方を見て、

「だって？」

と彼女は口ごもった。女中が入って来たら
困ると云う口振りであった。だが彼は

「大丈夫だ。ジュリヤは、こちらで呼ばない
限り、決して部屋に入って来ない事になって
いるからね」

彼女は仕方なく寝台のそばに立った。そし
て、どうしたら良いのかと、夫の方を問いか
けるような顔で見つめた。

「すぐそこへ腹這いになって寝転ぶのだ。こ
れからまずお前に、ローランド家の妻が代々
勤めてきた日課を教えてやるのだ」

夫の顔に一瞬、ぞっとするような冷酷な影
が走った。そして、壁の所に近寄ると、さっ

とカーテンをあけた。そこには、十本の鞭が
綺麗にたてかけてあった。旅行の時、夫が靴
の中から取り出したものとは比べものになら
ない立派なものであった。

ガッシリとした握り柄。手入れが行き届い
てびかびか光っている革具類。時には金属の
輪や貝類の飾りがはめこまれて、美しい模様
さえ作られている。ちらつと見た彼女は慌て
目を掩った。この美しく装われた鞭で、又思
い出しても身の凍る激しい仕置がくり拡げら
れるのだ。

夫はその中の白い角柄で出来た、結び瘤の
玉が幾つかついた鞭を取り上げて宙にびゅっ
と二、三度素振りをくると今一度言った。

「上着だけ脱いで、ともかく腹這いになるの
だ」

「旦那様」彼女は哀願した。「どうか今日だ
けはお許し下さい」

「駄目だ。お前がぐずぐずすればする程、仕
置の数は多くなるのだ。今なら二十で良い。
すぐ二十五になるぞ」

絶対妥協を許さない夫の性質を知っている
彼女は大急ぎで上着とスカートを脱ると、ベ
ッドに腹這いになった。

その時、彼女ははっとして、ベッドの四隅
の柱を眺めた。そこには、鉄の鎖の先に、黒
い鉄の環がつけられている。

忽ち夫の手によって、両手と両足をそれぞ

れ黒い環ははめられてしまった。

体がえびのようにそり、僅かに腹部が下の
布団につくだけの苦しい姿勢になった。

「さあ始めるよ」

夫の宣言に、彼女はひやりとして目をつぶ
った。誰にも遠慮のない鞭が、びゅーとし
たたかに振り下された。

「うーっ」

彼女の口から耐えかねた悲鳴が洩れた。ス
リップ一枚の下の方くよかな臀部が、激しく
揺れ動いた。

二

夕食をすました後、寝につくまでの二、三
時間の日課のお仕置を除けば、彼女の毎日の
暮しは、それ程悪いものではなかった。家事
一切の用はジュリヤが全部やってくれる。休
日には、夫が巴里中の珍しい劇場や、盛り
場に連れて行ってくれる。コメディ・フラン
セーズも、モンマルトルも、彼女の心をすっ
かり奪うような楽しい場所であった。

そしてどこへ行っても、金満家の若夫人と
して、人々の敬意と羨望の眼に取り巻かれる
のが常であった。びったりとした仕立ての良
いドレス、天性の愛くるしさに上品さが加わ
り、巴里の好色紳士達をどきどきさせた。

だが、そんな彼女も一たん家へ帰ればみじ
めなものであった。

三月ばかりたった日の事であった。思い出したように夫が言った。

「そうだ、リヨンでデザイナーにわざわざ作らせた下着をまだ着ていないね」

「ハイ」

「今日はあれを着て日課の仕事をするにしよう」

「ハイ」

所詮逆う事は出来ない。彼女はリヨンから持ってきたまま、そのままになっている特別製の下着の箱を取り出した。そして別室で着換えようとする、

「いけない。私の眼の前で着換えるのだよ」

と夫の厳しい命令がとんできた。

「ハイ」

彼女は箱を持って寝室へ入って行った。

「箱を開いてごらん」

ベッドにどっかと腰をかけた夫は俄かにやさしい猫撫で声で言った。

何も知らぬ彼女は、その箱をあけた。ふわっと泡雪のような感じの白いナイロン製の下着がそこにたたまれてあった。

彼はそれを取り出すと、夫の前で、恥らしい姿態を見せながら衣服を脱ぎ出した。

流行のドレスを脱ると、肌の殆んどすべて見えるスリッパをしていた。胸から膝にかけて、大きな薔薇の模様が透かし織りになっている。しかしそれも夫の動き一つで脱がなけ

ればならなかった。そして最後の

下着までも。とう

とう全部脱いでま

るっきりの裸にな

りすつくと立っ

た。夫はそのしな

やかな裸身を眺め

ながら言った。

「さあ、着てごら

ん」

彼女は下着を手

にとった。乳房の

下半分から胴廻り

をきっちりしめ、

下は、ふわっと、

バレエの短いスカ

ートのように広が

っている。体に合

せてびったりと作

られた下着は、そ

のまま、まとうと

まるで体の一部の

ように、如何にも

似合っていた。

だが、暫く着て

いる中に、次第に

胸が息苦しくなっ



てきた。ドキンドキンと激しく動悸が打ってくる。彼女にはその原因が解らず、苦しさに弱って、部屋中歩き廻った。少しでも動けば短いスカートが、ふわっと舞い上って、あたりに、豊かなお腹や臀部が剥き出しになってしまふ。しかし、歩き廻らないではいられなかった。

表面は、いかにも体に合って作られ、ぴたりとした下着だが、裏面にある、糸の縫い目や、わざと作られた布のつぎ目から血管を巧みに押えて、各所に刺激的な興奮剤が浸透して行っているものであった。名デザイナーの腕の冴えである。

「苦しいわ。どうしたんだろう。ああ」

彼女はガバとベッドに伏せて身悶えした。

「どうかして。ああ何とかして」

彼女は顔を真赤にして言った。体が乱れるのも構わずに、手足をもちいて動かした。

それを、夫はさも嬉しいものを眺めるかのように、じーっと眼を細めてみつめているのであった。

遂に彼女は、ベッドの上で、転がり廻った。夫にじっと見られていることなど、考える余裕もなかった。

ようやく立ち上ったローランドは、暴れ廻る妻を押えてその表面はふわっと柔そうな下着を脱がせた。

その時、彼女は初めて気がついた。布の縫

目や、糸が体に当たるところには、赤く丸い、斑点が、白い肌に点々といっている。そしてそこが熱をもったように耐らなくむずかゆいのである。夫の見ている前で、シーツに体をこすりつけて、その苦痛から逃れようとした。

「その苦しみを逃れるには、たった一つの事しかない」

ローランドは例の鋭い眼付きで言った。

「それはどうするのです。どうか教えて下さい。何でも良いから私の体を」

「うん、そんなにお前がのぞむなら」

夫はまた彼女の体を、四隅の鎖に括りつけて動かないようにした。

そして、傍のサイド・テーブルの抽出から刷子を取り出した。硬い剛毛と、柔い房毛とが交互に植えこまれている特殊なものであった。彼女の体を押しつけると、夫は体中こすりつづけた。今まで内部から湧き出てくる刺激が発散されなくて、苦しい思いをしていた彼女も、今は外の強い皮膚をすり剥くような刺激に支えられて、やっと気分を押えることが出来た。

「どうだ」

「とても良いの。苦しいけれど」

「さて最後の仕上げだ」

夫は握り柄が幾巻も銀の輪で飾られてある平べったいベルト・レザーで出来た鞭を取り

出した。

体中、ほてって、どうにも耐えきれず、転々としていた彼女は、むしろ体を突き出すようにして

「ぶって、旦那様、あー、私を殺す程ぶって私、あーどうしたら良いか」

とうわ言のように言った。

死斗とも形容すべき凄絶な仕置が操り拡げられて行った。

ベルトが肌にまつわる時一瞬、耐え切れぬ痒痒感が拭われ、体中ひきしまるような快い陶酔が訪れる。

「ううっ／＼ もっと、もっと、休まないで」

彼女はもう自分から折檻を求める女になってしまっていた。

三

女と云うものは、短時日にこうも変わってくるものであろうか。

かつて、乙女らしく、やや稚い固ささえ見せていた、彼女の体が、いつのまにか、しつとりとした艶を帯びてき、瞳もうるんだように輝やきをまし、内面的の美がしみじみとあたりに漂うように発散されだしてきていた。

「お前、このごろ随分美しくなってきたよ」

お世辞でもなく夫はそう感嘆して言った。或る日の朝の食卓の一時である。

「いやですわ」

怒じるように彼女は夫を軽く睨んだ。

「まあそれも、毎日のお仕置のせいだよ。あいつは皮膚を艶々と光らせるためには、最も必要な事だからな」

彼女は黙っていた。複雑な気持が彼女の心を走った。毎日の責苦は思い出しても、そつとする程の苦痛であった。しかし、体のどこか一隅に悪魔が小さな声で囁やいているのだ。この体を、思う存分、痛めつけて貰いたい——と。苦痛は、甘美な陶醉でもあった。それ故にこそ彼女の体は、どこまでも美しく内面からの美を増してくるのだ。

久し振りの休日だったので、夫の小さな乗用車にのって、二人は巴里の街へ出た。

凱旋門から、エッフェル塔へ廻り、セーヌ川の見物をすませた二人は、車を、モンマルトルの裏町へ廻した。

石段の下で車から降りると、そこを登り、狭い石畳の道を行って行った。二、三軒の小さな酒場、紅い軒灯にも、一眼でそれと解る暖昧屋の間を通り抜け、更に小さなゴミゴミとした路地を入ると、一軒の家の前に出た。標札も軒灯も何も出ていず、扉はびったりとしめられたままになっている。何か不気味な沈黙が家中に漂っているようであった。

夫のローランドは、既に来馴れているらしく、拳でコツコツと、短く、長く、間を置いて叩いた。叩き方の指定があるらしい。

「怖い所ならいやよ」

マリアンヌは一寸怖気づいて言った。

しかしその言葉が終らぬ前に、扉がスーッとあいて、雲つくような大男が、恭々しく頭を下げて、

「旦那様、どうぞ」

と言って中へ招じ入れた。

「面白い機械が入ったかい」

「へえ、旦那様」

大男は恐縮した口調で答えた。

彼等はまず指定の小部屋に通された。そこにあつた、ガウンをスッポリまとい、仮面をつけた。こうすれば、誰が誰だか、男女の区別さえ分らなくなってしまう。

二人はその姿のまま、広間に入って行った。マリアンヌは思わず、ハッと行ってその場に立ちすくんだ。

広間には、様々な器具が備えつけられ、その何れにも、白い体をのたうたせて、悲鳴や号泣を上げている女の姿があつた。

ベルトとベルトの間に挟んで、激しいモーター廻転によって、体中、目の廻る程の速さで廻されている女、高く宙に突き出たように臀部を位置された女の上に、細い針金の風車がつくくり廻って、ピシリピシリと打ちすえて行く。一筋の血が女の体を伝わって落ちて行っている。

一方では、大きな台の上に、二、三人のま

だ幼い少女が、体をぐるっと丸めて、うづくまっているのを、玉にみたてて、棒で突いて転がしては、人間玉突きをやっている。

六つの体が中央を向いて、背中を出して円形に並んで立っている台がある。その台がぐるぐる廻り出すと、廻りに立っている人々はどれとも構わずに、細い鞭で、自分の眼の前に来た女の背後を打ち据える。女達は台に括りつけられているのか、悲鳴を洩らすけれども身じろぎ一つしない。

ガウンから、チラチラ覗く衣裳の色や、全体の体つきなどによって、この家には、女性のお客も、かなり来ている事が解った。

「この女の人はどんな人達なの」
不審に思つてマリアンヌは夫にそつと訊いた。

「みんな昼間、あちこちで勤めたり、学校へ行ったりしている人達ばかりだ。お洒落をしたいけれど、お金は無い。……と云つて、体を汚したくないと考えるお嬢さんばかりだ。皆、喜んで働いているんだよ」

「そう」

「さあ！ お前も、いつも打たれてばかり居て気の毒だから、今日は、おもいきり打つてごらん。どれでも好きな鞭を選んで」

そう云われると、俄かに、胸がどきどきと脈打ってきた。人を打つことは生れて始めての経験であつた。

壁の所にたてかけてある細い鞭を、一つ手に取った。白い細い柄に、朱色のぴんと張った、軟骨状のもので作られた、如何にもきやしゃな鞭であった。

それを手に持つと、夫に手をひかれて、一



つの機械の前に行った。

それは、円筒状の横長の管の上に、数人の女が、うつ向きに括りつけられており、ぐるりぐるりとゆるやかに廻っている機械である。客連は横にたっていて、自分の眼の前に

目指す部分がくると、ぴしりッ……と打ちすすめる。そして又、一廻りして次に眼の前に廻ってくるまで待って、出来るだけ同じ処に、前の赤い痕に合せて打つ。一種の遊戯であった。

嚴重に美しい処女のみを厳選しておいてある。この遊び場は、それだけに、会費も高かったろうが、いずれも、きりっと引き締った如何にもみずみずしい体つきの女ばかりであった。

マリアンヌは、中央の女を打つに丁度良い台の上に、位置を占めた。

すぐ眼の前に白い裸の二つの丘が迫ってきた。多少震え勝ちの自分の心を統一して、彼女はええいと、鞭を振り下した。ぴしりッ……と激しい音がして、鞭の先が柔い肉にぶかかり、一筋の赤い線をつけた。その時、彼女の体の中心を貫くような、激しい戦慄が走った「ああっ」

とむしろ打った彼女の方が、悲鳴に近い叫び声を上げた。自分が裸にむかれて、夫の厳しい鞭を受ける時のような、激しい情感に身を苛まれた。

一休みする暇もなく、円筒の下の方から、金色の髪、項、そして、ふっくらした肩、背中と、見えて来て、豊かな双丘が眼の前一杯に見えた。再び鞭が鳴った。先程の線とやや交叉して、今一筋の赤い線が走った。

体中が震え上るような、激しい情感に彼女は再び襲われた。

四

その夜、夫も妻も激しく感情が昂ぶって、制禦しようもなかった。

帰るとすぐ、夫は物をも言わずに、妻の衣服を脱って、銀に括りつけた。そして言った。「私の小猫さん。今日のお菓子は何にします。」

彼女は、これからの恐しさに、身をすくませ乍ら、やはり細かい声で答えてしまった。

「ゴムのついているのを戴かして下さい。旦那様。沢山お願いします」

先が細くなって、ゴムがはめられている鞭それは、他のに比べて、一番よくしない、痛苦が激しい鞭であった。

だがそれを彼女は自分でどうしても選ばなければならぬ気持ちであった。

そして、やがて始った、日課の仕置に、大声で悲鳴を上げて泣き叫びながら、それでも「もっと強く、もっと沢山、私を殺しちやうて」と息もたえだえに懇願していた。

△後 記▽ 本回で第一章の「痛められし桃の実」を終わります。第二章の「黒いペチ・コート」の中前半は、去る七月号に発表致しましたので、次回は、その荒筋と、後半を翻訳する予定です。前後して申し訳ありませんが、九月、十月、七月、十一月、と云う風に読んで戴ければ幸甚です。

〔テレビ通信〕

『美女達のお尻が風船をつぶすアイスショー』

清 水 恵 二

七月十四日（夜八時半）NHKテレビで中継したアイスショーは、MSファンには嬉しい贈り物であった。中でもビキニスタイルの美女がインデアン襲撃にあつて苛まれるシーンは、この女性がマゾを演じて秀逸であった。インデアンに片足を取られ乍ら氷の上を滑らされる彼女を見て、サディストならぬ小生の事、はら／＼してなりゆきを見つめてみると、次第に回転速度が速くなり彼女の体重をささえているもう片方の足が氷上を離れて宙に浮いた時は、ハッとしてしまった。インデアンは、彼女の両足をかかえてしばらくふり廻した後、女の身体を氷の上へ放りだしてしまい弓なりになった彼女は氷の上におなかをつけたまましばらくは、反動でぐる／＼廻っていた。その後、太い柱に、彼女を後手に縛りつけたり、彼女を救おうと、男装の西部男が出て来て、インデアンをやっつける等、全体の演技は兎も角、プロジョーサーの好

みの程が良く伺われた。フィナーレ近くの「パリ祭」では、スケートリンクのこちら側に用意された椅子に風船を置き、多勢の男女（女が大部分であつたと思う）が入れ代り立ち代り滑って来ては、上から腰を掛けお尻の重みで風船をつぶすと云う寸法、真白いすき通る様なスカートをひる返して可憐な乙女達が、或いは恥かしそうに、或いは得意気に、皆喜々として、お尻の下に風船を破れつさせていた。このマゾヒスト必見の光景を見て、バクチクのような音をたててはわれる風船の音を聞いて小生はスツカリ有頂天になってこの番組に心から拍手を送ったのであるが、今これを思い出す時あの幸福そのものの様な風船どもがねたましくて仕方がないのである。美しい女性の尻の下でその運命を終えた風船どもは、なんて幸福な奴らであろうと……尚、これは大阪梅田リンクからの中継なので、地元ファンは一見の価値あるものと信ずる。



マゾヒズムへのいざない

(第一回)

天 野 哲 夫

天野というのは私の実名です。このことに今更ためらいを感じません。曾て私がK・Sというペンネームのもとで某誌上に発表した「暗い慾望」という連載告白ものを御記憶の方が中にはあるかとも思いますが、かねがね畏敬する沼正三氏の雑報欄に取上げられるの光栄にも浴し、私としては何程かの慰藉と感謝の情で以て未だに忘れ得ずにあります。「暗い慾望」の冒頭の一節を先ず引用してみましよう。

自転車に乗った女の子とすれ違う。ともう私は呼吸が苦しくなる。あの花びらのようにひらいたスカートの裾に目をやる。風がそこでヒラヒラはためき、誘うように私の感応をくすぐる。花びらの内側の薄暗がり、そこに漂っているであろう生温い空気の臭

い。それにもまして花びらの中心にピッタリと密着し、それを支え、その重みで絶えずギシギシ鳴きつゞけているサドルのことを思って私の呼吸は弾み、目は血走る。どうして彼女はサドルにだけあのような位置を与え私にはあたえてくれないのか。

自転車に飛びのったとき、裾が尻の下にしかれる。ペダルがふみにくいのか彼女は二、三度腰を持ち上げるようなズラすような所作をしてその裾をひきだし、半開きであつたスカートの花びらを一杯に拡げ、サドルを完全にスッポリと包みこむ。サドルはその闇の中で、彼女の重量の下でギシギシなっているではないか。彼女がよしズボンをはいていたとしても、いや、かえってその方がいいかもしれない。膝から下の両側に流れ下りる線が美しくその足先はつつま

しくも可愛い。そして腿、そうだ、あの両腿にはさまれて苦し気にチョッピリ覗いているサドルの黒い金具は、自分自身に与えられたその位置をどう考えているのか。私は軽い眩暈を感じる。衝動にかられ私が彼女を呼止め必死なまなざしてこう云つたとする。

「どうかお願いです。私のこの体を、いやこの顔をサドルの代りに使つて下さい。思いきりよくこの顔の上に跨つて下さい。」

すると彼女は

「まあっ」

と云つたきりあまりのことに呆然としたまま二の句が告げないであろう。そしてやつとのことで彼女はなんと云うだろうか。そのとき彼女はどんな表情をするだろうか。私はその場にひれ伏して必死に哀願し

よう。しかし私がどのように頼んだとしても彼女は訊き入れてはくれまい。それどころかやがてかけつけてきた警官に衆人環視の中で引つ立てていかれることになるかもしれない。みじめな私自身を私がそのときどんなに憐れんでみたともうどうなるものでもない。……………(以下略)

マゾヒズムとは生命の中の当然人間が背負わなければならぬ義務づけられた現象の一つであり、勿論善悪以前によりラディカルな意識の問題です。

天野とは私の実名です。私は責任の所在をこのように明示した上でマゾヒズムを語りたと思うのです。私の体験あるいは現在の状態等を率直に述べながら、そして私の内部に息づいている捉えようのない意識をかえすがえす反芻しながら、私自身におけるマゾヒズムをこゝに呈出しようと思うのです。元祖マゾッホ以来、近くは沼氏をはじめとして幾多

の人達の表現の裏に生きているマゾヒズムの実相を一体どのような文字ですれば捉えることが出来得るだろうか。

私は二年程前、思いあまつて心理学の高橋鉄氏を訪ねたことがあります。氏は丁寧に私の話に耳を傾け、まず私の心理分析、どのような動機、あるいは環境が私をマゾヒストに仕上げていったのか、そのことを探るための心理分析を試みられたのですが、私には氏の診断がどうしても納得いかなかったのです。それがどのように細かく緻密に分析されたとしても、やはり一つの理論として心理学の立場からそのように固定したもののように捉えられたとき、既に私のマゾヒズムとは凡そ無縁なものになってしまっていました。もともと感情がそうであるように、マゾヒズムなる意識の流れは決して固定したものではありません。アミールバのように伸縮自在に生きているものです。したがってそれがどんなに綿密にして科学的なる研究によつたものとしても

記述や説明に了るしかない学問的理論では、それをそのものとして捉えることは出来ません。すぐれた芸術のみが始めて私共の皮膚にそのものをそのまま伝えてくれるのでしようが、……………しかし残念なことには私は学者でないと同様芸術家でもありません。ただマゾヒズムのあのめくるめくほどの盛宴の場に私も招かれた者の一員として出席したのです。

この妖しげな衝動はたしかに私の身内にもえさかつています。このたしかかな実感こそが私の唯一の武器です。そして人間を内から支えそれに生命を与えるもの、それは実感を措いて外にはありません。この実感を足場に私は私なりの方法でマゾヒズムの世界を覗いてみたいと思うのです。私はまず己の体験を告白することから始めねばなりません。「暗い慾望」の一節、その頃私は五才位、仄かな記憶ではあり、誰でもが体験したであろうありふれたことかもしれませんが、先ず述べてみます。

女性切腹隨想

田 谷 敬 生

最近ある新聞の夕刊三面記事の一部に

「切腹し内臓を引出す

痛苦にたえかね

という見出しで、四六才の人妻が胃潰瘍になやみ、苦痛に耐えかねてハサミで腹部を二〇センチ程も切り手で内臓をつかみ出

近所に仲良くしていた同い年の女の子がいて、時々その家の裏二階の物置にかくれて二人でお医者さんごっこをして遊んだ。いつも私がお医者さん、女の子が患者で、私が彼女の胸を撫でたり、お腹をさすったり、マツチ棒で彼女の腕に注射したりしても、各々の役目に不自然や不公平を感じる

し、重態であるとの記事がでていました。

簡単な記事のため詳しい様子はわかりませんが、ハサミというような不便な道具で内臓（もちろん大腸だと思われますが）を引ずり出す程切るにはよほどの覚悟が要ることと思われまふ。

これまで本誌に出ていた女性切腹例の中には、読んだだけでは「まさか」と思われる位凄惨なものがありました。現在のよる位平穏な時代に、しかもハサミを使つてこのような切腹が行われたのを見ると、血と恐怖にぬりつぶされたような終戦時には妙齡の女性でも一種の半狂乱の状態で、いわば暗示状態の中に半裸または全裸となつ

て腹を切裂き、内臓を引ずり出すということは当然うなずけることと思ひます。

欧米でも病苦による自殺は多いようですが、ナイフによるものは大部分咽喉を突くのでごく稀に鳩尾また左乳下を刺す例はあるようですが臍の高さまたはそれ以下を切つて大小腸をつかみ出すというような例はまず絶無といつても過言ではないようです。戦前の生活を体験してきた日本人には女性にもまだこうした特異性が残っているのでしょう。こうした感じは強さのちがいはあつても、旧時代の日本人の大部分に少しづつでも残っているのではないかと信じます。

ことなく、いつも私がお医者さん、女の子が患者さんだった。自動的にお互の役柄がそうなるので、これはすくなくとも意志的ではなかつた。或日、例の物置の古めかしい木の格子のはまつた窓際ではだけさせた女の子のからだを初めてマジマジとみつめたときにもなんら意志的なものは仿らいていなかった。勿論幾らかのうしろめたさは

覚えたものの、それを罪悪意識に結びつけるのは当を得ない。大部分の大人たちはこころしたお医者さんごつこの洗礼を受けているに違ひないし、そのことが彼等のその後

の生長にそれほどの影響を与えたともおもえない。そして大部分がたんになされただけなのだ。私がその幼いからだをまじまじとみつめ薬しべでその腹部をまさぐり、指先で押しつけたときにさえ私はすこしの感動も覚えなかつた。無感動にただたんになしただけだった。力をいれちや痛いよ！と云つた女の子の声もただたん痛いから義務的に出されただけにすぎなかつた。

その夜蒲団の中で何となくキタならしく感じられる自分の右手の指先をかいだとき私はひどく不快に思つた。石鹸で洗い、乾いたタオルでよく拭き上げたのだが、それは私に嘔気をおおさせあの女の子を憎ませた。そして昼間あれほど可愛く見えたあの小さなからだは、私にとって思い出すさへ醜怪できたならしいものとなつた。牝犬が牝犬に鼻先をつきつけて臭いを求めることに意志はなく不潔さもない。そろそろ物心つきかけたその頃の私が牝のからだにふれたことにも意志はなく不潔さもない。しかし猶且その夜私は子供心にも不快を感じ、牝を嫌悪せねばならなかつたのだ。性に対する罪悪感がこゝに芽法え、それ故にそのものに惹かれる奇妙な輪廻、それは私の人間としての性がかすかではあつたが目覚めの時期を迎えんとするあの微妙なものを暗示していたものと思へるのだ。

以上は別に珍らしいことでもなく、あゝ、そうかですんでしまふ事柄でしょう。ところがこのありふれた私の目覚めが、たんたんたる傾斜をたどつてマゾヒズム、——なかなしく足へのフェティシズムとコプロウロケニズムへの道程を確実に刻んで行くことになるのです。この道程をふりかえつてみたとき、マゾヒズムも決して珍らしいものではありません。あらゆる可能性を内にたたえる人間なるものを凝視するとき、一体如何なる心理現象に驚けばいいのでしょうか。ただその人の人間というものの認識の浅さとその恥ずべき無恥をあわれむだけです。

(未完)

終焉ノ一ト

『和装教室』

— 古典模様矢絣御供の巻 —

白 金 紅 次

『——何しろ寄ってたかって、ぐるりと大勢の人なんでしょう。だから、たった一人のあたしを両方から引つ張りだこにしようたって初めっから無理な相談なのね』

『そりやそうだろう。運悪くお殿様とお百姓さんじや話の折合いがつかないしね、正しく君の云う通りだ』

『それに、日照りなんぞ、何もあたしのせいじやないんだし、殿様のお胤を頂けばお腹が大きくなるのは当り前の事でしょ。それを何んだかんだとのしられちや浮ばれないわ』
『喰うか喰われるかの瀬戸際のお百姓さんのためなら男の僕でも我慢するが、殿様には御家老って奴が付きものでその先生が憎まれ口をきいたんじやないかい？ それで、君はど

うしたの？』

『整理がつかなくて、口惜しいけど両方兼ねさせて頂きますって申出でたわ、だって矢つぎ早やに白矢の矢を当てられたら、そうするより外に手は無いでしょ。でもそもそも、斯うなった大源はあなたが着て寝る寝ると仰言つて、この矢絣を無理強いなすった処にあるのよ。古めかしい紫矢絣はいつ見てもいい柄だけど』

『そう頭から無茶苦茶に僕を怨むなよ。多分そう云う事になるんじやないかと』

『だから、ひどい方だと今朝がたから申上げているんですの、宵の内は専らお殿様で、曉方には百姓一揆の大騒ぎに巻き込まれたんじや、へとへとにもなるわ』

『まあいいさ、久方振りに嬉しい女になってせいせいしたろう。ここらが正直に云って女冥利につきる処なんだよ』

『でも、あの時の文金高島田のあたしは、別人見たいにとっても綺麗だったわ。飛切り上等の矢絣をあと五六枚、借金しても買って見ようか知ら、長いたもとを垂れて裾を曳き大勢の人に羨望視されて』

『何処を、そんな恰好でブラブラ歩いたんだい？ 最後の講義だと云うのに』

『アラッ、肝腎な処を申し損って相済みません。顔付はあなた見たいな優男でも皺だらけのお年寄でも、毛むくじやらなお乞食さんでもかまわないわ。要は殿方でさえあればいいんですの、腕ッ節の強い漁師見たいだったら

なおさら、フフフ」

『笑う処を見ると万事お芝居事だね。いつも引合に出す人形箱から出て来た生人形じやあるまいし』

『生人形も生人形、生きた両の腕をぐつと後ろに廻わされて何の因果か判らないままに両手首を縛られて……』

『縛られるって、その、むくつけき男の子が君を縛ったのかい？』

『だって腰元兼己の歳生れの娘二役なんですもの、ホホホ』

床の中で五臓六腑の疲れが夢に化け、煙と共に現われた淡青地濃紫紺の古紋矢絰の年若く美しい女性が古着にまつわる因念だからと云って無やみに縛られちや可哀いそうだが、情愛の赴くままに女に見させた夢の片鱗が、その都度今様風俗取締りの条文に左右されて描写が逃げて廻るようでは何んにもならぬ。寧ろ不言猿、不見猿と断ってこれっ切り山奥に引込んで了うに越した事はないんだが——紙一枚の処で如何にも左様と引下れない処に手前味噌ながら和装の妙味がある。誠に以ておせっかい至極な人騒せもの。

『——でも、まずまず今朝来御無事対面で何より、大いに安心致しました』

『アラ、随分薄情な方ね、まだフラフラ腰が浮いてる見たいだわ。この矢絰に血糊でもついてないかしら？』

『その——最初君がなった腰元って、存分お情けを頂戴した処を見るとさしずめ高級内侍の部類だね。それが——と三七、二十一日の日照りと関係づけられて炎天下雨乞い供養の娘に横滑りするんだから話は混んがらかつてちと酷じやないのかい？』

『酷は昨晚からずっと続いていますの、あなたが叔母さんの帯だから締めてやるって、ひどく古風な結び方をなすったでしよ』

『吊いの黒帯が場を縫いだのさ、矢絰にはぐつと引立つんだから、但し小間物は、オール君の物ばかりだ』

『すると、この紅縮緬のお腰巻から、ハイ、今度から湯文字と申します。この赤い湯文字と小紋白萩の花模様散らしの長襦袢、これも矢張緋縮緬で、これに問題の曰く付の矢絰を肌にした途端に怖い夢を見たって云う訳ねえまるで講談物で後味が悪い見たい』

『味のうまい、まずいは後廻し、帯は少々きつかったかも知れないが君の横であだ、こうだと喋っていたら君は半分眠りながら頷ずいていたじやないか。洋装だところは行かんよ。ワンピースの押し掛け怪談って今時余んまり聴いた事はないんだから』

『じや偶然の一致なのよ、でも大方があなたの指し金だわ。うとうとするとあっちを向けこっちを向けて、まるで荒浪にもまれた葉っぱ見たいになぶられたあたりが、きつと山

だったのね』

『それにしても、この眼で高島田を拝見しなかったのは返すも返すも惜しい。出来れば只今お目覚めの序でにもう一つぺん腰元兼己の年生れの娘さんになって貰う事だね。折角拝借した曰く付の矢絰なんだから、しかもこの教室とも当分の間お別れなんだから』

此処まで女に迫られれば和装教室最後の教師としての面目は果たせるだろう。唯至極厄介な事は襟元から五六本の腰紐を経て足袋に至る七面倒くさい描写と書割一本すらない舞台ならぬ平々凡々の畳の上で女を操る能力が、たじたとする恐れがどうもありそうだと云う事である。

『ねえ、映画や、お芝居で色々話がこじれて女がよく縛られるでしよ、どうしても云う事をきかすんだとか、騙ましてお大名のお妾にしよっぴいて行くんだとか、そんな場面を御覧になって、どんな気が——あたし達じやないわ、殿方がそう云う女を観てどんな感じがします？ 笑わないでよ、どうお？』

『どうおって、話が横っ飛びに飛んだね。高島田に矢絰を着てかい？』

『矢絰でも黄八丈でもかまわないわ、とても居ても立っても堪らないでしよ。もう無茶苦茶に哀れっぽくて、むごく、痛々しくて抵抗すればする程イロっぽくて、フフフ、そのまんまその女を抱き締めた位でしよ』

『すぐくまた急先鋒に喋ったね、僕の云うセリフを、いや、正にその通りだろう』

『——だろなんて、生温るい事を仰言らずに確かにそうだと仰言って頂戴、でないと——折角あなたの横で見た腰元や日照供養の娘さんの御披露、これっ切りおあずけに、ホホホ、御免なさい。肝腎な処でお尻なんぞ捲くったりして……』

浮気は元より承知の上である。髯剃、紙、石鹼、カメラの外に御丁寧に何かさばる衣裳と細引持参の世に云うアベック旅行。一夜が明けて伊達巻長編絆の女を前にしての出張講義は和装教室また多忙なるかなと云い処だが——どうせ捲られるお尻なら派手に捲くった方がよいかも知れない。太股を斬って廻る痴漢より数段上等であり第一すべて和やかだ。

『じゃ、その夢ってね、そもそも斯うなのよ。初めは何んでも大勢の腰元がごちやごちや居て、首実験かな、お殿様に添寝する女の、ほら、伽を命ずるナンてあれなの。とうが立った古参者の腰元はあと廻わし、ピチピチした新参者を探せって、ぐるぐる見廻した御家老の眼がストリートであたしの処に飛び込んで来て、もうどう云い訳をしても駄目、「どうぞ、そればかりは御許しなされて下さりませ」って、あたし随分、哀願したのに、とうとう四五人のお武士さんに押さえられて連れ

て行かれ、お控の部屋で泣きながら承諾したの』

『そりや開幕早々気の毒だったね、また簡単によく承諾しちゃったりして……』

『だってもう仕方ないでしょ、元々、そのつもりで出仕の腰元を召集したのに、あたしが易々と応じたんですもの、処がいざって云う段で暴れちゃった』

『矢絣、立矢の黒帯、高島田のお曳ずりの腰元が櫛を落とし、かんざしを散らして咬みつくように暴れようとも駄目だったろう。何しろ相手は一国一城の主なんだから、「その方余っ程余が嫌いに見える、嫌いなのは余の顔か身体か、どちらじゃ？」「ハイ、嫌いらなのは両方ともで御座います」って答えたんじやないのかい？「よし、然らばあと残った余の最後の持物——権力で参る外はあるまい。そちが此の場に至ってどのように逆うとも必らず世継の嗣子を産ませて見せる。十日はおるか月余、半歳かかろうとも連続伽を命ずるぞッ」なんて事になって、その晩——』

『そうなの、あなたもお殿様とあんまり変らないわ、「静、そこへ直れ」って仰言って、床の間に置いたスーツケースの中から長い細引を取り出し「余は憎い程そちが好きだ。好きになればこそ、このように振舞い度いのじゃ。不本意ながらも、むごい目に逢わせなければならぬ——余の真意が判ったかな？ 判った

なら、端正に坐って裾の乱れを直し、そちの両の腕を後ろに廻わすのじゃ」って仰言らない？』

『云わなかったね、君の寝言は一寸聴いたけど』

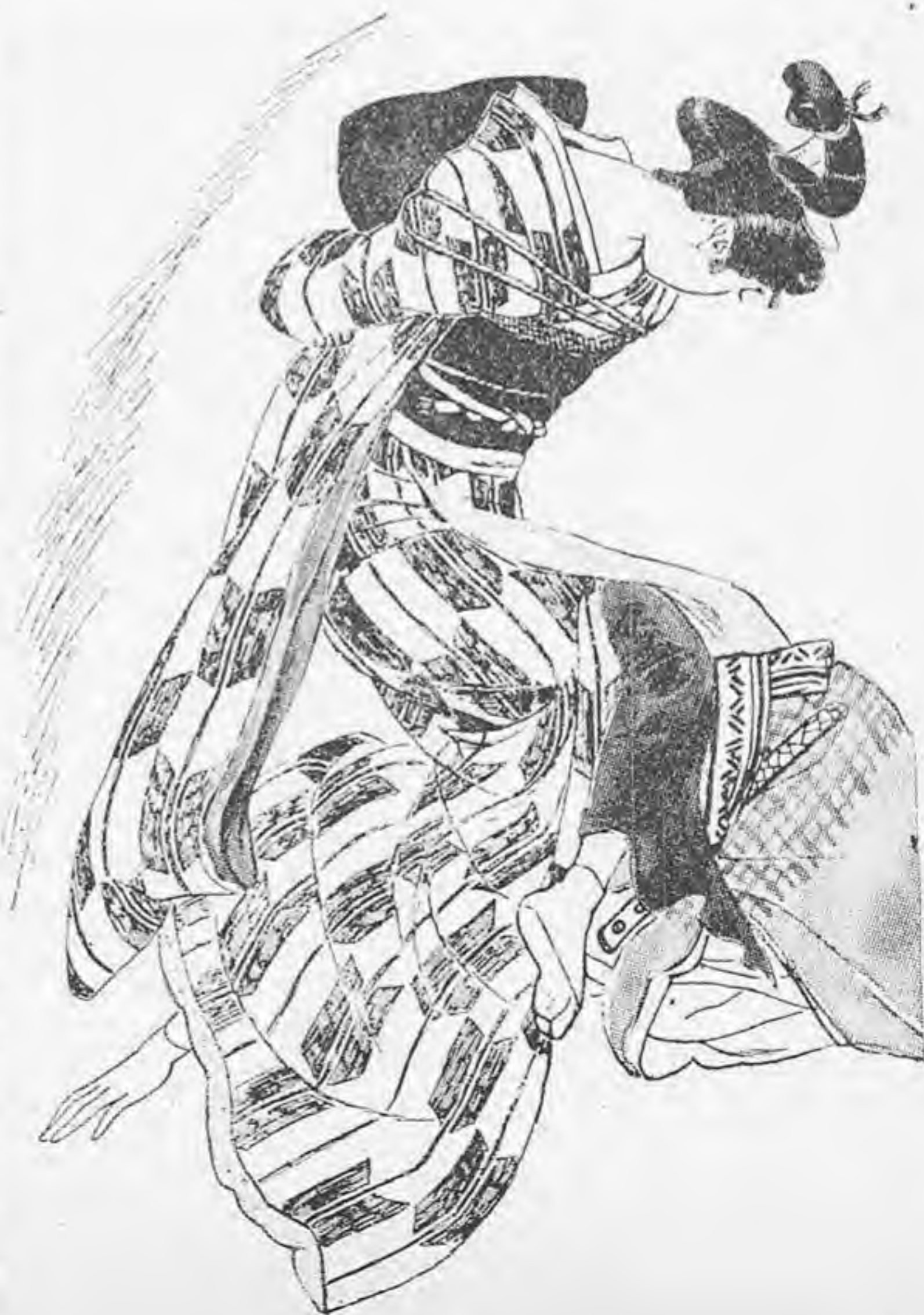
『じゃ矢っ張り、そのむくつけきお殿様なんだわ、で——あたし裾の前を昔の腰元さんのようにちやんとさばいて緋縮緬の長編絆をちよっぴり覗かせ、静かに両の腕を後に廻わしたのよ、モソモソ両手首が細引で縛られる時は覚えてましたけど、その細引が前に廻ってぐっと引きしぼるように胸の上を、それこそ矢絣の着物を透して肉がひきちぎれんばかりに二巻きくぐられ、余った縄尻を最前の手首の間に通してぎゅっと背中の上に引上げられた時は、本当に泣きたい位辛くて、思わず怨めしように、殿様の顔を見上げたわ。すると——「ワハハハッハッどうじゃ、女ながらも縛られた女は惚れほれするであろうが。余は伽の前に縛られたそちを床の間に飾り物にして



とくと眺めて見たい。今宵は幸い奥は居らぬ。それともその儘横になり余の枕となつて夜中を寝明かすか。これッ、物の一つは云えるであらう。何故にハイと答えて素直に観念しないのじゃ、余の本心はな、誰にも云うてはならんぞ、実は縛られた女を、いやいや、そのような残酷な事はせん。本当はな、若い腰元を矢絣の衣裳のまんま縛って見たらどんなに美しいだろうと思つてそつと家老に命じておいたのじゃ、判つて呉れるかの？ 奥がそばにおると斯うは参らぬ、幸い前にも申した通り留守じやによつて、今宵はその晴れの矢絣のそちを堪能するまで縛らせて呉れ、触らせて呉れまいか頼む、これこの通りじや」

『形勢が、がらりと急に変つたね。だらしない大名もおればおるもの、君だつて拍子抜けしたろう。折角腰元の君をしようばなから、おどかしたのに、これじや君が笑う筈だ、ハイ、ではお殿様御免とばかりさつと最前の人形箱の中へ入つて了えよかつた』

『処がこれが手なのよ、だらしない処はあなたに似て本当は腕ッ節の強い赤いおふんどの漁師見たいだつたわ。ねちねち寄つて来て後手に縛られたあたしの高島田の横から脂ぎつた、おまけにお酒臭い頬を擦りつけお乳のあたりを指で一つ二つ押したりして、「この処痛くないかのう。おお、可哀いそうに胸元にひどう縄目が喰い込んで、腕が折れる位



に辛いであろうに、それ、そなたを縛つた縄尻を右に曳くぞえ、そらッ左に曳くぞえ、そらッ右に、ほれッ、左に、今度は真うしろにぐつと曳いたら——おお、裾が乱れおつた。

湯文字をたんと見せるんじや、若い女御の湯文字は目の薬じやから、白い脛が見えてもええぞ、その何んだ、赤い湯文字のからみつく処がまた何んともいえぬ風情じや呐、そなた

の白足袋は何文じや、可愛い足をしとる。」つてまるで縛られたあたしの身体を操つて玩具扱い」

『成程、一城の主にしちや手が混んでる、縛られた腰元のおふな絵だ』

『あら、感心し放しでないで少しは同情するもんよ。お腰の、そうじやない、赤い湯文字の鮮さが捲くれた矢絣の裾廻しと似合つて翫め

んばかりの上機嫌、いやらしいけど昔の腰元
 だっていつもこんな事をされるんかしら、と思
 ったわ、その内行燈の灯がトボトボ消えそう
 になったのに驚いて「事の儀に及んで声が出
 るようでは、いかんからう」ってあたしの
 帯の上の鹿子絞りの帯揚げを脱し口を覆って
 のぐるり猿轡。さあ、どうなるでしょう、そ
 の後は？ フフフ」

『笑い事じゃないよ、君は世継の若様を生む
 んだらう？ ただ方法がちよいとサジ掛って
 いる。矢絣の手無し達磨じや如何にも可哀そ
 うだ。まあいいさ、それから？』

『それからと云うもの、長繻絆や湯文字は毎
 夜替ってもずっと矢絣、黒帯、緋の帯揚げ、
 もう一つ白の帯締め、裾を曳いて、今宵は後
 手の手首をしっかりと見せて床の間へ坐ってお
 れたの、余がめくらの沢市になるからその縄
 尻を掴ませて廁へ案内せよとお戯れになった
 り、ひどく御機嫌の麗しい時は「余はまだ女
 かん信の股ぐりなどやった試しがない」と
 仰言って後手に縛ったあたしを書院の前に立
 たせ、裾を曳いたまま股ぐり、一寸した旗
 のひらめく幼稚園の運動会見たいで、くすぐ
 ったかったわ、だって……』

『斯う云う殿様が往々にして名君になるぜ、
 嗣子の獲得と遊戯の至芸に到達して悔ゆる処
 無し、以て冥す可しだ』

『馬鹿ねえ、女の裾の中へちよん鬚の頭を突

込んで龜の子見たいにぐるぐる見廻わされち
 や第一侮辱だわ、冥し度いのはあたしの方よ
 その挙句のお言葉が振るってるの、「香り高
 き花園に遊んで余は満足じやよ」って、ホホ
 ホ、お終いには、赤い湯文字で鼻をかむつも
 りなのかしら？』

『そう君、いちいち悪口を云うもんじやない
 よ、おおらかで坊っちゃん坊っちゃんしてい
 いじやないか。まあ——それで目出度く君は
 御懐妊したって訳だね。処で矢絣の腰元がど
 のあたりで雨乞い供養に移って行ったんだい
 ？ お腰元の直々の払下げなのかい？』

フロイドの夢の分析じやないが物の理屈や
 論理を鼻にかける奴に限って卑怯さが後押し
 してイメージに残った歌麿調はおよそ野暮の
 極だと云うらしい。野暮は野暮でも古典模様
 矢絣の着物に包まれた豊満な女の統後手縛り
 は所詮消え去る夢でも眺めておきたいもの。
 るくに追究しないうちに和装教室がこれっき
 り閉鎖したら大変だから。

『お化粧しながらでもいいんだよ、まさか供
 養だからと云ってさ、そのまま君を永遠にね
 むらす訳じやないんだらう？』

『ううん、起き放しよ、真昼間に、そうね
 え、村に己の歳生れの娘っ子は居ないか、居
 るには居るが、あいにく御殿勤めに出ておる
 わいって云う処から始まったのかしら、そした
 ら、御家老と村の分限者——村長さんと耳打ち

してたから、この儀とくと殿と相談の上何分
 よきに取計うとでも伝え赤い舌を出して村長
 の肩をボンと叩いた——ような気がするわ』
 『態のいい昔の人身売買だね、お天道様こそ
 いい迷惑だ、迷惑処か君の供養姿を見下して
 目がくらみ、アルハア、ベーターはおるかガ
 ンマー線の一切をひっ込めて一天俄かに掻曇
 り忽ち篠突く大雨降り来たる、げに怖ろしき
 は女の魅力かな』

『それはどうでもいいんですよ。一寸待っ
 てよ、その前が長々とあるんだわ、何んせあ
 なた好みの場面をあたし一人が演ったんです
 もの、お話の途中で寒くなって来たわ。宿の
 丹前着てもいいでしょ、嫌だわ、それは古川
 柳の文句よ。風邪を引いたら本当に看病して
 下さるの？ じゃ一つその事ゆうべの矢絣を
 着て演って見ましようか？ まさか長繻絆一
 枚の女供養ってないんですものねえ』

『お腰一枚になったら村の河童は総踊りして
 喜ぶだらうになあ』

『証々 寺の女狸じやないのよ、真昼の暗黒
 をどうして招き寄せようかとあたしの一身を
 かけての死物狂いの闘争なんですもの、娘の
 一匹位は何んでもなかったのね。ただ夢の中
 だったけど一寸変ったのは矢絣は矢絣でも
 たもとが振袖のように長く縫ってあり、高島
 田に笄を挿して角隠し、綿帽子じやないわ、
 まあ矢絣の花嫁さん姿って訳ね、最後の講釈

よ、よく聴いて頂戴！その着付した処が例の書院付のお臥所なのでびっくりしちゃった」

『成程、その時君の股をくぐったお殿様はそばで何んと云った？』

『武州が相州とか云ったかしら、五十万石の民衆の飢饉を救うため、余は余の胤を諦めてそなたを手離す、忍び難きを忍び、耐え難きに耐えて』

『何処かで聴いたような文句だよ、そりや歟や蓑笠に身を固めたお百姓連中はそろそろ出て来ないの？』

『居るのよ、もうちやんとお城の廻りに蓑旗を高く挙げてあたしを待ってたわ、でもお姫様じやないんだから下に下に、ってお城を下る訳には行かないのよ。どうせ目茶目茶に供養されるんでしょ。だから、フフフ、下郎のいる表門の処でからげた裾を降し、地面を曳きずって執行頭の前で何やらモソモソ耳打ちの挙句、スーツケースの中から荒縄が出たからまたびっくりしちゃった』

『まさか僕でもなさそうだが、スーツケースはよかったね。時代を超越して愉快だよ。城門を出る途端に腰元の資格がフウーと消えて村民の娘——娘でもなさそうだね。今回は早替るなんて夢は便利だ。何しろ今度はお供物だから縄が必要と見える、ただ何も荒縄でなくともいいが』

『そうでしょ、御懷妊二ヶ月のあたしの身体を荒縄で縛り上げるなんて未だに判らないわ。鯉の丸煮のようにそっと壇の上へ乗っければよいものを、矢張り取ったときの美的感覚の一つかしら？ フフフ』

『しよっちや困るぜ、つまる処、懷妊花嫁娘の血祭なんだよ。百姓一揆ともなればさ、それから、どうなった？』

『本当は裸馬に後手のまま乗せられるんではないが、おが肩を詰めたような米俵の上へ股をひらいて乗ると乱暴にも赤銅色に焼けた十二三本の手がニユツと出てやっところさ、と戸板の上へ、処があたしの周りのお百姓さんの言草がとってもひどく残酷なの。』

『斯う云うふしだらな娘っ子が己の年生れとは驚くじやねえか、殿と乳操り合って花嫁たあ笑わせやがる、だから雨の神様が逃げて、お天道様がかんしやくを起したんだ』と、寄ってたかつて最後の悪口雑言の度い放題、とても情けなかったわ、両手をほら、こんな風に縛られていなかったら、一寸、縛ってよ、細引でいいわ、御免なさい。その前に肝心の矢絣を着なくっちゃ、大急ぎで着て見るわ、黒い帯はどう結んでもいいでしょ。あなたをお股ぐりのお殿様に見立ててその尊いおん前で、フフフ、綺麗なお腰元に。二ヶ月じやお腹はぶくつと出張らないわねえ、昔のものじやないからおはしよりを取っても裾はあんまり曳けないんですけど我慢して頂戴、どうお？ パーマの髪から下は腰元風でしょ、お待ちどうさまでした。サア思い切り、きつくあたしを後手にお縛りになって、どうせ、お御輿さんのように戸板の上に乗つけられるんですもの、ぐるぐる廻しに巻きつけてもかわないわ。お乳の上をもっと、痛い位に、縄目が見えない位に締め上げて、ふしだらな娘さんはどたん場で斯う云う目に逢うんだわねえ』

『いいのかい？ こんなにひどく縛って、また細引が馬鹿に長いんだ、ようし、終り』

『どうお？ だから無性に口惜しかったの。さつき悪口を散々浴せかけた連中をひっかこうにもこんなに縛られちゃ泣きの涙でしょ。そのまんまワッショ、ワッショと行列が歩き出す。さあ、数えても数え切れない程の大勢の人に囲まれて三途の河原へ』

『いきなりボン、かい？』

『ううん、まだなのよ、これから先を時代劇の絶天色シネマスコープでやったらさぞ壮観で、あなた見たいなお好きな方は固唾をのんで釘付けになるわ。御覧になりたいでしょ、但し非公開に付一切の男子はお断り申し上げます、ホホホ、でも斯んなにお縛りになって非公開じゃ心残りでしょ、パーマの髪を乱して一寸演って見ましようか。ねえ？ 男の方ってどうして満座の中に女をくくり付けて大騒

ぎしなけりや気が済まないんでしよう？ 若い女であればある程熱狂するのね、中にはそうされたい女の人もあるでしようが、大抵はまともに顔を挙げられない程恥しくって堪らないのが本當じやないかしら？」

『まあそう一口には云えないね、つまり痛々しい中に何程かの哀艶美を感じる、そうやって君が肌に喰い込む位に後手に縛られていると振るいつきたい位惚々するよ、それが口惜しいけど観念の唇を噛んでうなだれると満点だ、見ていて堪らんよ』

『アラ、とうとう白状なすったのね、「さあさあ、退いた退いたッ、皆の衆、供養の娘っ子が来たよう、生きるか死ぬかの境目じやけん、女ッ子を血祭にあげるんだよう」ウオッ、ワアと云う、それはそれは鼎をひっくり返したような大反響、ねえ？こんな場合、シネマスコープだったら痛々しく後手に縛られた矢絣の

あ

あたしが縄尻を小突かれ裾から赤いものをチラチラ覗かせて曳かれて行く処だけに目を留めて、あと先の憎ったらしいお百姓や小役人

はどうでもいいんでしょ？」

『その通り、きもののいい処は小突かれて、つまり荒庭の上へ坐らされたり柱にくぐられたりするあたりが圧巻だ、色彩映画だったら猶更のこと』

『だから、こんな風に、こんな処は非公開なのよ、河原の真ん中に設けられた別の米俵の上に仰向けにされてこうすると雨を呼ぶんですって、ホホホ何んせゴロゴロする米俵の上でしょ。そこへ竜のお面を被った七八人のお乞食さん連がでんでにギラギラした刀を抜いて得態の知れない唄に合せて米俵めがけてブスブス刺し込むのよ、一つべんでも手先きが狂ったらと思うともう無生に怖くて怖くて、だってお腰巻や長襦袢はブスブス穴だらけなんですからその内に研ぎすましたギラギラした刀が眼先にちらついた怖しさと炎天下に御丁寧にも半分花嫁衣裳のまきつく後手に縛れた痛さ



とでつい失心した隙をねらって何時の間にかぞろり着ていた矢絛から長襦袢まで剥ぎ取って文字通り腰から下は赤い湯文字一枚の裸。気がついて眼を開けたら、そうね、お腹の処が出たすぐ下を荒縄でひっくり、眼を下にして見るとぞっとする位高い白木の柱に両腕をひろげたまま縛りつけられていたわ——おまけに腥い風まで出て来て……」

『また帯を解くのかい？ 誰かが来ないからいいようなものの一人二役は大変だね、風邪をひかぬよう頼んまっせ』

『こうでしょ、あたしのお腰巻のどこ、も一度縛ってよ、で、このまんま両手を、十字の柱がなくても、こんな風に、河原の風って下の方から吹上げるのねえ、馬鹿ねえ、もうお天道様、とつくに拝観済みよ、ただ穴だらけのちぎれたお腰をまもっていたからひどく貧相に、まるでお乞食さんの娘が襟を喰らったように黒雲の湧出ると若い女の供養物両てんびんをにらめっこしてお百姓さん達には一寸気の毒だったわ、何かしきたりが昔からあるんでしうか、訳って、知らないわ、変なこじつけ、嫌だわ、そんな、だってホホホ本当に効くのかしら？』

『つまりさ、紅に包まれた雪の肌を暴露させてお天道様を天の岩戸に押し込んだまえばあとは暗闇なんだから竜神がのさばって雨とな

る——それが見た目と本当に酷たらしければ酷い程、効能が現われて来る、これには薄穢い輝を垂れた鬘蓬々の野郎じや艶消しだし、どうにもならんから若い女の子を選んだと云う、極めて簡単な理由なんだよ、きつと。して見るとこの古くさい矢絛は余り程の時代物なんだね、借りた先が恋に破れて胸を病んだ娘さんと聴いちや曰くの一つもつこうじやないか、たださ君んとこの社長が一晚、殿様に化けて秘書役の君が矢絛で時代がかった責めに逢ったのは少々気の毒だったけど、案外今時きものに慣れて積極的なのは驚いたよ。須からく世の洋装の女性もこうありたいね、ロック・アンド・ロールでお尻を出すばかりが能じやない。』

『でも、よく考えて見ると因念って怖いわねえ、目が覚める迄、あたし、本当の腰元になり切っていたんですもの、それに普段ならシヨーツにスリッパなのをいきなりお腰からでしょ。赤いスカートは気にしなくとも火の様な湯文字や長襦袢はとっても煽情的だわ。あなたがあたしをお縛りになった時、腰の線を御覧になって静公ッ隅に置けんと思いいになったのじやない？ 今はしうことなしに洋服なんですけど着物で着通したいわ、その方が、ホホホ、同じ後手にされてもお眼々の保養でしう？ 少くとも和装趣味第一のあ

なたには万能薬だわねえ、フフフ』

座興とは云え、裾を乱してお目覚めの一席を喋る彼女が時代を背に還して古風矢絛の後手のまま、禿頭教師『和装教室』講義終末篇を知ってか知らずか将亦きものへの哀別の情に耐え兼ねてか、

『ねえ、急に黙ったりして、どうなすったの？ 何かあたしのお喋り、お気に触ったかしら？ 行き詰るって何あに？ 元氣をお出しになって、お願い、大丈夫よ、いつでも動員して、あたし日本舞踊を習ってるお友達、うんと連れて来るわ、そして思い思いに自由を失ったポーズをおさせになったら？ 貸衣裳でも借りて、日本髪結って、だって、きものってあたし永遠の憧れなんですもの、このまんま、今の夢じやなくなつてよ。後手のあたしと御一緒に暫くの間——裾を放しの和装でこのあと続けたら読者さんのお笑いを買うばかりなんですものねえ、御免なさい、誰かさんに代ってお喋りして、ホホホ』

窓が閉められ、灯が消されて真暗になった教室——和装教室よ、さらば。

再び扉の開き、きもの漫筆に栄光の

そそぐ日の早からむことを祈りつつ講義終了の鐘は静かに鳴り渡ったのである。

(終り)



雑報と雑感

沼 正 三

一五三 マゾッホ作・佐藤春夫訳「毛皮を著たヴィーナス」(群像七月号) 原作は既に手帖で度々紹介論及した(六十項、八十一項、九十六項―既に訂正した通り、九十八項末段は九十六項末段になるのが正しい、雑報一四二番等)し、邦訳についても、青木繁訳と治洲嘉明訳の優劣に關し、第六十一項で詳述したが、今度新に文豪の名による新訳を得たわけである。「今福一雄の協力を得て全訳を完成」と跋にあるが、村上知行訳の水滸伝における剽窃問題などを思い合せると、名前だけ貸したものであろう。私としてはその行為を氏の為に惜む。この訳は重訳である上に不用意な誤謬多く、治洲訳に比して甚だ遜色があるからである。

【追記】雑報の記事としてはこれに止めるつもりだったが、九月号一三七頁の原忠正氏の時評に過褒な讃辭が捧げられているのを見たので、読者を誤らしめぬ為、私が徒らに放言してゐるのでないことを例示により証しておこうと思う。

尤も、英訳からの重訳である点に問題がある。原文からのズレを

指摘しても「英訳がそうになっていた」と弁解される可能性があるのだ。例えば、治洲訳で

愛らしき魔性を帯びた神話の乙女

なが奴隷を踏みしき給え

其の大理石の如きうつしみは

天人花と竜舌蘭の下に休らめて

とある四行詩は、原文では

Setz' den Fuss auf deinen Sklaven

Teuflisch holdes Mythenweib,

Unter Myrthen und Agaven

Hingeschreckt den Marmorleib.

で、右の訳文で略誤りがないが、佐藤訳は、

汝の足を汝が奴隷の上に置きてよ

あゝ、汝、半ばは地獄、半ばは夢より成る者よ

暗く沈める影のさなかに

汝が伸せし体はしなやかに輝く

とあってひどく原文に遠い。然し英訳がどうなっているか分らぬから誤訳とはいふまい二人称や呼掛詞がドイツ語のニユアンスを失つたため妙な所(例えば六七頁上欄末尾三行)もあるが、これらも大目に見よう。「そして、それ故に、あなたを虐待するやうな婦人よ」(四五頁下欄)は「その代償として」が正しいが、これも原文 *daß* が英訳者の力量不足から *therefore* と訳されていたとすれば仕方ない。

然し、英訳に *prince* とあつたからといって、それを安易に王子(六一頁下欄、八三頁上欄)と訳しては無神経である。*princeless* とあつたのだから、「無^{ワンシニツク}価値の、優秀無比の」の意を「値うちのない」(五六頁上欄)としては反対になってしまう。退屈しのぎに恋人にして玩弄したあと(手帖八十一項で紹介した場面)で、「これから二、三時間ばかり云々」(八八頁上欄)というのも滑稽で、これらは英文の如何よりも全体のコンテクストから分る筈の所だ。*Messalina* (ローマ皇帝クラウディウスの皇后だった淫虐女性)を *messaline* と取り違えて「特別織の綾絹」(四一頁上欄)と訳したのなぞ、マゾ作品訳出の資格ありや、と云いたい非常識である。「^{リリス・パルク}リリの動物園」(ゲーテが恋人リリー・シェーネマンの庭で熊として飼育される幻想を歌ったマゾ詩篇、近く訳出しよう。)を「リリー公園」(六五頁上欄)と訳しているのは、従来の各訳本も誤つた箇所が無理もないとは思ふが、真実この高名な文人が訳稿に関与したものなら、こんなことは情ない話である。

断つておくが、私はこの訳を一々原文と合せて検討したわけではない、訳文を一読しただけである。それでも、こんな類の瑕疵がまだまだいくらか拾い出せるのだ。全部あげるのは略するが、私はこの訳を原氏のように「後代に遺すべき訳業」とは考えないのである。以上厳しく評語を下したのは、原作をマゾヒストの古典として尊

重愛護するの余りである。然し原作の特殊な味は、この訳でも味わえぬわけではないのだから、治洲訳本の入手できぬ方は、この雑誌なら楽に入手でき、原作を味わえる便宜を逸すべきであるまい。マゾヒストにしてこの原作を読んだことのない方は、是非この号を買い給え、と、最後に提灯を持って置く。

尚第六十一項「毛皮のヴェヌスの邦訳」を読まれた方の為一言附け加えておくが、「性の受難者」と題する青木訳よりは、今度の佐藤訳の方がましである。

一五四 ボス著・村上仁・吉田利夫共訳『性的倒錯』(みすず書房)フロイト流の精神分析的方法とゲブザッテル一派の実存的考察とを止揚しようとする野心的著作だが、成功しているとは云えない様である。マゾヒズムやコプロラグニーの症例もあるが、質的にはとにかく、量的には貧困だから、クラフト・エビング、ヒルシュフェルト、シュテケル、エリス等の著書の持つ実例の興味に欠ける。理論に特に興味を持たれる向き以外には、必要あるまい。

一五五 雑誌「裏窓」旧風俗草紙誌の復活と目されるもの。全然黙殺するのもフェアでなからうから、サド一本槍の誌風からマゾもの併載へ変つたのを機会に、ここで誌名を紹介しておくことにしよう。尤も忌憚なく云つて、実感のない作り噺が多すぎ、ニセモノ感が強い。多様性もない。奇クと趣を異にする点である。七月号「弄獣」、八月号「いぬ」等がマゾもの。その他「大きい醜い雌に」いじめられる小さいかよい雄」というテーマの作品がいくつある。

一五六 ジラード事件の諸記事 真相を聞くと、余り屈辱的なので昂奮する。空葉莢を撒いて「ダイショープ」といっておびきよせ、それを狙い撃ちにした。エサを使って獲物を寄せておいて射つ猟師を彷彿させる態度で、これにも驚くが、その前で這い廻って投げ与えられたものを拾う日本人の姿を想像するとたまらない。米国

人側からコソ泥と罵られたって仕様がなないではないか。他方、裁判権について示された米世論は白人の東洋人に対する偏見を如実に物語る。弁護人は、日本側で裁判することを「大にくれてやるようなものだ」と語った。一米婦人は「無条件降伏した癖に」と書いた。全く、無条件降伏した時に、白人に対する裁判権を日本から永久に奪ってしまったら良かったのに……と、私の心中の白人崇拜者は切齒扼腕している。こんな日本人もいるのである。

一五七 在日米軍女性のシヨーツ禁止（三二年六月九日附各紙）

米第一騎兵師団長から東京地区米軍要員の妻と娘に対して書簡が送られ、シヨーツ、ペダルブッシュヤー（七分ストラックス）、ホールタードレスの着用が「優雅な感じを殆んど与えない」と警告された。少々長くなるが二つの感想を附け加えておきたい。

第一は、いうまでもなく、何が彼女等をして警告を必要とするほどルーズな服装をするに至らしめたか、ということである。

彼女等のそういう服装が、単に勝利者意識に基くものでないことは、独伊においてはこういう現象が全然見られないという事実をあげる丈で充分である。欧州においては、後進性を意識する米国人も、ベルリの開いた国日本では先進の優越感を持つ。そして汚れた色の皮膚、この優越の自覚が対等同格の白人に対して感じる羞恥心を減小させるのだ。（手帖第百四項参照）。終戦翌々年私達が惨めだった頃、日比谷公園内のテニスコートで練習する外人女性達を金網の圍障の外から見た時のことを思い出す。下半身のシヨーツは勿論だが上半身も海水着見たいな軽装で、汗を流しながら見事な体格の少女が跳ね廻るのがストリップ的興味を呼んで黒山の人だかりだったが、彼女等は平然とプレーしていた。猿の群に対する如く自分の半裸体を恥じなかった。魅せられた私は練習の終る迄見物が私一

人になっても金網にへばりついてたことだった……
この羞恥心の欠如が、ニューヨークなら軽犯罪になる様な避暑地の遊び着で東京市内を闊歩させる。禁止せねばならぬ程それが目立ったということに彼女等の意識的或いは無意識的の優越感を看取できるのである。

それが禁止されて、東京が植民地的でなくなることは残念である。然し、禁止が日本人側からの動きでなく米国人側からなされた点に救いがある。彼等は白人としての優越感を自肅したのでなく、男性の目で「優雅でない」と決めつけたに過ぎない。

そこで感想の第二として、私は例の吾妻氏とのズボン論争のあと記した手帖第六十二「淑女とズボン」の項を思い出す。女がズボンを穿くことをよしとしない気風が現在もあるからこそ「優雅でない」即ち女らしくない、として、禁令が出されたのである。この項一流ホールやキャバレーではストラックス姿の女性お断りの所が増えたと聞くが、この種の男性反動攻勢の一環としてこの「優雅でない」との表現を味いたい。六月十日附朝日で、牛山、柴田といったデザイナーが禁令に追随して賛成し「スタイルがよくてストラックスでもシヨーツでも似合う筈だと思っていたアメリカ人が、優雅な感じを殆んど与えないと自国人に云われているのです、況んや日本人で似合う人はごく少ない……」と、優雅と似合うということを混同して述べているのは、滑稽な不見識である。潑刺とした肢体美こそ女性の理想であるべきで、優雅など大に喰わしてしまえば良い。日本に対し、本来何の気兼ねもいらぬ白人女性達がほんの少数の在日白人老男性の古臭い感覚と意見に縛られるのは気の毒であり、その結果我々の目の娯楽も減ってしまうのは、残念なことだ。
これが一マゾヒストの感想である。



△浣腸襦袢通信▽

アブ・マニア 雑談

赤井 茂

浣腸 篇

私は今日も又、自分の願う夢を求めて、気の向くままに古本屋廻りに出掛けたのです。二軒程廻り、三軒目の本屋に來た時です。あれやこれやと気の向いた本をくつっていると、書店の若奥さんと母親だろうか、姑なのだろうか、彼女たちのこんな会話が私の耳に飛び込んで來たのです。老女の膝の上で愛らしい一年半位の女兒が「キヤッキヤッ」と云って騒いでいました。

「ネエお前、今してやったら」そうネ、でも寝る時にしてやるワ。今、機嫌が良いから」そんな浣腸が出來たのかネエ？」

と云う言葉に思わずドキリとして横目で見ると、若い奥さんの手にポリエチレン製のイチジク浣腸が握られているのです。「エーそうなの、中味がよく見えて便利でしょう。私の小さい時にはセルロイドの固いのでされた

けど」そうだね、便利になったものだ」と話していた。女兒は母親が持つ浣腸器に手を出して、無邪気になぶっている。三十分か一時間の後には浣腸の憂目にさらされる事も知らずに、便秘のためされるのだろうか、ちよっとした小さいスリルでもあった。

最近、私の校下の女子青年団の家庭常備薬及器具で一番多く使用される薬品についてのアンケートを取ったところ、五十件中、三十八件までは下剤及び浣腸器及び薬（軽便）を常備して居り、又、良く使用される薬品は浣腸であった事も面白いものでした。勿論、小さい子供のあるところは殆んどであった。浣腸は応急手当の第一法として常識になっていた点、興味深く思った。

或る薬局で買物をした時の事。私が釣銭を待っている間、中年の婦人が入って來たのです。此処は歓楽街近くなので、何処かの歓楽

街の内儀らしい小肥りの婦人なのです。「あの浣腸を下さい。」「大人用ですか。」と云って店主が一ヶ出すと「大箱で下さい。」と云って一箱買ってしまった垢抜けしたその婦人の後姿を眺めて、荒唐無類なイメージを描くのでした。

雑誌でも文学書にも浣腸の場面が描写されている事も往々にしてありますが、十数年前に読んだ事だが余りにも嗜虐的な描写だったので、子供心にも強い興奮を覚えて今だに忘れられないものです。それは講談社発行で昭和十五年頃の事だったと思います。講談倶楽部で菊池寛作の連載小説「黒白」と云うのです。中流家庭の出來事、五歳位の女の子が痙攣に罹るのです。母親は直に女中にヒマシ油を買いにやらせ、サイダーに浮かせて飲ませるが嘔吐してしまふ。そこで浣腸を行うが、すでに重症で何回も浣腸をするが、今入れた

ばかりのグリセリンのみが、オムツの代りに可愛いお尻の下に敷かれた古手拭の上に流れるのみ。母親は必死になって愛児を助けた一心から、遂に意を決して愛児の肛門に口を当て、体内の汚物を吸い出すと云ったくだりが描写されていた事が思い出されます。幼い時の事とてハッキリした内容（ストーリー）については記憶ありませんが、浣腸場面は忘れられない記憶となって居ります。

襁褓 篇

おしめに関してラジオから放送される事は多い。良く漫才でも抱腹絶倒な会話が流れて来る。「底抜け武勇伝」と云うのにも、相棒に泥棒になって貰い、夫の強い処を妻に見せ様として相談する。夜中に家に入ってくれと頼むと、相棒が「泥棒に入った時、奥さんが御小水に行っていたらどうする」としたが「おしめを盗んだら奥さんにオシメカバーをさせておけ」と云うと「まさか二十八にもなってオシメカバーなんて」「いやがるか」「当り前だ」と云った物。

又「ナルホド」と云うテーマの漫才。君は二十歳でまだオシメをしている奥さんと結婚したのか」「いや違う十年前だよ」「だって今三十だから十年前だと二十歳じゃないか二十歳でオシメをしていたのかい」「無理にオシメをさせ様としたって、イヤがってさせないよ」「当り前だ、二十歳にもなってオシ

メをしたら病人だよ」と爆笑的なのがあり、仲々興味が有り多少アブ的な物とも云えるものだと思うのです。

又、放送劇で「ジャボン玉横丁」「ヒトミちゃん」と赤ん坊の巻」と云うので、ヒトミちゃん（田端典子）と、もう一人の少女が、お隣の奥さんに子守と留守番を頼まれる。二人は鏡台の前で若奥さんの化粧品（口紅、白粉）なんかをベタベタ塗って騒いでいると赤ん坊が眼を覚まして泣き出す。二人は周章で、赤ん坊をあやすが、仲々泣き止まない。田端典子のヒトミちゃんが自慢の美声で子守唄を唄うが駄目、ミルクを与えても駄目、するとオムツが汚れているため泣いている事に気がついた。「ヒトミちゃん、オムツが汚れたのじゃないの」「そうかも知れないわ」「ヒトミちゃんオムツをした事（当て方）あるの」「ううんないの、でもミルク飲み人形にならあるワ」「人形でも一緒でしょう」と云いながら二人でオムツの交換を始める。慣れない手附でオムツを拭けると、二人が異口同音に発した言葉は「臭い」であった。「アラーお尻もオムツもベトベトよ、臭いナァ困ちやう。ネエあんたやってよ」「いやあたし」とゆずり合い赤ん坊は四、六時中動き、ヒトミちゃんの手には便がつき、ワアー手についちやうとおとなしくしてゐると泣き出しそうになる。すると隣のお爺さんが来てヒトミちゃん

に頼まれるが、お爺さんもビックリしてお婆さんを呼んで来る。お婆さんは手際よく始末するが、しかし今度換えるオムツがないが、無断で留守中の押入やタンスを開ける事も出来ず、お婆さんの前掛けやお爺さんのシャツがオムツにされるといふ面白い嗜虐的な劇なのです。妙に印象に残りました。

或る日の事、郊外へ用達しに行った時の事です。春の陽に種々の洗濯物が伸び／＼と、彼処の物干に此処の軒下にと干されており、一つの風物詩的な光景ですが、途ある一軒の物干に私の心は釘付けにされてしまったのです。と云うのは恐らく重病のためか、又は不慮の交通事故のためなのであるか、大きな浴衣地のオムツが物干竿に干されており、その横に大人用のゴム製のオムツカバーがヌメヌメした柔いゴム膜を見せて干されてあるのです。尿のシミだらうか、白く跡がついているのです。私は未だ純然たる大人用のオムツカバーの干されていたところを眼にしたくもなかったからです。御本人には悲しい辛い事だろうが、私は云い知れぬ興味に心が躍ったのです。

私の住む街の最大のデパート、M百貨店のベビー用品売場を見ると、幾種類の山と積まれたオシメカバーにも、妙に心楽しい思いが起きます。又、必ず二、三の客がいるのですが、先日も若い奥さんらしい婦人とその

妹なのだろうか、セーラー服の女学生がアレやこれやとオシメカバーを選別していたのです。"これはどうかしら"とウーリーナイロン製のアメリカンスタイルのを手にして、妹らしき女学生と話していたが、"そうネ、それもいいけど、これの方が可愛いワ"と今度は妹らしい方が赤い模様のゴム製のを持っていた。"それはゴム製でしょう。ムシたりするからどうかと思うワ"なんて話していた。

又、三人組らしき茶目気の女学生がオムツカバー売場を通りかかりにオシメカバーを見ながら、"ネエあんた、一つ買っ行って行つたらどう

奇譚クラブ旧号の在庫案内

☆復刊号の分

復刊第1号	(30年10月号)	二百円(送16)
復刊第2号	(30年11月号)	〆売切
復刊第3号	(31年4月号)	二百円(送8)
復刊第4号	(31年5月号)	二百円(送8)
復刊第5号	(31年6月号)	二百円(送8)
復刊第6号	(31年7月号)	〆売切
復刊第7号	(31年8月号)	二百円(送8)
復刊第8号	(31年9月号)	二百円(送8)
復刊第9号	(31年10月号)	二百円(送8)
復刊第10号	(31年12月号)	二百円(送8)
復刊第11号	(32年1月号)	二百円(送8)
復刊第12号	(32年2月号)	二百円(送8)

うなの"アラ、いやだ。そんな物は用がないワ。私はもうオムツカバーはいりませんワヨーツ"とキヤツキヤツと云いながら去っていったが、何んでもない事ではあるが興味を持つ私には心楽しいものなのです。

市内の某藤局のウインドウの中に朱書で、"大人用オシメカバー〇〇〇円"として飾ってあったのです。人通りの多い繁華街の事とて人目を引くのは当然で、矢張り物好きと云うのか、大きなゴム製のオシメカバーと云うところに妙な感情を抱くのだろうか、ウインドウの中をのぞいた若い女性が、お互に顔を見

復刊第13号	(32年3月号)	二百円(送8)
復刊第14号	(32年4月号)	二百円(送8)
復刊第15号	(32年6月号)	二百円(送8)
復刊第16号	(32年7月号)	二百円(送8)
復刊第17号	(32年8月号)	二百円(送8)
復刊第18号	(32年9月号)	二百円(送8)

【代理部だより】

○本誌の復刊号は上記の通り在庫しており、ますから御入用の方は、お申込下さるようお願いいたします。三冊以上まとめて御注文の際は送料は当方にて負担いたします。

○休刊前の本誌の旧号は殆ど売切れておりますが、只今、昭和30年2月特大号から同年5月特大号まで、若干在庫しておりますから、お申込下さい。各冊一部百四十円(送料十六円)です。右以外は全部売切で

合せて何かさきやき合せて去って行く。婦人と云った姿が又、妙に五体をゆさぶるのです。これを見た時は、私も思わず云い知れぬ物をおぼえた事は当然でした。然し数日後、このオシメカバーはウインドウの中から消えていたのです。誰かが買って行つたのだろう。広い世の中には赤ん坊の様にオシメをまとって明日への命、未来への命を求めている人があ

る事を強く感じたのです。アブブレイのためでなく、斗病のために不幸な人がある事を痛感しつつ、私は私なりのアブマニアのイメージを追って、明日も又、小さなスリルを求めて歩く事でしよう。

すから悪しからず御辛抱願います。

○アルバム、第一集、第二集共売切です。

○三条春彦画、「時代物責絵巻」未製本の分が若干残っておりますので、御希望の方はお申込下さい。八枚一組一揃 百五十八円(送共)です。

○代理部分譲品総目録の残部がなくなりましたので、この機会に以前の分は打ち切りといたします。但し特に御希望の方に限り当分の間、焼増はいたします。

○新しい目録は都合により延期となりましたので、お申込下さいました方は暫くお待ち下さい。出来上り次第お送りすることに致します。時期は只今のところ未定です。それまでは本誌に発表の目録により御注文願います。



捕縄術入門

獄 収 一

今までは、私の少年矯正院に服役中の体験について書かせて戴きましたが、今回は出獄後のことについて書かせて戴きます。

裁判のやり直しの結果、もともと無実の罪でしたので、無罪になって出獄しました。中学校の退校処分も取消しとなり復校しましたが、何分、三カ月間、さんざんな目に会わされたので、全身に捕縄の跡が残り同級生も、とても変な目で見ていた様でしたというのは入獄中は裸に近い恰好で捕縄をかけられ、熱帯の強い太陽の下で仆かされていましたので、捕縄の後だけがくつきりと白く残り、とても目立ちました。普通の学科の時間はともかく、体操の時はランニングシャツとパンツ一枚になりますし、又、水泳が正課でしたので、裸になると特に目立ちます。体操の時間

は同級生ばかりなので、見なれてしまったたいていして気にとめませんが、水泳の時は他の学年も一緒ですので、上級生等は、「あの首と腕に白い跡のあるやつが監獄帰りか、全く皆の面汚しだ。気合いを入れてやろうか。」

という様な声も聞く事があり、その時は全く嫌な気持ちがありました。家の都合で寄宿舎に入っていました。ここでも上級生に時々そんな理由で殴られました。矯正院在監中に物凄く鍛えられていますので、二つや三つ殴られても少しもこたえませんでした。

或る土曜日、同級生達と一緒に町に買物にいったの帰途、駅の方から一人の少年が高手小手に縛られて、看守に縄尻を取られて護送されているのに出会いました。つい先頃までの自分の体験した事が思い出されましたが、

同時に矯正院で植付けられたマゾ的な気持が湧いて来て、懐しさの心がぐっとこみあげて来ました。私が急に立止まったものですから看守がこちらを振り返りましたが、とたんに向うから、

「おい、獄じやないか、どうしとるか。」

と声をかけました。よく見ると、私が嘗て反抗の罪によって重屏禁に処せられた時の九号監のN看守です。なにしろ相手が看守ですから、同級生の手前、どうしてよいのやら困っていますと、N看守は

「今、こいつを護送中だから話も出来んが、君に一寸話したいことがあるのだ。もしよかったら家へ遊びに来んか。」

と云って名刺を呉れました。そして少年を連れて行ってしまいました。同級生達は顔を見合せていましたが、

「獄、君もあんなに縛られたのか。」

と聞きました。が黙っていますと、

「あのNさんは道場を開いているので、僕もちよいちよい通っているが、君もNさんを知っているのなら習いに行けよ。」

と云いました。私は、「それもそうだな」と言葉を濁し、寄宿舎へ帰ってから夜、舎監

の所へ行って道場へ通う為の許可を貰いました。道場へ行く途中、同じ学校の生徒、四、五人と一緒にいました。道場はなかなか立派なもので、剣道場と柔道場がありました。昼

間は警察官や看守の練習場となつて居り、夜間は主として町の青年達が練習していましたが、道場主はN看守の父で、Nはその長男だそうです。Nに取次いで貰い、Nの部屋に案内されました。色々、出獄後の事について聞いた後、

「お前が重屏禁になつた時、普通の者なら縮みあがつてしまふ処だが、お前は案外、平気だったか、或は縛られるのが好きなのか。」と聞きました。私は余り、そのものずばりの質問に返答に困りましたが、

「実は俺は、この道場で捕縄術をやっている。現在、助手に俺の弟を使っているが、一人ではどうにもならんで、今まで二、三人頼んでみたが、嫌がつて一度で断られてしまふんだ。どうだ、捕縄術も教えてやるが手伝つて呉れないか。」

と云いました。私は出獄後は、寄宿舎の便所等で秘かに自縛して楽しんでいましたので二の返事で承諾してしまいました。Nの喜び様は一方ならぬものでしたが、私も学業の関係上、土曜日と日曜日のみという約束で、その日は帰りました。翌日、Nが学校に来て顔見知りの武道の教師に会い、私を弟子にして土曜日と日曜日に練習させたいのだから頼んだそう、武道の教師から舎監に話した結果土曜日の午後から日曜日、一杯と月曜日の朝の七時まで、N道場で生活してよろしいと

許可がありました。私は余り嬉しくなかったのですが、Nの喜び様は相当なものでした。

次の土曜日よりNの道場へ行きました。その日は先ず稽古着で袴をつけ、弟子入りの式といったは大袈裟ですが、一応、式をやりました。そして捕縄術の練習場へ連れて行かれました。この練習場は柔道場の奥にあつて、十畳位の板の間の部屋で窓も遮蔽してあり外からは内部が見えない様になっていました。部屋の隅には囲いがしてあつて、脱衣場がありました。又、この部屋の隣りに一間巾の倉庫があると思つていましたが、前から見ると普通の板の引戸になっていますが、その戸を開けると中は丈夫な牢格子があり、内部は完全な牢屋になっていました。私はそれを見たのとたんに、何となく興奮しました。捕縄術の練習場は、普通の日には柔剣道と同じく、警察官や看守の練習場に使われているのですが、夜は日中、練習出来なかつた者のみ来て、一般の人は練習に来ませんでした。捕縄術は必ず縛られる相手が居ないと練習出来ません。今まではアルバイトを頼んでいたのですが、皆、嫌がつて止めてしまふので、私に目をつけたという訳です。早速、練習にかかりましたが、先ず縛られるための練習です。最初の二十分間、Nの指導によりアクロバット様な体操をさせられ、次にパンツ一枚になつてマッサーシして貰うのです。これは縄が直接肌

に当たるところ、首、二の腕、小手等を丹念にタオルで冷水摩擦してから、オリブ油を薄く塗ります。それからNは教範を見乍ら私を縛つて、

「これは、きょうのむねはりだ。この縄は胸をしめつけて苦しいだろう、どんな工合だ。」と聞きました。私は暫くぶりで縛られたので、刺戟が強くて、それどころではありません。私が黙っていますとNは気がついて、

「おい獄、ひどく興奮しているな、今からそんな事では駄目だ、少々冷してやる。」と云つて、縛つたまま風呂場へ連れて行きました。途中、Nの家人に会つた時はハッとしましたが、Nは平気で

「今度弟子入りした獄というやつだが、少し苦しがつているから水で冷やしてやるんだ」といつて、けろりとしています。こんな事は度々あるらしく、家人も平気な顔で

「まあ、せいぜい練習して下さい。」と云われた時は、全くほつとしました。それから水風呂の中へ漬けられましたので、やつと興奮がおさまりました。そして元の場所へ連れて行かれてから、体の締め直しを聞き乍ら、色々工夫していました。一時間位、立つと練習を止め、体操を十分位やらされ、十分間マッサーシをやるという工合に、土曜日は二回、縛られる練習でした。矯正院では惨々ひどい目に会っていますが、この様に型式

通りに縛られたのとは矢張り違います。又、縄受けと云って縄を受ける時の基本動作は、何時間もそのままにしているても、体の感覚が無くならない様に、特に手が痺れない様に工夫することが大切なものです。人を縛ることも自分が縛られて見て工夫するという様なやり方でした。二回、練習が済むと今度は柔道の練習をさせられ、それも相手を縛るためのものです。基本から教えて呉れました。「袖絡み、引倒し」等を繰り返して教えて呉れました。そして次は結縄法で、結び目の練習です。これは棒に縄をかけて練習するのですが、引き結び、止め結び、本結び等で、何秒以内にと制限して訓練するのです。凡て練習の時はNが鞭を持っていて、間違えると尻をびしりびしりと打つので、回を重ねる毎に上手になりました。それが終ると今度は、捕縄練習場とその隣の部屋の拭き掃除です。掃除を終ると検査です。そして気に入らぬ所は何度でもやり直しをさせられます。やっと終ったら風呂に入れて貰い、風呂から上ると稽古着に袴をきちんと着けて、道場主の所へ連れて行かれて挨拶させられました。いわゆるお目通りという所でしょう。そして道場主から「この道は大変辛い、心身共に不撓不屈の精神を養うのが第一の目的であるから頑張るように」との話がありました。その後、Nの部屋で今日一日の動作について批評があ

り、縛られる時はどのようにすれば体にこたえないか等の、解剖学的な話をして呉れました。

やがて夕方になると、Nは「今までは捕縄術としての訓練だったが、これから躰教育をやってやる。お前の好みも知っているから、十分楽しませてやるからこちらへ来い」と云って練習場内の更衣室へ連れて行きました。又、練習か、やれやれと思っと思っていますと「脱衣してそれを着ろ」と云って、青い風呂敷包をぽいと放ってよこしました。中を開けて見ると私はぎくっとなりました。中味は、私が嘗て在監当時に着ていたものと同型式の獄衣が入っていました。私は茫然としていますと、「さあ、早く着ろ」と怒鳴られました。赤土色のランニングシャツとパンツを着て、その上から獄内では長衣と称する、半袖で下は膝までしかない着物を着、三尺しかない帯をしめますと、「よく似合うぞ、お前はあの姿の方が適当かも知れんな」と笑っていました。が、「では今から躰のため、朝の六時まで少年囚として牢にぶちこんでやる」と云って素早く長衣を剥ぎとり、ランニングシャツとパンツだけにして、後手十文字にきびしく縛って「歩け」と背中を突かれました。そして隣の戸を開け、牢内に入れて繋留環に繋いで、戸を閉め鍵をかけてしまいました。牢内には五燭位の暗い電灯があるだけで、先日、出獄し

た獄舎へ再び連れ戻されたような気がして、本当に素晴らしい快よさに浸っていますと、三十分位して戸が開いたので、Nが来たのかと思います。稽古着、袴の同じ年頃の少年が食事を持って入って来ました。驚いて顔を見ると、同じ学校の一級下の生徒です。自分の浅間しい姿を見られたので、穴があったら入りたいような気持ですが、縛られているので、どうすることも出来ません。すると少年は、

「僕は兄から、獄さんが矯正院に入れられていたことや、その他、色々のことを聞いていました。僕の家はこんな道場ですから、小さい時から色々鍛えられましたが、捕縄術だけは苦手でした。それで僕は、いつも此処へ入れられました。しかし獄さんは、捕縄術に大変に興味を持って居られるそうで、兄も非常に喜んで居りました。武道というものは苦行です。獄さんは今日から僕の弟子です。お互に楽しくやりましょう。道場でのことは、学校等では一切他言しません。もし万一、獄さんの噂が立ったら、僕は獄さんよりどんなことをされても構いません。それから今後は獄さんが新入の躰で当分この牢内に泊られるでしょうが、その間、色々とお世話する様いにつけられていますので、何でもおっしゃって下さい。」

と云いました。私はみじめな恰好なので

「どうかよろしく」と云うより他になく俯向いていますと、

「食事を喰べさしてあげます。」

と、いきなり頭を後からかかえて、無理に口の中へ食物を入れました。やはり小さい時から鍛えられているだけあって、取扱いは、なかなかうまいものです。食事は非常に油っこいものでしたが、十分ばかりで無理に終らせてしまいました。その後、三十分ばかり色々注意すべきことなどを聞かせて呉れました。それから根堀り葉堀り、私の獄中生活について聞きましたが、最後に

「僕も兄より、獄さんのような好みにされてしまいましたので、いつか二人で練習しましょう。兄にもそう云っておきます。」

と云って出ていきました。やがて一時間もした頃、Nが答を持って入って来ました。

「おい獄、俺は貴様の様なやつを探していたのだ。俺は若いやつを縛り上げて、悲鳴を上げさすのが好みだ。お前が重屏禁を受けた時こいつは物にならんかと思っていたら、運よく物にすることが出来たが、お前も好んで来たのだから、十分楽しませてやるぞ。」

と云って、縄を「きょうのむねはり」に縛り直させ、尻を答打ちしました。久方振りに答打たれて、頭がジーンとして目がくらくらしました。

「どうだ、素晴らしいだろう。だが、こんなこ

とではすまんぞ」

と云って、続けてとうとう五十まで答打ちしました。それから今度は、俯伏せに板の間に寝かされて足止め縄をかけられ、足で惨々尻を蹴飛ばされました。しかし、これはたいしてこたえませんでした。これが終わると、牢格子に体を縛りつけ身動きも出来ないようにされました。

「よし、今日はこれで止める。朝の六時までぶち込んで置くから、そのつもりでおれ。」

と云って、さっさと出ていってしまいました。暫くしてNの弟が入って来て縄をといてくれた後、牢内の掃除を私に命じました。言葉は丁寧ですが、答を片手に持って気に入らぬ所は、びしびし答打って掃除をさせました。それが済むと、赤土色の長衣だけを着せて、いつの間にか持って来たか手錠を、目にもとまらぬ早さで両手につけ、毛布を二枚敷いた上に寝かせ、上に一枚かけて

「では、明朝の六時までお休みなさい。」

と云って、戸を締め錠をかけ出て行きました。

その後、彼には随分捕縄のことを教えて貰いましたが、彼にはN以上に縛られました。今でも二の腕や手首の皮の一部が堅くなっているのは、その時の名残りです。

さて、その夜は何も知らずにぐつぐつと寝ました。手が不自由なことも忘れて、久方振

りで牢内に寝ることが何ともいえない快さでした。

「おい、起きろ。いつまで寝ているんだ。」

という声で目が覚めました。見るとNが立っています。着ている物を全部脱がされ、顔を洗われた後、練習場や牢内の拭掃除です。この時はNの弟も同じ恰好で、二人で掃除をしました。Nは弟にも、私同様にびしびしやりました。それが済むと、体操、朝食の後二人でお互にマツサージをやりました。この時、Nの弟の体格を見ると、私よりやや身長は低い、なかなかよい体格でした。Nは私等二人に、準備して練習場へ来いと云いました。稽古着、袴で行きますとNは弟に「今まで教えたことを獄にやつてみる。獄はお前の能力のある限り抵抗しろ。」

と云いました。やがて始めましたが、なにしろ私は昨日から始めたばかりですので、如何に抵抗してもNの弟に何なく押えられ、丁度、蜘蛛が虫を捕える様に縛り上げられてしまいました。この様子をNは満足そうに見ていました。そして今度はNをモデルにして私に十文字縄から教えて呉れました。始めて人を縛る気持は、又、自分が縛られるのと違った快いものです。先ず両手を後に廻しイカダに縛り、その縄を首の左より廻して吊り、左の二の腕、右の二の腕と廻して締め、背の中央でまとめるといったものでしたが、肉体を

縛る快さは格別でした。約二時間、この様に
して相互練習をさせられ、後は昼まで二人共
練習に来た者のモデルに使われました。その
中には警察官も居りましたが、私を見て
「お前、獄じやないか、いつ出て来た。どう
して此処へ来たのだ。」

等と聞く人もいます。その都度、Nが訳を
話して呉れましたが、相手は「ふうん、無実
か」と素気なく云いますが、誰一人として気
の毒だとは云って呉れませんでした。午後も
三時間程モデルに使われ、一時間、相互練習
をやらされました。Nの弟が失敗すると、N
は物凄く怒って「今日はお前も牢へ入れてや
る」と申し渡し、それから後は私と同じ取扱
いでした。夜になって二人共、縛り上げられ
答打たれました。この様に昼間は捕縄術をや
り、夜はプレイと全く素晴らしいものでした。
しかし道場から帰って来た時は、二度と行く
まいと決心するのですが、やがて土曜日にな
ると授業が終るのが待遠しくてやりきれませ
んでした。そして三ヶ月もたつと弟ともすつ
かり仲良くなりました。

いつかの土曜日のことでしたが、Nの弟と
柔道をやっていた時、私が反則して彼を少々
痛めつけたことがあります。するとNは大変
怒って「獄を罰してこい」と弟に云いつけま
した。捕縄術は反則を犯すと危険を伴うもの
ですから特にきびしいのです。彼はその場か

ら私を「無縄引立て」という方法で牢まで連
れて行き、きびしく縛り上げました。そして
「獄さん、今から一時間、反則の罰を受けて
貰います。」と云って、牢の中央に正座をさせ
られました。そして足の拇指を重ねて両股を
直角以上に開かされ、股が閉じられないよう
に二尺位の棒をはさませられ「姿勢を正して
下さい」と云いました。しかし十分もすると
腰がひどく痛んでやりきれません。「許して
下さい」と頼みましたが、「駄目です。時間
一杯は務めて貰います。」と云うだけです。余
りの苦しさは一寸、前かがみになると「姿勢
を正しく」と云う声と同時に背にびしりと答
が来ます。その痛いこと……こんな苦しい
罰は矯正院でも受けたことがありません。全
くその道の研究をした人でないと考えること
の出来ないようなやり方でした。やっと許し
て貰った時には、腰より下の感覚は無くなっ
て居り、とても変でした。しかし仰向になり
二十分位マッサージュして貰ったので、やっと
歩けるようになりました。

又、或日曜日でしたが、Nは私と弟に
「今から一時間半程、お前等に縄をかけて歩
いて貰うから用意をしなさい」

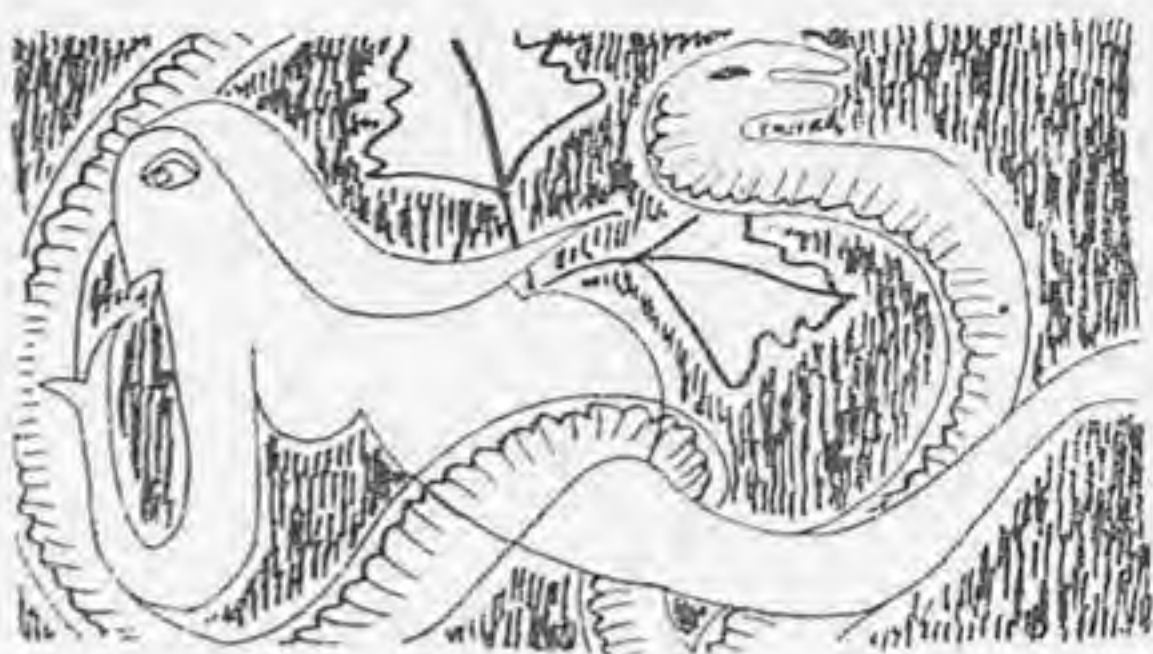
と命じ、私は「きょうのむねはり」Nの弟
は「しんのむねはり」に縛られ、Nは稽古着
袴で縄尻を取り歩かしました。そして道場内
をぐるぐると一時間半位、休みなく歩かされ

ました。はじめNが縄尻を持っていました
ししばらくすると二人の縄尻をつなぎ、N自身
は椅子に坐って「もっと早く歩け」とか「駈
け足」とか色々命じました。二人共ふら／＼
になって歩いたり走ったりしました。汗で捕
縄がしまつて来て、とても苦しいですが又、
縄の弛んでくる所も出来ます。Nは、その捕
縄の弛んでくる欠点を探すために私等を走ら
せた訳です。この様にしてNの縛り方はだん
だん実用的に改良して行かれました。

又、或る時には道場構内のプールで、水泳
を教えられました。これは「両手両足がらめ」
と称して、後手に縛られ両足首も縛られ、
丁度ほうふらが泳ぐようにして泳ぐ方法です
が、ただでさえ水泳の下手な私は、そのまま
水底に沈んでしまい、水を飲んで苦しみました
が、五、六回位より、どうやら足と頭で泳
げるようになりました。

この様に、土曜日、日曜日は苦しいが又、
楽しい日々でした。約一年ばかり通いました
が、中学校卒業と同時に工専へ入学のため、
内地へ帰らなければならませんでしたので止
めました。その後、日本も敗戦でNも引揚げ
て今はどこに住んでいるかと、何時も考えて
います。

若し、NやNの弟のような人が居られまし
たならば、飛んで行きたいような気持です。



(戦争末亡人の告白)

ヒ ッ プ 受 難

花 田 育 子

私は昭和十九年、二十一歳で結婚しましたが、まだ新婚五ヶ月の夢も浅いのには夫は新京の関東軍に応召し、終戦このかた未だに行方不明で生死のほどわかりません。つまり私は戦争末亡人なのですが、終戦後うなぎ上りに上って停止するところを知らぬ物価には全く弱り果てました。

父母には幼少の頃、死別して実家に兄が一人居りますけれども実は兄の反対を押切つて恋愛結婚をした手前、こんな場合でも兄に頭をさげて救いを求めることが負けすぎらいで

意地っ張りの私には出来ませんでした。

私に好意を寄せる適当な男性が現れないではありませんでしたけれども、夫が生死不明では再婚も出来ず、困窮に同情してくれたのが或る会社に勤めている女学校時代の友達で会社の謄写印刷の仕事させてくれました。

会社の謄写版を自宅に運んで、与えられた原稿を原紙に書いて、云われた枚数だけ刷つて、それをこよりで綴って届ければ良いのです。幸にして女学校時代から字は上手だと云われていた私ですので、慣れてくるに従ってうまく刷れるようになり、会社の評判もよく

社員の人達の好意で、よそからの註文も受けるようになって女一人暮らしのつゝましき生活には、どうにか困らぬだけの収入を得るようになりました。

生活に僅かでもゆとりが出来るようになる、と、私もやはり若い女の身ですから、戦後の解放された風潮と相俟って、独り居をかこつようになったのも境遇上、又やむを得ないこととお察し下さると思います。昼夜の別なくガリ版の字を書いておれば運動が不足しますので、私は健康を考えて暇を作っては郊外を散歩しました。女学校時代から水彩画が好きでしたので漫然と散歩するよりも風景の写生をして楽しみました。

自分のことを申せばおかしなことではありますが、私は幾分小柄ながらも日本人には珍しい位均整のとれた体で、殊に臀部に魅力のあるスタイルだと自負しています。容貌だつて自惚かもしれませんが十人並以上の自信はあります。それに子供を生んでいない為か年齢よりはるかに若く見られるのです。このようない人暮らしの女を好気心で見るのは男の人達の浮気心というのでしょうか、いろんな男の人から誘惑の手がさしのべられました。金に不自由はさせないと言って七十何才のお爺さんから結婚を申込まれたのには驚きもし悲しくもありました。然しいくら貧しくても私には私なりの誇りがあるのです。或る人に

は柳に風と或る人には断乎と肘鉄砲を喰らわせた。夫は生死不明のまま七年八年と歳月がたちました。こうなれば法規の上からも正当な再婚が認められますけれども、私が一人でいるのは何も夫に操立てをしているわけではありません。信頼が出来て愛情の持てる相手が現れたら再婚も致しようが、幸か不幸かそんな男性にめぐり会わなかっただけのことです。

○

昭和二十九年の春、私はもう三十一才の年増になっていました。東に三里の山の中に由緒あるお寺があつて桜の名所であります。私はお弁当をこしらえ写生道具をたづさえて朝から一人でお花見に出かけました。お寺の境内ではあちらこちらに酒盛りが開かれ、離れの一室では俳句会が催されているらしく、私は写生の場所を求めて大木の茂った淋しい裏山道を登って行きました。

少し深入りすぎたと思うところに岩清水が湧いて僅かばかりの草地になっていました。で、草に坐して鶯の声を聞きながらお弁当を開いていました。

そこへ流行歌を合唱してどやどやと山を下って来たのが五人連れの若者で、私の姿を見るなり酒の酔に勢づいて淫らな冗談口を叩きながら近よって来ました。手猿ぐつわで口を押えられ、手取り足取り引っかかえられて林

の中に連れこまれ、そこで彼等から、どんな目にあわされたか、自分で書く勇氣を持ちません。しかし、私の氣力は余程しつかりしていたとみえて、こんな無慙な目にあいながらも彼等が逃げ去るまで自失もせず意識を保ちましたが、その間、絶えず鶯が啼いていたことを知っています。私は暴行を受けた末に殺ろされていたと言う新聞記事を度々目にしていますので、ここで逆らつて殺ろされてはつまらぬと思い観念の目をつぶりながら彼等のなすがままに身を投げ与えたわけでありました。こんな山の中で、弱い女の力はどうにもならなかったのです。

その後何のこともありませんでしたので彼等が悪い病氣を持っていなかったのが不幸中の幸とでも申されましょう。これが夫と別れてから八年目に不可抗力ながら異性に接した不本意な最初でありました。

○

悪いことは続くもので、しとしと降りしきる其の年の五月雨の頃でありました。謄写版の仕事が忙しくて二た晩と云うものはろくに睡眠もせず其の夜もおそくまで原紙に向つて寝につきましたが、ハッ！と驚いて目をさました時は、もう猿ぐつわをはめられていました。熟睡していたとみえて迂闊にも賊が侵入するのに気がつきませんでした。曲者は覆面をしているので人相はわかりませんが、

私が目をさますのを見てニタリと笑つたらしいことは眼の表情でそれと察することが出来ました。彼は眠りこけている私の枕元で暫く私の寝顔を見ていたのではないかと思われまふ。恐れ戦く私の目の前で出刃庖丁をグサ！と畳に突き立てて騒げは命が無いぞと言う暗示を与えましたが、私はたとえ猿ぐるわをはめられていないにしても恐怖のあまり声も立て得なかったものと思います。彼は私の手足を細引様のもので引っくくつて自由を奪つてしまいました。それから古びた黒い皮の靴をあけて取り出したのが何と浣腹の道具なのです。リスリンとおぼしき液体を壺から浣腸器に一ぱい満たしているのを見た時、これはとんでもない変態男だと悟りました。こんな変態な人間は往々にして極端な残忍性を帯びているのでどんな恐ろしいことをやりかねないと思えば、逆つたら悪いと仕方なく彼の為すがまま人形のようにおとなしく従わざるを得なかったのです。

彼は最後に手足のいましめも猿ぐつわも解いて、さて、きちんと正坐して、いともていねいにお辞儀をして其のまま出て行つてしまいました。彼は其の間ただの一口も物を言わず、そして何一つ金品も取らずにおとなしく出て行つたのでした。

○

機会に恵まれなかった例の会社の友人が目

出度く結婚することになって、私が其の後任に採用されたのは昭和三十年の四月でありました。これで生活もまず安定し現在多忙な事務を日々楽しくはげんでおります。

庶務課長は大学を出た気品のある温厚な紳士で、さぞかし立派な奥さんがお有りだろうと思っていましたところ四十才にもなつてまだ独身と聞いて意外に思いました。私が課長の人柄に好感を受けたのは今に始つたことではなく謄写版の刷物を届けに行く折々に、部下に対する態度から察しても仲々立派な人だと思っていました。何も好男子で風采が良いからと言う浮氣な考えではないのです。私は課長に対する感情を憤み深く仮りにも外に現れないように秘かに一人の胸の中でのみ燃していました。課長も私を悪く思っていないことを女性特有の敏感さで見えてとっていました。

三条春彦・画

未製本 時代物責絵巻

八枚一組 百五十八円（送共）

【内容】一、山法師と静御前、二、女スリと岡引き、三、淀君と千姫、四、犬公方と侍女、五、八百屋お七の最期、六、新選組と芸妓、七、十郎左エ門と腰元、八、小紫と悪旗本、以上八場面。

然し謹厳な課長は表面ではそんな気持を素振りにも出しません。それにしても自宅には婆さんを雇つてまで一人で居る課長のことが何としても腑に落ちません。

或る時、私は課長のお供をして其の日帰りの出張をしました。用件はすぐに片附いたので二人は映画を見たり、中華料理を御馳走になつたりして、その日はなんにもなく帰りましたが、お互は口にくそ出さなくても此の日以来、急に心と心が接近したように思われました。そして半年後には上役下役を通り越して休の關係こそありませんが氣持の上では全くの夫婦か恋人同様になつてしまつたのです。私はもう彼の無い人生と言うものは凡そ味も素っ氣もないものになつてしまいました。が、四十才まで独身とは何の為か？ 何かそこには事情がなくてはならぬ。何処かに女が居ないか？ 或は悪い所へ遊びに行くのではないかと一応誰でもが抱く疑を持つてみましたが、彼の私生活はあくまで潔癖で、これと言ふスキヤンダルも耳にしませんでした。私には納得が参りません。遂にあたつてくだけると言う氣になり彼を誘つて土曜の午後から隣県の温泉へ旅行をしました。この二人を誰が夫婦でないと思ひましたよう。山の温泉は静かで谷川の音のみが高かったです。対岸の紅葉は夫婦ならぬ二人の顔にまで照り映え、夜となつて酌んだ淡い酒の酔は旅情を深くし

ました。ここで私は身も心も彼に捧げたかつたのです。それなのに彼の悲痛な言葉は私を驚かし、失望させ、彼に限りない同情を起させ、果ては彼の手を取つて泣きぬれてしまいました。

彼は結婚の出来ない不幸な体だそうです。人の夫たる資格のない男だそうです。父となることも、妻に子供を抱かせることも出来ない哀れな体だそうです。彼は長い間ずいぶん医療を尽したのにもかかわらず生れながらの世にも不幸な宿命を帯びた不具者だったので。彼が不具者とわかつてから私の愛情は益々つのる一方で彼を一生淋しい独り者で暮らせることは私の氣持が許しませんでした。たとえ形だけでも妻となつて彼と家庭を作つて彼の面倒を見ることに女性としての喜びを感じようになつてしまつたのです。

形だけの夫婦は必ず破綻が起る。人間は精神ばかりで生きられるものではない。人生の幸福は造化の神祕に酔い呆れることである。すまないが縁なきものと諦めて他に良縁を求めて幸福な人生を送つてくれ。自分の不幸を人にまで及ぼして運命を狂わせるような罪を作りたくないと彼は申しますが、医者で治らぬものが私の情熱で治せぬと断言出来ましようか。私は熱意と忍耐の愛の至誠をもって彼を完全な男にしてみせたい。若しそれが出来なくても私は悔ゆることなく貞節な妻として彼と人生の旅路を共にしたいのです。

美容病院

久留木 栄

(一) 松井美容病院開設

美容病院開設！ 若い婦人の方に限る。美しくなりたい人に告ぐ。美しくなりたい人はすぐ来れ！ 肌にあざわしい化粧品、個性ある衣服のデザイン、顔の形を生かした化粧法の指導、バスを使った全身美容、ホルモン療法、太陽灯照射、マッサージ、豊胸術、隆鼻術などの整形手術、ボディビル、やせる方法、食餌療法などよろず相談に応ず。医師、歯科師、美容師、体操教官、デザイナーなど指導員多数を揃えバス、パリマセット、美容道場、整形手術室、裁断室など施設も完備。入院治療にも応ず……

東京都山手区池中町二一 院長整形外科医学博士 松井重年

副院長 齒科技工師 河野 猛

美容師 桑野ミチ

デザイナー 山形光蔵

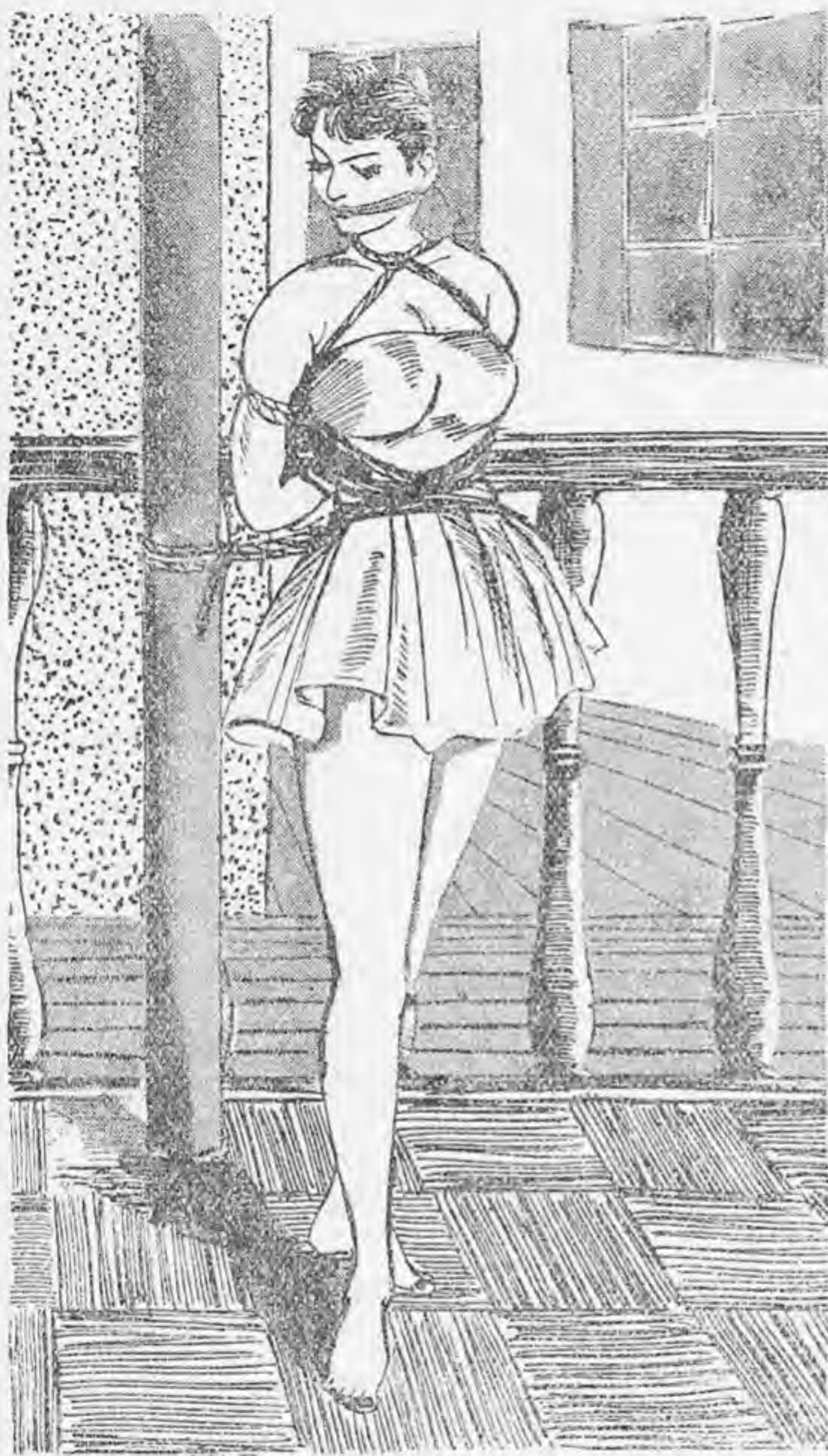
体操指導教官 小野茂夫

こういう広告がここ一カ月ばかり続いて新聞に載った。どこを向いてみても、この世の中に男女がいるかぎり美人亡者は多い。そこをねらった、科学的な金もうけの手段であることはこの広告の内容からして明らかだ。だが、近頃はやりの温泉センターや整形手術、パーマ屋を結びつけた総合的大規模な美容センター、美容ビル、美容病院の経営とは……なんと素晴らしいアイデアではないか……たしかにこういう商売は誰でもやってみたくなるものだ……だから、この松井美容病院は開店そうそう大繁昌である。私はこの松井美容病院の立案者、兼出資者だ。私はこれから松井美容病院の実状……いや看板にない性格をお知らせしようと思う。

(二) 入院患者木村愛子の経験 その一

(心理的美容法の巻)

木村愛子は丸石百貨店の呉服売場の店員である。出勤の途中新聞で美容病院の広告をみて、ふと行ってみたいと興味をそそられた。というのは彼女には田山隆行という同じ百貨店の企画部につとめる



意中の人があったが、この人は特産係の売子、好村光枝とも仲良しでいわば木村愛子はこの好村光枝とライバルの関係にあった。ところがその意中の人、田山隆行が最近「俺は肥満型の女より筋肉質の女の方が好きだ」と同じ企画部の同僚池上敬夫にもらした……と池上が愛子にささやいたからだ。愛子は池上の中傷かなと思った。肥満型であることに間違いはないのだからくやしかった。別段とりたてて肥えているというわけではないがやせたかった。彼女はこの広告をみてあれこれ考えたすえ、ついに病院訪問を決心した。

彼女は月曜の午後、同僚にたのんで、家事の都合で早引きすると

いって病院に出かけた。

木村愛子は身長一メートル六〇センチ、体重五十一キロ、胸囲八十九センチ女としては大柄な方である。一見して肥満型とはみえないが、良くみると上手に着こなした洋服の下からみえる四肢にそれらしいところがみえた。生まれて二十一年間、別に肥満型を苦にすることはない。むしろキングサイズが好まれる現在では誇りたいくらいである。だから口惜しまぎれにやせたい相談に出かけたものの心は微妙である。

山手区池田町の停留所でバスをおりると、大きな五階建ての白い

ビルが見えた。その入口に美容センター、松井美容病院という看板がかかっている。繁昌しているとみえて人の出入りも多い。愛子は病院を見るが見るまで小さな、ひっそりとしたところにあるパンガロ風の洋館かなと勝手な想像をしていたので、びっくりした。そして建物の中に入って二度びっくりした。というのは建物の内部が非常に明るいこと、水玉模様のそりいワンプリースを着た粋な姿の事務員らしい女の子たちがきびきび歩いていたこと、雰囲気は病院という名とは全く逆に明朗であることなど

である。愛子は好印象を抱いて玄関をあがり、ハイヒールをスリッパにはきかえた。玄関のつき当りには大きなカウンターがあつて受付とかいた三角柱が立っており制服の事務員たちが押しかけるお客の相談をうけている。見廻すとお客のほとんどは皆若い婦人だ。なかには四十台の人もあるらしいがほとんどは三十台二十台である。

美しくなりたいという希望は誰もかわらないとみえる——と木村愛子はなんとなくおかしかった。廊下は立派な石だたみで、壁はまっ白に近いクリーム色、その壁の一隅にこの美容院の見とり図が書いてあつた。それによると一階はバス・セクター、二階は総合美容院すなわち、パーマセットを受けるところ、三階はボディビル道場に撮影室——この撮影室はできあがつた美しい顔、かたちを記念にとるところである。四階は衣服相談所およびデザイン研究室、図書室美容博物館、五階は整形外科、美容相談所、歯科医室で一階と四階五階に、マッサージ室があつた。このほかにもレントゲン室、紫外線照射室、放射能線療法室などがある。その種数の多さ複雑さは木村愛子の頭をはるかにこえていた。マズシイ財布とにらみあわせ彼女は溜息をついた。

これじや一体どこに行つたらよいのだろう。

とに角彼女は例の水玉模様の事務員のところに行つて勇気を出して来意をつげた。するとその女の子はそれじやとに角美容相談所で相談をお受けになるのが最適です。と五六番とかいた赤色のセルロイドの札をくれ、カルテをとりだし住所、氏名、年令、生年月日、職業を記入して、五階の美容相談所の入口まで案内してくれた。

美容相談所は整形外科の隣に位置していた。というのは相談にくる患者の大半は整形外科に廻されることが多いからである。クリム色の扉に金文字で美容相談所とかいてあつた。その扉をあけて中に入ると、待合室になっており、一方の隅に受付があり、窓口の女が愛子の札を要求した。愛子はそこで待たされた。待合室にはコラ

・モードとか美容学界とかいう流行雑誌、研究雑誌があつた。愛子はふとそれを取りあげると、新しい美容学の研究とかいて副院長河野猛の名が出ていた。するとこの病院は専門家の方でもかなり評価されている、信用にたる病院なのだと思つた。相談所には五人の先客があつた。そして皆順番をまっていた。鼻の低い人、額に切傷のある人、顔もからだも美しくどこに病気があるのか文句のつけようのない人もいた。そういう人を見て彼女は勇気が出たが半面花恥かしくもあつた。相談所の相談室はそこから五つのセクションにわかれていた。婦人の相談員が三人、男子の相談員が二人で五人いた。愛子は一般相談の部だつたから男の相談員であつた。

「赤の五六番さん」

やがて愛子が呼ばれた。ここでは個人の秘密を重視してか名前を呼ばない、相談室に入つて行くと男は三十五、六の病院の医師というタイプの男であつた。あとで知つたがこれが副院長歯科技工師の河野猛、その人だつた。河野技工師は口を開いた。

「木村愛子さんですね」

「はい」

「どういふ御相談ですが、この部屋は完全な防音装置が施してありますから待合室の人にきかれる心配はありません、だから御遠慮なくどうぞ」とうながした。しかし愛子はただ「ハイ」と返事をしただけだつた。急に恥しくなつたのである。と相手はどう感じがいたのか、

「私が男だから御心配なさるようでしたら、女性の先生にかわつてもいいですよ」といった。

「ハイ、いいえ、そんなことじやございませんの、余り勝手にわかんかったものですから」愛子はやっと落付きをとりもどした。そして「実は、私、もう少しやせたいと思うんです」とぼつりといった。そして目をふせた。

木村愛子は自分の肥満型ということについてある見解をもっていた。それは、父や母の生きている時分、良い家庭に育ったのでかなりぜいたくな食事をとってきた。それが現在叔母と二人だけの生活になっても依然続いておりそのため脂肪が多くなったたのではないがまた、亡くなった母も、嫁いだ姉もみんなそうだったが母方の一族がみんな肥満型で、そう肥えてはいなかったが結婚生活に入ると目立って皮下脂肪がふえ、とくに下腹部が出張ってきた。そういう遺伝のせいだろうと考えた。それで愛子は学生時代からかなりはげしい運動をし、脂肪のつかないよう工夫していた。バスケットの選手になったのも、現在、バス、電車の利用を極力さけて歩行に つとめているのもその一つである。彼女はそんな女であった。

「やせたいのですね」

と河野副院長はききかえした。

「はい」

「それは困った。やせるということは一番困難なことですよ。たとえばちよつとやせるというには絶食という手軽な方法もありますがね。貴女のような脂肪質の人を筋肉質にかえる。こういうのもやせるということに入るのでありますが、これはできません。ただバスに入つて脂肪分をとるとか、運動をしてぜい肉をなくすとかはできます。でもこれが続けるということは大変ですよ。また手術で皮下脂肪をとるという方法もありますがそう期待できません……一体貴女の場合どれですか」

「……」

「困ったな、御返事がないとすると、多分脂肪質で筋肉質でないことを悲観していらつしやるのでしよう。悲観なさらなくてもいいですよ、貴女のからだでも結構美しくほっそり見えますよ」

「すると私のような女でも……」

「もちろんです。たとえばたんねんにもみほぐして体の筋肉をやわ

らかくする。すると肌が弾力をもち引締つてきてツヤが出ます。そこで体に似合った化粧をし、ほっそりした感じをだす洋服、たとえばキヤンデー・ストライプのような縞の布地を体の線にあわせ、斜かたてに生かすデザインをして、これをききますと、きれいにみえます。これは日常の努力ですね。ここではそれを行うのに援助できます。それから貴女がやせたいといわれますから例をひきますが……アメリカの女優のオードリー・ヘップバーン、あのスマーフトでほっそりした体付きに一時的には貴女の体をつくりなおすことはできるのです。たとえばさつきいったように絶食させ、一カ月近く特別訓練をすればいくら肥満型の人でもそうなるでしょう。だがそんな方法でやせても、また普通の生活にかえれば肥えます。そこで或る方法でやせた貴女を維持するには努力がいります。この努力がむつかしいのです。わかりましたか？」

「ええ、少しはわかったようです」

「そうですか、では一応やせてみますか、そうですね貴女の場合、別に絶食しなくてもよいし、特別治療といえますか、ここの特別訓練を一カ月くらいやれば理想的な体になりますよ。普通の治療法だったら、まずとなりの部屋で専門家について食餌療法をお聞きしてこれを実行する。それからうちのガス利用のムシプロで約三カ月、それにマッサージ、ボディビル道場でぜい肉をならす、そうしたら大丈夫です。そうでなくても貴女は結構美しいですよ、きつと運動の選手だったんでしよう」

「ハイ、バスケッスを少々」

「そうですか、道理で普通のお嬢さんにしては筋肉の発達がすばらしいと思っていた。でも美しくみせるための筋肉はまだ発達していませんね。それには徒手体操がいいですよ。」

「どうも有難うございます。私なんか美しくなりたいという希望は大きいのですが、やはり中々実行できなくて、それに私はサラリー

マンでしょう。だから治療といってもここに通うのは大変だし、一人でやる根気つてしれたものですワ」

「じやこうしたらどうです。お休みとれるんでしょ、お休みとって一カ月ほどここに入院したら、その間にいやおうなしに美しくなる習慣をお教えこみますよ」

「でもそんなことしたら……お金随分かかるでしょ」

「お金？　いろいろですよ、そうですね、さっきの治療法だと食餌相談が百円、バスとアンマとボディビルで二百円、合計三百円ですがしかし食餌相談は一回切り、だから毎日こられて一日二百円の月六千円です。しかし一月分先払いだと三千円、三カ月分先払いだと九千円のところを四千五百円に割引きますから案外安いですよ、もっともこういう場合毎日指導員はつきませんが、助手は勝手に使っているのだから楽にできますよ。また特別療法にもいろいろあつて食費は別にして月一万円から十万円というところですよ。整形外科利用の手術の額によっても左右されますし、親切さ加減サービスもいろいろ違います。どうです一万円ぐらい奮発しては」

「とても……とても、その外に安い方法はありませんか、なにしろ身うちも叔母だけで、私自活しているものですから……」

「そうですか残念ですね……でも一つだけあります。それはちよつと苦しいんですよ」

「苦しい」

「ええ、治療が苦しいというのではなく、治療に協力することが……というのは、ほらこの本御覧になったことがありますか。これですよ、その方法というのは僕の研究中の方法ですよ」

「すると先生は河野先生ですか」

「そうです、どうして？」

「ホホホそれその待合室でみました」

「それじやわかってもらえますね」

「まだ十分読んでないんです」

「じや簡単に説明しましょう。つまりこういうわけです。私が今までお話した方法はいずれも普通の方法です。たとえば内容は紹介しませんでした特別療法でも、いわば人間ドッグに入っているような方法でその人の内容、人柄にかかわらず外形から美しくする方法です。昔から美人は外見からばかりではいけない、心の美しい人でなければだめといひます。そこで私は心理的な美容法を考えたのです。たとえば身内の不幸とか睡眠不足とか、ある肉体的な刺激やなにかで感情がたかぶると人はやせる、これを応用するわけです。この世の中に生きていくにもほんやりした人は肥え、鋭い感覚と強い神経をもった人はやせるが力強く美しく生きていける。このことを治療に利用する。つまりある音楽とか絵をみせて神経を刺激し興奮させる。そしてやせさせようとするわけです。この方法はもうかなり成功したわけですが、加える刺激の程度、種類はあるていど判別できても、効果を測定しかねるわけです。それにいわゆる外形的に美しさを作る方法と併用するとさらによりよい効果があるが、それが新たに一体どのような効果を生むか、そういうことがまだ測定できないんで、知人の二、三の人にたのんで研究中なんです。で実は私はとくにこれと思った人をお願いしてこの研究に協力する人を選び多く探しているのですが、なか／＼思う人にありつけません。貴女だけを選んでわけではないのですが、貴女は家柄も人柄も良さそうだし私はもしやと考えたわけです。もし協力者におなりでしたら一カ月の特別療法を無料でサービスしてあげても良いと思っています。どうですか」

「……」

「なかなか返事できにくいと思いますが……私としては早いうちに研究を終わりたい気持があるのです。それに近く終る自信もあるのでそうしたら大いに活用しようと思っています。いうならば、貴女に

[.....]

「ハイ」

「さ、これで今日は終りです。私は木曜日までに貴女の美容計画をたてます。それから此処にいる小野君、小野先生はこんどきた時貴女に体操をお教えるになる方です。それから今日はみえてませんが御婦人の助手を一人つけましょう。じやさよなら、木曜の午前十時ですよ」

「はい、有難うございました」

愛子は何度も頭をさげてかえった。そのあとで河野と小野が顔を見合せて笑った。

「すごい掘出しものだな——でも歯並みを揃えるはよかった」

「うん、あの分だと出来上った特殊合成のサルグツワを最後まで歯の矯正道具と認めてくれるだろうよ」

「アハハハハハハ」

二人は典型的なサジストにしかみられない特有の目付きで笑った。

(三)入院患者木村愛子の経験

その二(プラスチックのサルグツワの巻)

木曜日まで木村愛子はいそがしい一日一日だった。木曜日になると彼女は約束の午前十時に間に合うように家を出た。ライトブルーのチェックのブラウスに同じ模様のギヤザースカートを着、右手には黒のハンドバッグ、左手には小さな旅行鞆をもちさっそうと松井美容病院の玄関に現れた。

持参するものはなにもいらない！ といわれていても、そこは身だしなみ、旅行鞆の中には紙とハンカチ、小型ノート、洗面道具に文庫本の三冊ぐらいは入れていた。先日同様、受付に行くときさっそう美容相談室に案内された。

「やあ、きましたね。一大決心というところですか。お家の方はう



まくいきましたか？」

顔をみると河野副院長はすぐいった。

「ええ、とても待ちどおしかったんですの」

「そうですか、それは良かった。それじゃさっそう入院の事務的な

面から済ましましょうか。ここに入院承諾書と研究協力者の宣誓書があります。内容は型どりのものです。まあ院の規則を守るといったような……これに住所氏名捺印して下さい。それで結構です」

愛子が二枚の紙をうけとってみると入院承諾書の方は、

「私は美しくなるため松井美容院に入院することを承知しました。入院中は病院の規則を守り、指導員の命令には絶対服従、美しくなるよう努力します。規則違反の時は即時退院されても構いません。」

月 日 氏 名

松井美容病院 院長 医学博士 松井重年殿

また研究協力者としての宣誓書の方は

「私は多くの人たちが美しくなるための、心理的方法の研究に協力し研究者と共同の責任を負います。したがって研究者の命令には完全に従うことはもちろん、進んで協力、自己を没却するだけの熱意と決意をもつことを明らかにし、ここに宣誓します。」

月 日 氏 名

松井美容病院 院長 医学博士 松井重年殿

同 副院長 研究者代表 河野 猛

とあった。

愛子は一読して、絶対服従とか共同の責任とか自己を没却する熱意とか字句に多少不満があったが、考えてみれば当然のことである。愛子はペンをとり出してゆうゆうと署名捺印した。それが終わると河野副院長はそれを良く点検して机の横の金庫の奥深くしまった。そして「さっそく入院室の方に案内しましょう」と立上った。愛子はその後につづいた。副院長は整形外科室の中を通り抜けると、その一番隅の扉をあけて通路に出た。その向い側の白い壁のボタンを押すと、白い壁が二つに割れてエレベーターが現れた。白いペンキを一面にぬった五、六人乗りの小型のエレベーターで螢光灯が美しく輝いていた。それにのると副院長はいった。

「なにしろ大繁昌でね、最初入院室を五階に作ろうと思ったのだがとうとう地下にできてしまったね、いまでは地下二階までふやしました。地下は五階とちがつて暖房装置の効果が良くでるしね、長く一カ月間の短期でしょう、その間ぐらい完全に外界から遮断するのも人間の生活に益するところがあると考えたのですよ。それに静かですよ、普通地下一階が特別療法のための場所一度に最高五十人ほど収容できます。地下二階研究室で、現在協力者が三人ばかりいます。いずれこの人たちとは顔をあわせることになるでしょう……」

副院長が説明しているうちにエレベーターは地階についた。たしかに五階からくらべれば冷やりした空気である。しかも無駄音は一つもないという静かさである。副院長はまず訓練室入口とかいた廊下を曲って一番はじめの部屋に案内した。廊下は白いセメントをみがいた石だたみで感じはつめたかったが美しかった。その廊下がかなりつづいているんな部屋があるように見えた。自分の部屋はどれかしら、三人の協力者はどうしているのだろう——愛子はふとそう思った。

案内された部屋は控室だろう、型の良いソファアがあった。河野はここで愛子に二人の人を紹介した。一人はきのうの体操教官だった。「小野君は昨日紹介しましたね、こちらの人は池田フジさんです。入院中、貴女の叔母さんがわりに世話をやいてもらうことになっています。それじゃここで池田さんに持物は全部お渡しして貴女は作業衣に着替えて、向うの研究室まできて下さい。私と小野君はさきにいつてこれからする仕事の準備をしておきますから、じゃ池田さんお願いします」

河野副院長はそういって小野をうながして出ていった。女二人があとに残された。池田フジは三十六、七の女丈夫といった感じの人で看護婦らしいタイプだった。そのフジが口を開いた。

「私池田です。どうぞ宜敷しく」

「私こそお世話になります」

「じやこれに着替えてもらいましょうか、持物はこれだけですね」

そういつてフジは戸棚を開けるとハンド・バッグと旅行鞆をおさめ、中から新品の白い作業衣をとりだした。作業衣は医者の着る例の上っぱりみたいなものでボタンはなく、前はホックで止め、小さな白いベルトで腰の部分をしめるようになっていた。愛子は別に点検しないですぐ着たのでその時気がつかなかったが、外には普通のものと同じでも実は肩のところから袖口までホックがついていてエリが三つに割れ、そでに手を通さずに自由に着脱できる仕組みになっていた。もし彼女がこの時、この仕組みを知ったら充分警戒したろうが悲しいかな愛子は疑うことを知らなかった。彼女はフジにながされるままブラジャーとパンティ一枚になりその上にこの白衣をまとった。フジは脱がれたブラウスとスカートを手にとるとそれを脱衣箱の中に入れ、

「帰る日までに洗濯に出し、アイロンをかけておくよう頼んでおきましょうね」

といった。愛子はその一言でフジをしっかり信頼した。

「どうもすみません」

「そんなこと気にしなくていいのよ、さ、研究室に行きましょう」
フジはうながした。

研究室には河野副院長と小野教官が待っていた。愛子は部屋に入るとすぐくると部屋を見廻した。天井に蛍光灯がはめこみになってついていたが、窓のない部屋というものはなんと奇妙なものだろう。彼女はそう思った。地下室のせいか部屋に窓は不必要なんだ……彼女はその理解しようとした。それから四周をよくみると四方の壁の三方所に扉がつけてあり、三方にかなり大きな立派な戸棚があり、一方に重役の机みたいなどっしりした長袖机があり本箱がのっ

て金文字の本が沢山のついていた。また戸棚の一つには鏡がはめてあり、その前に歯科医用の椅子と道具があるのは副院長が歯科技工師であるためだろう。壁の一方にはきれいなヒダのある卵色のカーテンが一まとめにしてかかっていた。気になるのは三方の壁にほがれた黒口正方形のワクで彼女は一体何だろうと思った。換気口かしらと考えた愛子はそう思いながら案内されるまま大きな机の横に腰かけた副院長の前につれてこられ、まるで医者に対する時のように丸い回転椅子に腰かけさせられた。

「どうです木村さん、御感想は。いよいよ貴女は、一人前の研究協力者です」

河野は口を開いた。

「なんだか胸が一ぱいなんです」

「よろこび、ですか、あこがれですか」

「さあ……」

「それじや、これから私たちの仕事について説明しなけりやいけませんね、この前、貴女の美容計画をたてるといっておきました。それも説明しなくっちゃ……そうそう思いました、木村さんは虫歯が一つありましたね……」

「ええ」

「それじや、それを治してからお話ししましょうか。こっちにいらつしやい、その白衣の作業服を着たところをみるともう立派な私の片腕です」

愛子は巧みな河野副院長の言葉に完全にだまされていた。それですなおに彼に従い、虫歯の治療のため、椅子にすわった。河野は愛子の口を開かせると器用な手つきで治療した。

「アーン、アーンをして、それでよし、と、ちよっと口をすすいで下さい。それから、こんどは歯並みを良くしなくっちゃ、きれいな道具をこさえておきましたよ、貴女のは犬歯が出張っているのだから

この道具をはめるとすぐ直ります。二十日間ぐらいははめた方がいいですね。ちよつと不自由でしょうけどすぐなれますよ、昔、歯並みをよくするには太いハリガネを曲げて、歯にゆわえたんだそうです。いまはそんなことはしませんよ、でも歯ぐきに相当力が加わるので、この透明のくすりをぬるのです。これは傷み止めという奴で感覚がにぶるんですよ」

河野はそういういながら歯ぐきに透明のくすりをぬった。それから金槌みたいなもので奥歯をたたいていたが、やがて引出しから奇妙な形のものを出してきた。

「木村さん、みてごらん。これは特殊のプラスチックでできています。無色透明の一見弱そうにみえますが、堅さは鉄ぐらいあるんですよ、粘りも充分です。どうです、現在の歯科医学はこんな便利な道具まで生み出したんですよ」

彼はその変てこなものを愛子の目の前にもってきた。その仕ぐさが愛子を全然疑わせず、疑わせないどころか河野を信用のある歯科医師に完全に思ひこみました。よく見るとその奇妙な道具は老人の良く使う一種の入歯のような感じだった。入歯とちがうところは歯をいれるところがへこんでいる点だった。かなり大きなしろもので上下の歯を入れるところが中央でつながっている点になったが、そうでもしなければ口の中に入りかねない程の大きさだ。上の方は歯を入れるもののそばから、半円形のペロが出ており、下の方は三日月形にそのペロがくわえていた。そして袋状になってそれに連結した別のペロが中央に長くのんで先はやわらかそうにふるえている。河野はその一つ一つを説明した。「ここが上の口蓋にあたるんです。その反対はこれが下の歯ぐきのところを押えるわけです。この長いペロは舌おさえでそのため柔いプラスチックを使ってあります」

河野はそういつて長いペロの先を指ではじいた。ペロはぶるぶるふるえた。

「さあはめてみましょうか、少し修正せねばならない点があるかもしれないかもしれませんから」

「ええ」

愛子はすなおに口をあけた。その時、河野の目がきらりと輝いた。これが緘口具になるとはお釈迦様でも……といったげな表情だったが愛子は気付かなかった。こんな大きな道具が私の口にはいるのかしら、と不安がった。ただそれだけである。

「ほら、ここに舌を入れて、そうそう、うまくいったようですね、強くかんで……そろそろ大丈夫、くちびるをとじてごらん、そう口びるもすなおに合うでしょ、もうそこから見てもわかりませんよ」

愛子は河野にいわれるままに歯を強くかんだ。するとカチンという音がして、かなり強い力で上下両方の歯が閉されるのを知った。思わずアゴに力をいれたがもう歯は動かなかった。

たしかに完全にはまったワ！愛子はそう思った。いわれるままにくちびるをあわせると、別に邪魔にもならないような気がした。河野が手鏡をとって見せてくれたので見ると顔はすこしもかわりはない、ただしほほがふくらんでかえって魅力があるようにみえる。くちびるをあけてみると、一つのプラスチックをはめられた上下の歯の間は前の方で一・五センチほどあり奥歯の方ではほとんどなかった。そして正面に一センチ直径の丸い尖がりが二つあいていて、それにネジ山が切つてあるのがわかった。

「どうです、立派なものでしょう。私は最近になり傑作と思っています、はめ具合はどうですか」

「ええ結構です……」愛子はそういうおうと思ったが歯も舌もアゴも動かなかつたので声が出なかつた。低い変な音になって出た口が動かない……と思ったとき河野の声がした。

「口が動きますか」

「いいえ動きません！」

そうだったがそれも答えにならなかった。モゴモゴと声にならない音がただけだった。彼女は声を出すには歯と舌を使うこと、歯と舌を動かして必ず上下のアゴを動かすことをすっかり忘れていたのだ。なんとうかつなことが！ 河野副院長は重ねて問いかけた。

「じゃ、声になりませんか」

「ええ、なんだか：完全にアゴが固定されちゃって……」

愛子はそういう積りがこれまた完全に失敗した。それをみて河野はにっこり笑った。しかしまだ愛子は河野を信頼していた。さき程「ちよつと不自由でしようけど」といった河野の声がよみがえった。

「先生！」

いつしか愛子は河野をそう呼ぶような気になっていた。

「先生、もうちよつとうまくいきませんかしら」

愛子はいくら河野に甘える気であつた。だがその甘えも言葉が言葉にならないのでどうにもならない。言葉が自由にならないということはこんなに不自由なものか、愛子はそう思った。しかし副院長は愛子のそんな気持には一向頓着なく、

「さ、こちらにいらっしやい。これから美容計画をお話ししましょう」

といった。疑うことを知らない彼女は口を完全に閉がれながらも……いそいそとついていった。

「美容計画といってもなんでもないことですよ、ただ実行してもらえばいいのです。歩けといったら歩くようにしてもらえばいいわけですよ。もっとも歩けといっても歩きたくない時、歩けない時もありますからね。そんな時はなるべくしておけばいいんです。私たちは計画どおりに歩かせるつもりですから……また貴女も協力者だからその辺のことはよくわかると思います」

河野はゆつくりと囁んでふくめるように説明した。

「で一番問題となるのは、貴女に与える心理的な刺激なんです、

音楽効果も色彩効果もこれまでに実験したので、われわれはもっとちがった角度から検討してみたいと考えたのです。というのは急速かつ最大に美容の効果をあげるため私たちは貴女に与える刺激は苦痛これが一番良い事だと思つたんです」

「苦痛？」彼女は口の中で思わず叫んだ。

「そう、苦痛ですよ。つねって痛いとか、叩いていたいとか、そういう奴です。昔の人が加えられた拷問の苦痛、そんな苦痛です。それよりもっと強烈で心理的な苦痛もあります。だが、苦痛が加えられるだけ急速に美容効果があらわれるのですから貴女は進んで協力して下さい」

「……」

愛子は驚いて口がしびれた。愛子は真青に青ざめた顔をあげて河野副院長の顔をキッとにらんだ。だが河野副院長の顔は微動だもしなかった。

「私にたいする刺激が苦痛だって、それじゃ一体私はどうなるの、打たれたりつねられたりするの、それじゃ私はいいのいいなぶりものになるんじゃないの、いやだわ、そんなの、もしそれが真実なら私はサジストたちに捧げられたいけにえだわ、この世の中にそんな不法が許されることはない、しかしもしそれが真実なら私は完全にとりこじやないの、緘口具をはめられたあわれな捕虜、いまは身動きは自由だが、いずれは縛られてしまう。もう完全に自由を奪われたと同じ捕虜だわ、しかもすくいのない捕虜、進んで身をまかした捕虜じやないの、私は完全にだまされたのだわ、この悪魔たちに！」

彼女はとっさにそう思った。だが半面

「この立派な紳士の歯科医がとてそんなことをするはずはない。しかもここは大勢の人が出入りする美容センターだ、常識で考えてもわかる、心理的効果をあげるためのトリックだ、トリックにちがいないワ」

と叫ぶ声もあった、あ、彼女は死刑を宣告されても、なおそれを疑いえない善人だった。彼女はやっと落付きをとりもどした。その耳に河野副院長の声がきこえてきた。

「木村さん、わかりましたか。じやこれからの計画をお説明いたしましょう。いまから一週間は貴女のからだの精密点検と機能の測定です。これはいま流行の人間ドッグと同じもので、貴女にはどんな能力があるか、またもし貴女に与える刺戟：すなわち苦痛が、どんな種類のものではあればどのくらい耐えうるか、また体のどの部位に刺戟がつよいかなどを調べる。また貴女は貴重な研究協力者だから殺したり自殺されたら困る。そんなことのないように体力、精神力の続く一定の限界をしらせるわけです。もっとも自殺の方は、そのサルグツワで一応効果を達したと思いますが：それから次の一週間は単純な刺戟たとえば古来いわれた鞭打ちとか、束縛：緊縛といいますが、そんなもの、それに汗の中に流れる脂肪の測定という方法も入っています。第三週は複雑な刺戟で後半には心理的な苦痛の併用をも考えています。たとえば縛ってくすぐるとか、貴女の叔母さんをさらってきて叩いてみせるとか貴女を裸にして銀座の真中をねり歩くという具合です。そして第四週は休養と回復ボディビルなどを利用した筋肉の解放ということにしています。この時になるとトルコ風呂に入れます。そして第四週の終りから月末にかけては仕上げと整理という具合です。これがスケジュールです。わかりましたか」

河野副院長はいうだけいうと突きはなすように目をそらして向う側を向きデスクに何やらかきこんだ。

愛子は途中から耳をおおいたいくらいだった。

何ということだ、不幸はいま完全に真実となり、火の粉となって身の上にふりかかってきたのだ。だが自分にはいまそれをふりはらう力はないのではないか、あ、一体どうなるのだろう。彼女は急に

不安になった。そして思わず椅子の上に背をかめ、膝を大きくうにして突俯した。泪が一つ、二つ出てきた。彼女はくちびるの中に手を入れ、一センチ直径の二つの孔に手をかけプラスチックをゆすってみたが、この不思議なサルグツワはびくともしなかった。あ、私はまず最初に人間の一番最大の武器、言葉を奪われた自分の意志の表明の直截な道具をうばわれたのだ。彼女はそう思った。だが不幸はこれに終らず、すぐ又新しい苦しみがはじまった。

(次号へ続く)

モデル志願の女性より

今年も又ぎらぎらと太陽の輝く夏がやって参りましたね。Kの皆様もさぞ大変な事とお察し致します。でも私、夏ってとても好き、だって自分の美しさを発揮出来るのは薄着の夏しかありませんもの。編集長様、私何度こうしてお便り書きかけたか分りませんでした。今迄勇気がなくて、とうとう出せませんでした。今日は思いきって書いてしまします。私は東京の生れ、数年前に父も母も失って今はたった一人ぼっちの淋しい身の上です。二十二才、五尺三寸、バスト、ウエスト、ヒップは925993です。私、町の古本屋で一年半程前ふとKKを見つけから、今迄何か胸の中にもやもやして居たものが、一度にふき出した様に、ああ私の求めていたものはこれだと思いました。グラビアの美しいモデルの方の胸に足に腕に喰い込むような縄。私、本当のことを申し上げますと、今或る水商売に入っています。以前会社に勤めていましたが面白くないことがあってやめたのです。私もあのモデルさん達のようにぐるぐる巻きに縛って頂けないでしょうか。若しお許し下さるならお勤めを休んで喜んで大阪へ参ります。今住所は書けません、読者の頁にお返事下さい。若しお返事見てどうしても都合が悪ければ電報を打ちます。時間と場所をきめて下さるようお願い致します。

かしこ
宮崎 永井朱実

編集長さまお許に

【お返事】日時はいつでも結構御都合のよい時御上阪下されば編集部宛電話⑥三六〇七下さい。委細その上にて。編集長

架空小説 残虐芸術展覧会

伊 藤 晴 雨

△月十五日ヨリ△都市△警本部主催残虐芸術展覧会は△△市四条通△丸百貨店五階に於て開催、入場料大人五百円、十八歳未満の者入場禁止という珍らしいポスターがK市料理屋各種飲食店興行場の廊下に張り出された時はあの因循姑息なK市としては能も思い切った事をやったものだと思つた。

其ポスターには雪責、火焙り、腹烈き、其他の人形の写真が実物の同様に出来ている。背景も巧みに描かれて色刷りになっている。中将姫の雪責め、八百屋お七の火焙り、両国の見世物、縛られた△△△△やれふけ等凡そ残虐芸術と名の附く程のものは一種残らず網羅されている。殊に観衆の眼を引いたものは林間で△△された女の捜査が順を追つて其方法を図表で示されて居るので当局が犯人の捜査の方法が一目瞭然で如何なる変質者と雖も

此展覧会を見れば婦女子の狼籍など出来ないという事を直覚させるには十分の効力があるだろうと思わせる。一流の学者や斯界の權威を集めて出来上つた此展覧会はK市の人々を挙げて開場時間の午前十時より閉場時間の午後四時迄、満場全く立錫の余地なき有様であつた。

大津事件の当時、露国皇太子の人力車夫をして居たという向山竜太郎が四条通西洞院の西にメリヤス店を開いて居た頃、此店に居た少年が居た。四条通り長刀鉾町の万永亭高橋永次郎の家より紹介されて小僧に來た少年であつた。向山竜太郎の事は嘗て本誌で某氏が匿名で書いた事があつたが彼が祇園新地へある特殊の待合を開いた時、相談相手になつたのは此少年であつた。

此少年は名を豊吉といつて店では「豊どん」

と呼ばれて居た。明治三十年頃のK市は新京極に福井茂兵衛や故人になつた実川延若がまだ延二郎といった時代であつたから残虐な芝居や見世物がK市では盛んであつた。

其頃東洞院より六角堂へ抜ける錦小路や魚の棚に野村芳国という芝居の看板描きがあつた。此人の子息が後に松竹合名会社の映画監督野村芳亭となつた人だが、此人の遺物が今度の展覧会に出品されている。

芳亭の父の野村芳国という人は因循な京都には珍らしい画壇の先覚者で、明治の初年に「パノラマ」の画を書いて居る。随つて現代の或る種の画家より腕は達者である。洋画を折衷した芝居の絵看板は思い切つた賣場を表現するのに十分であつた。明烏の雪責などはまだしも其頃の新派のお家騒動を主にした芝居の看板には残虐其物のあらゆるもの（新派の

賣場はそうでもしなければ見物の同情が引けなかった)があった。其頃新京極には俗に「東向き」と称える中村翠娥(当時仲吉といっていた)の女役者の一座が根を張っていた岡崎の祇園館(ぎおんかん)という九代目市川団十郎の櫓落し(落成式)をした小屋(劇場というより小屋といった方が適当な程粗末な建物であった)には名古屋から来た坂東勝治という源氏節(げんじぶし)のドコシヨメ芝居が掲って居た。四条の南座には三州豊橋の林花製芝居が掛っていた。私は少しここで話が此林花製に移る。

三州豊橋に林花という「苗字は忘れたが」義太夫語りがあった。此人義太夫語りであったが頗る文才(?)に富み(ありとこ)の義太夫に一寸手を入れて脚本を作るとそれが永年の経験で地方の興行にピタリとはまる。義太夫の太夫から終には芝居の太夫元となつて素人芝居を組織したのが林花製一座と俗にいう素人劇の一座である。

芝居は人気のある美しい女形を縛って責めるに限ると昔しの興行師や作者がいつている様に現代でも美空ひばりや林長二郎を縛って責める所をやつたら大入満員は請合で楓某氏が提供の映画の「縛り」が喝采されているのと同じ事で此林花製もの(俗に林花製もの仲間では呼んでいる)には女の賣場が多いのである。お家騒動の賣場は誰もが書く通り悪

責めの見世物

機械人形の一家

伊藤晴雨画



人の家老が忠臣の彼女を責めるという定式が不思議に見物に請けるのは当然なので黒髪を振り乱して打たれるシーンを想像しただけでも十分であると思われる。

林花製もので特に傑出した女の責め場はお杉お玉二見ヶ浦の仇討という通し狂言十三場で主人公は近江のお兼で責められるお杉とお玉は姉妹で伊勢の古市(?)の女郎である。三人の親の敵を近江のお兼の助けによって二見ヶ浦で打つという筋で大芝居にはメッタに出た事がないが此頃では小芝居でも出ないのは恐らく筋さえ知っているものが無いからであろう。筆者は近所の中村座という立ち者専門の小劇場で特に望んで見せて貰った事があるが、二見ヶ浦の日の出は小道座の一文子の笠へ女の腰巻を掛けた奴が海の真ん中よりセリ

出すんだから呆れて物が云えない。女の赤い腰巻が太陽になって二見ヶ浦の真ん中からセリ出す光景は想像した丈けでも愉快だと思いませんか……。

話しは少し脱線したが、此林花製芝居が京都の南座へ一座総勢七十余名の大一座(今なら大変な大一座でしょう)で乗込んだのが明治は三十年の夏で向山竜太郎のメリヤス屋時代の事であった。

当時京都の芝居では女を縛った絵を描いて掲出する事を警察では許さないので縛られた絵は芝居の看板では見る事が出来なかった。其理由というのがナント馬鹿馬鹿しい外人崇拜主義で「京都は日本最古の古都で外人が来るから残虐な絵を見せると日本人は残虐性を持つていると思われるから罷りならん」という

んだ。ナント馬鹿げた外人崇拜よ、変れば変わるものは世の中で、戦後は其警察本部が先棒になって残虐な興行をやる様になったのは自由主義をいい方に向けたのであろう。

扱K市の残虐展覧会は会場を岡崎公園にして広さは凡二丁四方老大な面積でまず徳川時代の拷問場を第一に寛永時代の切支丹殉教史の人形より人身売買の行われつゝあった明治時代の北海道やら三十七、八年戦役後上海へ積み出す九州五島(ごとう)附近の淫売婦の生人形など無慮人形の場面数百、此経費は全部国家の負担だから其結構たるや実に善美を尽し見物をして人形の美しさに垂涎せしめる程でこんな人を物を何の為に作ったかと云えば全くK市市長の趣味である。(ツツク)

雑誌通信 (挿絵を中心として)

丘

一 明

読切倶楽部「乱雲」成瀬一富画

後手、猿轡、盗賊に犯される武士の妻。

講談倶楽部、「まぼろし若衆」石原豪人画

角田喜久雄作 連載中

「見れば見るほど日本に唯一の高貴な女性だ」という印象が深くなる。あの美しい女性が淫なけものになりはてて、素裸のまま、わしの足下を這いまわっている姿を思い描いていた

ところなのだ」と独語する唐人高砂藏人、今月の挿絵は余り良くない。

面白倶楽部、「冥土の顔役」白井哲画

南郷弁護士の助手、京子が猿轡に手足を縛られて、ソファアに横になつてゐる挿絵。

大衆小説、「大阿蘇の秘宝」細木原青起画

野性の、どこか品のある美しい女が高手小手にしばられて、土間の柱につながれている

絵。裸体で手を後にまわしている絵。但しこの方は縛られているのではない。

小説倶楽部、「不知火頭巾」木俣清史画

拷問場面あれど挿絵は平凡。

同

猿轡、後手の二葉の挿絵あり、流石挿絵界

の大御所、質的に本月最高。

読切特撰集、「鱈」中村英夫画

無名画家なれど、胸のふくらみの美しさ。

同 “恋天狗” 柳瀬茂画

つづらの中に目かくし猿ぐつわをされて、挿絵が本文に忠実でないのは惜しまれる。

小説の泉 “坊ちやんの特ダネ記者” 森下和男画、猿ぐつわだけなり。現代物第2号。

読切小説集 “尼子三国志” 石原豪人画

第四話 “狐雨” に後手宙吊りの絵あれど、不自然な感じ。

読切小説読物 “鴛鴦ばくち” 木俣清史画

読切傑作集 “判官登場” 山本一郎画

右の二つ、特に後者はつまらない絵だ。

読切読物 “恋狂い尼僧地獄” 今野英子画

美しい尼僧が法衣のまま、後手に縛られ転されている。作は鹿火屋一彦、住持の老蓮生尼と下男八十八に責められる蓮月尼。

蓮生尼は、八十八に命じて、蓮月尼の手足をおさえつけさせ、その体から袈裟を引きはがそうとする。蓮月尼は抵抗した。が、かばそい女の力ではとうてい八十八の馬鹿力には敵うはずはなく、たちまち手足を麻縄で縛りあげられ、梁に吊り下げられてしまった。(此時蓮月尼が全裸であることが後に書いてある。)

蓮生尼は用の済んだ八十八を追いかうと、一本の筈を取り出し、蓮月尼の脇腹のあたりを目がけ、びしりッと撲った。雪白の肌に、

さつと美しく桃色のみみずばれ。筈は追打ちに、びしりッ、びしりッと鳴った。

同 “女体花火師” 西村毫太郎、小日向一夢画
山の中腹に仕掛けた花火の真中に、丸太を十字に組んだ丁度磔柱の様なものが立てられお浪は一糸まとわぬ素裸にされた上、その柱に高々と吊り上げられている。

仙太郎の目に柱の上のお浪が大の字なりの体を必死にくねらせ、空しい足掻きをしているのさえ、ありありと見て取れる。

(花火と共に打ち上げようというのか。挿絵は木俣清史に似ている。)

なお、挿絵はないが同じ本の “ぼてれん女郎” 葉田光に責めシーンあり。その一つ、湯もじ一枚の若い女が十二人、お互の髪を毛を結び合わされて転っていた。

以上の各誌はいずれも八月号、岩田専太郎の絵の外は、質量共に低調な感じは抜萃する文章に乏しかったせいだろうか以下増刊から二、三

別冊読切傑作集 三十三集

口絵四色刷 “海の若獅子” 石原豪人画

人身御供の若いメノコが半裸の身体を帆柱に結びつけられている。

傑作倶楽部盛夏増刊 “八幡の旗風”

早乙女貢作 平野林作 画

泉殿の南面にすだれを三重にかけつらね、

中柱を立て、腕木をわたし、(さより姫)を縛ってあった。

そしてそのすだれには十数本の矢が突き刺さっていたのである。

彼女は風を剪って、とびくる矢の、一本一本に戦慄して、絶叫し、泣訴し、そして、氣を失ったに違いない。

その矢かずも十数本にとどまらぬことは、三重のすだれが、ずたずたに切れていたことでもわかる。そのくせ彼女の肌には、ほんの毛すじのかすりきずもついていないのだ。

恐るべき残忍な手法であった。一撃で復讐を遂げるにはあきたりず、一矢ごとにひしつとさけぶ悲鳴をたのしみながら、悶絶し、狂死するのを望んでいたのではないか。

(此の姿で見つけられ、一度救われた姫は叛臣の娘であるが故に又十字架に縛りつけられる。)

最後に挿絵ではないが「30の読物」という雑誌(創刊号)に女が戸板に縛りつけられている写真があることをお報せしておく。

モデルを使って挿絵がわりにつかったものが、私にはグロテスクで見るに堪えないものであった。

(以上)

フランソワの手記

山 梨 参 次



今思い出しても身慄いがする程、恐ろしい一週間で御座居ました。今まで平和なキルティヌ侯のもとに、どうしてあんな忌むらしい審問官が来る事になったので御座居ましょう。あの悪魔のような男がやって来て幾日も経たないのに、可哀想な私の姉が捕えられようとは思っても居りませんでした。私が捕えられたのは、その翌日の朝で御座居ました。

姉の身を案じて、転々と寝られぬ夜を過ぎ明方近く一寸まどろんだ時、それがあのなつかしい家で過ぎた最後で御座居ました。

激しく扉を叩く音に、私は遂に恐しい災難が自分の身にふりかゝったのを知りました。転がるように床におり立った時には扉が打ち破られ、鬚だらけの兵士達の顔が、それこそ地獄からの使者のように並んで居りました。忽ち私の手首には冷たく重い手錠がかけられこの腕を痛い程握られて、お城に連れて行かれました。いつも見なれた美しいお城が、その時はまるで鬼の住家でもあるように気味悪く見えました。未だ薄暗い廊下を何度も曲り階段を登ったり降りたりしながら、私は殆んど何も考える事も出来ませんでした。心臓の音が、早鐘のよう激しく鳴るのが自分で良く解ったのを覚えて居ります。ある部屋の前まで来ると一人の兵士が静かに戸をノックし、中から応ずる声が聞えました。さっと開かれた部屋の中を見て、私はいよいよ地獄に

来たかと思いました。窓際にはあの審問官が大きな椅子に腰かけて机ごしに私の方を見つめて居り、その傍らには頭のうすい、あの残忍な針師が立って居り、床にはX字の木架が置かれて鎖がまつわり、壁には何本も鎖が不気味に、下って歯車や、大きな柄が片隅に据えられ、その他色々の恰好の恐ろしい責道具が散乱し、その間を毒蛇のように太い鎖や縄が這まわって居るのでした。

私は命ぜられるまゝに、審問官の前の椅子に腰を下ろしました。彼は冷たい、鋭い瞳で私を長い事じつと見つめて居りました。目を伏せて居ても、その刺すような視線が私の頭から顎のあたりまで何度も往復し、更に頸から胸、更に腰のあたりをなめるように這い廻るのが良く解りました。次には私の手錠の喰い込んだ手首から指の先まで見つめられて私は思わず指をひく／＼と動かししました。

「マルグリットはお前の本当の姉か？」

冷たい低い声で彼は尋ねました。

「ハイ……」

「マルグリットはお前に魔女の膏藥を渡したと云って居るが本当か？」

「………イ、いいえ、私はそんなもの見た事もありません。」

私は一寸口ごもりました。と云うのは、本当は自分で使うために姉に買って来てもらって居たからです。しかしその膏藥を売って居

たアルヘンティヌと云う占術師の女が捕われた事を知った姉は、私の身をかばうため、もし何か在った時は自分が使ったと云うから私はあくまで知らないとしり立てるよう云い聞かされて居たからです。

「しかし、姉は自分では使った事も無いと云って居るぞ、皆、お前に渡したと云って居るのだから……」

彼はニヤリと気味悪い笑を頬のあたりに浮べました。私はハッとしました。もしかしたら姉はひどい拷問に耐え切れずに本当の事を云って仕舞ったのだらうか……。そんな考えがチラと頭をかすめました。彼は何と思っただか部屋の隅の椅子を指してそちらに掛けて待つように命ずるのでした。私がホッとしてそちらに参りますと、彼は兵士の一人に何か囁き、その兵士は急いで部屋から出て行きました。彼は黙って目をつぶって居ります。重々しい空気が私の胸を締めつけ、大声を上げて泣き出したいのをこらえるのがやつとでした。「何をされるのか、何が始まるのか……」

「……」考えても仕方の無い事ながら、それは非常に恐ろしい事でした。やがて彼の残酷なたくらみがわかりました。彼は私を責め虐む前に、その恐ろしさをいやと云う程、私の臉に焼きつけようと考えたのでした。

廊下に乱れた足音が聞かれ、やがて扉を開いて、よろめきながら連れ込まれた人を見て

私はとび上る程驚きました。瞬間、もしや姉ではないかと思いましたが、そうではありませんでした。それはマルヘンティヌだったのです。私はあまり口をきいた事もありませんでしたが一寸見ぬ間に十も歳を取ったかと思われる程やつれ、見違える程の変りようでした。何より痛々しいのは臉に彩られた真黒な隈と、手首や足首に残された血の滲んだ鉄鐙の跡でした。あとで聞いたのですが、アルヘンティヌは昨夜、審問官を絞め殺そうとしたとかで、その懲罰を受ける事になって居たのだそうです。余程ひどい仕置をされたのか立って居たのがやつとの様子で、今では彼女は自分のそんな姿もあまり苦にならないらしく、かえて私の方が目のやり場に困って、カッと頬に血が登るのが良くわかりました。彼女は兵士達の手で乱暴に床に引倒され、X字の木のの上に四股を大きく拡げたあさましい恰好で縛りつけられました。すると審問官の傍でこの様子をニヤ／＼笑って眺めて居た針師が、大きな鋭い歯のやつとこを持ってアルヘンティヌのそばに行き、縛られてしっかり指を握りしめた手のわきにしゃがみ込みました。彼女は何をされるのか知って居るらしく、ハッと身体を固くして目をしっかり閉じました。可哀想にその目尻から大きな涙滴が一つ流れて落ちました。針師はおもむろに彼女の差指を無理に延ばして握りしめると

爪の先をそのやつとこで挟みました。彼の手にじわ／＼力が入るのと、アルヘンティヌが床の上で顔をのけぞらせるのと同時でした。すぐに彼女の額に脂汗が浮き出し、顔が真赤になり、やがて獣のような凄まじい悲鳴がほとばしるのでした。その口を見て又私は驚きました。何と歯が全部抜かれて居るのでした。人差指の先を血に染めて苦悶するのまかまわず、次は中指の、更に薬指の爪が剥がされ、泣きわめき身を揉むアルヘンティヌを見て居るうちに私自身フツと気が遠くなつて必死になつて耳をおさえ、目を閉じましたがとう／＼そのまゝわからなくなつて仕舞いました。

ツンと鼻にしみる薬を鼻がされて、私が目を開くと、もうアルヘンティヌの姿はありませんでしたが、床に横わつたX字架の手の当って居る所に鮮血がこびりついて居りました。今度は私の番でした。椅子に腰かけたまま、胴を留められ、肘掛の上に両手が、椅子の脚に足首が革帯で留められてからは夢中でした。胸がはだけられ、裾をまくられ、「いや、いや」と懇願するのも容赦なく、羽根で擦られたり、ベンチで挟まれたり、生まれて始めての恐ろしい拷問に、何もかも打ち忘れて、椅子の上で身を揉み、悲鳴を上げて泣き叫びました。

「云います、云います、ゆ、ゆるして……」

私はこの苦しさから許されたいばかりに、とう／＼そう叫んで仕舞いました。息を切らせ涙と鼻水をぬぐう事も出来ずに喘ぐ私に次々と鋭い質問が並びせられました。問われるままに私は魔女の膏薬を使った事も、姉に頼んで買って貰った事も正直に答えました。私はたとえ火あぶりにされる事はあつても、もうあの恐ろしい拷問に掛けられる事はあるまいと思かにも考えたからでした。しかし私は、サバットの有様を根掘り葉掘り訊ねられてすぐ詰つて仕舞いました。夢のようにもうろうとした、熱にうかされた時のようなサバットの事等、そんなにはつきり思い出せるわけは御座居ません。サバットに連らなつた人の名前を次々と訊ねられ、

「未だ居る筈だ。他に誰が居た？」

と繰返して問い訊され、私はとう／＼いい加減な人の名前までに足りそれも種切れになつて仕舞いました。

「なぜ云わない、云わなければ、お前の姉が苦しい思いをするのだぞ」

「……………」

私の口の前に奇妙なくつわが持ち出されました。

「口を開け」

カサ／＼に乾き切った唇の間に鉄の棒が押し込まれ、生臭い鉄の味が氣持悪く口中に広がりました。首のうしろで金具が留められ絶

対に取れない事がわかって居ながらも、私は舌で棒を押し出そうとしながら、悲しく首を振り続け、縛られた手をもぞもぞと動かししました。その目の前に二人の兵士が檻を運んで来ました。まさか、その中にきゆうくつに詰め込まれた人間が、私の姉だとは夢にも思いませんでした。

「顔を見せてやれ」

審問官の声で檻の向きが変えられ、首を肩にうずめるようにして鉄の棒に押しつけられたその顔を見て私は思わず声を上げました。私の嘴まされて居るくつわよりもっと恐ろしい嵌口具に、なかば開かされた口から唾液を流し、乱れた髪を額に脂汗で濡らせ、涙によごれたその顔は忘れもしない私の姉マルグリットの変わり果てたみじめな姿でした。何時からこの小さな檻の中に詰め込まれて居たのか知りませんが、目の前で蓋が開かれ、姉は足首を掴まれ、お尻の方から引き出されても、床にぐったりと這いつくばって呻き続けて居りました。そのいじめ抜かれ、疲れ切った身体に次々と加えられた責苦は血を分けた姉でなくても目を覆わしめる程、惨虐なものでした。天井から下った鎖に片足を吊られて激しく鞭打たれ、床の上にうつ伏せに寝かされ、両脚を拡げさせられ、もり上ったお尻に太い棒がうなりを立てて打ち下され、転々と床をころげ廻って苦しむ姉になげかけられる淫ら

な言葉……何度か死んで仕舞ったと思うような、すさまじい悲鳴を上げて失神する姉の姿は、そのまゝ、その翌日の私の姿でした。

どの位経ったのか、責め抜かれてぐったり気を失った姉は兵士に担がれて、室の外に運ばれました。

その後、私は衣服を奪われた上、妙な台に載せられ、身動きも出来ぬように手足や頭まで革紐で留められて、身体中を検査されました。それは検査されると云うより罵るといった方がよい、乱暴でしかも、苦しいものでした。いくらこらえてもカッとして頭に血がのぼり呻きとも叫びともつかぬ声が喉からひとりてに出て来ました。その夜はどうとうその台の上に縛られたまゝ、それでもひどい疲れのため、とろとろとまどろんでは、恐ろしい夢にうなされハッと目をさましたながら朝を迎えました。

朝になるとそれでも一応台から解放され、与えられた水を貪るように飲み、身体の衰弱を恐れて、固いパンと不美味いスープを胃に流し込みました。その後又台に縛られたまゝ昨日私や姉が責められた隣の部屋から聞えて来る女の悲鳴や、鎖の音を聞いて、今日も誰かど虐められて居ると云う事が解りました。午近くになってから、私はとうとう又隣の部屋に連れて行かれ、「他の名前を云え」と云う無意味な訊問を続けられ、吊られ、鞭打たれ、

引き伸ばされ、更にもう一つ向うの室で刺の植った責具に虐められました。一番つらかったのは長い時間、刺の生えた台に載せられて鞭打たれたのと、四肢を吊られてこまのように身体を廻された時でした。

他にも色々な形の刺の植った台がありましたが、私が載せられたのは、背と尻に当る部分の他、足をのせる所まで刺の植った椅子の形をした台でした。お尻と背中を浮かせようとすると足の裏に、足を浮かそうとすると尻に鋭い刺の先が喰い込むのです。それだけでも全身から滝のように脂汗が流れ、泣き声を上げる程痛いの、太腿の上に重しをのせられました。何とその重しにも刺が生えて居るのでした。太腿を両面から怪物の歯のような刺に挟まれ、足先を持ち上げる事も出来ずに身を揉む背中を恐ろしい刺が掻きむしる痛さ苦しさは、筆舌にはとても尽す事が出来ません。わずかに椅子の背に廻して縛られた腕を慄かせ、指をひきつらせて、この地獄の責苦から退れようと無駄な努力に喘ぐ私に更に鞭が振り下されたのです。腕にも、肩先にも、ふくらんだ胸や脛にさえ、引き裂かれるように凄まじい鞭打を繰返され、しまいには刺の恐ろしさもかまわず、そり返り、はね上り、みじめなダンスを踊り続けるのでした。

どの位時間が経ったのか、息も絶え絶えになった私は、ぐったりと刺の椅子に身をもた

せたまゝ鞭が鋭い音を立てて振り下される度にわずかにひく／＼と死にかけた魚のように身を浮かせ、自分の声とは思われぬような、かすれた泣声を出すようになった時、ようやく椅子から、ころがり落ちる事を許されまし

た。窓にうつる陽影を見て、随分長い間、忌わしい刺の上に載せられて居たのを知りました。今でも太腿に点々と残された刺の黒ずんだ跡を見る度に、その恐ろしさに身慄いが致します。

逆吊、片足吊、その他色々苦しい吊り責めされましたが、何と云っても一番凄まじいのは、丁度捕師が獣をかつぐように手足をまとめて吊り上げられ、こまのようになり廻された時でした。始め吊り上げられた時は、それ程苦しいとは思いません

でしたが、髪の手を掴まれぐる／＼と身体を廻され、天井から下ったロープがよじれ始めた時、私は、来るべき次の恐ろしさに気附いて必死になって許しを乞いました。勿論許される筈もなく、ロープは捻り捻れて、ギシギシと音を立てていくつも溜を作って、よじれ上がりました。やがて手がはなされ、私の身体は始めてゆっくりと、びく／＼早く廻転し出しました。すぐ目がくらみ、胃からすっぱい水がこみ上げ、吐き散らしました。絶え間無く襲って来る嘔吐にすぐ胃の中は空になり、吐くものが無くなる、胃が裏がえしに口から飛び出して来るような苦しさが続き、身体中から冷汗



が流れ額にも背中にも気味悪い程だらぐと流れては振り落されて行くのが解りました。やがて廻転はゆるやかになり、止ったと思うのも束の間、今度は今までと逆に廻り出すのです。又凄まじい胃の痛みと苦しみ……。私はとうとう気を失って仕舞ました。

そのあと、私は椅子に縛られたまゝ、マンリエットと云う娘が審問官の手で色々と言つて云われぬ酷い検査をされるのを見せられました。私は自分の身体が今迄味つた苦しさを思い起し、目の前で悶える可憐な乙女の姿と一緒に泣いて涙をこぼしたり、悲鳴を上げたり致しました。アンリエットは未だ十六歳、よくやく蓄のふくらんだと云う感じの娘でし

◎北原純子青画傑作選◎

「女學生の羞恥責め」

大
中
判
印
画
紙
（
ヨ
タ
コ
テ
1318
）
焼
付
四
枚
一
組
五
百
円

純情可憐な制服の女学生が正面向いて後手に縛られ脚を上げたりスカートをまくり上げられたり大胆きわまりない責構図四態「ハートの的、女体洗滌室」

大判印紙焼付 二枚一組 三百円
全裸の豊満な肉体を誇る女性に加えられる
奇想天外な賣場面、二態。

〔緊縛又ード十六ボース〕

大中判印画紙焼付 二枚一組 三百円

柱、棒、杭、石、等を用いた女体緊縛又
ードの様々。(以上、二組にて五百円)

た。私は拷問部屋の隣の、あのおぞましい型の検査台の脇に据えられて、今度はどのような苦しい目に合うのかと気をもんで居ります

と、境の戸が開き、審問官が、手錠をかけたアンリエットの腕を掴んで入って参りました。彼女は私の姿を見てハツとした様子でした。審問官は私には目も呉れず、アンリエットの手錠を脱して着物を脱ぐように命ずるものでした。彼女がそれに従わず両手で顔を覆ってしく／＼泣き出したので、彼は手荒にアンリエットの襟首を掴んで乱暴に着て居るものを剥ぎ取り、とう／＼下着だけの姿にして仕舞うと、台の方に引ずって行き、その上に引倒すとたちまち、私がされたと同じように手足を大きく拡げて革帯で留めて仕舞しました。どんなにそれが情ない恰好か、アンリエットは目を閉じて、うぶ毛の生えたやわらかい頬を染めて、泣じやくって居りました。身体のおちこちを曲げられ、捻じ上げられ、摘み上げられ、私がしたようにアンリエットも、悲しい声を立てながら、わずかに動く腕や太腿をくねらせ、悶えて居りました。

やがて、さんざん罵られた後、私がされたと同じように、耳たぶを太い針で刺されて血を採られました。まばらに金色の毛が生えた腋の下をやっとここで挟まれ、痛さに流した涙や、顎や乳房をしつつこく擦られて苦しさにと絞り出された腋下やその他の汗を溜められ、

泣きぬれて鼻水のつまった鼻孔を乱暴に押し開けられ太い管を挿し込まれて鼻水まで採取されました。

私のされた事も一通り終つたので、この可哀想な娘も一応この台から解放されると思つたのですが、審問官が棚から取り下ろしたものを見て、私は思わず「あッ」と叫び声をしました。それは黒い壺なのです。その中に入っているもの、あゝ、それは何で作られたのか知りませんが、あの恐ろしい液体で、この娘の何処が痛めつけられるのでしょうか。先刻、泣き喚めく私の乳首や腋の下等に何度も塗りつけられ、焰で焼かれるような、鋭い針の束で肉をえぐられるような苦しさを味わされたのが、まさしくと思ひ出させられました。彼い細い棒を壺に入れてどろどろした液体をその先につけると、アンリエットの鼻先をつまんで、形の良い穴の中に押し込んだのです。可愛想な娘はたちまち激しく咳込み、喉をふり絞るような悲鳴を立て、台の上で身体を弓のようにそらせました。その大きく開いた口の中に今度は棒が押し込まれ、アンリエットはその棒も折れよと齒で噛みならし、更に痛々しい叫び声を上げました。部屋中に、あのいやな液体の臭い匂が立ちこめ、身をよじって泣き叫ぶ娘の痛ましい声が頭にガンガンと響きました。

(未完)

【新版】女体緊縛フォト ◎分譲◎

R組 四十組 (印画紙の大きさ 9×13cm)

各組一枚一組 (全部送料共)

一組一枚	一〇〇円
五組五枚	四〇〇円
十組十枚	七五〇円
二十組二十枚	一四〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇円
四十組四十枚	二四〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇円
六十組六十枚	三五〇〇円

R 1	柔肌と荒縄 (須川令子)
R 2	海浜の緊縛 (萩千恵子)
R 3	床間の飾り (佐賀美智子)
R 4	高手小手 (花坂道子)
R 5	海老縛り (萩千恵子)
R 6	後手猿轡 (須川令子)
R 7	後手足縛り (村田那美子)
R 8	鏡うつし (伊吹真佐子)
R 9	股間しぼり (須川令子)
R 10	鎖縛晒責 (萩千恵子)
R 11	股間縛正面 (伊吹真佐子)
R 12	女学生縛り (須川令子)
R 13	尻立縛り (萩千恵子)
R 14	開股しぼり (川辺砂登子)
R 15	猿轡の魅力 (伊吹真砂子)
R 16	トイレ縛り (須川令子)
R 17	立木しぼり (村田那美子)
R 18	緊縛横臥 (厚狭春江)
R 19	足湯梯子責 (伊吹真佐子)
R 20	いたぶり (春日、伊吹)
R 21	帆立縛 (萩千恵子)
R 22	強烈梯子責 (伊吹真佐子)
R 23	椅子責め (佐賀美智子)
R 24	逆さ吊り (伊吹真佐子)
R 25	後手吊責め (伊吹真佐子)
R 26	股間縛後手 (中塚文子)
R 27	逆海老責め (伊吹真佐子)
R 28	高手小手 (加賀利江子)
R 29	変型しぼり (萩千恵子)
R 30	松樹後手縛 (村田那美子)
R 31	くさり責め (伊吹真佐子)
R 32	薄羅の緊縛 (加賀利江子)
R 33	股間縦縛り (中富綾子)
R 34	首縄股間縛 (坂口利子)
R 35	手足逆吊り (伊吹真佐子)
R 36	和装責め (藤田節子)

責められる女、責められる場面八態

北原純子画『風流女体アラベスク』(略号)

大中判印画紙 (タテ十八糎 ヨコ十三糎) 焼付 八枚一組 八百円

一、嫉妬の炎

自分は唯一の愛人だと思っていたのに、彼には自分にかくして、こんな美しい隠し女があつたとは、恵美子の物差しを持つ手は思わずブルブルと慄えた。

二、新妻鑑

新婚の夢まだ覚めやらぬ若妻は、ビチビチと張りきつた鮎のような全裸の肉体に、ひしひしと乳房に喰い込む腰紐を掛けられ後手高手小手のまま寝具の上に仰向けに転されていく。

三、深夜の侵入者

「何をやるのよ」うつ伏せになつた顔を左へ廻したとき、腰巻一つの姿で後手に縛られ猿轡ぐつわまで囁まされた姉の姿があつた。妹の太股がまるで生物のように跳ねて男をはねのけようとした。

四、古寺の怪

「ウウウ、ムムム……」

囁まされた猿轡ぐつわの間から娘の呻き声が洩れる。ゆらゆら揺れるローソクの火に照らされて尙も

擦り責めは続く。

五、雪中の折檻

仏の権三は、その名前に似ぬ凄惨な形相で女の頸すじを下駄のままで踏みつけた。二十二、三の小股のきれ上つたいい女だが降り積つた雪の上へ、腰巻一枚で後手に雁字搦目に縛られてころがされていく。

六、ガール・フレンド

今日は珍らしく家には誰もいない。大学生の森川はガール・フレンドの排佐子を誘つて、ストッキンダ一枚の裸に剝いて柱に後手に縛つた。帯を持ち出して両足首に括りつけて……

七、ズベ公のリンチ

首から足首までグルグル巻きに麻縄で縛られ猿轡をかまされたミチは、全裸のまま浴室のタイルの上に放り出されていた。

八、縁側の夕顔

庭の泉水では蛙が鳴いている縁先にぽっかりと白く浮かび上つた夕顔のような全裸の縛られた女、

新人モデル登場！

津森静子嬢の新作

今回本誌モデル陣に加った新
人津森静子嬢のニユースタイル

R 37	仰向悦虐責(川端多奈子)	R 51	雁字搦目(津森静子)
R 38	後手首縄締(加賀利江子)	R 52	股間緊縛()
R 39	乳房下緊縛(村田那美子)	R 53	のぞき見()
R 40	肉体美誇示(伊吹真佐子)	R 54	引き裂き()
R 41	お灸責め(春日、伊吹)	R 55	後手しぼり()
R 42	後手猿轡(萩千恵子)	R 56	猿ぐつわ()
R 43	松樹しぼり(村田那美子)	R 57	苦悶の表情()
R 44	コルセット(中塚文子)	R 58	あきらめ()
R 45	股間しぼり()	R 59	強烈しぼり()
R 46	手足緊縛(萩千恵子)	R 60	トップモード()
R 47	後手しぼり(加賀利江子)		
R 48	御開帳(萩千恵子)		
R 49	くさり責(川端多奈子)		
R 50	折檻の魅力(須川令子)		

新作切腹写真『女体自決悦虐図』(略号(えつ))

△血紅使用極鮮明実演切腹モデル写真V

大中判印画紙(タテ十八糎ヨコ十二糎) 焼付 七枚一組 千円

うら若きモデル嬢が自らの腹部の柔肌に刃を当てて、一文字腹に十字腹に、或は又、臍の上と下二筋に、きりと割つさばいて苦悶の表情も真に迫った切腹実演のフォト。苦痛に喘ぐ緊迫した表情、自らの手で我が腹を切る恍惚の表情など、すべて血紅を使用して一段と凄惨さを加えました。女体切腹フォトの決定版としてマニアの方におすすめる女体自決悦虐図。尚、従前代理部より分譲していただきました切腹写真は目録品切に機会に全部打ち切りとなりましたので悪しからず御諒承願います

新版マゾフォト分譲

久方ぶりに待望の春日ルミ嬢出演、男性モデルは愛読者某氏、復刊以来、初めて撮影した本格的なマゾフォト。本来、某氏の求めにより個人的に作成したのですが、特に御希望の方にのみ焼増いたします。尚従来分譲中のマゾフォトは全部、分譲打ちりになっております。

第一組 凌辱篇 (略号 ま1) 七百円

大中判印画紙焼付、五枚一組 (略号 ま2) 七百円

第二組 屈伏篇 (略号 ま2) 七百円

大中判印画紙焼付 五枚一組 七百円

第一組、第二組共、いずれも特に春日ルミ嬢を煩して最近作成した新しい作品で、第一組(凌辱篇)では足を舐めさせられたり、足で踏みつけられたり、足を洗わせられたり、大の男が精神的に凌辱させられているポーズ、或は後手猿轡に苛められているもの等を選びました。第二組(屈伏篇)では、尻の下敷になつて屈伏している奴隷の姿、股の間に挟まれて呻吟したり、首の上に尻を乗せられているもの等に狙いをつけて選んでみました。

女体切腹構成案図譜

中康弘通氏案 北原純子女史画

キヤビネ版印画紙密着焼付 八枚一組 千円(送共)

時代物

(一)女武者の最期

(二)腰元の自害

(三)遊女の自決

(四)武家の姉妹

現代物

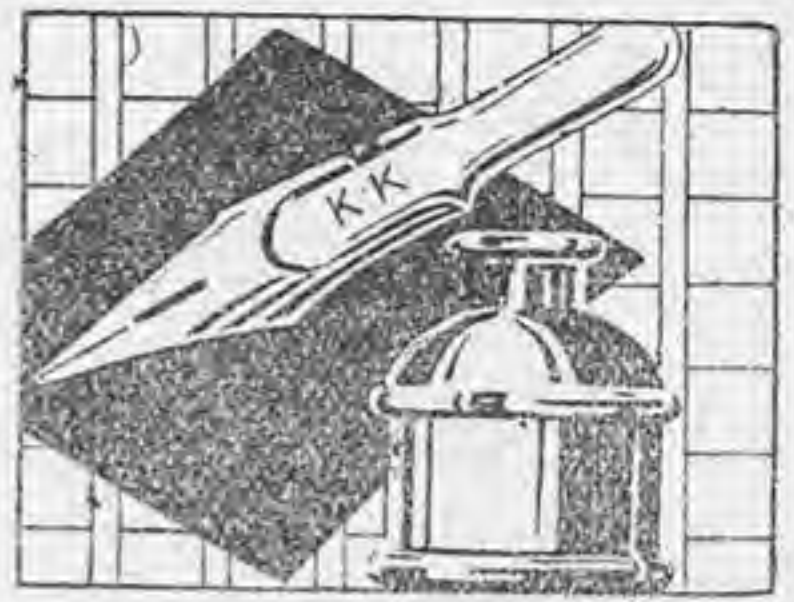
(五)女剣劇の腹切

(六)女剣士の切腹

(七)オフィスガール

(八)農家の娘

(詳細解説は本誌、九月号、並に十月号にあり)



読者通信

私は本年三十三才になるマゾヒ

○

ストです。南国の雄都、福岡に住み身長は五尺四寸二分、体重十四貫五百、自分で述べるのも変ですが、顔の方もどうか十人並以上と思つて居ります。前にも述べた如くマゾヒストとして、サドの女性の方から責められたいと望んで居るものです。K・Kは時々読まして頂いて居りますが、同郷の池田ふみ子様がサドでないのが淋しくてたまりません。サドの方により裸にされ仕置場に連れて行かれて足なめ、その他色々の精神的な責め方により、その方の足下に伏したいと望んでいるものです。又、その憐れな姿をカメラで写されたら、どんなに素晴らしいことだ

ろうかと思つて居ります。平常は人一倍、内気で困つて居ります。K・Kの読者通信にも目を通して居りますが、東京の方達は同好の士が集つて色々プレイして居られる様子なので、何時も羨ましく思つて居ります。私も東京に居れば皆様方の仲間に加えて頂いて、女王様方の足下に伏したいと思つて居りますが、残念でたまりません。誰か私を責めて下さる方はいないでしょうか。福岡、又は近在のサジスチンの御便りを心からお待ちしております。居ります。

(福岡 T・O生)

○

花村みち子様、八月号にて貴女の文を拝見しました。小生は大学生で東京に居住していますが、旅が好きで始終暇を見つけては行つています。これから、お会い出来ると思ひます。これまで本だけで否応なく慰めていました、うちとけてお話を出来る人を見つけて、今直ぐお会いしたい気持ちです。いくらか珍しい書物、雑誌等も集めてあります。訳あって誌上で住所を公表出来ませんが、左記へお手紙下されば返信にて住所お知らせ致します。絶対に御迷惑はおかけしませ

なお祭の前後にそちらへ行く予定でいます。それまでに御連絡がつけば幸いです。浜田佳子さま。奇く旧刊号、その他の書物、雑誌は出来ませんが、お望みなら三、四冊お譲り出来ます。お貸しするのなら何でも結構です。東京近郊で同好の集いが出来ているようですが、お仲間に入れて頂ければ幸いです。マゾの女の方、浣腸、禪などに興味をお持ちの方、お便りをお待ちしています。(東京都長崎局区内目白局止 佐藤好夫)

○

皆さま御無沙汰いたしました。この頃フンドシの記事も愛好者の声もさつぱり振いませんが、どうされたのでしょうか。私の三角フンドシグループは、いよいよ張りきつて研究に製作に精出しています。フンドシのシーズンともいふべき夏を迎えて、私たちのグループの新作品を何等かの方法で公開したらと、皆で話し合っています。先日は私の家へ、伯父とその友人のフランス人の女の人が遊びに来ました。丁度グループの会合の日でしたが、お庭で日向ぼっこを兼ねて新作フンドシを締めて批評して

まいりました。その後、そのフランス人と話をした時に、その人は「先程、貴女方が着ていた下着はなかなかモダンなもののように見えましたが、一寸見せてほしい」と云つて私の部屋までついて来ました。私は赤と黒の縞の、切込みの鋭い小さい三角フンドシを見せると「どこのデパートで見つけたか」と聞きます。私はその時、さすがにスマートな服装の国、フランスだと感心しました。そのフランス人にとつては、私たちの三角フンドシがデパートで市販されているものと決めているのです。彼女の感覚にとつては、三角フンドシは最早パンティやショーツと変りない女性の一般的下穿にすぎないので、す。しかもそれは、より美しく魅力的であるに違いないのです。フンドシ——それは私たち女性が締めても、なんと気持ちのよいものでしょう。私たちの三角フンドシグループでは、この夏の海で思い切つてお揃いのフンドシ姿で、跳ね回つてみましょうと計画しています。私たち女性だって、もうフンドシ姿になつていい時代が来ていると思ひます。皆さん、この夏は思い切つてフンドシ生活をしてみましょう。(岐阜 若柳ヤミコ)

○ 最近号では四月号の「木馬責に
関するノート」や「ズロースET
C」に喝采を送ります。又、若い
女性がお互に流暢し合い、おしめ
を当てがう等の記事は非常に魅せ
られてしまいました。関西の方々
は各分野で活躍、執筆されている
様ですが、当地にもそんな方が居
られるのではないかと等と一人で考
えています。私も多少、書き溜め
ておりますが、いずれ発表したい
と考えて居ります。

(宇都宮市 N・S生)

○ 奇クはもう廃刊になつてい
かと思つていましたが、現在も出
版されていることを最近知りまし
た。前の二回の後が尻切れとんぼ
になつていますので、私の義務を
果たすために未亡人期を書いてみま
した。夜、御蒲団の中で書きま
すので読み難いことと思ひますが、
御判読願えれば幸甚です。猶、こ
れは私の乗馬経験だけを頼りにし
ましたので、同感の方や違ふ心境
の方もあらうかと思ひます。どう
か今後は、余り血なまぐさいもの
に貴重なページを割かず、文学
小説、心理学、医学、服飾といっ
たものに何等かの参考になるもの

を優遇して頂きたいと思ひます。

(東京 乗杉貴代子)

○ 四馬孝氏の被虐美あふれた惱ま
しい女体のクローズアップに始ま
る八月号を嬉しく拝見しました。
潰滅の前夜は白熱した盛り上りを
見せ、L・T商会、又、華やかな
展覧に佐川氏の筆もいよいよ冴え
星光一氏、本田由郎氏の素晴らしい
読物に魅了され、うつつとうしい梅
雨も何処かへ吹き飛んで仕舞いま
した。先般、小生の不注意のため
不祥事を招き、六月十六日には各
夕刊紙が、更に某週刊誌までこれ
を針小棒大に取り上げ、貴社はじ
め各方面の方には多大の御迷惑を
御掛け致しました事を深くお詫び
申し上げます。又、御多忙中、多
くの方々から御見舞や御慰めを頂
き恐縮致して居ります。小生自身
十六日に夕刊を縮き、驚いたり呆
れたり致しましたが、一部の新聞
に於ける興味本位な取上げ方や、
事実を歪曲した報道を今更論じて
も始まりませんし、いかがわしい
週刊誌に、良心的な事実の解説を
求めることは、木によつて魚を求
めるより困難な事と思ひますが、
如何に「報道」の仮面をかぶった
創作が横行しているかのよき実例

になると感心致して居ります。我
々が心の友と語り合い楽しめ合う
ささやかな喜びまで干渉し禁止す
ることが許されるか否かの問題は
さておいても、非良心的なジャー
ナリズムの在り方については、更
に大きな問題があるので無いで
しようか。このためではありませ
んが、小生の拙いノートは一応中
断致さねばならぬ事情となりまし
たので、半年の間、温く御指導、
御支援下さいました皆様に深く御
礼致すと共に、無責任を御詫び申
し上げます。近い将来、再び構想
を新に皆様に御目に掛れる日を楽
しみに致して居ります。

(甲斐仁参)

○ 長期に互り面倒を見て下さいま
した編集部の御原意に、深く感謝
申し上げますと共に拙作に対し、数
々の御批判を御寄せ下さいました

読者の方々に厚く御礼申し上げます
本誌六月号より九月号迄の読者通
信で御指摘下さいました方々に対
してだけでもと思ひ、簡単ながら
返事を書かせて戴きました。
東京水木さん。(六月号)
私も殺すのや肉体変形は好みませ
ん。曩に一度、原稿を送つて了つ
てから「血が流れた」と云う描写
をしたことに気付き、急いで編集
部へ手紙して訂正して貰つたこと
がありました。血を見ることは
嫌いです。作品を讀んで戴いてい
るからお解りでしょうが、斬り刻
むような責め方はせず、又、血の
表現は極度に避けたつもりです。
併し、肉加工とか、潰し肉用とか云
う会話は書きましたが、これは私
の好みで被虐者の心理を攪乱する
為なのです。所謂、神経的な責め
と云いますが、犠牲者の心を恐怖
に陥れる為の嚇しなのです。です

四馬孝・傑作集

『美しき女体家畜飼育室』

ハ―潰滅の前夜―より(詳細解説は本誌九月号、十月号にあり)

(大中判印画紙) 焼付 八枚一組 八百円(送共)

◎次号の本誌は九月上旬発売です

本誌は今後毎月上旬発売の予定です。三ヶ月分、半年分予約の方々は出来次第お送りいたします。毎月お申込の方は、下旬頃までに誌代のお送りを願います。

から、手を下して行う場面は書きませんでした。近藤一さん。(六月号)

伶子の水責めに使用したゴム棒は私の考案ですが、似たような木棒に水を湛えて責める方法は、満州あたりで関東軍の憲兵が使ったと云う記事を七、八年前、或雑誌で読んだ記憶があるのです。うわ覚えではつきりしませんが私なりに加味して、この条りを書きました。

「マツトに生きる夢」楽しく拝見しました。名古屋、MMさん。鼻に響く無味なものは無趣味かもしれせん。併し、ストーリーが家畜化にあるのですから、一つの条件として許して下さい。東一郎さん(六月号)正直なところ、映画にしても小説にしても続〇〇となるかどうか影が薄くなるようです。(皮肉ではありません。私自身、そう感じているのですから)私も今、思い上って第二作を考えて居りますが、好評を得た後だけに、

二番煎じになる危懼で容易に考えが廻りません。このところお作に接しません。淋しく思っています。KK一フアンさん。(七月号)Y

本国の家畜集積所で白日の下、いろいろな責めを行おうと考えてはいたのですが、余り永くなりませんでした。別稿に譲らして貰いました。又、畜生化されて行く女性の気持ちを主体として話を進めていると云われていますが、人形を責めるのと違って、人間を虐めるのですから心理の動きがあり又、その苦悶の心情が顔に、身に表情されて、サディストが喜ぶのだと思います。幸い、大変褒めて戴いて恐縮していますが、私はそんな気持ちで書きました。岡山、江藤恵夢さん。東京、TUさん。人間は責められれば褒められます。そして、毎日連続して責められれば、みるみる衰弱して了うことでしょう。併し、私はヒロインを責められても責められなくても瑞々しさを保つ、美しい肉体

として描きました。美しきものの凌辱、と云うことがサディストの本心なのでしようから——。鼻責めにしても、アクロバット責めにしても、責めの美が出ていたとしたら、作者の喜びは之に勝るものはありません。神戸、山村光治さん。(九月号)過分な評価をして戴いて拝謝して居ります。私も単行本として纏めて戴けたら、どんなに嬉しいことだろうとは思っています。居りますが、店頭販売の出来な

幸甚にと存じます。今后共、よろしく御叱正下さい。(土路草一)

○

い今日、出版採算の上から云って無理なことのようになっています。自費出版をするには、私は資力がありませんし、他の便法?と云ってもありません。沼正三さん。相木の凌辱を書いてみました。どうも、うまくゆきませんでした。所詮、私はサディストなので。一般読者の方々へ私は、健康なサディズムと云うことを標榜して参りたいと思っております。人を虐めるのは既に不健全なことです。健康ではないではないかと申されるかもしれませんが、所謂じめついた、病的な物語ではなく、大らかなサディズムの世界を謳いあげたい念願なので御座います。作品に対する御希望なり御意見なりを編集部宛、お寄せ賜らば皆さまで御きげんよう。初めて私も仲間入りさせて頂いていただきす。まだ本誌を読み出して一年生のかけだしですけど、どうぞよろしくお願いいたします。私は二年前から大変興味を持ちまして、ずつと熱心に愛読いたしております。しかし、読者通信をお出しするのは今回がはじめてです。私は会社にお勤めしておりますが、同僚は勿論ですが、男の方も皆会社ではすましていて、本当の本心を表わすようなことがありませんので大変淋しく思っております。本誌の読者の方々と親しく手を取りあつてお話しあえたら、どんなに楽しいだろうと想像いたします。最初通信欄で呼び掛けあつて、それから文通、或は交際とか、グループの会合を持つとかしたら、と考えたりしています。私自身、何故、興味を持つのか、はつきりわかりません。只、本屋さんで奇く見たとき、他のどんな本を見たときにも感じなかった、身のひきしまるような戦慄にも似たショックを受けたことを覚えております。私は二十三才で職業は文事務員です。

男のお友達もなく、日曜日には映画を見たり、盛り場を一人で散歩したりするのが好きです。何の経験もありませんので、よくわかりませんが、皆さまの御指導をいただければ有難いと思います。

(大阪 森シズ子)

○ 楓月太郎さんとさん付けしては申訳けない未知の方からお賞めに預つて誠に恐縮です。いつもながら御丹精な映画シーンをふんだんに拝見させて頂き、この点からも奇クが他誌を圧して高く評価されたと共に、満天下の愛読者を引きつけているのだと愚考する次第。御健在の程お祈りしておきます。白金氏と同様、和装主義の一部を守り、時代遅れかも知れませんが事、和服に関しては終生頑張るつもりです。御支援下されば幸甚。

(牧高志)

○ 私は今までは、とても投稿したりする程、勇気がありませんでした。でも現代ではもうSやMは誰でも有する傾向であり、フェチにしても現代ではノーマルに属するとも云われる程に普遍的なものになっておられます。私も今までは秘しておりましたし、劣等感も

抱き自己嫌悪に落入了ました。こんな変なことを考えるなんて、恐らく私位なものと思っていましてある時、郊外の社線の駅近くの古本屋に奇譚クラブという文字が目にとまりました。手にとってパラパラ頁をくつて見て、私は思わずドキッと致しました。緊縛された女性のグラビヤ、鞭打たれる女性の激しいシヨツクを感じました。私は夢中でその本を求めて、その日の用件も後日にまわし家に急いだのです。帰宅してから私は夢中で奇クを読みふけたのです。私一人で悩むことなんかなかった。このような本があったのだ。私のような傾向の人があるのだという安心感も手伝って、その後、奇クの熱心な愛読者になったのです。一時休刊した時は本当に淋しく、目先が真暗になった思いでした。奇クの復刊を手にした時の私の喜び恐らく皆様もお感じになったあの嬉しさです。生きる喜びを与えてくれたことは事実です。「私の奇ク貴方は再び現れて呉れたのネ」と本当に生きている人のような限りないなつかしさで、涙さえ湧いて来るではありませんか。奇クの復刊三月号でしたか、金齒の事を

読者通信に寄せて居られた中富敬子さんに心を引かれ、住所にお便りして見ました。その方は男の方だとばかり思つて居りました。私は金齒を大変に好み、金齒を入れた女の方に強く魅力を感じます。中富さんとお逢いした時に、悦美さんと云う金齒を上下にずらりと入れた美しい女の人を知りました。当然、親しみを覚え、悦美さんの家で毎日話の華を咲かせて居ります。奇クで結ばれた人達は本当に仲良く、又普通以上の友情を以てつき会つて居ります。

(中津 由紀子)

○ 谷川様のお手紙頂きましたが、折悪しく病臥中にて失礼致しました。貴兄の御住所がはつきりしませんので、森本様にお詫びし一文を差し上げました。御理解を頂けましたら、又の機会に、M・T様チャイミングなお手紙ありがとうございました。生憎入院中にて御希望にこたえることが出来なくて残念です。元気な時でしたら泣く程きゆうきゆう責めてやれたのに。今度、又、悪魔に食われたくなったらお手紙下さい。蠟燭一様、色々と御心配をおかけ致しまして済ません。再度お手紙を頂きましたが、入院中

にて失礼とは重々承知していたのですが、どうしても御返事が出来ませんでした。詳しくは追つてお手紙致しますが、お許しを載けましたら又、御文通をお願い致します。失念生様、Z・Y様、及び都内近辺のK・Kファンの皆様、手を取りあつて孤独な人生を有意義に出来得ればと思います。親書お待ち致して居ります。(東京都文京区柳町 久保哲志)

○ 毎号欠かさず発刊される編集部の皆様には先ず感謝します。唯、若干の不満はありますが、今後は男性緊縛愛好者の願いを満足させるような作品をどしどし載せて下さい。「一筆亭雜記」は最近のヒットだったと思います。若しあのような処があれば直ぐにも行きたいと思ひますが、現実には困難で我々の欲望を満たして呉れるものは奇クだけです。八月号の原俊行様並に失念生様、貴兄等のグループに小生も加えて戴きたく存じますが如何でしょうか。何卒、連絡の方法をお知らせ下さい。小生は東京在住のサラリーマンですが、お互に緊縛のスナップ等を楽しみたい存じます。

(東京 XY生)

六月号より拝見、先ず表紙のメデイックなセンスは貴重なものです。内容にいたっては、S・M各種各様の多彩振りに、いささか驚異の目を見はつています。ゲイテの臨終の言葉ではないが「もつと光りを」「もつと明るさを」ということを昔からこうした世界に感じておりましたが、本誌はどうやらこの念願を満してくれたようです。それにしても八月号の読者通信砂塚啓三氏が、鷹野めぐみさんの文章を引用され、「……はつきり行動に移し、自由奔放にぐいぐいと生活していることで、なかなか出来ることではありません。鷹野さんの自分の傾向に適した生活態度を誌上で拝見していると、自分自身の生活態度が歯がゆくなつてきます」と讃辞を呈していましたがこれはそっくり私の云いたいことです。他にも意を強くする人達も多かるうと思います。尚、砂塚氏がはつきり住所氏名を記しておられますが、これは見習うべき態度です。私はM傾向ですが、MとSとは全く背中合せ、いづどんな動機で私もSに変貌するかかわりません。そういうことを考えると、期待と戦慄を覚えます。毎日の退屈な生活の彼方に私の求める

ものは——未知なる美というべき！S傾向の諸姉妹の方々、手をつなぎましょう。お手紙下さる方は私が直接御返事してよろしいか、お書き添え下さい。無智蒙昧なノーマルな人々の目から或る程度、身を隠す必要がありますからね。
(愛知県半田市前崎七三朝日格一郎)

九月号を拝受、包装をといひつくりしてしまいました。嬉しさのあまりです。私の書いた駄文と思われる投稿が「病床徒然草」と美麗な名前を頂戴致しまして、麗々しく表紙にまで飾られました。編集部御厚意と感謝致して居ります。しかし今一度読み返して喜こんでばかり居られない気が致して参ります。皆様の大切な誌面を多大に頂戴致し申訳けない気がして参ります。土路草一氏の「潰滅の前後」は奇巧に輝く最大のそして最も偉大な名作として、毎月楽しみに愛読させて頂きましたが、とうとう完結を見てしまいました。淋しくなることでしょう。南川和子さんの絵は私の好きなるもの一つです。「メデカル礼讃」を読ませて頂きましてからは、口絵を楽しみに致して居りますが、意を言

えば、四馬氏、北原さん同様に分譲フォトとして発売して頂きたく編集部の方々に御願い申し上げます。南川さん、貴女の名画を貴女の責面ファンにお分け下さいませようお願いします。我等の奇く層偉大な誌価を築きあげられますよう、皆様の御便りを鶴首しております。
(柳沢吉保)

私は三十四才の独身(三年前に妻と死別)の会社事務員ですが、幼少(十二、三才の頃)の時よりサド的なことを覚え、今では一人前なサジストです。色々なことを皆様知って戴きたい、そしてそ

女体緊縛フォト	
G組 大中判印紙画焼付	
1組 一枚 一三〇円	
5枚 六〇〇円 (送共)	
10枚 一〇〇〇円	
G1 鉄鎖と柔肌 (高瀬 忍)	ES2 全裸悦唐集 (須川)
G2 股間縛正面 (高瀬 忍)	ES3 腎 三枚一組 二〇〇円
G3 海老晒し (萩千恵子)	ES4 酒宴の弄者 二枚一組 一五〇円
G4 羞紅の椅子 (菅登紀子)	ES5 脱がされる娘 (須川)
G5 量感の帯 (伊吹真佐子)	ES6 あわや寸前 二枚一組 一五〇円
G6 アイデア (萩千恵子)	ES7 剥れたブローズ (佐賀)
G7 叫喚の森 (伊吹真佐子)	ES8 乙女のすべて (花坂)
G8 全裸目隠し (村田那美子)	ES9 女学生の縛り (須川)
G9 優すがた (花坂道子)	ES10 緊縛のベッド・シーン (佐賀美智子)
G10 開股一番 (萩千恵子)	
E組 (9×13cm印画紙焼付)	
ES1 ヌード緊縛集 (佐賀)	六枚一組 三五〇円

○

私に共鳴と協力を得さしめて下されんことを切望します。私が奇タを知ったのは、旅行の時、湯の町のうらぶれた古本屋の一角です。其後、出来るだけ旧刊の数々を得まして、貴誌の充実された内容に絶対の信を私に抱かせ、今では貴誌はなくてはならぬ宝になっております。近日必ず皆様の興に添うような告白とか、色々な趣味で寄稿致す所存なれば、宜しくお引立てと助力を願って止みません。こんな仲間入りの挨拶をしているうちに、私のコンパスと定規は初稿の構想が練られております。では皆様、次稿にてお目見えしましょう。

(峰生)

○ 鷹野めぐみ様、新年号のこの欄で拝見を致しました。なかなか貴女のような人にめぐり逢えなくて困ります。見分ける練習はしていることになるでしょうが、それらしい人に自分のことを話したりしても、そうだと言われたことがありません。心がけてはいるものので実際にぶつかつた例しがないのです。それはやはり不満なことですが、(今までの処、現在を含めてこの雑誌で見る他に仕方ありません。他の手段を考え、そして実際に試

みているのですが、今までの処、徒勞でした。)ただこの頃、どうもそれらしい人に対し心が動くようになってきました。僕は現在、独身病氣等も別にないのです。昭和の生れです。連絡をして戴くわけには参りませんが、直ぐにブレイというようなことでなくともいいのです。自然なのがいいわけです。すし当り前に面談等。出来ればこの発表後。一ヶ月以内位に一旦連絡だけでもして頂ければ有難いのですが、どうかお聞きとどけ下さい。これの発表後、約五十日間、局と連絡をすることにしました。(新宿区牛込局止 石川真司)

○

窓より流れ入る風さえ梅雨特有のうつ陶しさを感ぜさせる毎日に手当り次第に読書に暇をつぶす毎日。飽き、それでもやっぱり唯一の慰みをと読書、ラジオに心のいらだたしさをまぎらわし、心の安らぎを得るつまらない時、あだかも僕の人生(少し大げさかな)に一時にせよ心の安定を得る如く、心の内に喜びを感じさせたK・K八月号! 事実むさぼる如く読みました。表面(社会生活上)を月並な人間を装うている僕に、裸の人間生活の真実を如実に見出さず、

又、心の何処かにそれらしい物を掴みかけた僕に、はつきりと答を知らして呉れたK・K八月号! 本当に心の梅雨も上り、すがすがしい空深い秋を迎えたようなものでした。「恋する夫人への手紙」などは貴誌独得のもの、三回も読んで読みました。(S生)

○

八月号の青山芳樹氏の「女白虎隊」を、嬉しく読ませて頂きました。私も会津若松近郊の東山温泉とやらへ飛んでいつて「白虎隊踊り」が見たくなりました。九月号には一段の力作を期待致します。浜田佳子さんへ、毎号、奇タの出るのを鶴首して待つ愛読者の一人として、ケンランたる旧号を故意に焼却されて、後悔の跡を噛んで居られる貴女の御気持は良くわかります。私も又、奇タではありませんが、得難いコレクションを何度か作っては焼き、作っては焼いたか知れませんが。貴女と同じように馬鹿馬鹿しい羞恥心からです。つまり二重人格で、コレクションを築きむ心と、それを冒瀆と自己嫌悪する心との葛藤によるものです。しかし、お説の通り一度味つた禁断の本の実の味は決して忘れ去ることは出来ないものです。

今では奇タによるコレクションは大きなスクラップに満載されて得難いものになっています。浜田さん、貴女の希求されている旧号を出来るだけ全部揃えられるようにお手伝いしてあげたいと思います。私も又、至って恥しがり屋なので誌上はペンネーム「兵頭庫一」でお便りさせて頂きます(兵頭庫一)

○

六月号にお二人の女性サジステのお便りを見出した時の小生の喜び、それも東京の方とあって、小生の心は妖しくも激しくかきたてられ、矢も立てもたまらず筆をとってお呼びかけ哀願する次第です。服部みどり様、鷹野めぐみ様、貴女の乗馬でお鍛えになられたその惱ましくも美しいお身体の下に息のつまる程……、貴女の美しい瞳で見つめられ、辱しめられたと思うと、嬉しさに身内がぞくぞくしてまいります。貴女の下に飛んで行き、足下にひかれ伏したいと念願しております。浜田佳子様八月号で貴女のお便りを拝見しました。貴女と同じような過去を持つ小生には、貴女のお気持がわかり過ぎるほどよくわかります。少々損じていますがフオトは揃えています。(藤田嗣治)

○ 小生は数年来、御誌を愛読致して居りますが、最近の充実ぶりは少い頁数の制約を乗り越えて素晴らしいものだ、大変嬉しく存じております。今後の編集部諸氏の御健斗を祈って止みません。特に八月号は内容的に小生の体験と似たものが多かったので、興味深く拝見しました。佐川増夫氏の「L・T商会」は、創作としてではなく現実であり得る程度の事実としての体験がありますので、非常に身近くその雰囲気を感じとることが出来ました。「潰滅の前夜」も同様の意味から好きなのの一つです。「虹のかけ橋」末尾の皆川のぶ子さんの私信も、小生が同好の方々とクラブのようなものを作り世話をしている関係上、大変有意義な集いであつたことと拝察致します。小生のタイプとしては、南川和子さんと対照的なサドの傾向にあり、中年の肥満女性、濃い腋毛、縛り、鞭等に魅力を感じます。南川さんが東京の方でしたら、一度お逢いしてお話を伺うことが出来ればと存じております。趣味としてカメラをやりますので、過去の記録はすべて二千数百枚のネガ・コレクションとして秘蔵して

おります。其他サド・マゾの女性とも交際が多いので、都内の方でしたら御希望があれば御紹介しても結構です。
(芝原修)

○

奇巧の投稿は始めてですが、学生時代からの永い愛読者で、色々研究的に読んで居り、得る処が非常に多く生活に様々な色どりを与えてくれます。当年二十四才、東京の某短大出身、父は当地方の有力者で家庭が厳格のため、現在は独立の意味もあり某会社に勤務少々、独身生活を楽しんで居ります。さて私の体験をチョッピリ：四年前ミス信州に応募、第三位に当選した頃のことです。交際を望んで来た男の一人に、面白半分「足にキッスしたら」と云って擲擲った処、いきなりその通りの事をした挙句、脚に一面煩うりし乍ら泣き出す始末に些か戸惑いましたが、半面、その時の酔うたような征服感が忘れられず、其後、数多くの男に足を与えて参りました。現在、飼育中の奴隷は二匹、何れも社会的には立派な紳士の部類に入りますが、特に年長の方は有力な地位にあり、以前はドンファンと云われる位、女性にチャホヤされていただけに、十二分の征服感に浸れる次第です。その他にも臨時的奴隷は十を下りませんが、何時までも恵みを与えてやるうと思う程、気に入る奴隷は仲々見当たらないものです。何れ筆を改めて、男を奴隷化する場合の方法とか心構え等を、私の体験として発表させて頂くつもりですが、とも角、女性がすべて美しくあれば如何なる男をも奴隷にすることが出来る断言致します。男は誰でもM・S両面を持って居ります。が、それを本人が意識しない場合が多いのです。従って色々な方法でMの面を強く摘出してやれば、疑いなく奴隷としての性格を現してくる筈です。

○ (飯田市 矢部かず子)
内田武男様、貴方の「一揮亭雑記」を拝読しまして、私は風太郎になった錯覚で独り憂鬱感や苦惱感に誘われ、何度何度も繰り返して読みました。でも残念なことに八月号で完結ですね。どうもつとつと御活躍下さるよう御願ひ致します。矢崎龍一様「灰色のノート」を何時までも何時までも続けて下さい。三根耕二様、獄収一様、森太一様、岡村文雄様どうもつとつと私達によりよき御

執筆を御願ひ致します。最近の本誌では私は満足出来ないんです。六月号「読者通信」の神戸のT・I生様、私のようなものでよろしかつたら、貴方の良きプレイヤーとして御交際下さいませんでしよるか。その日の一日も早からんことを御待ちしております。尚、大阪の中井様、名古屋の古川様、御返事本当に有難うございました。どうぞ何時までもよろしく御願ひ致します。私は二十七才の独身のホモ、禪、浣腸、女装、マゾ、サドに傾向があるので、九月号を入手、一晩かかって読み終えました。先輩諸兄の云われる如く、僕達ホモ者にとつては、愛禪マゾ、サド者にとつて、内容及びフォートの僅少なのは全く遺憾に思います。豊橋市の比良沢様の御投稿には僕も大賛成です。「一揮亭」なるものを夢でなく是非実現したいと希望するのは僕も同感です。どうか僕のこの希望を叶えて下さる人の出現を期待しております。尚、山口の松田生、大阪の東淀川私書箱二十号、香川のS・K生、二十一才の愛禪生、又、柏山多津夫の皆様方からの御便りの頂けるのを鶴首しております。
(白根敏夫)

○ (白根敏夫)